# ONEPIECE　死者の放浪

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥＰＩＥＣＥ　死者の放浪

【Ｎコード】
Ｎ６５１６Ｐ

【作者名】
黒

【あらすじ】
何の変哲も無い高校生が居眠りしていて起きたら知らない場所にいた。周りは大雪、俺の服は夏服。あれ?積んでね？　そんな普通の高校生が、ＯＮＥＰＩＥＣＥの世界の闇を見て成長してゆく。食べた悪魔の実は図鑑にも載っていない無敵の能力を持つ実。そして不思議なパートナーと共に適当にグランドラインを航海中。主人公・パートナーが最強です。初投稿・初書きなので色々おかしな部分があると思われます
原作キャラと冒険したりはしませんが、時々会ったりはさせたいと

思っています。

あと、ヒロインが非常に鬱陶しく感じられる場合があると思いますが、こういうキャラクターが書きたくて始めた作品でもあるので目を瞑って頂ければ幸いです。

６月２８日追記：現在、文章を始めから大幅に修正しています。修正作業後、次話を投稿しようと思っていますので、お待ちください

８月１８日追記：今年度大学受験につき更新停止。３月くらいまで更新凍結します。待っていてくださっている方々、しばらくお待ちください。

# 第1話　出現

気がつけば、雪山の中にいた。

訳がわからないが、実際そうなのだから仕方がない。

周りを見渡すと

巨大な流氷が近くにいくつも浮かんでいて、さらにその先には広大な蒼い海
そして後ろには大量に雪の積もった杉の木の森
そしてブリザードのごとく吹き荒れる雪嵐

遠くを見ようとしても、暴風に身を任せて降り続ける雪が作り出す、灰色のヴェールに阻まれて何も見る事ができなかった。

さっきまえ俺は学校で授業を受けていた筈だ。
英語の授業のときに眠くなって、教科書を枕代わりに目を閉じて眠った所までは覚えている
その後の事を思い出そうとするが、いくら考え続けても記憶は眠ったところで途切れていた

・・・駄目だ　何の解決の手がかりにもならん。

そういえば・・・ん?俺は・・・

俺は・・・名前は、あれ?　名前が出てこない

自分の今までの出来事や生活のような記憶はあるのだが
何故か自分の名前だけが思い出せない。

「どこかで頭でも打ったかな・・・?」

頭を打ったにしろ、自分の名前だけが思い出せないのはおかしい。
もっと他に忘れている事はないか!?　と焦りながら考えているうちに寒くなってきた。

そしてもう1度周りを見渡すと、今の自分の状況が飲み込めてきた。

現在の自分の姿は制服。しかも運の悪い事に夏服である
そしてこの雪の嵐は着実に俺の服をぬらし、体を冷やしている
ここがどこか全く判らない。

かなり不味い状況にあると自覚した自分は「とりあえず後で考えよう！」と思い
肩や頭に積もった雪を掃って、学校に戻ろうと歩き出したのだった。

## 第1話　出現（後書き）

どうも。黒と申します

このページを開いていただき、ありがとうございます。本当に嬉しいです

私がこれを書き始めた理由は、他の方々が書かれたＯＮＥＰＩＥＣＥの小説に感銘を受けて

「よし、自分も書くぞ！書くぞ！」なノリで投稿してしまいました。
文の構成とか、誤字とか、訳のわからない文などはあると思われますが
その時はこっそり指摘して頂けるととても嬉しいです。

なお、自分は高校生で来年は大学受験
なので、投稿が1月に近づくにつれ遅くなっていくかもしれませんが
その時は許してください

改めて、よろしくおねがいします！

# 第2話　氷柱に貫かれ

自分の名前が思い出せない。ここはどこだ!?
今、自分の脳はこの2つの疑問に答えを出すためにフル回転していた

俺は、ほんの1時間くらい前までは成績は普通（強いて言うなら数学が得意で古文・漢文が超苦手だが）。
周りから「ちょっとオタ」の称号をいただいているどこにでもいそうな普通な男子高校生である。

今日は、日曜日夕方6時半に流れる、名前は言わないが・・・あのアニメの凶悪なエンディングテーマを聞いたせいで憂鬱になりながら登校した。

そして学校で、俺のとっての地獄である古文の授業が始まって
眠気が襲ってきて、寝て気がついたら冬の浜辺にいたという訳だ。

「ううん、寒い！　ここどこだよ・・・」

・・・・・状況を整理しても大して効果はなかったようだ。

さて・・・それはさておき、はっきり言って今の状況は笑えない
周りは雪で俺の服装は　さっきまで夏であったため薄い制服しか着ていない。
雪が服につく度に体温ですぐ溶けて水になり、服に染み込み冷たさを増幅させる
何が言いたいかというと、つまり凍死が目の前まで歩いてきている状況である。

このままでは死ぬ

それがわかった途端、すぐに駆け出して進んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・

しかし、その判断は間違っていたようだ。
しばらくすると雪に足をとられ、体温をさらに奪われて目の前が揺らいできていた。

死にたい　その思いが俺を支配し始めていた。
人間は普通死にたくないと思っているはずだが、極度の苦痛を感じると逆に死にたいと思う　と、何かの本で読んだ気がする。
もう駄目かと思うたびに、体だけでなく心まで冷えたような気がした。

必死で雪にとられた足を動かして前に進もうとしたが、もう体力の限界が来ていたようで
足の力が尽きてバランスを崩し、ついには目の前の雪山に倒れてしまった。

「（あー、もう駄目だ。）」

そう思ったその直後に何かの本で読んだ「凍えているときには眠くなる。そこで寝ると死ぬ」という一節を思い出した
だが、強烈な眠気に勝てず俺はそこで眠気に身を任せてしまった。

全身に伝わる寒さ、疲労には勝てなかった。

体に強烈な痛みが走って俺は目を覚ました。

「（ここは・・・？）」

どうやらあの吹雪の中雪山に倒れた状態のまま寝てしまったらしい。

しかし、なぜ目を覚ましたんだろう？と思った瞬間、背中と腹が焼けたように熱くなっているのを感じた。

暖かいのは結構なのだが、どうも妙だ。

目の前は雪が積もっているのに、何故焼けるように熱いんだ？

ふと、自分の腹に目を向けると

「え・・・何だよこれ・・・」

一本の氷柱（つらら）が背中を貫いていた。

背中には赤黒い液体が付着しており、腹を支えていた雪は血液によって赤く染まっていた。

「（つまり俺は凍死じゃなくて出血多量で死ぬのね・・・）」

全てを諦めて、そう思った

「なんでこんな事になってんのかな・・・」

俺は心からそう考えた。

ある日普通に学校に通っていた学生が

突然何の助けも求められない場所に放り出され

凍えるような天気の雪山なのに、ろくな装備もないどころか夏服で

氷柱が落ちてきてそれが刺さって死ぬのである。

わけがわからない。

でも痛みは本物でもうすぐ死ぬのが自分でわかった。

さっきまであんなに冷え切っていた自分の体がとても暖かくなってきた。

背中に痛みを感じるかと思ったが、既に麻痺して痛みも寒さもわからなかった

「どうせ死ぬんだから凍死でも出血多量でもどっちでもいいや」

そんな気になっていた。

ふと氷柱が降ってきたところを見るまでは。

「何だよ・・・これ？小屋？」

すぐ横に小さな小屋を見つけた。
ここにたどり着いたときはひどく疲労困憊していたせいでまったく気がつかなかったが、ここからだと良く見える位置にそれはあった。

俺も人間だ
どうせ死ぬなら山の中に小屋の前で無様に倒れて死ぬよりは小屋の中にあるかもしれないベッドでゆっくり死にたい。
あとせめて何かおいしいものを食べて死にたい。

そんな考えで小屋の中に入ろうとした。

「うっ！痛たたたっ？？！」

氷柱を残り少ない体力で引き抜いて・・・流石に痛かったが、その痛みに耐えつつ立ち上がり
やっとの思いで小屋の扉にたどりつき、取っ手に手をかけた。

運よく小屋の扉は開いており、すぐに中に入ることができた。

小屋の中を見回してみると・・・あるではないか！

想像とは少し違ったが、ちゃんと寝れるベッドと

そして妙な柄のついたバナナとそれと同じくらい大きいみかんが！！

俺は何気なくバナナの方が好きだったのでバナナを手にとってベッドに倒れこんだ。

「これが俺の最後ならさっきと比べると相当マシになったな。神様ってやっぱいるのかな・・・」

そう思ってベッドに寝て薄れゆく意識の中でバナナを口に運んだ。

「まずっ！！！！！！！？？？？？？」

口に運んだバナナはものすごく不味かった。

よく考えたら当たり前の事だ

誰もいない小屋にいくら寒いとはいえ、放置されている果物が腐っていないわけがない。

「もう・・・ちょっ・・・と、旨いものを食べて・・・・死に・・・」

そこでまた意識を手放したのであった。

## 第2話　氷柱に貫かれ（後書き）

6月28日　大部分修正。

このころに書いた文・・・意味がわからなすぎる！！

あまりのひどさに涙が出てきました。少しづつ修正していきます

# 第3話　悪魔の実の能力

俺は生きている

目が覚めたとき、俺はベッドに横渡っていた。
窓に目をやると、吹雪が止んだのか小屋の外が静かになっていた。
暖かそうな日差しが目に入ってきて思わず目を腕でかばう

「あれ・・・?さっき死んだよな?」

なんて間抜けな事を思って口に出してしまった俺を誰が責められるだろうか。
ふと体を持ち上げた。

「体が軽い?」

意識を手放す前にはもう動かすことさえ難しかった体が楽に動いているのである。

さっきの出来事を振り返ろうとしたとき、氷柱が腹に刺さっていた事を思い出してあわてて目をやると

「うわっ!?何だこれ!!??」

そこには氷柱が刺さった痕があるのだが・・・問題はそこではない。

腹にぽっかりと、１０ｃｍほどの穴が開いているのである。
普通背中から腹に穴が開いたらそこから血が吹きだし、内部の臓器などが見えたりしてもおかしくない筈なのにその穴の周りは皮膚が囲んでいて元々そうだったかのようにきれいな丸に穴が開いているのである。

「何かの漫画で、胸に穴が開いた仮面お化けと剣持った奴が戦う漫画があったなぁ・・・」
確か死神の主人公が敵と戦うやつで・・・っていやいや、そんな場合じゃない！

とりあえず体が動く事を確認できたので辺りを確認してみた。

小屋の中は寝ているベッド。そして何も入っていない棚と妙な柄のすごく大きいみかんが机の上においてあるのが見える。
見渡したが明かりになるものはなく、窓から入ってくる光だけが頼りのようだ。

「・・・とりあえずどうしよう」

そういえば腹が減ったな・・・
ふと横に目をやると、昨日食べてそのままになっているバナナがあ

った。

昨日感じた不味さはもしかして自分の舌が狂っていたんじゃないか？
本当は普通にうまいんじゃないかと思い、再び口にしてみた。

「不味い不味い不味い不味い不味い不味い不味い不味い不味い」

本当に不味かった・・・・・

「これだと、そこにおいてある大きいみかんも信用できないな・・・」

同じ柄で同じ机の上においてあったのである。警戒しない方がおかしい。

しかし、そうなると今日食べる物はどうしよう・・・

普通なら「よし、コンビニに行こう！」「カップ麺はどこかなー」で済むのだが
残念ながら近所にはスーパーもないし民家もない。

どう見てもここ学校の近くじゃないし、それどころか無人かつ未開の土地に見える。
そんな何もない、どこかもわからない場所で店を期待するのは愚か

過ぎる。

残った選択肢にサバイバルはあるが、もちろんそんな知識は持っていない訳で・・・

間違って毒キノコをとってきて食べて死んだ　なんてことになったら目も当てられない。

ではどうしたかというと

「あーあ、ここにステーキでもあればいいのになぁ・・・」

俺はできるかぎりこの場を妄想してやり過ごすという間抜けな選択をした。

その途端、目の前に綺麗な木の皿と　焼けばすぐにステーキになりそうな肉がパッと出てきた

「!?」

俺はこの時気づいていなかったが、さっきみかんを食べていたら間違いなく死んでいたであろう。
後から考えると思い留まって本当によかったと思う

超人系（パラミシアけい）”悪魔の実”　『ナノナノの実』

まだまったく気がついていないが、それが俺の食べた『悪魔の実』だった。

## 第3話　悪魔の実の能力（後書き）

オリジナル悪魔の実の登場です。
これで主人公の防御力は地上最強です。もちろん弱点もありますが・・・

もう1つのみかんですか？
それはお楽しみって事で・・・

1月8日追記

ここから、この悪魔の実の能力に関しての説明が省かれてしまう部分が多くなってしまいますが、主人公本人が能力を使いこなしていない段階で明らかにしてしまうと、主人公を窮地に追いやる要素や戦闘以外のストーリーが書けなくなってしまうので書けない部分も多くなってしまいます。
なので説明がないままかなりご都合主義な展開に進んでしまうと思いますが、ちゃんと弱点や限界があるのでご安心下さい。
また、３５～４０話くらいで能力の全容の紹介ができると思います。
かなり遅くなる予定です
訳のわからない部分も多くなってしまいます。
本当にごめんなさい＞＜

６月２８日　大幅修正完了。

## 第４話　無人島での暮らし

俺が浜辺で気がついたときからもう１ヶ月が過ぎようとしていた。

この一ヶ月は本当に色々あった・・・

まず、この場所が「島」だという事がわかった。
探索のとき目の前の森には入らず浜辺に沿って海を歩いていたが、
数時間で小屋のある地点まで戻ってきてしまったのだ。

小屋が見えたときは「ここはどこなんだ」という思いと「家に帰りたい」という思いで本当に絶望して１日中泣きじゃくった。

その後は、小屋を目印かつ拠点として島の探索を進めることにした。

その次の日に「もしかしたら途中で道を間違えたんじゃないのか」
という思いで再び浜辺を歩くことにした。
どう考えても、海に沿って浜辺を歩いているのだから道を間違える
など有り得ないことなのだが・・・
溺れる者は藁をも掴むとはよく言ったものだ。

しかし、その日は運が悪かった。

まず外に出て３０分もしないうちに”蟹”の大群に襲われた。

蟹といっても、人間のと同じくらいの有り得ないくらい巨大な大きさで、目や口が人間の顔のような位置についているくせに、まったく感情のない無表情の蟹だった。

初めて蟹に出会ったその時、情けなくも俺は腰を抜かしてそのまま蟹の大群に飲み込まれたのだ。

そこで不思議なことが起こった。

「せっかく死ななかったのにここで死ぬのか！？」　と思って再び諦めかけながら目を閉じ、砂地に身を任せていたのだが、しばらくしてからなぜか蟹が去っていったのである。

頭に疑問符を浮かべながら辺りを見回してみると、蟹達が食い散らかしたであろう肉・臓物片が散りばめられていた。

しかし、俺は襲われる前とまったく変わらず　傷一つついていなかった（※）

その後は、無表情で１５匹くらいがまとめて集団で動いているのが目に入るたびに命の危機を感じ、全力で逃げたものだ。

さらに、この1週間の間は島の周りの探索を行ったのだが

「（こんな島に人がいる訳ないよなぁ・・・）」

という諦めの思いで一杯だった。

実際島の周りをその後も何周もしたが、あの小屋以外人のいた形跡は一切見つけられなかった。

残念だ。本当に残念だ・・・

そして外周の探索に飽きた頃、島の中を探索してみようと思って島の中を歩いてみたのだが、森に入ってすぐの所に崖があって進めず島の周りは海の筈なのに、どう見ても海水のある位置より深く、底が見えない崖で

渡ることも降りることもできず、断念した。

後は、浜辺を歩いていたときに大きなジュゴンに遭遇して

襲い掛かってきたので全力で逃げた事くらいだろうか。

蟹の3倍くらい大きかったのだが、幸い一度しか遭遇しなかった。

「（一般人の俺がどうしてこんな目に！）」

そんな思いを抱えつつ、その日は朝早くに起きて今日の計画を立て始めた。

食料がどこからか沸いてくる肉だけでは流石にまずいと思ったので（腹減った！と思ってほかのものを出そうとしたが、何故か肉しか出てこなかった。豚肉なのか少し酸っぱかったがそこそこおいしかった）食料などを探すために島の周りにある崖をなんとかして渡る方法を探しに行くことにした。

（さて、どうするか・・・）

何せ、どこの崖も最低でも５ｍの幅があって、とても飛び越えられるようなものではない。
深さは、相変わらずどこを見ても底が見えないので降りることはできなさそうだ。

そんな時、俺は近くにあった大木に目をつけた。

「お、この木を倒せば何とかなるかな？」

どうやって切り倒すかを考え始めた
しかし、斧も何もない場所ではどうすることもできない。

（もういっそのこと勝手に倒れてくれないかな・・・）

バキッ　メキメキメキメキメキメキッ

!?

木の幹に斧で切られたような窪みが突然出現し、木の重力に耐え切れずにその大木は綺麗に崖の向こう岸に倒れた。

「（おいおい、どういうことだよ・・・）」

少し考えたが、道ができたのはありがたい事だと思いそれは保留にし、
とりあえず食料と人を探すために木を伝って先に進んでみた。

……………………
………………
…………
…

崖の先には毒池があった。

なぜ判るかというと、水は透けないほど濃い紫色、時々ボコボコと泡が吹き出している、漂う刺激臭。
少なくとも、人間がこの中に入ったらただでは済まないだろう、
見つける前から既に激しく刺激臭が漂っていたのだが、まさか毒の池があるとは完全に予想外だった。

「ギシャアアアアアアア！」
「！？」

毒池の中に何か見えないかと覗いていると、突然中から水の色と同じ毒々しい色の何かが飛び出してきた！

「うわっ！！？」

なんとか、運よくギリギリかわすことができ、その魚は勢いをつけたまま陸に向かって飛んでゆき、打ち揚げられてしまった。

その魚をよく見ると

「・・・これどう見ても」

紫色のピラニアです。本当にありがとうございました

その時お腹が減っていたのと、毎日同じ肉ばかり食べているせいでのイライラ。
この２つがなければ自分はこの魚を食べようなどとは血迷わなかっただろう

小屋に戻ってそいつを徹底的に海水で洗って洗って洗って洗って　焼いて食べました。

塩味のピラニア（？）は中々刺激的で美味しかった。

そんなこんなで、俺の島での1人生活が過ぎていった。

森の奥まで入り、結果無人島だとわかった。

救助の船か飛行機、ヘリコプターが通り過ぎるのを待ち望む日々は続く

## 第４話　無人島での暮らし（後書き）

（※）
主人公にもちゃんと痛覚が備わっています。
しかし、能力の回復故に剣・銃は効きません。
打撃も吹っ飛びはしますが、ダメージはありません

ダメージが無いのは、それらの攻撃が一瞬で終わり、その隙に再生してしまうからなので、永続的なダメージを与える攻撃であればダメージを与えられます。
詳しい事はプロフィールに書こうと思います

６／２８　大幅修正完了

# 第5話　ONEPIECEの世界の確信

時は過ぎ、この島の小屋を発見してから多分半年くらい。
多分というのは、この島に着てから日数を数え始めるのがかなり遅れたからだ
遭難者が日数を数える時に使う木に傷をつけるやり方を使用している、

最初こそ戸惑って、1週間を超えた辺りで小屋の中に引きこもって泣きじゃくっていたものの
思い切って外に出てからは意外な事がわかった。

まず、この体　何をしても傷つかないのである。
自分でいっそ自殺しようと腕を切った事があったのだが（今ではそれをすごく後悔している・・・）その部分が血が出ることもなく刃が砂を切っているかのようにみるみると傷が塞がっていくのである。

蟹に全身を食べられた時にその事に気づき、その後いろいろ試してみたのだが

・肉体がどんなに傷つけられてもみるみる直る
・燃やされても切られるより時間はかかるがすぐに元に戻る
・どんなに肉を引きちぎられようと質量とか無視して完璧に再生する
・自分の体以外には物の形を変化させる、消失させることができる

こんな感じだ。
検証が終わったとき、自分で化け物もいい所だろ・・・と思い苦笑した。

あと、自分に不都合なところを上げれば

・自分以外のものに干渉する場合は自分の本体、または武器や服などが触れていなければならない
・水に半身以上浸かったら力が抜けて何もできなくなる

ちょっと考えてて思い出したのだが、以前自分が食べた実に似たものが出てくる漫画があった気がする。

ＯＮＥＰＩＥＣＥという漫画で「悪魔の実」という名前の木の実があった筈だ。

あれも食べたら訳のわからない質量保存を完全に無視したチート能力を発揮するもので
唯一の共通の欠点として海に落ちたら能力が使えなくなる・・・みたいな感じの特殊能力だった筈。

あと、２つ食べたら体が爆発して死ぬとか言ってたな

後で食べなくてよかったと本気で思った。

・・・食べてたら今頃小屋で肉片だったよ!!　せっかく拾った命を無駄にするところだった。

まぁどっちにしろあんな美味しくない果物　もう絶対に食べたくないけど。

それはさておき・・・相変わらず、時々ここに来る直前のことを考えるが
学校の授業中に眠って、その時に何かあってここに強制的に移動させられた　という馬鹿げで展開しか思いつかなかった。

突然夢遊病にかかって無人島まで泳いでくるということはまず有り得ないし、あのでっかい蟹やジュゴン、毒沼の説明がつかない。

とりあえず、今は救助が来るまでここでひたすら海を眺めながら待つ生活をしている。
「案外ここは動物の遺伝子改造実験場か、核の投下実験を行った場所なのかもしれないぞ!」と常に思うことにして自分をごまかしながら日々をやり過ごしている。

悪魔の実?そんなの知らない。
さっきまで夏だったのにいきなり冬になった?
地球の上か下に近いところにいるんだろ。夢遊病すげーな。

・・・・・もしここが「別の世界です」とかいわれたら首切ってやるよ。

すぐ再生するけどね。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・

首を切る日がやってきました。

こんにちは。自分の名前は・・・忘れたので割愛。

今俺は小屋から歩いて5分ほどの砂浜にいる。
そして目の前には・・・といってもしばらく沖だが、髑髏マークを掲げた船とと錨のマークを掲げている船が大砲を打ち合っているのが見える。

どう見ても海賊船と、あのマークは海軍の船のものだった筈。無論ワンピースの海軍。

一瞬特撮かと思ったが、大砲がお互いの船に当たるたびに木片は散り、時々赤い物体が海に落下しているのが見える。

あんなこと現実でやったらコスプレとか戯れとかじゃ済まないよ。
確かに海賊は現代でも海外にいるらしいけど・・・
あんな大砲撃ち合ってたら流石に警察どころか軍隊が出動するレベル、冗談じゃ済まない。

で、しばらくそれ（・・）を唖然としながら見ていたら、海軍の船が炎上しながら撃沈。
火の手から逃れようと海に飛び込んだ人間は、海賊たちの持つ矢や大砲を打ち込まれて、多分生き残ってはいないだろう。

そして海賊船がこっちの方向、つまり俺のいる島にやって来ました。

こりゃＳＯＳって言っても無駄だな・・・海軍が勝ってたらまともな事になってたんだろうけど、海賊じゃ助けてくれるどころか良くて下働き、悪くて人身売買だろう。

考えうる限り、最悪の訪問者だった

## 第5話　ONEPIECEの世界の確信（後書き）

1月8日追記

＜＜小屋で食べた肉は自分の肉みたいですがどうやって体から肉を切り離したのですか？
悪魔の実は質量保存の法則を無視することができます。
原作でもドルドルの実なんかは明らかに能力者の体重以上のものを出しています
なので、肉は体の一部分を体外に増やした・・・という訳です。

6月18日　大幅修正完了。

# 第6話　能力の行使

今、俺は海賊達と対面している。

無論、麦わら海族団のように友好的に接することができるならよかったのだが
残念ながらそういう海賊ではなかったようで、見える限り全員から銃を向けられた。

それがを理解した瞬間

「うわあああああああああああああああああ」

情けない叫び声を上げながら、俺は必死で逃げだした。

海賊に助けを求めようとして海岸に残り続けたのがそもそもの間違いだった。
丸腰の子供に大人が総出で襲い掛かってくるなんて思わなかった・・・
・既に手遅れだが。

「こらあああああああああ待てやあああああああああああああ！！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

俺の悲鳴を追いながら海賊達が銃を撃ってくる

追いかけられている時、唐突に本編を少し思い出した

アルビダの時
奴らは客船を襲って金品を強奪していた

アーロンパークの時
ルフィが助けるまで、村人は虐待　場合によっては殺されていた。

アラバスタの時
クロコダイルが意図的に戦争を仕掛けて自身も殺戮を繰り返していた

魔の三角海域（フロリダトライアングル）の時
ゲッコー・モリアは部下を使って死者を改造し、生きた人間の影を入れて意のままに動くゾンビ兵を作っていた

シャボンディ諸島のヒューマンショップの時
海賊のはぐれ者みたいな奴が人間やその他の種族を捉えて金持ちに

売っていた

漫画に載っているルフィの麦わら海賊団や白ひげや赤髪のような連中なんて存在は数え切れないほどいる海賊のほんの1部であることを思い出した。

それはそうだ。麦わら海賊団は時々感謝されて金塊とかを貰ったりして生活できているが
他の海賊は食料を手に入れるにはどこかを襲うしかない。
そしてその標的になるのは・・・客船かどこかの港。

そこの一般市民達の運命なんて想像したくもない。

「逃げるなあああああああああ!!」

逃げるな言うんならまずその銃おろしてくれよ!!
俺何にもしてないぞ!!

「おとなしく捕まれえええええええええええええ」

つ、捕まれ??

つまり、人身売買の方？
それかそのまま海賊船の奴隷にするか・・・どちらかだろう

いずれにせよ、碌な選択肢ではない。

「捕まってたまるか！！！！！！！！！！！！！」

そうだ。

こんな訳のわからない世界で

何も分からないまま全てを・・・死ぬわけにはいかない！！！

俺は、その場に立ち止まり　海賊たちに向き合った。

海賊たちは観念したと思ったのだろう。歩きながら、囲むように徐々に迫ってくる

海賊に最初からこれを使わなかったのは
人を殺したくなかったから

この力の存在は、薄々感づいていた。しかし使わなかった。

俺は軍人でもないし戦争なんか見たこともない

だから死ぬ場面なんてドラマとかでしか見たことがない

人を殺すことに抵抗があった。普通の人間でいたかった。

これを初めて誤ってだが使ってしまったとき　俺は本当に驚き、怖くなったものだ

そしてそのことでずっと悩んで　もうこれは二度と使わないと思っていた

だが

「食欲（グリード）」

死にたくない

そのために、初めて力を生物に向けて　自分の意思で使用した。

数分後　追ってきた海賊たちは俺に”喰われた”

「ふぅ・・・」

俺は、初めて人を　しかも悪魔じみた能力で殺してしまった。

追っ手は元々俺に銃を向け、捕まえに来た。だから殺すしかなかった

傍から見れば、正当すぎるほどの自己防衛だと思う。

しかし自分で何度そう思っても、その場で泣き崩れてしまった。他

の仲間が来るかもしれないことを忘れて泣いた。

初めて人を殺したという自覚のせいで、あまり覚えていないがかな

り吐いたと思う。

やっとの事で泣き止んで辺りを見回す。
まだ海賊の追っ手は着ていないようだ

泣きやんで、やっと自分の心の整理がついた。

これから、どんなに平和な所に行こうと、どんなに辛くても
心を麻痺させ、人を殺す、

殺そうとしてくる”敵”は　殺す覚悟を決めた。

## 第6話　能力の行使（後書き）

ヒューマンショップに売りに来る人は実際は海賊ではないのですが自分の考えではやっていることは海賊と大して変わらないと思ったのでそういう考えの下　はぐれ者みたいな奴　と書きました。

食欲（グリード）については次話で解説を入れようと思います。

6／28　大幅修正。ここが1番自分で読んでて恥ずかしかった・・・

# 第7話　食欲と死兵（前書き）

後半からグロ注意です。

# 第7話　食欲と死兵

「糞、さっきのガキを追っていった奴等はまだ戻ってこねぇのか？あぁ？」

プロレスラーのような筋肉質の、装飾と髑髏のマークのついた帽子と血の染み込んだシャツのような服から考えれば海賊の船長であろう。

海賊船の前でその男が部下を怒鳴り散していた。

「す、すいません・・・」

「使えねえ野郎だ。海王類の餌になりてェか？」

男は、さっさと仕事を終わらせない部下にとてもイライラしているようだ

「ヒッ・・・」

部下もそれに反応して小さく震える。

だが、決して異論を唱えたりはしない

もしそんな事をすれば、この場で切り捨てられると皆わかっているからだ、

海賊に人道なんてない。あるのは略奪と無慈悲な心だけ

それが海賊である。

「全くですケヘヘヘヘ、あんなガキに梃子摺っているようでは・・・とっとと切ったほうが船のためですね」

細身の、遠くから見れば人間と同じ大きさの、服を着た大きな蛇・・・ではなく、れっきとした人間の男が船長に話しかけた。

「フン、あと１０分以内に戻ってこなければこのまま出航する。代わりはいくらでもいるからな・・・おい！食料と水は確保できたか？！」

「へ、へいっ！！？　えーと・・・既にどちらも補給は済んでいます！！」

部下が慌てて応える。

「ケヘヘ、ならば今すぐ出航しても問題はないですね。」

切る

普通の会社ならば、首切り　つまり退職の事だろうが、海賊の世界の場合は、残酷な意味を持つ。

この場合は「誰もいない脱出不可能な無人島で終身刑」が適切だろうか。

海に出ようとすれば、魚や海獣などの餌食になるだけ。

しかもこんな無人島滅多に人はこない　さっきの海軍でさえ海賊ら

を追って来た船で、普段はこんな辺境の地に来ることはない。生きてここを出られる確率はかなり低いだろう。

無論、その場で殺したり海に投げ込んだり、人身売買の商品にする道も存在する。

略奪を繰り返す海賊に慈悲なんて欠片もない、という事がよくわかる言葉だった。

「おい」

森から1人の男が出てきた。
その男は顔を下に向けながら、ゆっくりと海賊達をの方に歩み寄っていく

「!?」

海賊達の視線が俺に集まった。

「てめ、おい。部下はどうした?!」

船長と横にいた蛇男は一瞬俺の余裕の態度に焦ったが、すぐに飛んで火に入る夏の虫　とばかりに逆に余裕の表情になった。

「ケヘヘ、追っ手から逃げ切ったのですか。運がいいですね　船長、あいつらは少しここに残ってでも始末しましょう」

俺が追っ手を全て振り切ったと思ったのだろう。

「チッ、面倒くせぇ。おいガキ、大人しく捕まれ!!野郎共、捕らえろ!!」

ガキ1人にその人数は過剰戦力ではないか?　・・・と思ったが、よく考えたら追っ手から逃げたのだからそれだけの素早さがあると思っているのだろう。

なら、ここに全員を差し向けられてもおかしくないな。

などと考え、心に余裕を持ちながら10人ほどで掛かってくる敵に

「食欲（グリード）」

俺がその一言を発し、襲い掛かってくる海賊に触れた途端に全員が消滅した。

「な、何だ!?おい!!野郎共どこに行った!?!?」

能力を発動させ、一斉に飛び掛ってきた敵を”喰らう”。

傍から見たら全員が突然消えたようにしか見えないだろう

「次は・・・お前か。行くぞ」

そう言って、船長の所に走り出す。

「な・・・・く、来るな!!!!わあああああああああああああああああああああ」

逃げ出した船長の背中に触れることなど容易であった。

触れた瞬間、船長を喰らった。

辺りからは、波の音と木が風で揺られる音しか聞こえなくなった。

「ケへ、ケへへ・・・　す、素晴らしいですね！あ、貴方は何者ですか？」

動揺して顔を真っ青にしながらもすぐに媚を売りながら男がこちらに向かって語りかけてきたのに気づき、そちらに顔を向けた。

すぐに殺してしまってもよかったのだが、まだ殺す事に対して嫌悪感を抱いていた俺はどうするか迷ったが、すぐにこいつは『敵なんだ』と考え直し、再び覚悟を決めた。

「名乗る必要は無い。それに・・・次はお前だ」

「まぁまぁ・・・落ち着いてください。わ、私は強い人がとっても好きでして。貴方についてゆきたいのですよケへへ」

俺が襲ってこないのを確認して男が馴れ馴れしくしてくる

着いてくる?俺を捕まえようとした海賊が俺に?
何だこいつ?全く、冗談じゃないぞ

「着いてくる?冗談じゃない　お断りだ」

「ケヘヘ・・・ならばいい物をお見せしましょう。船の中へお入りください　きっと面白いですよ
私の船に乗っていただけるならこれらを皆貴方に差し上げましょう」

もちろん罠の可能性も考えたが
この航海士も船を動かす人員もいない今、俺を殺しても何の意味も無い。
俺の能力を見たのだから、俺を追ってきた人間がどうなっているのか勿論予想しているだろうから
罠を仕掛けて俺を怒らせるようなことはしない筈だ。
刺し違えてでも殺そうとしてくることを考えると、絶対とは言い切れないが・・・

いや、こういう狡猾なやつは、どんなに頭に血が上っても自分の利を手放そうとはしないだろう。
そう思って俺はそいつの誘いに乗った

「ささ、お入りください船長」

「（誰が船長だ。貴様の船長になる気など毛頭ない。）」

そう思いながら、船室の扉をくぐり中の階段を下って行った。

「ケヘヘ・・・どうです?船長」

それを見たとき、俺は頭が真っ白になった

そこにあったのは鉄の檻の中で鎖に繋がれた女性

隣には見たことがない動物

その大半は既に事切れている
1人だけ生きている人間がいたが、ひどい拷問に合ったのだろう
身体が傷だらけで食事を与えてもらえないのか、とても痩せ細っていた。

動物はかなり生きていたが、床にはその檻の中にいたであろう動物が死んだのか、その死体が無残に踏み潰されている。

この部屋のありとあらゆるものに血が付着して点々と赤黒いシミがついていた。

「いいものでしょう・・・ケヘヘヘヘ　女は犯して鞭打ち、その辺の動物は殺すまで甚振って最後には踏みつけて鳴かすんです　気持ちいいですよ・・・キハハハ!!!!」

何も考えられなかった頭が、今度は逆に冷静になってゆく

「あそこの女は、16歳で食べ頃なんですがね。どんな事をしても鳴かないもんで。全員放っておいてるんです　まだ誰も手を出してないので船長、犯ってみます?ケヘヘ・・・ヘ・・・?」

そこで男の言葉が止まった
それも当然だろう。俺が相当切れていたのがわかったのだろう

俺は只の高校生
若いとはいえ、友達と喧嘩をしたり、暴力を振るったり振るわれた経験もある。

しかし、今のような感情を覚えたのは生まれて初めてだった。
この状況を自覚するごとに、怒りで胸が熱く、鼓動が早くなっていった。
そんな中で、頭だけは怖いほどに冷静な自分がいた。

「お・・・お気に召しませんで・・・？船ｔ「おい」　！？」
突然の俺の言葉に驚く男
「船から降りろ」
「へ？何ｄ「船から下りろと言ってるんだ！！！！！」」

男を蹴り飛ばして甲板に蹴り出した。
火事場の馬鹿力という奴であろうか。いとも簡単に男の身体は吹き飛んでいった。

俺も甲板に出る。砂浜まで蹴飛ばされた男は震えながらこっちを見ている

こいつ等には容赦したくなかった。
別に階段の下の奴らの敵を取ろうとしている訳じゃない。

だが、こいつらが心底嫌いだった。身体が嫌悪していた
だから・・・

## 「死兵（アンデッドソウル）」

甲板から降り、砂浜に足を着いて
そう俺が唱えた瞬間、男の回りに影が生まれる

「へ・・・？え・・・？」

そして、影の中から人が出てくる

「せ、船長！？お前ら！？！？　　なっ、お前らまで！？」

影の中から出てきたのは、さっき消えた船長とその部下達。

そして、俺を最初に追って来た部下もいた。

男は焦っている。船長が帰ってきてくれたというのにその顔はみる
みる白くなってゆく

「・・・・・・・」

陰から出てきた奴らは全員声を上げない。
船長も何も言わない

男が怯えるのも当然である
周りにいる船長たちは全員

無機質な、無表情の青白い顔をしていたのだから

「殺せ」

俺のその一言で、影から出てきた船長たちは雄叫びを上げて男に襲いかかった

「せ、船長！！？？やめて・・・うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ・・・・・」

男は、みっともなく失禁しながら一心不乱に、森の方へ駆け出していった。

そして、生気の宿っていない船長達はそれを追いかけていく

俺の「殺せ」という命令を遂行するために。

## 第7話　食欲と死兵（後書き）

砂浜に届くほどの蹴りを入れる描写がありますが
怒り＋火事場の馬鹿力がなせる業で、本人の身体能力は普通の高校生のままです
ちょっと無理があったかな？

次回、ヒロイン登場です

６／１８　大幅修正完了。

# 第8話　融合

船の中に戻った俺は、すぐに船の中の牢獄に向かった
さっき、あの男と話していたとき　まだ1人生きていた
生きている動物もまだ何匹かいるだろう。
せめて生き残っている人と動物達は助けたかった。

牢獄に入ってすぐさっきと変わらない、目をふさぎたくなるような
風景が飛び込んでくるが
その状況耐えながら、すぐに牢の鍵を探した。

鍵は壁にかかっていたため直ぐに見つかり、牢獄の扉に差し込んだ。
3本目で鍵の開く音がして、急いで扉を開けて中にいる人に駆け寄った

「おい、大丈夫か！！」

そこにいた少女を見て俺は絶句した

腕は手錠によりつり上げられ、足以外は完全に身動きがとれないようになっている。
足が動けるようになっているのも、抵抗されないようかつ楽に性行為をするための意図なのだろう。
服は鞭でうたれたのか所々破れ、破れた箇所から見える肌は血が滲

んでいる。
顔は青白く所々にアザがあり、目は虚ろで、声をかけても揺すっても床を見続け動かない

俺は慌てつつも急いで牢屋の鍵を手錠に使うと、すぐに外れた。

この時なぜか水を飲ませたほうが良いと思い
急いで海水と船の木を使って塩の入っていない水と木のコップを創り、それを少女の口にあててゆっくりと飲ませた。

しかし、口の横から水が零れるばかりで飲んでくれる気配がない。

心臓は動いているのだが、それもとても弱弱しかった。
過度の拷問で苦しんだ結果だろう・・・俺は再度この海賊達に再び激しい怒りを覚えたが、一方で焦りながらどうするか考えていた

「（どうすればこいつを助けられるんだ・・・？！）」

そう思っていると、少女が微かに動いて口を動かした

「・・・・・・・・・・・・て・・・・・」

「意識があるのか！？なら、とりあえずこれを飲め！！」

そう言ってコップを差し出した。

しかし、少女はそれを受け取らなかった

「あ・・・た・・て・・・・」

「何て言ったんだ!?」

「あの・・子・助け・・・・」

そう言うと、顔を下に向けたまま少女は弱弱しく腕を動かしながら牢の外を指指した

俺はコップを少女のすぐ傍に置いて、指差した方向に向かった。

そこには、一匹の見た事の無いオレンジ色のセキセイインコに似た鳥が動物用の網の牢に閉じ込められていた。

餌を与えられなかったのか、半分目を開けながら下にポトリと蹲っている。

よく見ると、ほかの動物たちも餌を与えられずに息絶えてるか、相当弱っている。

残念ながら、この鳥はもう死んでしまうだろうと思った。

まだかすかに動いているので生きているようだが、既に羽を羽ばたかせる事もできず、目も閉じかけている。

すぐに網を取り外して、鳥を優しく持って少女の下に持っていく

「その・・・子を」

少女は気力を振り絞って言葉を紡いでいる

ドサッ

言葉を続けたかったのがわかったが、言い終わる前にその場に頭から前に倒れこんでしまった

「おい・・・？」

顔を覗き込んでみるが、目を瞑っている

心臓に手を当てると

「（――ッ！）」

そこには、最後の気力を振り絞って小鳥を託したすぐ先ほどまで生きていた少女の亡骸があった。

この少女は海賊とは違う　なのになんで死ななきゃいけなかったんだ？

目の前で起こった理不尽な出来事に、俺は再びその場で泣き崩れた
一生分の涙を流したかと思うほど泣いた。

泣いている中で、俺は少女の亡骸を抱き、その上に虫の息の鳥を乗せて、甲板の外に出た。

このままでは鳥も死んでしまう

それが耐えられなかった。

俺は、今感じている怒りと悲しみのせいで、無意識に行動していた。

砂浜に降り立ち、自分の家である小屋に戻る
そして、少女の遺体をベッドに載せ、その上に鳥を乗せた。

この能力の使い方がいつの間にか判っていた

既に息絶えてる少女の上に鳥を、さらにその上に手を置いて、その能力を使った。

1人と1匹を「融合」させた

## 第8話　融合（後書き）

ヒロイン登場とか言ってごめんなさい　次回になっちゃいましたｏｒｚ
そして文章がまだまだ甘いのが自分でわかります・・・やっぱり難しいですね。

６／２８　文章大幅修正。当時は気づかなかったけど、空白多すぎた・・・

# 第9話　少女と出会った（前書き）

年賀状書いたり色々忙しくなってまいりました
リア充はだいばくはつすればいいと思います

# 第9話　少女と出会った

目を覚ますと、いつも過ごしていた小屋にいた。
辺りにはいつもの景色を映し出す窓。
机の上のオレンジな悪魔の実。
ベッドの中の女の子。
窓からあふれ出す光

・・・・ん？

もう一度ベッドに目をやるとオレンジ色の髪をした、全く知らない女の子が横たわっていた。

落ち着け、落ち着け、なんでこんな所に？いや、いつの間にこんな子連れ込んだ・・・？
えー、昨日は・・・
起きて、海賊に襲われて、逃げて、殺されそうになったから海賊に能力を使って、海賊の船長を喰って、蛇男に話しかけられて、船の中に連れて行かれて・・・
拷問を受けていた人や動物達を見たところまでは覚えているが一部思い出せない？　まあいいか。それで部屋に戻って、牢屋の中にいた少女に駆け寄って・・・あれ、こっから思い出せない？

その後、結構何かあったような気がするけど・・・思い出せない
考えていると、何故か胸が苦しくなりそれ以上のことが考えられなり、どうしようもなく悲しくなって泣きたくなってしまった。
何で？　と思ったが、自分でも全く理由が判らなかった。

とりあえずそれを頭から振り払い、目の前の女の子を改めて見る

寝ているようなので、話をするために声をかけてみる
「おーい、起きてくれー」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

起きる様子はない。すごくいい顔で寝ている

「起きろって言ってるだろ!!!!!」

少しイライラしながら布団を捲って、俺の顔が真っ赤になった。

・・・・女の子は全裸だった

▽おれは　どうする?

コマンド?
　にげる
　にげる
　にげる
＞にげる

しょうねんは　にげだした!

逃げ出すときに、ちゃんと布団が体にかかるようにしてから逃げた俺を誰かほめてほしいものだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とりあえず落ち着いてから、能力で適当に俺の通っている学校のセーラー服を出して、目を瞑りながら着せた。

え？服をどう着せたかって？　・・・それは聞いちゃ駄目だよ。健全な男子高校生が全裸の女の子に服を着せる経験なんて普通ないよね

あ、もう色々と普通じゃないか。

『襲わなかったの？このヘタレが！』だと？

いくら人殺しで、不法侵入してきた全裸の知らない女の子だからって寝てるんだし、何よりそんな事したら消えたくなる。というか、布団めくっただけでもう罪悪感で一杯なのにこれ以上何をしろと。

え？なんでセーラー服の着せ方や構造知ってるか？
ハッハッハ、それはね　クラスのアホのＤＱＮが女子更衣室に忍び込んで取ってきて
俺らに自慢げに見せてだな、案の定結局女子更衣室で騒ぎになってたから机の上に畳んで置いておいた
とかいう事件があったんだ。

余談だが、その件は自分の机に制服が置いてあったので学年集会程度の騒ぎで済んだ。

改めて女の子を見ると・・・いや、女の子って言うのやめよう、ここから少女って呼ぼう。
その少女は大体俺と同じ年くらいのようだ。

普通に若い。変わったところといえば髪が黒や茶色じゃなく赤に近いオレンジ色な所かな

しかし・・・小屋は暖かいとはいえ、こんな雪降ってる所で何も着ないで入り込んでくるとは何者だ？

「うー・・・・」

起きたかと思ったら、まだ涎をたらしながら寝ているようだ。

▽しょうじょ　は　ねている！

コマンド？

ねかせておく

＞おこす

たたきおこす

たたきおこす

たたきおこす

たたきおこす

とりあえず起こしてみることにした。

「おーい、おきろー」

再び揺さぶってみた。

ユッサ・・・ユッサ・・・

「うーん・・・・ハッ!?」

目を開けて少女が跳ね起きた!

突然だったため、少女の額が俺の顎にクリティカルヒットし、ガツンという痛々しい音を出した。

俺はあまりの勢いにバランスを崩して床に頭を思いっきりぶつけて鈍い音が立った。

「おー、痛い・・・痛くないけど。　起きた?」

「痛い・・・・」

俺のあごに当たった部分を押さえながら少女はをそう言うと

まず自分の状態をキョロキョロと確認して、自分がベッドで寝ている事を確認したようだ。
すると、目を丸くしながら胸を隠すように腕を組みながらこっちを向いて話しかけてきた。

「私はひょっとして襲われたんですか？」

おいこらあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

こっちとら勝手に小屋に入ってきたお前を追い出さずに服まで出して着せて襲わなかったんだぞおおおおおおおおおおおおおお
感謝しろよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
感謝ああああああああああああああああああああああああああああああああ

ハァ・・・ハァ・・・

「あのー・・・大丈夫ですか？」

ああ、心配してくれてありがとう

「主に頭の事です」

ギロッ

「ひゅあ!?」

軽く睨んだら訳のわからない奇声を上げた

「ただ、ぶつかった頭のことを心配しただけなのに・・・」

「え？　あ、ごめ「・・・ま、まさか私はサディストさんにいじめられてしまうんですね!!」誰がサディストだ!誰が!!!」

アレ?ナンデコンナテンカイニナッテルンダー

## 第9話　少女と出会った（後書き）

気がついたら好感度ゲーになってました

このヒロイン、元となるキャラがいます。
気がつかれた方はそのままそっとしておいてやって下さい作者はこのキャラが大好きなんです

さて、そろそろ主人公の名前決めないと・・・

6／28　大幅修正完了

# 第１０話　俺の名前は（前書き）

キャラクタープロフィールは出航したら載せます。

## 第１０話　俺の名前は

「と、いう訳で　俺が気がついた時には君はここにいた。」

「私は気がついたらここにいました。何も覚えてません」

あのままでは埒があかなかったので、そのまま話を続けた結果

・気がついたらここにいた
・自分の事を何も覚えていない
・ここがどこかもわからない
・小屋で目を覚ます以前の記憶が何も無い

つまり記憶喪失らしい。

そして、今１番の問題は

「私の名前は何なんですか？」
「んなこと俺が知るか！！」

名前である。

「じゃあ逆に聞きます！あなたの名前は何ですか！！」

「え？」

しばらく経っていたので忘れていたが、俺もこの子同様、名前を覚えていない身だった事を思い出した。

さて、どうしたものか・・・

「じゃあお互い適当に名前をつけてしまいましょう！」

「随分と安直だな・・・まぁそれがいいだろう。ないより遥かにマシだ」

「じゃあ・・・ゴリラって呼んでもいいですか」

「ちょっと待てやゴルァ」

「じゃあ・・・オタクって呼んでも」

「ごめんなさい許して下さい」

「じゃあ・・・天才って呼んでも」

「別に俺は天才じゃｎ「天才と書いてバカと読みます」おいこら待てや」

「じゃあ・・・愛してますって言っても」

「とりあえず落ち着こうｋ」

「冗談です」

「・・・・・・・・・・」

「じゃあ・・・あれ？何で泣いてるんですか？」

「うるせーよばーか！！純情を弄びやがって！」

「何を言ってるんですか？？？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・

「文句が多いですね・・・一体誰に似たんですか？」

「いや、お前の提案の全てがおかしいだけだ」

結局かなりの数を提案してもらったが碌な物がなかった。
某夢の国の生き物たちが出てきたときは、なんで知ってるのかと小一時間問い詰めたくなる衝動に駆られてしまった。

「じゃあどうすればいいんですか！？」

そこでふと、閃いた。

俺は前の世界で友人と学級旗のデザインを考えている時に俺が出したアイデアを思い出していた。

この名前なら、ワンピースの世界の名前としては申し分ないんじゃないか？
名前を呼ばれてもあんまり違和感ないし・・・

「こういうのはどうだ？
これから俺ら船乗ってくだろ。だから・・・帆で”セイル”
さっき話したとおり、能力で死者操ったりできるから”ファントム”」

「・・・・・（ススッ）」

グサグサッ↑心に突き刺さる槍

「引くな、！引かないで！（切実）　女の子に引かれるとすごく辛い！
それに俺はこの名前が自分でしっくり来たんだ。
今からセイル・ファントムって名乗るぞ」

「言ってて恥ずかしくないんですね！すごいです！！」

セイルの心のＨＰに９９９９９９９９のダメージ！
セイルのせいしんはちからつきた！
めのまえが　まっしろになった！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・

「で、俺はお前をなんて呼べばいいんだ？」

フフフ・・・次はお前の番だ！
俺が受けた屈辱を、お前もたっぷりと味わうがいいわあああああ

「覚えてないです！！」

ズサー

「んなことはとっくに分かってるよ！　名前を考えろ！！」

全く、なんでこんなボケ突込みをこの辺境の地でしなきゃならないのか・・・と思いつつ聞き返した。

「そうですね・・・じゃあ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・

## 第１０話　俺の名前は（後書き）

ということで、主人公の名前はセイルファントムになりました。
理由は、帆のデザイン考えて、デザイン考えてたら髑髏に人魂のイラストが気に入ったから。
なので帆のデザインは人魂が含まれます。

次回、少女の名前を明かしてからやっと出航します。

６／２８　大幅修正完了。

# 第１１話　初出航（前書き）

キャラクタープロフィール・・・書かないとなぁ

今回は両方とも名前を出すので次回プロフィールを載せようと思います

# 第１１話　初出航

「よし、じゃあ今日からそう呼ぶことにするよ。」

「ちょ、せっかくカッコいい名前付けたのに完全無視ですか！？」

ひとまず自分の名前が決まったが、この少女は気に入らないようだ・・・主に自分の名前なのに自分の意見が全て通らなかったという点で。

・・・どこぞのリリカル魔王様や青髪貧乳オタク、炎髪灼眼の名前を出されたら誰でも却下したくなるだろう？
数字を名前にしようと提案したら、２３という数字に何かひっかかったらしく　それで名前を決めることになったのだが・・・

「いいじゃないか別に。名前が変わってる訳じゃないんだし」

「いや、そうですけど・・・ね？　あ、今思いついたんですけどキュウべえなんてどうですか？」
「お前、絶対知ってて言ってるだろ」

そんな会話をしながら、俺たちは船の所まで来ていた。

甲板に上がってまず最初に階段下の牢の部屋に入った。
あまり入りたくはなかったが、生きた動物がいたら・・・と思うとどうしてもそれを放ってはおけなかった。

部屋の中に入ると、肉が腐ったとき特有の嫌な臭いが充満していて思わず立ち去りたくなったが、構わず部屋に入り辺りを見渡した。

しかし、牢の中や篭の中には生きた動物は1匹もいなかった。

一瞬、全ての動物が死んでしまったのかと思い全身から力が抜けかけたが、少ししてそうではないことに気づいた。

昨日は篭は全て閉まっていて、中には必ず1匹以上の動物が入っているように見えたが、今は半分くらいが開けられていて、この部屋にいた動物もかなり減っていた。

ちょっと迷ったが、生きている動物がいないなら何もすることがないので、少しこの部屋に生きている動物がいないかを探してからすぐに甲板に出た。

次に、この船で冒険に使えそうな素材を探し始めた。

この島にいても俺が元の世界に帰る切欠を掴める訳でもないし、何より生きてて面白くないからこの島から出ようと思っていた。
そもそも、こんな毎日島をさ迷うだけの人生を送らなきゃいけないなんて真っ平御免だが

朝、少女に「ずっとこんな島にいたんですか?世間知らずですね」って言われたからも大きな要因のひとつであるのだが。

小屋からは撤収するが、遭難者が来たときのために色々と残しておいた。
(即席島の地図、危険な場所マップ、食料確保マップなど。俺の血で書いたので知らないで見たら軽くホラーだろう)

悪魔の実は、原作どおりならば1億ベリーの価値があると記憶しているので、そのまま持っていくことにした。。
能力を使えば元のお金があればいくらでも増やせる上、海賊船に少し金塊があったので必要ないとは思うのだが、ばれた時が面倒なのでそれは出来るだけしないようにするつもりだ

その後は牢の中の人や篭の中の動物達を弔うため
中にいた人と動物たちを協力して運び出し、森の入り口周辺に能力なしで掘った穴に埋めて
宗教とかはよくわからなかったので、植物の蔓で簡単に木を縛って十字架を作って弔った。

「・・・なんでこの人たちはこんな事になったんでしょう」

そう呟いているのが聞こえたが、それに答えることはできなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・

「この船を使うんですか？」

「馬鹿言え、このまま使ってみろ　海軍に見つかって俺らが捕まるぞ」

海賊旗を掲げていたら、それは即海賊と見なされて逮捕もしくは沈められてしまう。

もし捕まって、あのインベルダウンに幽閉されでもしたら最悪でもルフィがポートガス・D・エースを助けに来る時に脱出するしか手段がない

今が原作の何年前後なのかもわからないため、そんな愚は避けたたか

った。

とりあえず、船の中に剣などの鉄製品がないか探し始めた。

2人で船をあさり始めて、甲板からすぐ手前の部屋に入ったのだが

「ふおっ!?何ですかこれは!!鞭の山です!」

「ろくでもない拷問器具ばっかだな。剣はどこにしまってるんだろうな?この部屋ならあってもおかしくないんだけど」

奴隷船のような役割の船だけあって、かなりの種類と量の拷問器具が部屋に置いてあった。

残念ながら、鉄製の拷問器具はほとんどが血で錆びていて使う気になれなかったのでこの部屋を出た。

そして次の部屋に入ったとき、俺は妙なものを見つけた。

「これって・・・記録指針(ログポース)じゃないか?」

航海士の部屋だったのだろうか。机の上に散乱した地図とアニメで見た航海道具が置いてあった。

そこで見つけたのは、方位磁針の入っているガラスの球体の中がついている腕輪だった

「何ですかそれは？」

「ああ、これは偉大なる航路（グランドライン）の島々を渡るときに使う指針だよ」

記録指針（ログポース）とは、特殊な磁場・気候のため方位磁針がまったく役に立たないグランドラインで唯一使えるコンパスの一種であり、滞在地の記録（ログ）というものをためる事によって次の目的地を示すという便利な道具である。

ちなみに永久指針（エターナルポース）というものも存在し、こちらは特定の１つの島を永続的に指し示すコンパスである。

見分けは、腕輪型（ログポース）と砂時計（エターナルポース）。

グランドラインを渡る方法を見つけて喜びつつも、他のいくつかの部屋をあさっていきながら奥の部屋に進むと

「ありました！剣の山です！！」

「おー、これはすごいな」

その部屋にはかなり多くの剣が、かなり無造作にうず高く積まれていた。

そんな中で、奥に大切そうに飾られてある剣が目に留まった

普通の西洋風の両手剣だが、この部屋の中にあるどの剣よりも遥かに綺麗に手入れされており、普通の銀ではなく鈍く銀だけではなく紫にも光っている
装飾も
丈夫そうな剣だったので、これに決めて額から船の外に持ち出した。

「それをどうするんですか?」
船を出てからすぐに不思議そうな顔で見られたので、早速考えていたことを始めることにした。

俺はその剣をを地面に突き刺し、能力を使って海賊船を真似つつ刀を変質させていく

「おお・・・」

変質が終わって形が定まると、先ほどの海賊船と大体同じ形の、木製ではなく先ほどの剣の鉄を使用した紫かかった船体の船が砂浜の上に完成した

「こんな事もできたんですね!すごい能力ですね!!」

「どうだ、俺のおかげだぞ!」

「うん。本当にすごい”能力”ですね！」

「・・・」

「すごい”「能力」”ですね！！」

「・・・ごめん」

能力　という部分を強調されて涙目になりながらも俺は作業を続ける。

ます、海賊船から木の1部を剥ぎ取って作った船の上を木の板で敷き詰めた。
そしてそこに森から芝生を作るための草と土、そして捕っておいたでかい蟹を持ってきた

まず木の上に土を置いてそこに草を植え、甲板中に行き渡るよう増やして　原作のメリー号のようにする。

蟹は、海賊船の中にあった保存庫を使って冷蔵庫を作った。
「これは何ですか？」と聞かれたので電気で動いて、食べ物を冷やして保存する機械だと説明したら
セイルは理系狂科学者（マッドサイエンティスト）だったんですね！って言われた　冷蔵庫開発した人に謝れ！！

ちなみに、電気は船の中に釜と煙突を作ってそこから出る蒸気で風車を回して発電するようになっている
蒸気船を作りたかったのだが、その原理は知らないので残念ながら作ることはできなかった。
ついでにその釜の隣で熱を利用した鉄板を作ったので、簡単な料理が出来るようになっている。
発電機に使うコイルやモーター等の精密な部品作るのがうろ覚えでとても大変だった。

海賊船から使えそうなものを運び込む作業でさらに時間がかかったが、それも予想してた時間よりはるかに短い1時間ほどで終わった。

そしてその他色々な部分を作って、最後に船に使用されていた黒の塗料を使って船をデザインして完全に自分の船が完成した。

鉄で作ってあるが、普通の船の原理を知らないので海賊船をそのまま真似て帆船である。
基本は鉄だが部屋やマストは木で作ってあり、帆には自分の名前である”ファントム”から炎のマークをつけ、青で2３と大きく書かれている。
無論、海賊ではないので髑髏マークはついていない
船の横には蒸気船ならではの水車がついており、凧の帯（カームベルト）でもゆっくりだが動ける程度の動力をつけることができた。

「出来た！　おー・・・意外と立派な船になったな」

「おお、すごいです！　こんな船世界に1隻しかないですよ！！」

元の世界にはこれなんてゴミに見えるような船がいくらでもある、
と頭をよぎったが
それはは胸の奥深くに閉まっておいて素直に完成を2人で喜び合った。

そして、仕上げに船を海に着水させる用意をした。

「あれ？」

「どうした？」

「どうやって浮かばせるんですか？」

船は、黒の染料を綺麗に塗るために砂浜に置いてある。
これでは、砂に船底が沈んで出せなくなってしまう

「なめるな。無論ちゃんと考えておいたさ！」

浜辺に落ちていた貝殻を増やして形を整え、砂浜に道を作る。そして・・・

「鉄を変形してローラーにする！！！」

船に触れて船の前と後ろに鉄の棒を出し、船をバランス良く全体的に持ち上げる
さらに貝の道の上にちょっと浮かぶようにローラーをつけた

「いくぞ！乗り込め！！」

「ふぁい！？ちょ、ま」

俺たちは船に急いで乗り込んだ。
その途端、前の鉄の棒がポッキリと折れ、船が前のめりになりローラーで動き出した

「「うわあああああああああああああああ」」

バッチャーン！！

激しい水音と共に、それに相応しい水しぶきがあがって見事に船を

海に浮かべることに成功した。

「何てことをしてくれるんですか！！！！！セイルは悪魔です！！」

うん。本当にすまんかった

鉄の棒があんなに早く倒れるとは思ってなかったんだ

「それにしても、ちゃんと浮かんでますね・・・」

「当たり前だ。ちゃんと船が浮かぶ原理研究したもんね！」

ちなみに、浮力については物理の授業で最近習ったばかりなのはセイルだけの秘密。

「じゃあ・・・どこに行く？・・・フミ？」

「うるさいです！ニザンって呼んでください！！　そして目指すはまっすぐです！！！」

「だから、その名前はどう考えても変だって。２３そんなに重視しなくていいから！

それに、フミで２３なんだしそっちの方が語呂もいいしいいじゃん！」

「でも、なんとなく普通っぽいです・・・」

「普通でいいだろうが！　普通で！」

「そういう事を言ってる人は会社作っても失敗するタイプです！」

「作らねーよ！？」

俺たちの2人旅が始まった

## 第１１話　初出航（後書き）

という訳で、主人公の名前はセイル
ヒロインの方はフミです。両方の名前は２３から来ています。２３は後のフラグです。

やっぱり複雑な動きを書くのって難しいですね・・・
訳わからないぞ！な部分があったら指摘してやってください。

あと、貝殻の道？すぐ割れるだろ　と思った方もおられるかもしれませんが、かなり厚くしてあるので問題ない・・・筈！

リリカル魔王様＝高町なのは
青髪貧乳オタク＝泉こなた
炎髪灼眼＝シャナ

ニザンは呼びづらいし、どう考えてもおかしいので設定完全修正。

７／２　大幅修正完了

# 第12話　キャラクター紹介（前書き）

今回はキャラクター紹介・悪魔の実能力紹介です。

# 第１２話　キャラクター紹介

●キャラクター紹介●

【セイル・ファントム】

異名無し

１６歳（♂）

身長　１７１ｃｍ
体重　６０ｋｇ

［特殊能力］

悪魔の実・・・ナノナノの実
体術　　・・・特に無し
覇気　　・・・未覚醒
身体能力・・・無人島で鍛えられたため、元の世界に戻ったら高校で番長になれるくらいは強い

［容姿・特徴］

黒髪、黒目　一般的な太ってもいなく細くもない、背も１７０ｃｍくらいの普通の体型。
悪魔の実を食べたせいで身体能力の上昇が早くなっている。
筋肉は無人島生活により本人も気づいていないがかなりついている。
しかし外見上はほとんど変化が無い。

長い無人島生活のせいで、髪が胸につくくらいまで伸びている。
服は突然飛ばされてきたため、ずっと学生服。
能力でちゃんと手入れはして清潔にしているがそろそろ新しい服が欲しいらしい

［性格］

基本的には人見知りをしない、誰でも対等に接する
危険な能力を持っているが、敵意を持って向かってこない人間に使う気は無い
基本的に身内には優しい（身内はあまりいないが）。

前の世界では色々なアニメを見ていた。オタクである
1人、とあるキャラクターを溺愛していたが本人は今はその事を忘れている（黒歴史・重病人）

1つのことに時間をかけて打ち込めば、その分野において誰にも負けないほどの事ができる
（但し、その能力を遊びと文化祭と俺の嫁（笑）以外に使ったことは無い）

『悪魔の実について』

名前：ナノナノの実
（図鑑には載っていない）

セイルがたまたま入った小屋の中に放置されていた実。

［効果］

食べると、絶対的な回復能力を手に入れることができる
他の悪魔の実同様、食べた人間は水に弱くなる（半身以上がつかる水・海水等）

使い方によっては、人間を瞬時に殺したり死んだ人間を傀儡として使ったり　対象の物質に触れると、その物質の質量の変化、形を自由に弄ることができるという凶悪な能力。（但し、原理がわからない機械や正確な形を思い浮かべられない人間などを形作るのは不可
　人間を消す能力も、なぜか1部の人間には通用しない）
死んだ人間も動かせるが、どんどん腐敗していくので使うことができない。

また、能力を得た後1度に限り「死んで間もない同種族（人間）の肉体」と「生きている肉体を持つ魂」を融合させ、新しい人間を造ることができる。
性別は、前者の肉体に依存し　性格もその肉体の性別に引っ張られるので大きく変化する可能性もある。
基本の性格は魂の方に優先される
生前、能力を使われる前の記憶などは魂・肉体共に全て消滅する。

追記：悪魔の実で造られた存在だが、悪魔の実を食べても大丈夫ら

しい

［防御能力］

ほとんどの物理攻撃は効かない。ただし殴られれば実体があるので普通にそれ相応に吹っ飛ぶ
怪我した部分はすぐに再生するためか、痛覚が無い。

剣で切られても、通り過ぎた部分から即再生するため剣には少量付着するものの、血は出ない。

［弱点］

今のところほとんど判っていない。
但し、一度小屋の前で焚き火をした時に何を思ったのか手を火に突っ込んだことがあり、しばらくは大丈夫だったが、少しすると普通に”熱い”という感覚と来て焦って引き抜いたことがある。
その部分は火傷になっていたがすぐに再生し、痛覚もすぐに消えたものの、再生能力も万能でなく痛覚もちゃんと存在するらしいことがわかった。

【フミ】

異名無し

肉体年齢１６歳（♀）
（ナノナノの実により造られた人間のため０歳とも言える？）

身長　１５８ｃｍ
体重　（聞いたら吹っ飛ばされた）

［特殊能力］
悪魔の実・・・無し
体術　・・・特に無し
覇気　・・・未覚醒
身体能力・・・平均的な女子中学生レベル。

［容姿・特徴］

茶に近いオレンジ色の髪、金色の目　髪は肩に届くくらいだが、揃えたいという本人の希望で木で造ったヘアバンドと布のリボンをつけている。
両サイドにクセ毛（？）がある
運動はあまり得意ではないらしい。

胸は目算Ｂで、スリーサイズは・・・聞いたら目を潰されたのでこの項目に新しい情報が増えることは無いだろう。

服はセイルの学校のセーラー服を元に作ってもらって着せてもらったがその事は知らない。
着替えは次の島に店があったら買う予定なので今のところ無し。

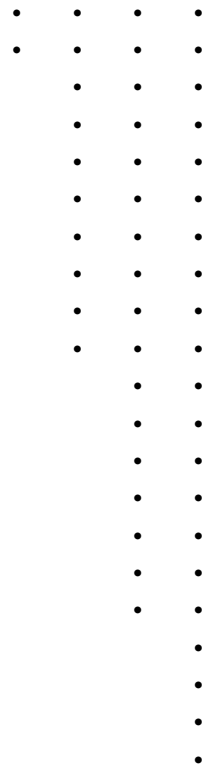
［性格］

天然。しかし、ドジをする訳でもなく人を惹きつけるようなキャラでもないが、本人は普通に返しているつもりらしいが、時々思ったことを包み隠さずそのまま言う・・・つまり超毒舌を発揮する。
言われた側の精神的ダメージは計り知れない（もうやめて！俺のライフは０よ！）

美しさは惨敗だが、代わりにものすごく可愛い。
例えるなら猫のかわいさのような感じ。

人見知りをするが、すぐに慣れる。

嘘をつくと目が丸くなり、冷や汗を書いて言葉が棒読みになるのですぐにわかる。



## 第１２話　キャラクター紹介（後書き）

え？セイル本人の知らないことや覚えてないことが書かれている？
・・・・ごめんなさい。キャラクター紹介枠で話数を変えたくなかっただけです

今後のキャラ紹介も、こんなノリでの紹介になるのでご了承下さい

さて、次回はついに第1章です。初めて原作キャラと遭遇する予定です
ご期待下さい！

７／３　大幅修正完了。
キャラ紹介で思ったことを書きすぎてたなあ。
ある程度は残しましたが、かなり自重しました

１２話って書いてあるの消そうか残そうか迷ってます

# 第１３話　能力者誕生（前書き）

年末年始掃除とか勉強とかで死ねる

# 第１３話　能力者誕生

島を出てから3日後

俺達はあの島からとうとう出航し、離れることに成功した。
帆船の知識は全くなく、海賊船の構造を真似ただけだったのであまり自信はなかったが、船の両側についている蒸気水車と合わせてゆっくり走る車くらいのスピードが出ているので問題はないだろう。

普通のコンパスが滅茶苦茶にならない所から、ここは偉大なる航路（グランドライン）ではないようだ
出発地点がいきなり偉大なる航路だったらどうしようかと思ったが、東西南北どの海かはわからないものの、わけのわからない気候や海王類に出くわすことはないため安心した。

それにしても、偉大なる航路でもないのにあんなでかい生物がいるなんて・・・ワンピースの世界の動物の生態系は一体どうなっているのだろうか？

・・・さて、そんな事はさておき。
今、船の上では重大な問題が発生していた。

「今日も蟹ですか・・・？」

「肉もあるぞ。人肉だけど」

「絶対に嫌です！！！」

俺たちは食料難ではなかったが、野菜を完璧に忘れてきていた。
前の島には大き目のゼンマイなどの食べれる山菜などの野草があったのだが・・・

ちなみに、どこからか沸いてくるといったあの肉なのだが、

俺の能力は、”触れている同物質のものの質量と形を操る効果”があるらしい

あの小屋の中に肉でできているものは1つ
お分かりだろう、俺の肉である。

「・・・野菜はどこに行ってしまったんですか・・・」

「我慢しろ。水ならいくらでも出せるんだから」

この船の食料確保は俺がやっている。
冷凍した蟹に触れて増やしたり（人）肉を出したりするだけだが。

ちなみに水は、海賊船にあった樽の中に海水を入れて　水面（水面だけなら大丈夫だった）に少しの間手を触れることで真水と塩を分ける事に成功した。
普通の海賊船が聞いたら激怒するか号泣されるだろうなぁ。喉が渇いて死ぬ人もいるくらいだし・・・

「セイルー、あの果物食べちゃ駄目？」

「あれものすっごくまずくて食えたもんじゃないぞ　それに俺みたいな悪魔の力がつく上水に入れなくなるからマジでやめとけ。」

フミがとうとうあの果物（悪魔の実）にまで手を出そうとしていたので慌ててストップ。

そんなやりとりをしつつ、甲板に座り込みながら辺りを見回す。

平和だ。

辺りに島影や船も見当たらない

波も穏やかで、水も透き通って海の中にいる黄色い魚の群れが見える。
時々カモメが船の上を通過したり、時々船の端にとまって一休みしていっている。

あー、早く島見えないかなぁ

一応、普通のコンパスでまっすぐ進んでいることは確認してはいるのだが　3日も海しか見ていないと流石に暇になってくる。
なので、しばらくは海をみてボーっとしながら蟹を餌に釣りをしたり（釣れるのだが、極端に小さいのか大きいのばかり。しかも大きいのは糸が切れるので釣れない）
氷柱のせいで穴の開いた腹に手を入れてボーっとすごしたり（フミにどん引きされた）
海賊船の船室で見つけたおいた本を読んだりして過ごした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

4日後

「おおおおおおお、島が見えたぞ!!!」

やっと、目の前に島が見えた!!
これで・・・やっと野菜が食べられる・・・ッ

「あれ?フミ?」

フミの姿が見えない。
急いで船室を探して回るがどこにもいない。

そして、宝の部屋（ほとんど何もない）に行くと

「ふぁお?!こりゃへ＃つご＜＊うんど%$」（翻訳：ふぁい?!
これは違うんです!!）

この船に乗ったときに俺は、悪魔の実をいつまで常温で放置していても腐らないらしいので、宝の部屋に放り込んでおいた。

・・・で、問題はここからだ。

目の前にはフミ、口元には破片　そして手にはオレンジ。

「・・・・・」

「・・・ごめんなさい」

フミが申し訳なさそうな顔で謝ってくる。

「いや、別にいいんだけどさ・・・金ならどうにでもなるし。問題は、それ何か分かってて食べたんだよね？」

フミがうなずく。

「偉大なる航路以外での能力者の差別的な扱いについては話してあるよね？」

再びうなずく。

「なら、別に俺はどうでもいいわ。」

「へ？」

「だって、別にそれ食べられても俺何も困らないし。そもそも、お前にそれあげる気だったしね。ただ、少なくとも偉大なる航路の後にしようとは思っていたけど」

「え？　・・・え？」

「だってさ、偉大なる航路って普通に海賊達の殺し合いが日常なんだぞ？
お前じゃ人攫いに遭うのがおちだろ。」

「いや、まあ・・・フミはこの世界で最も雑魚と言える位弱いですけど」

そこで緊張感が途切れて、何故か二人で笑ってしまった。

「そういえば、さっき島が見えたところなんだけど・・・タイミング悪いなあ」

「！！」

「？」

「（ドキドキ・・・）島が見えたことなんて当然知ってました（キリッ」

「今嘘をついたよね？焦ってるのがわかる効果音があからさまに聞こえてくるんだけど」

「そんなことないです！！」

「で、どんな能力が付いたの？」

手短に、悪魔の実には
・ビックリ人間になれる超人系（パラミシアけい）
・動物に変身する動物系（ゾオンけい）
・実体のなくなる希少な自然系（ロギアけい）
の３種類である事を説明する。

「ちなみに俺は超人系ね　自分で言うのも何だけど正直超人系の中では最上級の能力だと思う」

何せ瞬時の回復に物体の無限生産、形を変化させる上、人間を瞬時に殺すことができるという非常に応用のきくチート能力である。

どうでもいいけど、ドルドルの実って能力者自身が能力を鍛えて暖かいところで戦えば自然系並みの防御で物理攻撃が効かなくなるんじゃないかな？って思ったんだが。
液体のものって基本的にそういう攻撃は回避できると思うんだよ。

能力者は質量保存の法則を見つけた人に土下座して謝らなければいけないような気がする。

そう思っていたとき、フミが

「うおっ！？何ですかこれは！顔がたくさん！！」

えっ？

「何か見えるのか？」

「たくさんの顔が私に話しかけてきてます！」

顔？　顔って・・・何だ？　人の魂でも見えてるのか？
呪い系の能力か？

「ちょっとこの紙にどんな風に見えてるか書いてくれる？　適当でいいから。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・

「できました！」

「・・・・・・・・」

そこに書かれているのは、某農大が舞台の漫画でいつも「かもすぞー」とか言ってるかわいい顔の奴らが書かれていた。

ひらたく言うと、も●しもんの菌たちが見えているようである。

「これ、狙って書いた?」

「? 何の事ですか? 普通に書きましたよ!」

どうやら菌に関連した能力がついたようだ。

そんな会話をしつつ、俺たちは始まりと終りの島”ローグタウン”に到着した。

## 第１３話　能力者誕生（後書き）

ということで、ついに原作の島であるローグタウンに到着です
まだ原作開始時期ではないのでルフィとかはいません。

フミが悪魔の実を食べましたね　さて、どんな能力が付いたのでしょうか？

７／３　修正完了。

## 第１４話　＆ｑｕｏｔ；骨壷＆ｑｕｏｔ；のデラー（前書き）

ちょっと長くなっちゃいました。ごめんなさい
総合ＰＶ７５０００、ユニークアクセス８５００突破しました！
見てくださっている皆様　本当にありがとうございます！！

# 第１４話　&ｑｕｏｔ;骨壷&ｑｕｏｔ;のデラー

「ここは・・・」

俺は、海港に船を止めて（入港料を払えと言われたので、船の宝物庫の中から小さな金塊を引っ張り出して渡しておいた。渡された奴は卒倒してた）フミを連れて町に入った。

そこで、銅で作られた門に描いてある町の名前が目に入って唖然とした

”Ｌｏｇｕｅｔｏｗｎ”

「ローグタウン」、つまり原作に出てくる、グランドラインに入る直前の港町だ。

「（マジか・・・）」

ＯＮＥＰＩＥＣＥ本編に出てくる町を見て、不覚にも僅かに感動してしまった

ずっと島にいて人とかかわらなかった事もあり、早速町の中に駆け出した。

それにしても、今は時間的にいつ位なんだ？
海賊王のゴールドロジャーが処刑された後ならわかり易いんだが・・・
・
人は・・・まあ、通りには結構いるけど多いってほどでもないし、特別な日ではなさそうだ。
ロジャーの処刑日だったら海賊満載だろうし。
確か原作がそれから１０か２０年くらい後だった筈だから、人に聞けばそれで大体わかるだろう
「ちょ、待ってください！　おいてかないで！」
おっと、いかんいかん。考え事をするうちにフミを置いていくところだった。
「ああ、ごめん。とりあえず、換金したら野菜を買いに行かないとな」
「むしろ野菜を買ってくれないと・・・もう蟹を見るだけで舌が死にそうです！」
苦笑しながら、店の場所がわからないためその辺を回ってみることにした。
様々な商店があり、食材や武器、衣類を扱う店やら酒場、飯屋やらとても活気付いているようだ
「セイルー、あのカレー食べたいです！」

フミがカレー屋を指差して物ほしそうな目で見てくる。

「う、ちょっと待ってな？とりあえずあの金を換金しないと何も買えないからまずは、換金する場所を探さないと」

フミも納得したようで、まず最初に換金場所を探すことにした。

ＳＩＤＥ　？？？

「大佐！このローグタウン町内にたった今〝骨壷〟のデラ一味が入って来た様です！」

その一報を持ってきた部下が部屋の扉を開けた。

運の悪い事に、かなり勢いよく扉を開けてしまったため、今まで中にいる人物が暇つぶしに積んでいた石の塔が、バランスを失って一気に崩れた。

「あ・・・」

扉を開けた海軍の新兵が顔を青くしてその場で固まってしまう

「ああ？一々海賊ごときの事で焦るんじゃねぇよ、だらしねぇ」
「も、申し訳ありません！！」

俺はその部下の前に行き、顔を上げさせる。
「ヒィッ！」

殴られると思ったのだろう。その場でさらに顔を青くさせる

「次からはノックして入って来い、いいな」

部屋の男の言葉を聞いてぶたれない事に気づいたのだろう。
安心した表情を出したが、すぐに先ほどの焦った顔に戻る

「も、申し訳ありませんスモーカー大佐！！　しかし、骨壷の一味はこの東の海（イーストブルー）ではなく偉大なる航路（グランドライン）の海賊です！！」

その報告を聞いて、部屋の男・・・海軍大佐”白猟”のスモーカーは顔を曇らせた
グランドラインの入り口であるこの地点に海賊が来る事は多いが、ほぼ全てがグランドラインを目指す新しく結成された海賊だ。
グランドラインの海賊といえば戦闘能力も一流、状況判断にも長けていて、経験もある。

「で、その海賊団の賞金首はいくらなんだ？」

「賞金首は船長デラーだけですが、４３００万ベリーの海賊で　一味の数も見る限り１００は越しています！！」

スモーカーはさらに顔を曇らせた

４３００万ベリーといえば、海賊の中でも特に大物の部類に入る。当然グランドラインには億越えの賞金首もいるが、賞金額が３０００万を超えていれば海軍でも梃子摺るレベルだ

そんな奴らが町に来たと聞けば、渋い顔になるのも当然というものだ。

しかしスモーカーは渋い顔をして入るものの、そんな状況の中でも冷静だった。

「一等部隊は町を中心に船長のいない３人以上のグループに分かれている海賊を取り押さえろ、数は状況に応じてだ。二等部隊は２人以下のグループだ。残りは港に行かせろ。頭は俺が相手をする」

そう言い放ち、スモーカー自身も討伐の指示を出すため、そして船長を潰すために部屋を出た。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『換金所に行ってベリー通貨と交換して店を出たら即海賊に囲まれた』

な…何を言ってるのかわからねーと思うが
俺もどうなっているのかわからなかった…
プレッシャーで腰がどうにかなりそうだった…
不良だとかチンピラだとか
そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わっているぜ…

・・・まぁ、予想はしてたよ
自分の力で稼ごうとしない奴等が金を奪いに来るなんて。

でもさ、いきなり２０人くらいで一般人囲むのってありか？

交換して手に入れた額が１２００万ベリー・・・１円＝１ベリーくらいだから１２００万である。
小いけれど、金塊１本売ったのに１２００万って安くないか？と思ったが、ワンピースの世界ということであきらめる。

空島の黄金を袋一杯持ってきて換金したのに3億なんておかしい話だと思ったのだが、俺の世界中とこの世界中に存在する金の総量は違うなら納得できる。

でもやっぱり１２００万は大金な訳で、そんな大金を持ち歩いたら当然狙われる訳で。
勿論、好んで持ち歩いたわけじゃないけど

「大人しく金を渡せば命は取らねぇよ。」

海賊マークのついた三角帽をかぶり、顔と腕に刀傷をつけた、いかにも『船長』な男が俺に向かって話しかけてくる

・・・まぁ、どうせあの金塊増やして船に置いてあるし別にそのくらいいいか。
こんな街中で戦闘して海軍に見つかるのも嫌だし、別に失っても痛くないから、もう1度安い剣でも換金しにくればいいし

フミも、生まれて初めて向けられた敵意と武器に身を震わせて俺の後ろに隠れたので、結局すぐに現金の詰まった袋をそいつに放り投げる。

船長のような男はそれを拾い上げて中身を確認すると、途端に驚き、次には奇声を上げて喜んだ

「！！　こいつ、結構持ってるじゃねぇか。おい、お前ら！　今晩は宴だ！！」

そう船長が言い放つと、囲んでいた海賊たちも乾季の声を上げてそ

の場を去ろうとする。

俺らもその場から立ち去ろうとして後ろを向いたとき、海賊達からこんな声が聞こえた

「ん？待てよ・・・おい、お前　そこにいる奴はお前の女か？」

ビクッ

フミが後ろで身を震わせた

再び海賊達がこちらに、今度はフミの周りを囲むようにして近づいてくる。

「フン・・・中々いい女じゃねぇか。おい、お前ら　この女をひっ

捕らえろ」

その一言で、海賊たちは俺たちを再度囲んでフミを奪いに来た。

「・・・・か」

「あ？何て言ったんだ？」

「『連れて行かないでください』か？アッハハハハハ！！みっともねぇな！」

「船長に目をつけられたんだ。諦めて素直に渡せよ！」

俺のつぶやきに、海賊の下っ端のような男が口々に下種な笑い声を上げた。

海賊たちの卑しい声がその場に響く。

町の人間も遠目に見ているが、完全に諦めきっていて助けてくれる様子もない

町の警察もいないので、俺たちが助かる見込みはない

それが俺じゃなければ、フミはこのまま連れ去られて慰み者にされただろう。

「安心しなぁ　この女は船長が優しく相手してくれるだろうよ」
「船長、使い終わったら俺らに輪姦(まわ)してくれませんか？」

その言葉に船長は

「おお、俺は今気分がいいんだ。俺がやり終わったら好きにしな」

その言葉で、切れた

「お前ら・・・覚悟はできてるか？」

「ああ？何を言ってるんｄ」

船長がそういい終わる前に周りの海賊に飛び掛り、食欲（グリード）を使ってそいつらを喰った。

「なっ・・・」

他の海賊にも同じように飛び掛り、同じように喰らっていった。

俺の動きは島で鍛えられていたが、人間の比較対象がいなかったので自分の身体能力がどれほどのものなのかよくわかっていなかった。しかし、猛獣から逃げる事や森の中をかなり動き回っていたことでかなり俊敏になっていたらしい。

相手の海賊達は反応できずに次々と消されていく

「お、お前ら！？」

気がつけば、周りには船長と俺しかいなかった。

周囲にいた住人らしき人間達も何が起こったかわからず、ポカンとこちらを見ている

「てめぇも消してやるよ?俺の連れに手を出そうとしたんだからその位当然だよな??」
フミを守るように背にしつつ、海賊に向き合う

「お前・・・まさか悪魔の実の能力者か?」
船長が俺に対して本気になったのか、冷静にこちらに聞いてきた

「さぁな。答える必要はない　消えろ」

そう言って、船長に飛び掛る。
船長は急いで剣を抜こうとしていたが、既に俺の手は船長の体に触れていた

「・・・・・?」
「なっ・・・・・?!」

俺の手は船長の腹部に触れていた。

だが、船長の体は消える事がなく　俺が触れた状態そのままの光景があった。

当然、船長はその場で消えずに生きている。

そして、自分の身が安全だと悟ったのか　俺を掴んで投げ飛ばした。

突然のことに混乱した俺は受け身がとれず、そのまま投げられてしまった

「ガハッ!!」

痛くはないが、一瞬息ができなくなり奇声を上げた。

くそ、ちゃんと触れた筈なのになぜ効かない?!

いや、そもそも能力が効かない人間が存在してもおかしくないか・・・

・クソッ、油断した!!

「この野郎・・・どんな手品を使ったかは知らないが」

そう言ったところで、船長が手を前に突き出す

「”ツボツボの実”つまり、俺も悪魔の実の能力者なんだよ！」
そう言った途端、突き出した手が花瓶のような細長い壺に変化する。

「俺の能力は、触れたものを壺の中に封じ込める能力だ。この能力に一度嵌ると骨になるまでその空間から出ることはできない。これが俺の異名の由来だ！！」

そう言い切ったとき、突き出した壺がものすごい勢いで周りの物を吸い込んでいった。
手近な小石から、プランターの花、柵、看板と、次々と吸い込んでいく。

不味い、このままでは壺の中に吸い込まれてしまう！
しかしここで逃げるにしてもフミを連れて走る力は俺にはないし・・・

仕方ない、人前で使うつもりはなかったが・・・

「死兵（アンデッドソウル）！！」

そう言うと、海賊船長の後ろの影から1人の部下が死んだような顔つきで現れる。

「（勝った！！）」

俺は、心の中で「殺せ」と命令して剣を船長に振り下ろさせる

しかし、その攻撃が通ることはなかった。

「吸富士壺（きゅうふじつぼ）！」

船長がそういった瞬間背中が山のように盛り上がり、多分そこに穴をあけたのだろう。俺のゾンビは吸い込まれてしまった

「何だ、お前にも部下がいたのか。しかし、残念だったな。俺は体のあらゆる部分に穴を開けて何でも吸い込むことができる壷人間だからな。吸い込んでそれで終わりなんだよ」

どうやら、振り向かずに能力を使ったためこいつを斬ろうとしたのが元部下であることには気づかなかったようだ。

しかしこの技が使えないとなると、もう手段がない・・・

ここで吸い込みに耐えるのにもそろそろ限界が来ている。
体は既にズルズルと、確実に壷に吸い寄せられていた

「（くそ・・・もう駄目だ・・・！）」

そう思い諦めたとき、海賊船長の後ろに煙の腕ようなものが現れて船長を掴み、それ目掛けて駆けつけた海兵たちが煙に掴まれて唖然としている船長に銃を撃ったと思うとその銃弾から網が飛び出し、船長はあっけなくその網に包まれた。

## 第１４話　&ｑｕｏｔ；骨壷&ｑｕｏｔ；のデラー（後書き）

やっぱり戦闘シーンって書くのと見るのじゃ全く違いますね
臨場感とか上手く表現できてるでしょうか？

フミの能力の登場はしばらく後です。

能力解説
『ツボツボの実』超人系（オリジナル）
体を壷化して、そこにできた穴からあらゆる物を吸い込むことができる。
吸い込んだものは能力者の任意で出すこともできる

壷となっている部分を攻撃されるとその部分は破損してしまうため接近戦には向いていない。
しかし、鉄壷という技もあり体中を本物の鉄にすることができる。

『吸富士壺（きゅうふじつぼ）』
体に複数の壷を生成して穴を増やして吸い込む技。

７／５　修正完了。

# 第１５話　スモーカー大佐（前書き）

年末年始でも学校はあります（涙目）

# 第15話　スモーカー大佐

ＳＩＤＥ　スモーカー大佐

俺は、部下の情報で船長であるデラーのいる場所に駆けつけた。

デラー一味のうち、船長と２０人ほどの部下が２人の・・・ありゃカップルか？見ねぇ顔だな。その２人を囲んでいた。

「安心しなぁ　この女は船長が優しく相手してくれるだろうよ」

「船長、使い終わったら俺らに輪姦(まわ)してくれませんか？」

「おお、俺は今気分がいいんだ。好きにしな」

海賊のいつもの薄汚ない腐り切った言葉を聴いて胸糞が悪くなり、同時に少し焦り始めた。

チッ、どうやら女のほうを攫うつもりらしいな　逮捕のとき人質にでもされたら厄介だ。

・・・全く面倒なことになったもんだ

咥えた葉巻を部下の持っている灰皿に擦り付けて火を消した。

俺の能力を使い船長を掴んで、部下に海楼石(かいろうせき)入りの網『監獄弾』を打ち込む・・・これなら奴を一瞬で捕縛できる。
しかし、ここだと位置が悪い。

奴等の後ろに回ればこの作戦は使えると思い、海兵たちに作戦を伝えて全員を配置に向かわせて俺もそこに向かった。

この作戦において面倒なのは、使える監獄弾の数が少ないため捕縛のチャンスは1度であること
そして、周りの海賊どもが網を解いてしまえばそれまでということだ。

内側からは解けないが、外側からは簡単に解けるようになっている。
そのため、デラーを捉えた後は俺の能力で全員を捕縛するしかない

海軍大佐スモーカーは、グランドラインの海賊を相手にほんの少しだけ恐怖していた。

建物を回って、全員の配置を確認したスモーカーは、現状を確認するため海賊たちのいる通りに目を向けた。

「（なっ・・・！？）」

それは、予想だにしていなかった光景だった。

船長とカップルの周りにはさっきまで大勢いた海賊が1人しかおらず、その1人が背中を向けている船長に斬りかかるところだった。

「（何故だ！？　何故部下が船長を斬る？！　それにさっきまで大勢いた海賊共はどこに行った！？）」

スモーカーが動揺していると、さらに場の展開は思いも寄らぬ方向に向かった。

デラーの背中に突如大きな穴が開き、斬りかかろうとした部下を吸い込んでしまったのだ

なんだ？何が起こっている！？

船長のほうはおそらく悪魔の実の能力者だろう。

パッと見た限り様々なものを吸い込む能力なんだろうが、部下がいないのは能力で部下を巻き添えに吸い込んだせいなのか・・・？

そして1人切りかかっている所を見ると、仲間割れでも起こったのか？あの短時間に？

・・・こんな事考えてても意味がない。今は奴を捕縛することに集中するんだ。

それにこのままだと、あの男も船長の能力で殺されちまう

奴があの男に集中している今がチャンスだ！

「ホワイト・アウト！！」

俺は、自分の悪魔の実の能力で手を煙に変え、船長の体を掴んだ。

そして、それを見た部下たちが一斉に海楼石入りの網を放ち　突然のことに呆然としたデラーは綺麗に海楼石の網に包まれた。

SIDE　END

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・

助かった・・・

しかし、今のは煙の手？
ここローグタウンの管理をしている海軍大佐で煙の能力者と言ったら・・・

「スモーカー大佐！デラー一味の船長の捕縛、完了しました！！」

海軍の軍服を着た男がそう叫ぶ。

ここに来る海賊を誰一人逃がしたことのない、また自然系悪魔の実の能力者でもある海軍大佐『”白猟”のスモーカー』がいた。

「よし、そのまま駐屯基地に連れて行け。残った奴らは残党の逮捕に向かえ！！」

そう言って、スモーカーの部下が返事をすると
俺のほうを向いて話しかけてきた

「お前・・・大丈夫だったか？」

スモーカーがこちらを向いて声をかけてくる。

「あ・・・はい。ありがとうございます」

動揺しながらも返事を返す

うわ・・・やべぇ　俺原作キャラと話してるよ・・・

やっぱりワンピースの世界なんだなここ。

漫画でしか見たことのないキャラクターが動いて、喋っていることに感動を覚えつつ、同時にある疑問が浮かんできた。

待てよ？スモーカーがいるってことは原作開始ちょっと前かルフィがここに来る前ってことだよな？

スモーカーがここにいなくなった原因ってルフィを追いかけるためだったし・・・

「あの・・・」

「あ？何だ」

部下の海兵に色々指示をしていたスモーカーがギョロっとした目でこちらを見た。

やっぱ怖いなスモーカー大佐。葉巻のせいで妙な貫禄が・・・いかんいかん、これ聞き逃したら後で厄介な事になりそうだからちゃん

と聞いておかないと。

「今ってゴールドロジャーが処刑されて何年目でしたっけ？」

「あ？　確か２０年くらい前だが・・・おいお前、何年だったかわかるか」

そういって近くにいた海兵に尋ねた

「え？　ああ・・・えーと、確か１９年目ですね」

「だ、そうだ」

成る程、１９年目か。ってことはあと2，3年でルフィがこの島に来るんだな。多分

「ありがとうございます・・・ってああ！俺の金が！」

スモーカーの後ろで海賊の持ち物として金を没収しようとしている海兵が見えて、つい声を上げてしまった。

「ん？ありゃお前の持ち物だったのか？」

「そうです。換金したらさっきのやつ等に囲まれて・・・」

あの金がないとこの島ではもう換金し辛いし、何度も換金してると怪しまれて捕まる。

で、能力がバレたらそのまま目をつけられて監視か海軍ルートか・・
・やだよ、勘弁してくれ！

「そうだったか。だがあの金は海賊が持っていたから直ぐに返すわけにはいかねェな」

やっぱりそうか。俺のだっていう証拠もないし・・・

「お前の金だと言うならどこでその金を手に入れたかなんかを聞かないとな。海軍基地まで着いてきてもらうぞ」

え？

「どうした、さっさと来い。お前の金なんだろ」

そう言うと、スモーカーは俺の手を取って海軍基地に向かって歩き出してしまった

「ちょ、私は完全無視ですか！？」

フミもあわててついて来た。
・・・ごめん、スモーカーが現れてから完全に忘れてたわ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「何で何も言わねぇんだ！何とか言ってみろ！！舐めてんのか！！！」

どうも。セイルです
ただ今海軍大佐のスモーカーの有難ーい取調べを受けている最中です。

え？なんでスモーカーさん切れてるかって？
話は5分前に遡り・・・

「この金はお前が町の換金場で手に入れたのは確認した。だが、これだけの金をどうやって手に入れた？　それに、お前ら港で金払うときに金塊を渡しただろ。何故そんな真似をした？」

あ、港のことバレてる・・・

で、俺はもちろん「海賊を皆殺しにしてその船にあった金塊を盗ってきました　しかも能力で増やせるので問題ないです」なんて言えるわけもなく
「えーと・・・拾いました」って適当な事を言ったんだよ。そしたら
「じゃあどこでこれを拾った？」
って聞かれた。当然答えられる訳もなく2人とも口を閉ざす。

「・・・だんまりか。とりあえず仕方ねぇ　ならお前らの名前と住所、年齢を教えろ」

名前だって!?そんなもの教えられるか!!　住所もねーよ!　年齢なんてこっちが聞きたい位だよ!!

という突っ込みができる訳もなく、再び黙り込んだ。

「おい・・・あんまり俺を舐めるんじゃねぇぞ!」

・・・・んなこと言われてもいえないんだよなぁ

少し間を置いたとき、スモーカーが机を手で思いっきり叩きつけて大きな音を立てた。

「何で何も言わねぇんだ!何とか言ってみろ!!舐めてんのか!!!」

という訳で冒頭に戻る。

「（そんなもの教えたら後で面倒じゃねーか！！）」
俺がこっそり呟く。
「（え？どうしてですか？）」
そういえばフミにはまだ説明してなかったな。
俺はどうせこの世界に来たんだから見たいと思っているものがある。
それは、俺が前の世界で見たＯＮＥＰＩＥＣＥの漫画に描かれていたもの。この世界で未来に起こる最大の戦争白ひげ海賊団と海軍との頂上決戦だ。
俺は今はどっちにも味方する気はない。
だから、今ここで下手に名乗って顔を覚えられても後々厄介な気がする。
それに今俺が持っている能力の事を知られたらもっと厄介な事になる。

繰り返すようだが、俺はどっちにも味方する気はない　だからここで全てをスモーカーに明かそうものなら海軍に誘われる可能性が高い。
海軍に入ったら白ひげ海賊団の敵になり、入らなくても危険度の高い人間としてマークされてしまう。
能力が能力なので、世界政府からも目をつけられて対策をとられたらもっと面倒だ・・・それは避けたい。

それ以前に、全部話したら間違いなく顔を覚えられてこの島から出られなくなるように思える。
何せ、俺の能力は普通の超人系悪魔の実の比ではないのだ。世界政府以前に、海軍がこれを知って放っておく訳が無い
普通の能力ならともかく、これは一瞬で、しかも一人で大群を蹂躙できるような危険なものなのだ。

それに海軍に入れられてしまったら俺の時間がなくなってしまう！
これが1番の理由。

何せ俺の夢はルフィじゃないが・・・俺の夢、それはッ
「ニート王に俺はなる！！「ああ？」ごめんなさいごめんなさい」

スモーカーから激しい殺気が放たれた。

・・・怖いからそのまま座り込んだ。

ついでにフミは俺をポカーンとした目で見ている。

場の冷たい空気が、俺のせいでさらに冷え切って冷凍庫にいるような気分だった。

「チッ、訳のわからねぇ奴だ。だが・・・お前ら　何もしゃべる気は無いんだよな？」

「「・・・」」

俺とフミは口を閉ざしている。

「なら仕方ない。その金に盗品の可能性がある限りお前らは「スモーカー大佐！失礼します」・・・何だ、勝手に入ってくるな」

スモーカーが話している途中で部下の海兵が部屋に乱入してくる。

「も、申し訳ありません！！しかし、海賊たちが広場で騒ぎを起こしているようです！」

「チッ、仕方ない。お前ら、悪いが俺が帰ってくるまで拘留させてもらうぞ」

そう言って、その場でスモーカーが立ち上がり部屋の扉に向かった。

その時、腰に十手が入っているのが見えた

俺は咄嗟にその十手の先端に服越しで触れて、そのまま十手に付いている『海楼石』をコピーして素早くポケットに入れた。

「あ？　お前、何かしたか？」

俺が十手に触れたのに気づいたのかスモーカーが訝しげに見てくる

俺はその問いには答えず、え？　何ですか？　という顔をしながら見返した。

スモーカーは訝しげにこちらを見ながらも、そのまま部屋から出て行った。



「（咄嗟にやっちゃったけど、成功してよかった・・・）」

コピーした海楼石はポケットに入っているが、どうやら肉体に直接触れなければ問題ないらしい

もちろん能力者が自分で海楼石を持つリスクは大いにあるだろうが、これを持っているだけで他の能力者の弱点を問答無用で突く事ができる。

例えば海楼石を銃弾に加工して、油断している自然系の能力者に撃てば、上手くいけばそれだけで致命傷を与える事ができる

いいものを手に入れたな、と少しニヤついた

スモーカーだけでなくフミからも訝しげな目で見られた。

俺がニヤついてフミが微妙な顔をしている中、部屋のドアが開いて1人の下っ端の海兵が入ってきた。

「お二方、悪いがこっちに来てもらおうか」

部下の海兵が多少乱暴ながら俺たちを小さな部屋に案内した。

「お前らには窃盗の疑いがかかっている。残念ながらその金の出所を調べる必要がある」

まぁあれだけの出所の分からない額の換金をすればそうなるよな。

「だから、スモーカー大佐が戻ってくるまでここにいてもらう。もちろん食事や部屋は提供する。」

へぇ、一応それなりの待遇はしてくれるんだ。

まぁまだ俺らは灰色だし、どっかの金持ち成金野郎の息子とかだったら困るし、スモーカーが戻ってくるまでとりあえずそれなりの場所にいさせるっていう海兵の配慮かな？

「・・・説明は以上だ。扉には見張りがついている。何かあれば近くの海兵に言ってくれ」

そう言って、海兵は部屋を出て行って扉を閉めた。

「・・・さて、スモーカーが戻ってきたら面倒だからさっさと出て行くか」

「そうですね。あれ？でもフミたちの食糧確保は？」

「そういえば、換金すらしてないよなー」

「・・・・・・・えっ？」

「・・・・・・・」

今日はとても面倒事の多い日のようだ。

## 第１５話　スモーカー大佐（後書き）

海楼石コピーの部分について
海楼石は『実際に本体に触れる』と能力者の力を奪えるから服越しに触れれば能力が使えるんじゃないかなぁ　という妄想です
スモーカー大佐の十手もいつも首に押し付けてたし海楼石入り手錠も手首に触れてつけるようになってたし・・・
もし使えないようでしたら申し訳ありません。

次回でローグタウン編が終了となります。その次は・・・
双子岬には行くんだけれどそのままサボテン島のウィスキーピークに行かせるか、全くオリジナルの島に行かせるか
どうしようか。

１２／３１追記
事情により、今日の夜の更新になります

８月１８日追記

大幅修正完了。説明文に更新停止報告追加

受験のため、しばらく更新停止します！

# 第１６話　ローグタウン出発（前書き）

挿絵頑張った！ちゃんと表示されてるかな？
途中下ネタ含みます。ごめんなさい

# 第16話　ローグタウン出発

どうも。セイルです
只今買い物を全て終えて船に戻る帰り道です

「セイルー、すっごく重いんですけどこれ」

「罰だ。我慢しろ。最後の菓子はお前が勝手に買ったんだろうが」

これから船ですごすことになるため、大量の買い物をしてきた所だった。
気がつくと、荷物が大量になっていたため　あまり使いたくは無かったが死兵（アンデッドソウル）を使ってそいつらに荷物を持たせた。

俺がちゃんとコントロールして命令を下してやると、顔も青白くなく普通に生きている人間と変わりなかった。
まぁ、俺の命令になんでも「はい」って言うからどうせなら女の子がよかったなーと思った。って、こいつらを殺してこうしてるんだからそれは駄目だよ・・・人として

あれ？でもこの能力って世界政府とか革命軍とかの組織にバレたらすっごくヤバくね？
政治利用され尽くされるな・・・

まぁこの能力をほしがる奴は星の数ほどいるだろうが、今は荷物持

ちという非常に普通の仕事をさせている。

・・・船の中も2人じゃ寂しいし後でこいつらに仕事でもさせてみるか。

そんな事を思いながら俺はふと買い物リストを見た。

●食料（増やせるので各種1セットづつ）
・冷凍保存できる野菜全種類
・冷凍保存できるパン各種
・生米
・挽肉
・ステーキ用の肉
・バーベキュー用の肉
・タコ
・飲み物各種（オレンジジュース、麦茶、ｅｔｃ）
・小麦粉
・パン粉
・香辛料各種
追記
・菓子各種

●衣類

・男物の服７日分

・女物の服２０日分

追記

・女物の・・・まぁコットンとかお月様とか

●雑貨

・救急箱（怪我用）

・医療セット（病気用）

・羽ペンと紙とインク

・ティッシュ１箱

・タオル１０枚

・油

・火をつける物

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・

そこまで読んだ所で、よくこんなに買い込んだなぁと自分で感心する

フミがそれを見たがったので手渡すと

「・・・・・・・・・・・・・」

黙り込んでしまった。

「ん?どうしt」
言い終える前に、フミの右ストレートが炸裂!!
セイル　は　ちからつきた!

「・・・って何をするんじゃあああああ!!」

「デリカシーって言葉を知らないんですか!!女性にこんなものを渡さないでください!!」

「衣類の所?そこは正直スマンカッt・・・ゲフッ」

フミの　こんしんの　ずつき!　こうかは　ばつぐんだ!
「そう思うんだったらさっさと消してください!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・

そんなやりとりをしているうちに、俺たちは船の前まで到着していた。目にきれいな痣がついているように見えるのは気のせいである。
船の前には金の件があるからか見張りが2人いた　いや、それ以前に港の警備もいるのだがそれは見回りだったので見計らって抜けることができた。

さて、どうするか
こいつらを使って脅して・・・いや、そんなやり方は気に入らない
　没

そんな事を思っていたら、見張っていた海兵が

「ううっ、トイレトイレ」
「ちょっと待てよ！！僕も今トイレに行きたかったんだぞ！」
「スマン！我慢できないッ！！」
「あ、ちょ　待て！！」

タッタッタッ・・・

そんなやり取りをしたと思ったら、全速力でどっかに行ってしまった。

あれ？これってすごくラッキーじゃないか？

俺たちは、急いで船に道を造って乗り込んで素早く出航させた。

あ、でもこのまま逃げたらあの海兵達は確実にクビだろう。あまりにも可愛そうだったので、これと同じ船をもう一隻・・・鉄が浮かぶ原理を知られるのが嫌なので、同じように見えるが鉄ではなく木で造られている船を造ってそこに置いていった。

俺って優しい！　あ、でも向こうの船の中は何も入れてないからすぐバレるかな？　まぁあの海兵の言い訳にはなるか。

そしてゆっくり処刑台を見ることができず残念に思ったが、気を取

り直して急いで出航させた。

船が動き出し、ゆっくりとローグタウンを離れていく。

「あー、どっとつかれたなぁ・・・」

「そうですね。まさか能力者さんに出会えるとは思ってませんでした」

「フミよ、一応お前も能力者なんだぞ？」

「ふおっ！そうでした！！！」

船はだんだんローグタウンを離れて、進んでいく
少し寂しい気持ちになりながらも俺は何気なく島を見返した。

するとそこには見たことの無い景色が広がっていた
辺りは夜なのだが、それ故に海辺街頭の光が反射して
幽玄で
素晴らしく
悲しく
寂しく
美しい景色がそこにあった。

>i15957—2216<

思わず、前の世界のことを思い出して涙がこぼれてしまったが
すぐに気を取り直してここを見ることはもう無いであろう、ロー
タウンを見納めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そういえば、どこに行くんですか?」

荷物を降ろして、俺と一緒に夜景を見ていたフミが、気遣いなが
そう聞いてくる

俺も気を取り直して答える
答えはもう決まっていた。記録指針（ログポース）もある事だし・・・
「そうだな・・・折角ワンピースの世界にいるんだし　『偉大なる航路』行ってみるか！！」
俺達の船は、それに答えるかのようにその時海流に乗って順調に偉大なる航路の入り口である”リヴァース・マウンテン”に向かっていった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

・・・

ＳＩＤＥ　スモーカー大佐

「チッ・・・俺を呼んだからどんな奴かと思えばたかが８００万ベリーの雑魚海賊じゃねぇか！！そんな海賊くらいてめぇで処理できるだろうが！俺を一々呼び出すな！」

そう部下に怒鳴りつけ、仕事を終えた俺はさっさと尋問に戻ろうとした。

部屋に戻り、番をしている海兵に
「おい、あの２人組はどこだ」

「ああ、あの２人なら２階の小部屋に誘導しました」

さっさと終わらせて寝るぞ。疲れた

そう思って部下が言っていた小部屋に入ったのだが・・・

「（ん？いないぞ・・・？）」

そこには誰もいなかった。

見張りの部下に

「おい、俺が連れてきた2人組はどこに行った」

「え?この部屋ですけど・・・」

そう言って指を刺したのは今まさに俺が入って誰もいないことを確認した部屋だった。

「ああ?じゃあ何でここに誰もいないんだ?」

そう聞くと、部下はあせった顔になったがすぐに

「そ、そんな訳ありません!!この部屋に入ってもらってから3時間位ですが、見張りはさっきまで2人で行っていましたし一度もドアからは離れていません!!!」

その後、入り口や裏門の部下達にも聞いてみたのだが大佐と海賊を捕らえに行った部下以外は誰もここからは出ていないという。

部下に変装して抜け出したか?と思ったが、俺が出て行ってすぐに着替えて出て行くなど不可能だ。

あの2人組・・・どこに消えやがった?

その後も探し続け、次の日海兵全員に聞いたが　入ってくる2人の姿は見ていたが一切出た様子はないと全員がいう。
後に、ローグタウンの怪談として語り継がれる『黄金の幽霊カップル』の元となる一件になった。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

## 第１６話　ローグタウン出発（後書き）

つ、疲れた・・・しかも絵を書いていたせいで小説のストックがあああああ

正月に頑張って５話くらい投稿してゆっくり休みたいんだがまだ１話分しか・・・よし、今から頑張るしかないなｏｒｚ

そういえば、ワンピース最強考察という本を買ったんですけど中々面白かったです。

自分の小説も進めば進むほど色々なイベントに遭遇しますが、そこに書いてあるフラグを大切にして書いていきたいなぁと思ったり。

まぁ結果面白くなくなったり自分の思うとおりに進まなかったらスルーしますが。

ということで、第１章は次回で終了です。

次回は妙なテンションの２人がフミの悪魔の力を調べる回だったり

では皆様、良い大晦日を！

## 第17話　フミの能力（前書き）

これでストック0。しかも2~5日は更新できないから予約もできない

さて、今日の勉強済ませたら徹夜じゃ！

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします

## 第17話　フミの能力

「セイルー、ちょっといいですかー？」

甲板で昼寝をしているとフミが俺を呼んできた。

呼ばれたので、仕方なく俺はフミの所に向かう

フミは食堂（と、言っても机1つと椅子4つ、料理用機材があるだけだが）のイスに座っていたので、俺も正面に座る。

「何か用か？今昼寝してたんだが」

「セイルにちょっとお願いが有るんですけど」

ん？フミがお願いとは珍しいな・・・

「何だ？」

「フミの友達のために、1部屋と毎日食料を少しずつわけて下さい！！」

はい？

友達？船に乗り込むときは、俺とフミと死兵だけだったし

生き物を持ち込んだなら船を通して気づく筈なんだが・・・

「友達ってどこにいるの？」
とりあえず聞いてみる。

ネズミか何かでも連れ込んだのか？

「目の前にいる子達のことですよ！見えないんですか？」

目の前には机とフミしか見えない。

「あの・・・フミ？大丈夫か？悪い病気ならグランドラインに入る前に診てもらわないと」

「この前紙に書いて見せたじゃないですか！！」

Ｎｏｗ　ｌｏａｄｉｎｇ・・・

おお！

そういえば１３話でそんな事があったようななかったような。

あの時は著作権的な意味で別な政府に消されるかと思ったよ。

「・・・待てよ？つまりその菌達と仲良くなったの？」

「ふぁい！フミのためならなんでもしてくれるそうです！！！」

ちょっと待てよ？菌が見えるってことは、菌関連の能力がついたってことだよな？
ってことは動物系は無いな。それならとっくに変身とかしてる筈だし菌がアニメ風に見える動物なんていない筈。

と、すると超人系か自然系って事になるけど・・・まさか！！

「フミ、ちょっと能力を確認するために軽く殴ってもいいか？」

「ふぉえ！？な・・・」

「いや、ただ菌が見えるってことは自然系の可能性があるからな。確かめておきたいんだ」

とりあえず、フミを説得してその場で立ってもらい　腹部を軽く軽く殴ってみる。

スカッ
「！！！　やめて下さい！！！！！」

俺の手がフミの腹部に当たった思ったら突然フミの怒声が上がったので俺はかなり驚いた

結果から言うと手は、フミの腹に当たることはなくそのまま貫通してしまった。
引き抜くと、貫通した穴の周りは紫色に変色していたがすぐに元通りになった。

つまり、実態がない自然系悪魔の実だろう。他のやつだと火や氷、光や砂があるがフミはウィルスといったところか？
しかし、今はそんな事より・・・

「ふ、フミ？突然なんだ？」

そう聞くと、すごく慌てながら
「あ、いえ　フミの体に触れたからって親衛隊の皆さんがセイルの体に乗り移りそうになったもので」

ちょ、この子今ものすごい事イッタヨ
何？親衛隊って！？

しかも触れたら乗り移って来られるだと!!?やめてくれ!!

「フミ、何だ?その親衛隊って」

「えーと、ローグタウンでお友達になった『ノロ』君が私の中に住んでるんです!!」

無い胸を張るフミ。
やめてね?そんなポーズされると逆に胸にこみ上げるものがあるから　襲うよ?

しかし、ノロで菌かウィルスって言うと・・・

「ノロウィルスの事だろうな・・・」

「ノロウィルスって何ですか?ノロ君の正式名称ですか?」

「いやいや、フミよ　そいつは体に入ったら普通なら暫く寝込むほどの威力の持ち主だぞ」

軽く解説
『ノロウイルス』は、冬にカキ（貝）を食べて食中毒を起こしたこ

とで有名。
体に入ると1～2日後に突然吐き気に襲われ、嘔吐や下痢が1～2日くらい続き
頭痛、発熱、咽頭痛などカゼとよく似た症状が見られる場合もある。
嘔吐物や排泄物で菌をばらまくので他の人間に伝染(うつ)りやすい。

対処法は、原因となる貝類を加熱する事や発症者の嘔吐物等に触れないことである。

「そ、そんなにすごいんですね・・・」

「ま、まぁ友人として話してるんだったら大丈夫だと思うよ。　しかしフミって体にその辺のウィルスを入れてるの？」

「いえ、消えそうな子をフミが引き取ってあげたらいつのまにか１００を超える種類の子達が・・・」

あー、成る程。それで部屋が１つ欲しいと

「でもフミよ、ウィルスによって色々住む場所が違うんじゃないのか？湿度とか温度とか」

そう聞くと、フミはとんでもないことを普通に言った

「皆が『私についていきたい。多少のことは我慢する』って言うんで大丈夫じゃないですか？案外皆平気そうですし」

ウィルス達と話せる能力かぁー　まるっきり例の漫画じゃないか。

つーか、ウィルスって消毒したり温度を変えれば死滅する筈なのにそれを『我慢できる』ってどういうことだよ！

熱に弱いけど凶悪な効果を持ってるウィルスだっているんだぞ！？

でもこの能力って上手く使えば町を壊滅させたり、相手をじわじわ苦しめたりできるよね？

うわ、想像しただけですっごくエグい

ドクドクの実と同じくらい性質（たち）が悪い上自然系だから物理が効かないのかよ！

とりあえず、ウィルス使うから『ウィルウィルの実』って呼ぶ事にしよう。

まぁ・・・能力がわかったからとりあえずそれはおいておいてっと

「で、部屋が欲しいって言ってたけど」

「ああ、そうなんです。この子達の場所がそろそろ満員気味で・・・」

「一応聞きたいんだけど、部屋はあるけど環境が駄目だと思うんだよ　ある程度なら造りかえられるからウィルス達の希望を教えて？」

「えーっと、土と葉が落ちてくる木と食べ物が少しと水が欲しいらしいです」

あれ？案外普通だな。

俺はてっきり『冷蔵庫の中身全部よこせ』とか『加湿器よこせ』とか言われるもんだとばかり思ってたよ。

## 後日談

1部屋与えて数日して、結果その部屋に食料を放り込むと一瞬でカビに包まれて霧散
さらに海賊が俺の船に入ってきたことがあるんだが、部屋に一歩足を踏み入れただけで
まず体中から発疹が出て瞳孔が開き、みるみるうちに生気が無くなって死んだそうな
俺とフミは船の主だから攻撃されないけど、アレをはじめてみたときは精神がおかしくなりそうだった・・・

## 第17話　フミの能力（後書き）

gd gdですね。ごめんなさい

前々だったかな？　船長の使ってた『ツボツボの実』の効果をあとがきに追記しました。

メインキャラはプロフィールでストーリーと共に明かしていくので書きませんが、他のキャラクターは後書きで書いていこうと思います。

# 第18話　リヴァース・マウンテン（前書き）

第2章突入です。

# 第１８話　リヴァース・マウンテン

ついにここまで来た。

俺たちは今リヴァース・マウンテンの手前にある『導きの灯』と呼ばれる灯台の所にいる。

こうして見ると、やはり素晴らしい感動がある。

何せ今まで俺はＯＮＥＰＩＥＣＥの世界を漫画でしか見たことがなく　まして本物の海や川で目の前のような光景が見られるわけがない。

目の前の河川は、山の上を”登っていた”

おそらく、水が逆流しているからリヴァース（逆流）マウンテン（山）というのだろうが。

と、感動している場合じゃないな。入る用意をせねば。

何せ、原作曰く『この川に入る前にぶつかって船が壊れる』らしいのである。

まぁ、鉄製の船だからそんなのは関係ないのだが・・・

この船は俺の分身みたいなものだからできるだけ傷つけたくない。

いい忘れていたが、この船は俺の分身のようなもの　はそのままの意味である。
俺が船に乗っている間は、こいつが手足のように動かせるのである。
例えばちゃんと進みたいと思えば、風の吹いている方向に帆や舵が動いてくれる。

戦いになって、砲撃戦になればこの船に俺が乗っていれば破損箇所は水に漬かってない部分なら即修復されるのでまさに『生きる船』になっている。

ただの怨霊船です。本当にありがとうございました
ついでに帆のデザインも人魂だしね

と、いう訳で入り口に来て既に引き返せないところまで来ているのだが・・・

フミは菌の部屋の中で「フミがこの子達を守るんです！」って言って引きこもっている。

しかし、リヴァースマウンテンの頂上は見たいらしく近くなったら教えてくれとのこと。俺はパシリか！

そんな訳で、俺は今真剣に船の一番前に立ちながら帆と舵を操っている。

「うおっ、柱にぶつかる所だった！」

船のすぐ横を柱が掠った。

何でこんな所に柱があるんだよ！　ここに柱がなかったらもう少し偉大なる航路に入る人間は増えてたんじゃないか？！

そして、ついに問題の山道入り口。

俺は、船に意識を全集中して舵を取る

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・

「ふぅ・・・」

船は岩壁をちょっと掠って焦ったが、無事に川に入ることができた。

真っ直ぐの川だったので舵をとらなくてもいいようになっていた。

この道に入ってしまえば頂上まではしばらく暇だ。

「フミー、山には無事に入ったぞー」

遠くから

「ちょっと待ってくださいー　今ナイル君が船酔いしたみたいなんです」

ナイル君!?ナイルってナイル川の事だけどそこのウィルスっていったらナイル熱しかないよね!!

確かあれって脳に入ったら死ぬ可能性もある最悪の結末をもたらすやつだよ!?

しかも船酔い?ウィルスって船酔いするんだ!

・・・なんかもうこれでフミが何言ってきても驚かない自信がついた。
もう何を言われても俺は絶対驚かんぞ。

そう思って、冷蔵庫からオレンジジュースとポテトチップを増やして取ってきてその場で食べる。
（お菓子についてはフミがウィルスを説得してくれたおかげでカビにくくなっている）

「（やっと緊張した時間から離れられるよ・・・）」

「セイルー、はしか君とインフル君がどっちが強いかで喧嘩始めちゃったんですけどちょっと来てくださいー」

ん？俺に言われてもウィルスとは話せないんだぞ？
それでも俺を呼ぶってことは・・・

やめて？！殺す気！！？？

インフルｖｓはしかならインフルが勝つだろうけど、はしかは他の

ウィルスと組み合わせるとやばくなる病気だぞ！？
勘弁してくれよ！！
お前ら俺の体で実践する気だろ！？！？

「セイルー、来ないとｏ１５７の刑ですよ？」

出血性大腸菌と来たか。やるな・・・
回避したら凶悪な大腸菌で死ぬ
行ってもはしかとインフルが待ってる

・・・お父様、お母様
先立つ不幸をお許し下さい

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・

ついに見えてきました、リヴァースマウンテンの頂上！

え？顔が赤紫な点だらけ？思い出させないでくれ。２度とあんな目にあいたくない

俺が今普通に話してるのは案の定合併症を起こして俺がやばくなったから引き分けで手を打ってくれたんだよね。
普通麻疹って赤い点なんだけど、俺の顔には赤紫の大き目の点が・・・思い出すのやめよう。

因みにｖｓ悪魔の実の能力＋激しい免疫との戦いのせいか、消そうとしても顔の分しか消えてくれなかった。

・・・もうあの悪魔の実の能力トラウマになりそうだ。

それはさておき、今俺はフミと一緒に甲板に出ている。

そして・・・

目の前の『偉大なる航路（グランドライン）』の素晴らしい眺めがが一望できた。

「ふおおおおおっ！！すごいです！！すごくきれいです！」

高い山を登って、そして頂上から朝日を見るときのあの感覚によく似たものが俺の中を駆け巡った。

達成感のようなもので俺はとても気分がよかった。

「セイル、こんな景色を見せてもらってありがとうございます！」

フミがこっちを向いて、本当に綺麗に微笑んだ。

「いやいや、全然俺は何もしてないよ。しかしフミは危ない海だと分かっててついて来てくれてるけど本当によかったのか？」

実はフミは、俺がグランドラインに入るちょっと前にどんな場所か説明して入るかどうか聞いたのだが『ＯＫです！』って答えてくれていた。
本人は良いって言ってくれていても、もしグランドラインに俺が強引に乗せたことで後悔させてしまったら・・・と思うとやっぱり心配なのだ

しかし、フミの答えは

「フミはセイルのいる所に付いていきたいんです！」

その言葉で俺はまだフミに話していないことを話す決心をした。

そう、この世界の人間が知ることができない、まだ誰にも語った事のない前の世界の話である

# 第１８話　リヴァース・マウンテン（後書き）

どうも。黒です

さて、まだ小説内でちゃんと書いてないことがありました。ごめんなさい
実はセイルはフミにまだ前に自分が住んでいた世界のことは話していません
能力で冷蔵庫造った時の反応で気づいた方もおられるかもしれませんが・・・

ここでセイルが未来のことをフミに話したらどんな反応を示すんでしょうね。
フミもこの世界で生まれたこの世界の住人ですから驚くのかな？

早くフミの戦闘シーンを書きたいです

皆様、前回も書きましたがもう１度ここで
ハッピーニューイヤー！！ああ、受験まで@１年・・・

続きます。

# 第１９話　リヴァースマウンテン・下り中（前書き）

急いで書いた結果がこれだよ！

# 第19話　リヴァースマウンテン・下り中

「フミ、すごく真面目な話があるんだが　聞いてくれるか？」

「ふぁい？」

今まで目の前の光景に集中していたフミがこっちを向いて間の抜けた声を出して返事をした。

「ちょっと信じられないかもしれないけど、事実なんだ。聞いてくれないかな？」

俺は真剣な声で言う

「・・・わかりましたけど　何のお話ですか？」

それから俺は、フミに前の世界のことを1つ1つ話した。

自分の人生や家族や友人の事。住んでた場所や文化、生活、科学、地球の話

最初に別な世界から来たって言ったときはポカンとしてたが、話し

ていくにつれ真面目かつ笑いながら俺の話を聞いてくれた。
聞くだけじゃなく、色々質問してくれたのでとても話しやすかった。
まぁ、ここがとある絵本のような創作の世界で　この世界の事をある程度ならわかる　って言ったら驚くどころか喜ばれたので逆にびっくりした。

最後に、俺がなんでこの世界にいるか話すと

「・・・そんな感じで気づいたらこの世界にいたんだ。」

「そこだけは納得いかないです！」

・・・・・・・

おい！他の話が納得できてなぜそれが納得できない！！！！

まぁ・・・気がついたらここにいたってのも確かにおかしい話ではあるけどね

「でも実際そんな感じだから信じてもらうしかないね。来たくても来れるもんじゃないし」

「そうですか・・・でも今から3年後の事がわかるなら何かできそうじゃないですか?」

「今のところの目標は、さっき話した四皇の白ひげ率いる海賊と海軍との戦争を見ることだなぁ」

「戦争を見に行きたいなんて、正気の沙汰じゃないですよ?何かしてあげられることもあるんじゃないですか?」

もっともである。

確かにあの結末のおかげで時代は変わり、ルフィが成長するきっかけにもなった。

しかし、この手で変えられるのならばやっぱり白ひげに勝ってほしい　という想いもある

「まぁ、あと3年ほどあるんだ。参加するかどうかはゆっくり決めるさ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・

そして、ついにリヴァースマウンテンの終着地である『双子岬』が見えてきた。

ザバーン

・・・と思ったら、大きな音を立てて突然目の前に黒い球体（？）が現れて通り道を塞いでしまった

「（あ・・・こいつの事忘れてた）」

俺たちの船は既にかなりの勢いになっているため、今更ブレーキをかけて止める事は不可能だった。

「「わあああああああああああああああああああ！！」」

ぶにょん

俺たちの船は黒い球体に突っ込んで、そのままゼリーをつっついた指のように跳ね返ってしまった。

幸い転覆はしなかったが、今の揺れのせいで俺が海水を浴びて船の制御を失った！

「ひゃあ・・・一体何なんですか？」

フミがそう言った途端

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！

突然、上から体を震わせるような大きな声が聞こえた。

「な・・・？！」

上を見ると、黒い物体には目がついていた

「（これは・・・やっぱりアイランドクジラの『ラブーン』か？しかし現物はでかいな・・・）」

そう思ったら、クジラが一瞬こちらを向いように見えたが

ザッバーン！！

すぐに水中に潜ってしまった。

「一体何だったんですか・・・あれは？」」

原作ではここの灯台にクロッカスさんがいる筈だが、どこにも姿が見えない。
このクジラのお腹の中にでもいるのだろうか・・・

まぁそういう事情は知っているが説明が面倒なので適当に
「わからんが、流石グランドライン。常識外れなデカさだなぁ」と言っておいた。

まさかこのクジラは５０年前に来た海賊を待ち続けるが故にリヴァースマウンテンの壁に頭を打ち付けているが、縁あって灯台守のクロッカスさんが体の中に妙な施設を作って鎮静剤を打ち続けてるなんて説明するのも面倒くさい。
あれ?今全部言っちゃったな・・・まぁいいか。うん

クロッカスさんと話せないのを少し残念に思いながら

「さて、どうやって道を選べばいいんだ?」

原作では7つのルートがあって麦わら海賊団はちゃんと選んでいたが、どうやって行くかよくわからない。

「しゃーない。とりあえず行きかたも分からないし適当に船を進めるか」

「面倒だしそれでいいんじゃないですか？」

俺は偉大なる航路の出発点である双子岬を後にした。
この選択をしたことで、もうすぐこの2人はグランドラインの恐ろしさを身をもって思い知ることになるとは知らずに・・・

## 第１９話　リヴァースマウンテン・下り中（後書き）

ごめんなさい。忙しいので本当に短いです

クロッカスさんは鯨の中で仕事中だったようです。
遭遇してたらセイルは多分ロジャーやエースの事をペラペラ喋るかもしれませんので・・・

セイルには１回そういう事を喋ってもらって痛い思いをしてもらおうかな？

## 第２０話　フミとギャンブル　その１（前書き）

これまた短めです。ごめんなさい

ついに２０話達成ですよ奥さん！

総合１６５０００ＰＶ，ユニークアクセス１６５００人達成しましたありがとうございます！！

これからもこの小説をよろしくお願いします！

# 第２０話　フミとギャンブル　その１

「あー・・・どうしましょう」

俺たちは完璧に偉大なる航路をなめていた。

俺らは今海の上でさ迷っている

え？ログポースがあるんじゃないかって？双子岬でログ貯めなかったからだろう。針はピクリとも動かない

グランドラインで航海する時に規準になるのはログポースだけ。そしてそのログポースが使えないとなるとあとはさ迷うしかない

幸い・・・というか能力のおかげで無限に食料も水も出てくるし天候も今のところ問題ない。

問題があるとすればものすごく暇だという事だ。

「フミ、何かゲームして遊ばない？」

「何をするんですか？」

フミは甲板の芝生で寝転んでいる。

うーん・・・あ、そういえば前の世界でボードゲームがあったな

「じゃあ好きな単語を選んでくれ。チェス、将棋、麻雀、簡単なのだとすごろく、トランプ、オセロ・・・」

「随分色々なゲームを知ってるんですね！じゃああえて難しそうな『まーじゃん』というやつを教えてください！！」

おっと、１番覚えるのが難しいのを選んできたな。

俺も点数とかよくわからないけど役はわかるからそれから教えていくか・・・

「えーっと、まずは・・・・・」

とりあえず鉄で雀牌（つまり麻雀につかう道具）を作って１つ１つに柄をつける。

そして専用のテーブルを作って俺のマージャン講座が始まった・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・

「ツモ・・・です？これって和了（あが）っていいんですか？」

フミが手を開けたら、見事に国士無双ができていた。しかも1順目の13面待ちだ。

どのくらい凄いかわかり易くいうと、普通なら一生かかってもこんな事は絶対にできない。トランプで言うとロイヤルストレートフラッシュ並だ

その位すごい事をあっさりやってのけやがった。

「おま・・・なんだその豪運は？ありえんぞそんな状況・・・」

「ふぁい？」

「よし、次はチェスに挑戦だ！！こいつは運じゃなくて戦略的なゲームだぞ！！」

「面白そうです！！」

そしてしばらくしてから

「これは・・・チェックですか？」

「・・・・・・・・・」

次は2人でチェスをやっていた。
盤面では、俺のキングはフミのクイーン6体とルークに囲まれていた。

つまりチェックメイトという奴である

どうやら、フミは博打にはとんでもない豪運があるらしい。
次はオセロをやったんだが盤面を全部白で染められた。
一体どういう風にやったら盤面を同じ色で染められるんだ・・・？
言うまでもないが無論白はフミである

「どうしたんですか・・・？」
心配そうな顔で覗き込んでくる。

「いや・・・お前カジノ行けよ。どのゲームやっても勝てるから」

今日の戦績
　　俺　　フミ
麻雀　　０勝　５勝（うち４つが役満）
チェス　０勝　４勝
オセロ　０勝　２勝

結論：：

無理。フミと博打やったら絶対に勝てません
だって、俺が勝負に出る前に神がかった運で先に勝たれちゃうんだもん。
チェスもオセロも「訳わかんないとこに打つなー」と思ってたらいつの間にか全滅してるんだもん！

「はっ！セイル！見てください！！」

次はどのゲームで挑めば勝てるだろうか・・・
ブラックジャックでもやって頑張って降ろさせてやれば勝てるかな？

「セイル？島ですよー」

あー、でもフミだから毎回Ａ（エース）か絵札引いてきそうだな。
しかも毎回ＢＪやられそう

「セイル！生きてますか！？街に舞った島です！」

「あ、ああ悪い。街に島が舞うって、発音が間違ってるぞ。・・・って島！？」

フミの言葉で我に返った俺は急いでフミの指差す方角を見た。

見ると、まだ少し遠いが２つの島が見えた。

「これでやっとフミのニート生活に終わりが来ました！！」

黙れこの野郎！俺は今お前に惨敗して泣きながら必死にかつ方法を探していた所なんだぞ！！
俺はそう思いながらも船を操作して急いで島に近づいてみる

その島は、どうやら２つに分かれているだけのようでちゃんと繋がっていた
片方はジャングル、もう片方が荒野というなんとも不釣合いな双子島だった。

早速島に近づき、ジャングルのほうの島に船をつけて錨を下ろしたのであった

## 第２０話　フミとギャンブル　その１（後書き）

麻雀は、他にも九蓮宝燈とか四暗刻字一色大三元単機の四倍役満をあがったらしいです。
わからない人は『麻雀　役満』でググってみよう！

その１ってタイトルに書いてありますが、活気のある町に行ったときにはこれの『その２』をやろうと思います。
もちろんフミが勝ってセイルがボロ負けする予定です
誰もフミの訳わからない強さには勝てないと思います　チェスでもあんな訳わからない結果になるし。なんだよクイーン６体って！
（ちなみに、ポーンを相手の陣地の最奥地に進めれば相手に取られた駒を使って進化させることができますが、セイルの場合無限に増やせるのでポーンが条件を満たしたときは何回でもクイーンにすることができます。）

今は出かけててこれ予約投稿なんですけど　これで小説のストックが完全に底をつきました。
１月５日は休むかもしれないです。ごめんなさい

# 第２１話　狂った巨大鳥（前書き）

やたー！１月５日に更新できたよー！
でもストックが相変わらず底をついているよ！！

# 第２１話　狂った巨大鳥

目の前の島は、前の世界でテレビに映っていたブラジルの密林（アマゾン）のような場所だった。

ワンピースでも似たような『リトルガーデン』という場所があったなそこも同じようなアマゾンだが、巨人２人が決闘を繰り返している事で有名な場所だ

「これからどうするんですか？」

「まずは人の住んでいるところを探そう」

グランドラインなら記録（ログ）を貯める時間や次の目的地を知らなければ何より、迷ってたどり着いた島なので尚更聞いておかなければならない。

「そうですね。人がいないとさびしいですよね！！」

「何を勘違いしているんだ。次の島のことは考えてないのか？」

あと、この島の事も色々知らないと
珍しい食料があったらやっぱり欲しいしね！

そうしてジャングルに足を踏み入れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・

「シャァアアァァアァアァアアアア！！！！」

「「わああああああああああああああああああ」」

ジャングルに入って数分。
今は俺たちの後ろに人の大きさくらいの美しい白色の巨大な鳥がいる。
でも、白目を剥きながら気が狂ったように大口を開けて追いかけてくる。

一方俺らはその明らかに狂っている鳥の迫力に押されて全力を挙げて逃げている。
普通なら優雅そうな生き物なんだが、狂っている分のギャップでものすごく怖い！

全力で走りながらフミに話しかけた
「フミ！！何かできないのか！？自然系（ロギア）の能力者だろ？」

そう言うと
「ふぁい？あ、忘れてました！！」

そんな反応を返されるとは思ってなかったので何か言おうと思ったのだが
その前にそのままフミは立ち止まって振り返り、鳥と向かい合った。

「ギャァァァアアアアアア！！！！！」
その瞬間鳥は甲高い声をあげながら上からフミに突っ込んできて嘴はそのまま腹部貫通した。

しかし、その時突然フミの顔色が変わった。

「お、おい！？」

自然系とは言え、あの鳥が知らずのうちに覇気(はき)を使っていたらまずい事になる

もしかしたら・・・と思い急いで声をかけた

しかし、どうやら痛くて顔を歪めてる訳ではなさそうだ　が、何やら深刻な顔をしている。

「おい・・・？」

よけい心配になって声をかけた。

すると、フミはそのまま嘴を腹から抜き取って飛び掛ってきた鳥をそのまま抱きしめた。

俺には訳がわからなかったが、鳥は最初は暴れていたが目がみるみる生気を取り戻して安らかそうに眠ったようだ。

「一体何をしたんだ？」

「鳥の周りに暴走族さんがいたので説得して1つのウィルスにまとめて私の体の中に入れました！」

うん。ウィルス1つにまとめるとかどうやったらできるんだ？訳がわからん

・・・・もう何も突っ込むまい

「それにしても、ウィルスって事は何かの病気？」

「ワンちゃんです！」

ワンちゃん？・・・って犬？

・・・・・ひょっとして狂犬病？

ああ、なるほど。気が狂ったように追いかけてきて犬関係の病気ってそれしかないな

でもあれって発病したらもう直らないんじゃなかったっけ？

あらゆる病気はフミにかかれば原因のウィルスを説得したら普通に
直るのかな
あれ？俺医者いらなくね？
というか怪我しても即効直せるし病気も速攻治るし

怖いのは生活習慣病と火傷と海水くらいのもんだ。

そんな事を考えていると
「セイル！鳥の巣を作りなさい！！」・・・何で！？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・

結局、ジャングル入り口のすぐ傍の木の上に巣を作って鳥を乗せて
休ませておいた。

乗せるとき、改めて鳥を見たのだが　そこら辺にいる動物と違って
純白で美しい姿をしていた

「普通の鳥じゃないですね。」

ああ、フミよ。俺の傍には普通じゃないものが集まるらしいよ

というか、この世界に来たときからずっとそうだ。普通？何それおいしいの状態だ

ＯＮＥＰＩＥＣＥの世界に来た原因がまだ全くわからないし
氷柱（つらら）で穴のあいた腹もそうだし
悪魔の実もそうだし
最初の海賊もそうだし
フミの出会いもそうだし
金（きん）の件もそうだし

そして今も普通とはかけ離れているよな？なんだよこのどこぞのＭＨに出てきそうな奴は？

早く平穏を手に入れてニートになりたい・・・
あ、元の世界には帰りたいけどね。

そして、一通り作業を終えたので疲れながらもまた探索するためにジャングルの中に入っていったのだった。

## 第２１話　狂った巨大鳥（後書き）

はい。ごめんなさい
昨日急いで書いたのです　更新したかったんです
すごく雑な文になっていると思われます・・・

いやぁ、昨日一昨日は本当に疲れました
おかげで腰も腕も足もガタガタですｏｒｚ

ちなみに、この鳥のモデルは『ロック鳥』です。わからない人はググってみよう！
モンスターハンターでもでてきているみたいですが、本来の色は白らしいのでこの小説では白として扱います。

# 第２２話　幻獣の島

ジャングルに入って数時間が経った。

「何なんですかあああああああああああああ！？！？」

「もう嫌あああああああああああああああああ！！！」

今俺たちは色々な生き物に追い掛け回されている

具体的に言うと

・上半身が鷹で下半身がライオンの奴
・顔のついた動く木
・顔のついた人魂
・動く人骨
・巨大な蛇多数（岩に噛み付いた時、その岩が溶けたから毒蛇？）
・色々な竜≪ドラゴン≫
・人型オオカミ
・巨大な蠍≪さそり≫
・耳のとがった小さな妖精（火の塊を飛ばしてきた）

他にも結構いたけど割愛。

・・・ここは動物系≪ゾオンけい≫幻獣種≪げんじゅうしゅ≫の悪魔の実の生産地ですか？
明らかにグリフォンとかワイトとかバジリスクみたいな空想上の動物しかいないよ？
ちなみに今は虹色の蛇に追い回されている

「もう！なんで皆白目剥いてるんですかあああああああ！？」

そんな動物たちにも共通点があった。
動物（木と人魂と骨以外）は全員白目を剥きながら狂ったように襲ってきた

全員狂犬病なのだろうか？
追いかけられて実感していたのだが、伝説上の生き物はどれも普通の動物より強く狂犬病でありながら賢い。
集団で行動してくる生物や壁際に追い詰めてくる生物もいる。

そのたびに壁に穴を開けて逃げたりした。
無論巨大なワームや土竜≪モグラ≫に追い回されて同じことだったが。

「逃げるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

「言われなくてもわかってますようううううううううううううううううううう！！！！」

〜そしてさらに数時間後〜

やっとの思いでジャングルを抜け出した俺たちは船に乗り込んでやっと息をついていた。

「い、一体何なんですかここ・・・？」

「狂犬病の伝説の生き物達の島だったのか！もう本当に冗談じゃない！！」

ＯＮＥＰＩＥＣＥでは伝説上の生き物がそういる訳ではなかったと思う。

いるとしても、白ひげ海賊団１番隊隊長”不死鳥”マルコや・・・あと知将”仏”のセンゴクもヒトヒトの実幻獣種モデル大仏だったか。

作中ではそんなもので、やっぱりこの島は異常らしい。

というか、よくこれだけ狂犬病が流行っててこいつら生き残っているな

普通なら発病後すぐ死ぬ病気だった筈だがやっぱり幻獣だと様々な面で強いんだろうか？

狂った最強の動物達の島なんて普通の人間なら入って２秒で『ｙｏｕｒ　ｄｅａｄ』の文字が出てくるぞ・・・

「しかし、こんな島にいたら気が狂う！隣の島に行くぞ！！」

「え・・・でも隣も似たような所なんじゃないんですか？」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

結局、記録≪ログ≫が貯まる時間がわからないので隣の島に行くことにして船を出した。

1時間くらいで隣の島が見えてきた。

錨を下ろして、見えた先は前に見た通り広い荒野だった。

「もう幻獣は御免だぞ・・・？」

「全くです！」

そう悪態をつきながら島に足を降ろした。

## 第２２話　幻獣の島（後書き）

色々な生物の元ネタ

・グリフォン
・人面樹
・人魂
・ワイト
・バジリスク、アポピス他
・そのまんまドラゴン
・ワーウルフ、人狼
・スコーピオン
・妖精、ニンフ
虹色の蛇はエインガナ

すぐに次の島に行く展開になって予想よりかなり短くなっちゃいました
これなら２１話でまとめでもよかったなぁ・・・

次回は荒野のほうに突入です。原作キャラが登場します

# 第２３話　国都サラマンデル

俺の目の前には広い荒野が広がっている。
後ろは海なのだが、３メートルほど進むと乾ききってひび割れた土の地面になっていた
辺りには水を失ってぐったりしている木や逆に花を咲かせているサボテンだらけだ。

しかし、少し向こうには巨大な城門が見え　門には兵がいて商人らしき人達が出入りしているのが見えるため町はあるようだ。

「ふぉー、こっちは普通の島で安心しました！！」

「全くだ。あんなのは俺はもう御免だぞ？」

人がいることで安心しつつ、船を手ごろな岩陰に隠して歩きで城門に向かった。

「それにしても・・・暑いなぁ。」

「まぁ隣もジャングルでしたし『夏島』というやつでしょうか？」

夏島というよりは隣ジャングルだし温帯なんじゃないだろうか？
いや、グランドラインの気候なんて信用ならんよな。一部だけ温帯なんだなきっと

そして、とうとう城門の前までたどり着いた。

門からは城下町とこの国の城と思われる大きな建物が見え、城壁も異常に高かった。

その場で人生の中で初めて見る城壁と門の向こうに見える城に見とれていると、門番の１人に声をかけられた

「おい、そこの人！今日は海軍の大将がこの島の視察に来る日だぞ？！早く行け！！！」

「「え？」」

そう言われて焦って門の中に入った。

入ってから気づいたのだが

「（あれ？でも大海賊時代の世の中に見ず知らずの人間を入れちゃっていいのか？）」

「（２人で丸腰で入ってくる人が海賊だなんて思わないですよ？普通は）」

そりゃそうだ。

ちなみに俺らの今の装備は学生服ではなく、俺はＴシャツに半ズボン。フミはタンクトップで残念な胸を晒しつつ「ていっ！！」

グハッ！？

突然フミに全力で殴られた。能力で痛みはない筈だが心なしか結構痛い？

「おま、何をするんだ！？」
訳がわからないうちにグーで殴られたので全力で突っ込んだ
「なんとなく失礼なことを言われている気がしたので！！」

・・・ごめんなさい。

えー、ゴホン。
続けると、タンクトップに半ズボンにサンダルで　2人とも一般的な夏服であり武装もしていないので特に警戒しなかったのだろう。
無論武器なんかすぐに作り出せるのだがそんな事をしようとは思わない。

そんなやりとりをしているうちに、城壁の中の町に辿り着いた。
目の前には豪華な馬車と、海軍大将を待っているのか兵士がずらりと並んでいる。

俺達は、そっとその列から離れて町に入った。

町の看板には『サラマンデルへようこそ』と書かれている。
ちなみに俺の原作知識にはこんなものはない。

スイスのような町並みで、蛇を象った国旗の旗が所々にかかげられている。
大通りは海軍大将見たさに人で溢れていて、兵士がやっとの思いで抑えているようだ。
これなら入ってくる人間の管理が薄くなるのも頷ける。（といっても、武装した人間は絶対に通さないだろうが）

「じゃあさっさと宿を探しましょう！さっきの島で疲れました」

ああ。俺も追い回されて疲れきっているので大賛成だよ。

幸い、ローグタウンで換金したベリー通貨はたくさんあるので金には困らない。

宿屋もすぐに４階建ての綺麗な場所を見つけてチェックインした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

同時刻。

話は変わり、ここはサラマンデル国城門前。

城門の前に、ついに『正義』の文字が掲げられたコートを羽織りサングラスをかけたオッサンと、それに続いている海兵たちがやって来た。

この国の国民には彼らの目的はこの国の隣にある幻獣達のいる島だと囁かれている。

別にこの国はそいつらに害を与えられている訳でもないので大半は海軍大将がきた理由を誰も知らないしわからない。

海軍の目的は全世界の海上の治安維持なので、特別何の問題もない国に全世界最高クラスの戦力ある大将が来る理由などないのだ

ちなみに本当の理由を知っているのはこの国のトップと海軍のほんの1部の人間だけだ

「オー、やっと着いたねェー。随分と時間がかかったんじゃないのかい？」

大将と思われる男が部下である海兵にそう尋ねる。

「グランドラインにある場所の中で誰もたどり着けないような場所にある島ですから勘弁してください黄猿さん・・・」

「そうですよ。ここまで来るのに『魔界の大渦壁≪シー・ウォール≫』を通ってこなきゃいけないんですよ？いくら優秀な航海士がいてもこれが限界ですよ！船が全て鉄でできていたら話は別ですが。」

「オ～、責める気はなかったんだよォ？でも一週間も船の中で待たされちゃうと暇でねェ～」

そんな暢気な会話をしながら、原作でも有名な海軍大将ボルサリーノ・・・つまりピカピカの実の能力者である黄猿が国の門をくぐった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

「ごめんねぇ、今日は大将さんが来るって皆見に来るものだから部屋が1つしか空いてないんだよ」

俺たちはすぐに宿を探した

が、どこの宿も他の町の人間が宿屋のおばさん曰く海軍の大将を見るために泊まっているらしく1つも部屋が空いていなかった。
しかし、海軍の大将って・・・この時代だと青雉、黄猿、赤犬の3人かな?

あのうちの1人が来てるってことだよね。なんでこの島に来てるんだ?

そんな事を話しながら歩き回り、やっとの思いで大通りから少し遠い宿屋を見つけたのだが、そう言われてしまった。

「つまり・・・相部屋?」

「そうなっちゃうねぇ。まぁカップルだし今夜はここでやってしまえばいいんじゃないかい?大きな声さえ上げなければおばちゃんは気にしないよ?」

おばちゃんが調子に乗ってとんでもないことを言い始めたので俺は焦って否定する

「ちょ・・・ま!?おばちゃん、そういうんじゃないから!!そういう事言わないで!ね?!」

俺が全力で否定する。

「そうです!!セイルとはただのお友達です!!!」

フミも顔を赤くしつつ全力で否定する

グサッ

あれ?フミの言ってることは全くもって正論な筈なんだけどなんかすごい悲しいんだが何故だ?

「でも今日はこの宿しか空いてないと思うよ?」

そうだなぁ。他の宿もほとんど回ったと思うけど全部満員言われたし・・・

「おばちゃん!もう少し気を使ったらどうなんですか!!!」

フミがとんでもない口調で喋り出したので俺は慌てて

「ちょ、フミ!?　ごめんなさい!連れが失礼なことを・・・」

突然だったので俺も驚いた。

フミってこんな口調で喋った事あったっけ?

しかしおばちゃんは

「アハハ、いいんだよ。あんたの連れさん、いいねぇ。若いねぇ羨ましいよ」

その言葉にフミは体を少し震わせてまた赤くなり反論を始めた。

・・・女同士の会話ってよくわかんね。

とりあえずこれ以上は俺の手に負えそうにないのでさっさとチェックインして騒いでいるフミを引きずりながら部屋に入った。

## 第２３話　国都サラマンデル（後書き）

今回はがんばった！短くないはず！！

ただよう恋愛フラグ。さてさて回収する日は来るのでしょうか

畜生！俺もリア充になりたいよ！！

今回この島に来たのは海軍大将の黄猿さんです。

なぜこんな場所にきたかは後々・・・といってもあと１か２話後くらいだと思いますが。

# 第２４話　鳥の救出

「おはようございます！！今日もファイト一発ですね！！！」

朝だ。

昨日は走り回って船に乗って移動し、さらにずっと歩き回ったせいで足腰がすごく痛い。
しかも疲れもたまっているので昨日は即効でソファに倒れこんだ（ベッドに２人で寝るのはまずいだろうということでフミに譲った結果ソファで寝た。代わりにタオルケットを貰った）

多分昨日寝たのが午後１０時頃で今は・・・日が昇り始めているから午前６時くらいか？
時計がないのでわからないがその位だろう

まぁそんな半端ない疲労が半端な時間でとれる訳が無いので・・・

「うー・・・あと５分・・・」

「ふぁい！？せっかくのいい朝なのにどうしたんですか！！」

うるさい寝かせろ！そしてお前はなんで俺と一緒に行動してた癖にそんなに元気なんだ！！
寝たの８時間位だぞ！？普通ならこれで十分だけど本気≪マジ≫で

疲れているときに8時間はきついんだって！！

「じゃああと5時間・・・」
やっとの思いで声を出す。眠すぎて頭が痛い・・・

「起きて下さい！！！！！じゃないと朝バイキングに行けないじゃないですか！！！」

ピキッ

「お前の目的はそれかあああああああああ！！！！！？？？ふざけるなあああああああああああ！！こっちは疲れが貯まって眠いんじゃあああああああああああああ！！！！」

「（ビクッ）・・・ふぁい！！あ、あと、昨日助けた鳥の様子も見に行かないといけないです！！！セイルがいないと船が動かないです！」

あ・・・そういえばそうだった。
俺がいないと船が動かないからこの島から出られないんだっけ。

あ、いや　そもそもフミ1人で航海するなんて絶対に無理だしそも

そも動かすことすらできないだろう。
あの船が動く原理って根本は風だけど、帆の動きとか移動方向の操作とかは全部能力を使って俺の感覚でやってるし

「う・・・わかったから。あと5分だけ頼むよ・・・」

「駄目です！！今日は時間限定で新鮮なサモーンフィッシュの刺身が出るんです！！早くしないとなくなっちゃいます！！」

「バイキングのためなんだな！？俺を無理矢理起こすのはバイキングのためなんだな！？！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

まさかバイキング1回に2人で6万ベリーも消費するとは思わなかった。（1ベリー＝1円くらいなので実質6万円）

バイキングの名前が「超豪華！新鮮魚介バイキング　季節の魚から海王類まで！！」だもんな
まぁ、結局おいしかったから別にいいんだけどね・・・
ちなみに俺はハタテガイの寿司が一番旨かったと思う。しかし朝から寿司ってすごい店だな

「じゃあ体力源も補給しましたし行きましょう！！鳥さんが苦しんでるかもしれません！！！」

「だな。まだ眠いけどさっさと行くか・・・」

俺らは宿に戻って親切なロビーのおばちゃんに挨拶をしてチェックアウトした。
出るときに「なんだい？せっかくのチャンスだったのに何もしてあげなかったのかい？」とおばちゃんに言われた。
フミがまた赤くなって騒ぎ出したのですぐにお礼を言って引きずりながら出ていった。
・・・やっぱり女同士の会話はよくわからん。

町は相変わらずの大騒ぎで、大将に釣られて遊びに来る人の集まりに便乗するためにたくさんの屋台が出されている。

とりあえず鳥を見に行く前にまず情報収集から始めることにした。

話を聞くと、今回この国に来ているのは3大将の1人である”黄猿”らしい。

いくら痛くないといっても光の速さで蹴られて海に落とされるのは御免だから絶対に戦闘にならないようにしないと・・・

でもやっぱり遠目で見てみたいなぁ。

この国は『幻島≪まぼろしじま≫イリュラム』という場所らしく、2つ島があるがどっちも同じようにつながっている島らしく記録≪ログ≫も一緒に貯まるらしい。

ちなみに記録は25時間で貯まるらしく　驚いたことに次の島はなんと、原作に出てきた”ドラム島”だそうだ。

ルフィ達は医者探しの際にたまたま見つけて立ち寄った島だったが、俺たちの場合どうやらそこが正規ルートになってしまうらしい。

そしてこの島だが、グランドライン入り口にかなり近い場所らしいが周りが『魔界の大渦壁≪シー・ウォール≫』という引力を無視した円柱型の巨大な渦に囲まれている場所であり、最初に選べる7つの島のどれでもないことから滅多に旅人や海賊が訪れることはないらしい。

ただ、幻獣の体の一部（羽とか牙とか）はとてつもなく高く売れるので来ようとする商人や狩人、海賊が後を絶たない。

一週間に一度だけ一部の海流が上向きに流れてこの島に来れるよう

になるらしい。その情報はこの島の人間しか知らないらしいが、来る方法はそれしかないので海軍はそれでここにたどり着いたのだろう

また、たまたまニュース・クーという新聞配達鳥が来ており1部新聞を購入したのだが、「百計の」キャプテン・クロが処刑されたというニュースが載っていた。

確か、これは偽者を仕立て上げて「斧手の」モーガンと共に催眠術をかけてそのまま偽者のクロを海軍に引き渡し処刑した　とかそういう筋書きだったな・・・

他には、新しい懸賞金リストも入っていて町の古い懸賞金リストと合わせて見てみたのだが、まだ原作キャラの『「火拳の」エース』がいなかったのが気になった。

（あと、全く関係ないがリストの中に『「臭気の」ホンオフェ（３００万ベリー）』というなんとも阿呆顔の海賊がいて2人して吹き出してしまった。）

他にもいろいろ調べたい情報があったが、あまりモタモタしてもいられないのでさっさと俺らの船に向かった。

船に乗り込んで島に到着した俺達だが
今度は大体４０分と、案外早く着くことができた。

急いで降りて、昨日の鳥を休ませてある巣に向かう。

そういえば、あの鳥の面倒をなぜ態々見てるかというと「１度助けたんですから最後までちゃんとしたいです」とフミが言ったからだ。
本来、全ての幻獣を治療できればいいのだが残念ながらフミはまだそこまで能力を使いこなせていないので諦めるしかなかったらしい。
それを言った時のフミはとても落ち込んでいた。やはり一匹だけ助けて他を助けられないのが辛いのだろう　普段は人のことを気にしないで何でも言う所があるが、こういう根本的な所で優しい

・・・あれ？俺いつの間にかフミの事を褒めてる？なんでだ？

まぁ・・・とりあえずそれは置いておこう。今は鳥が先決だ

木を上って巣を見ると、昨日助けた綺麗な純白の鳥が横たわりながらこちらを見ていた。

どうやら、俺たちのことは覚えていないらしく、警戒しているようだ。鋭い目つきでこちらを見てくる

「大丈夫ですよ。昨日治療したのにもう忘れたんですか？恩知らずですね」

フミが安心させようとしているのか馬鹿にしてるのかよくわからない言葉で声をかけながら鳥の体を撫でた。

しかし、自分の体を触らせまいとして　動けないもののその場で大きく羽をはばたかせて暴れ始めた！

俺は焦って引き離そうとしたが、フミは手を引いたものの今度は鳥の目を見続けた。

すると鳥も暴れるのをやめ、今度は警戒したままフミの目を見つめ始めた。

しばらくその無言の時間が続いた。

すると、フミを見つめたまま鳥から・・・敵意がなくなったように感じた。
そのまま羽に手を置くと、今度は暴れずにその手を受け入れて撫でられるがままになった。

「フミ?今一体何が起こったんだ?」

「セイルは動物の気持ちがわからないんですか?昨日まで苦しみながら自分の意思とは裏腹に人を襲い続けて、でも突然それがなくなったはいいものの体が動けず抵抗できないところに　自分のしたことを恨んでいるであろう人間が来たんですから暴れて追い払おうとするのは当然じゃないですか?」

長い!長いぞフミよ!
でも・・・まぁ自分の考えじゃなくても今まで人を襲ってたなら(多分狂犬病だったし襲ってたんだろうという勝手な推測だが)人間はそんな都合知ったこっちゃないだろうし、もっと簡単で手っ取り早い”殺し”という手段を取るだろう
つまりこいつは邪魔な存在である自分を消しに、人間がやって来るってわかってたんだろう。

「でも、何で警戒を解いてくれたんだ?普通だったらそんな状況で警戒解かせるの無理だぞ?」

「目で話せないんですか?口より遥かに色々伝えられますよ」

うーん・・・俺にはよく分からないな。

フミって時々高度すぎる事言うよね

「ま、セイルには一生分からないでしょうけどね！！！」

「キ！」

ピキッ

「コラアアアアアアアアアアアこの野郎！！！！！！お前もフミに同意するなやあああああああ！！！」

「ひゅい！？」

「キュ！？」

そんな口論（笑）をしつつ、鳥の看護に入った。

俺も同じように見つめてやって、敵意が無くなったのを感じるとローグタウンで買った米や肉、他にも野菜や蟹とかをその場に増やして置いてみた。

すると、どうやら相当お腹がすいていたらしく主に海豹≪あざらし≫肉を中心に食べ始めた。

大きい塊だった筈なのだが、一口で食べてしまったのですぐにまた増やしてその場に置いてやる・・・そんな作業を何回か繰り返した。

そして、しばらくしてから看護も大体終わった。
怪我は俺ができるかぎり治して（肉についた傷は無理だったが、折れた骨は直すことができた）、狂犬病ウィルスに関してはフミが説得して引き取ってた。
ついでに破傷風菌もいたらしく、そいつらも逆になぜか活動できなくて困ってたのでフミが引き取ったらしい。　後に親衛隊の1員になったとかならないとか

そういえば、看護しているうちに鳥が主にフミに懐いてしまって一々離すのが大変だった。
離したら離したで今度は俺のほうに寄ってくるのだ。　・・・こいつ、そんなに甘えたいのか？

今はフミの膝枕で寝ている。なんか腑に落ちないけど『鳥だから仕方ない』と思って割り切っている。

・・・ん？一体何を割り切ってるんだ俺は？たかが鳥の看護だろ？

しかし、そんな和みながら俺らが鳥の頭を撫でている時だった。
近くで何かが鋭い音を立てたかと思うと、激しく爆発した音が聞こ

えた

## 第２４話　鳥の救出（後書き）

サモーンフィッシュもハタテガイも誤字じゃないです！

ホンオフェは世界でもかなり臭い分類に入るエイの発酵食品です
なのでセイル達が見た海賊の顔はエイ顔だったらしいです。

あと、鳥の鳴き声は悩んだ末「キ」「キュ」にしましたｗ

フミとの恋愛フラグ？しばらく回収する気はありません。
少なくともドラム王国以降にしようと思ってます。

それにしても鳥と仲良くさせるシーンがとてつもなく難しかったです
これのせいでまたストックが消滅しましたｏｒｚ

修正
怪我は俺が治して
←
怪我は俺ができるかぎり治して（肉についた傷は無理だったが、折れた骨は直すことができた）

## 第２５話　海軍大将黄猿（前書き）

主人公の能力の説明が遅れている件について後書きに記載しました。
能力について説明が無い事に関して何も言わず、皆様を混乱させてしまい申し訳ありませんでした。

# 第２５話　海軍大将黄猿

「！？　な、何だ！？」

突然、俺らのいる場所からかなり近い所で爆発音が聞こえた

ギャアアアアアアアアアッ！！！！

オオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

同時に動物たちの悲鳴が響いてきた。

チュン

耳元を、鋭い音と共に何かの光線が駆け抜けた

「え・・・な・・・？」

一瞬で訳の分からない内に、俺の後ろで爆発が起こった
俺らは気づかなかったが、後ろには人と同じくらいの直径を持ったワームが大口を開けて今にも俺らを食おうとしていた
それが今は焼け焦げて地面に崩れ落ちている

「おや？おっかしいねェー　この島には人はいないって聞いたんだけどねェ？」

俺らの下から間延びした声が響いた。
声の主を見ようと思った途端、一瞬の内に目の前に姿を現した

「君らはここで何をしているんだい？ここは立ち入り禁止だった筈だよォ？」

そこには、以前漫画で見た海軍大将黄猿がいた。

「わっしはボルサリーノ。海軍で大将をやってるよォ　君達は知らない顔だけど・・・海賊かい？」

・・・・・やばい

俺は、さっきの鳥とは比べ物にならないほどの殺気を感じた

一歩でも引いたら殺される

そんな威圧感で場は満たされていた。

そんな中、質問に答えるためにやっとの思いで俺が首を振る

「まァ、海賊じゃないなら君達に用はないからさっさとこの島から出ていきなよォー。わっしはこの島の狂った幻獣全てを片付けなきゃいけないんでねェ」

「こ、この子は狂ってないです!!もう治ってます!!」

フミが怖がりながらも口を開きそう告げる

すると、その言葉を聞いた黄猿は「んー?」と良いながら俺らの後ろにいる鳥と目を合わせた。

鳥もそれに答えるように、鋭い目つきで黄猿と目を合わせた。

沈黙

「・・・わっしの仕事は”狂った幻獣”の処分だったからねェ、考えたらそいつを処分する必要はないんだよねェ」

その言葉を聞いて2人に少しばかり安堵の空気が流れる

「でもねェ、その鳥が狂ってるかどうかを判断するのはわっしじゃないんでねェー　やっぱり海軍としては消さにゃならんでしょう」

安堵の空気が一瞬にして凍りついた。

「ただ、その鳥より先にまず明らかに狂って襲い掛かってくる連中を片付けにゃならんからねェ　そいつらが片付いたらすぐに消しに来るよォ・・・『八咫鏡≪やたのかがみ≫』」

そう言い放つと、手で円の形を作り

そこから光が放たれたと思った瞬間黄猿は消えていた。

「これって・・・まさか助かったのか？」

「『狂って無いなら自分が手を出す必要は無い。さっさと連れて逃げてしまえ』って事ですよね？」

すぐに2人は、鳥を巣ごと持ち上げて船に戻った。
鳥もどういう状況かわかっているのか、一切抵抗せずおとなしく巣の上で横たわった

黄猿って・・・漫画で見たときは全く性格が読めない人だったけど、実際会ってみるとちゃんと自分の正義を持って行動してるんだなぁって実感した。
もしこれが赤犬だったら1%でも可能性があればそれを根絶しようとする人だし全部消しただろうなぁ

「セイル・・・」

「？」

「私はこの子だけを救いましたけど・・・本当によかったんでしょうか？」

どうやらフミはこの鳥だけ救って後の奴らを救えないことを思いつ

めているようだった。
んー・・・でもなぁ。他の奴らを救う時間とかもなかった訳だし
「いいんじゃないの？この鳥を救ったのもたまたま縁があったからだし　手の届く範囲でできることはしたんだからできなかった事を悔やむのはよくないと思うよ」
そう言ってやると少し元気になって「ふぁい！」と言って笑顔に戻って小走りで走り出した。
「ちょ、俺も巣持ってるんだから待ってくれよ!!」
その時、また新しい爆発音が後ろから響いた。
同時に、甲高い動物の悲鳴
馬や鳥、狼や　人に似た声まで聞こえた
とてもの悲しい声だった
それを聞いて巣の中で蹲っていた鳥は顔を上げて声を上げた
とても悲しそうな声を上げた。

それを聞きながら、俺たちは無言になって船に向かって走り続けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

時は遡り、ここはグランドライン海軍本部。その建物の高い場所にある一室

「そろそろこの報告書を片付けねば・・・このままだと駐屯基地が全滅する」

「そもそもなんで普通出てこない幻の生き物が態々出てきたんだろうね？」

海軍の元帥であるセンゴクと、中将である大参謀つるがうず高く積まれた報告書を整理していた。

『基地が巨大な鷹に襲われて壊滅状態』
『巨大なヒルが基地に住み着いて入れなくなった』
『突然基地がジャングルになった』

などと一見訳の分からない報告書
しかし、それを受けて本部の海軍が視察に行ったところ全て本当の話だったという。

調べていくうちに、それらが幻とされてきた生き物達の仕業だとわかった。

「しかし・・・何故幻の生き物が突然こんな事を?そもそもこいつらはどこから来たんだ?」

「さぁ。分からないけどこれはどうにかしないと町がいいようにされちゃうよ?」

センゴクはこの問題に頭を痛くしていた
おつるさんもこればかりはどうしていいか分からず、ただただ報告書を見つめるばかりだった。

1つ1つ本部の者が対処していったのであれば相当な時間がかかる。
しかも、この生き物たちは駐屯基地の強者全員を負かしてそこに住み着いているため、生半可な海兵ではこの問題はどうしようもない。
はっきり言って、これは海軍の歴史の中でも最悪と言っていいほどの部類だろう。

「でも・・・何でグランドラインの島しか狙わないんだろうね？しかも南東付近に多いようだけど・・・」

そこでセンゴクが何か思い出したような顔をした

「！！　南東と言えば・・・幻島≪まぼろしじま≫がある場所じゃなかったか？」

「幻島・・・？　ああ、そういえばそんな話を聞いたことがあるよ。確か伝説の生き物が住んでいる島と人間が住んでいる島に分かれていて、我々とは全く別にで共存しているとか。でもあそこは魔界の大渦壁≪シー・ウォール≫に囲まれてて航海が成功して戻ってくる確率がとても低い場所・・・じゃなかったかい？」

「ああ。　だが、あそこの航海は今は海楼石の軍艦で何とかなるんじゃないか？　そこに沈む船は大抵何かに食われた跡があった・・・つまりその原因は海王類かそこに棲む幻獣の何か　とは考えられないか？だから航海成功の確率はそれで上がる」

「もしその島が存在するなら、すぐに調査にいかないとまずいね。幻の生き物が存在するとわかった今幻島が存在してそこが幻獣の源でないとは言い切れないからね」

調査のため船を出した結果

・魔界の大渦壁≪シー・ウォール≫は1週間に1度の周期で登りの道ができてそこを伝っていけばなんとかなる事
・そこには国があり、是非海軍と国交を結びたいとのこと
・元々海軍の存在は何らかの手段で知っていた事
・幻獣は魔界の大渦壁≪シー・ウォール≫の外の存在しか襲わないらしい事
・幻獣が明らかに狂って白目をむきながら襲ってきたこと
・昔はいなかったゾンビなどが出現したとのこと

がわかった。

「ふむ・・・国交に関しては後で詳しく調べて決めるとしよう。しかし、ここが発生源であるというのは確定のようだな」

「そうだね。ちょっと読んだ感じだと昔は幻獣と共存していたけど、今はゾンビなんかのアンデッド族が出てきて以来友好関係は崩壊してるらしいよ。以降は食物を荒らす連中に困っているらしいね」

「そういう事ならその問題解決を手伝う意味でやり易いな。よし、国交について決定した後はすぐに幻獣の問題に移ろう」

そして、幻獣を殲滅するのに大量に素早く、負傷者を出さないで片付けるため　そして海軍支部全体の士気を戻す意味で海軍大将黄猿に『狂った幻獣の殲滅』任務が言い渡された。

## 第２５話　海軍大将黄猿（後書き）

第３話と第５話に能力についての説明と、主人公の能力についての解説が遅れることのお詫びをを追加しました。
改めて、ここまでそれらについての一切の説明が無かったことをお詫びします。皆様を混乱させてしまい本当にごめんなさい

主人公の能力をいつ明かすかですが・・・
今は原作開始時期３年前なので　ドラム島編後２年か３年間修行期間を空けて　その直後に主人公の能力についてちゃんとした解説を入れようと思っています。
予定は３５~４０話くらいとなる予定ですが、それまでお付き合いいただければ幸いです。
よろしくお願いいたします。

# 第２６話　セイル／エース出航（前書き）

気がついたら総合の評価１０００、ＰＶ３３００００、ユニークアクセス３００００を突破していました！
ここまで見て下さっている皆様のおかげです！本当にありがとうございます！！

# 第２６話　セイル／エース出航

船に戻った俺たちはすぐに出航させた。

「ハァ・・・ハァ・・・何とか間に合ったな」

「なんとか・・・」

「キ！」

後ろを振り返ると、まだ黄猿の攻撃が続いているらしく光線の音と爆発の音が途切れない。

記録も２５時間を経過したため既に貯まっており、すぐに島を出ることができた

しかし・・・

最初からハードすぎなんだよこの島！！！

もうちょっと優しいところで経験積んでからじゃ駄目なの！？

でも・・・この島って最初のどのルートでも無いみたいだし、場外だったんだろうな。

そういえば、町で聞いた情報によると
この島を覆っている渦だけど、普通の木の船じゃ即効やられちゃうらしい。
原因は主に2つ

・海流に流されて沈没
・海の中にいる生物に沈められる

俺たちはどうやらギャンブル系ボードゲームをしているうちにいつの間にか渦を超えて、その上海獣に襲われなかったらしい。
渦のほうは、どうやら鉄の船だったので耐えられたらしいが、それでも結構すごい運だと思う。
おお、本当になんというう豪運だろう！神≪フミ≫様ありがとうございます！

そう思ってフミに手を合わせて2礼2拍。

するとフミが
「なんで私を拝んでるんですか！！気味悪いです！！」
腕を胸の前で組んで怖がる動作をしながら相変わらずの毒舌。

「いやぁ、この島にたどり着けたのはフミのおかげだったなぁ・・・と思って」

「何なんですか！突然・・・？」

「いや、何か突然言いたくなったから」
「本当に何を言ってるんですか！？！？」

そんな話をしながら、しばらく海を進んでいると
「お、あれがそうじゃないのか？例の渦」
目の前が山頂から見えている景色のように見下ろす感じになっていて、坂になっている海は下向きの流れになっていた。

「意外と簡単に進めそうだな。いや、戻るが正解かな？」
「どっちでもいいです！早く鳥さんの手助けをしてあげないと！！」

うん。そうだったね
さっさと下る事にしよう。この航海はそう難しくなさそうだしね。

こうして俺たちの1つ目の航海が終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・

その頃、東の海≪イーストブルー≫のゴア王国、コルボ山のとある海岸

普段は人が集まるような場所ではないが、今日はとある人物が島から旅立つためかフーシャ村の人たちとその土地に住む山賊達が集まっていた。

普通は山賊と町民が集っていたら争いが起こりそうなものだが、今はどうやらとある人物を見送りにきているようだ。

その場所はこれから出発するであろう人物に送る歓声で満たされていた。

「頑張れよー！！エース〜〜〜！！！」

歓声の中、さらに大きな1人の声が響いた。

海には、小さな一隻の、漁船くらいの大きさだが帆船が浮かんでい

た。

「待ってろすぐに名を上げてやる!!!」

その上には1人の青年が大きく手を振りながらそれに応えていた。
容姿は黒の夏服、首には変わったペンダントがかけられていてオレンジ色の帽子には顔を模したと思われる飾りが付けられている。

「はは!!まだ手ェ振ってる!!」
「まったく・・・・ガープの奴が何と言うか・・・」

見送っている人の中で一番年を取っていると思われる人がため息をついた。

青年はいつまでも手を振りながら、とうとう島から見えない場所に行ってしまった。

そして出発後のコルボ山の中のとある山賊達の住処

「お頭ァ〜〜!!エースの奴行っちまいましたよー!!」

中には見送りに行かなかったお頭と呼ばれた人物だけがいた。
「・・・・・!!　あァそうかい。結局ガープに怒られんのはあたしだよ・・・・・しょうのねェクソガキだった。」

「あ・・・そういやエースからお頭に伝言が」
見送りから帰ってきた1人がそう言う

「何を～～～!?最後の最後まであたしに文句があんのかい!!?」
「『世話んなった　ありがとう』って」

その瞬間、お頭と呼ばれた人物はどばっという効果音が出そうなほど涙を流して

「ふざけんじゃねェよ!!!!バカが!!!!」

旅立った人物の名前は、『ポートガス・D・エース』。後の「火拳の」エースとして名を上げる人物であった

この人物がセイル達と出会うのはまだ先の話である。

## 第２６話　セイル／エース出航（後書き）

２礼２拍・・・神社でのお祈りの作法。

書いてたらとても短くなっちゃいましたｏｒｚ
明日は頑張るぞ！！

ここからは少なくとも２話くらいは船の上でのお話になりそうです。
そろそろ旗のちゃんとしたデザイン考えて書かないと・・・

１月の１５，１６はセンター当日模試のためお休みします。申し訳ありません

# 第２７話　それぞれの夜（前書き）

ウィルスのところは判りづらいと思うのであとがきで説明入れました。

# 第27話　それぞれの夜

無事に渦から降りたセイルたちは船の上で夜を過ごしていた。

今は皆がそれぞれの部屋で思い思いに過ごしているようだ
騒がしい部屋もあれば、もうとっくに暗くして寝ている部屋もある。
とても2人と1匹とは思えない騒がしさだ。

そしてここは、セイル達が連れてきた鳥を看護している部屋。

「ふぉっ、駄目ですよ！また傷口が開きますよ！！」

「キーーーッ！！」

フミと連れてきた鳥が悪戦苦闘していた。

純白の体に所々できている赤いシミがとても痛々しい。
フミはそんな鳥の傷1つ1つに丁寧にローグタウンで買っておいた
包帯を巻いていた

「やっぱりいくらか部屋を広くしましたが、やっぱり鳥さんには狭いですか？」
「キ！」

鳥が肯定したように首を縦に振る。
この2人は会話はできないもののちゃんと意思疎通を行えるらしい。

「それにしても、鳥さんって呼び辛いですね・・・なんて呼べばいいですか？」
「キキ！！」

反応したような鳴き声をあげる。

「キキ・・・そういえば、鳥さんって男の子ですか？」
「キーッ！！！」

首を横に振ったので、どうやらこの鳥はメスのようだ。

「女の子なんですか！！じゃあこれから鳥さんのことはキキって呼びます！！」
「ギャーッ！！！」

名前をつけてもらってよほど嬉しかったのか、鳥がかなり嬉しそうに悲鳴を上げた。

そして、明日からこの純白で美しい鳥は『キキ』と呼ばれるようになった。

場所は変わり、ここはフミが連れてきた菌達が集う部屋。

「初めまして！！今日からこの部屋でお世話になりますワンです！よろしくお願いします！！」
狂犬病ウィルスであるワンちゃん（命名はフミ）がここにいる菌たちに挨拶をしていた

「俺も今日からココに加わらせてもらうハショーだ。宜しくゥ！」
やたらとテンションの高い破傷風菌のハショー（命名は（ｒｙ）も挨拶をする

「やぁ～特に何も～無い場所だけど～これからよろしくね～！」
ノロ君が代表で挨拶をする。

「そんな事よりさ、ダンボールの底についてるプチプチ持ってない？」

「はしか君、例えダンボールがあっても私達じゃ潰せないよ？」
腸管出血性大腸菌Ｏ１５７：Ｈ７・・・いや、イチゴさん（命（ｒｙ）がもじもじしながらそう言う。

「知るか！あのプチプチは男のロマンと同時に俺の夢なんだ！！！俺の一族はプチプチを作るばかりでいつも潰せないんだ・・・」
麻疹ウィルスのはしか君がとても残念で悔しそうな顔をした

「それにしても、この蟹すごく家を作り易いナリ！！」
空気を読まない青カビ達がそう言いながら1日1回放り投げられる食料の中の蟹に、共にコロニー（家）を形成する作業をしている。

「空気嫁！空気嫁！そして今日は疲れてる人もいるんだからもう寝ようZE★」
さらに空気を読まないウエストナイルウィルスのナイル君がそう叫んだ

「（うわぁ、何あの言葉遣い。”おたく”みたいねー）ヒソヒソ」

「（そ、そうなの？でも”おたく”って何？）ヒソヒソ」

「（さぁ・・・でもフミっちが『パソコン用語をやたら使う人』だって言ってたよ？）ヒソヒソ」

「（本当にそれで認識あってるの？何か違うような気がするんだけど・・・）ヒソヒソ」

「（いいじゃない。そういう独立語として使っちゃえばこっちのものよ）ヒソヒソ」

「（いいのかなぁ・・・？）ヒソヒソ」

「（いいのよ！）ヒソヒソ」

ピロリ菌（♀）とアクネ菌（♂）のカップルがヒソヒソ声で色々話している

「えー、ちゅうもーく!!これからいつものあたい主催の恒例『さいきょー決定戦』を行います!!」
インフルエンザウィルスのインフル君（♀です）がそう高々と宣言する。

周りからは
「え?またやるの~?」
「何?最強決定戦???」
「ナリー僕達のコロニー作った後でもいいナリか?」
「お前、また自分の型進化させたな!?対策できねーじゃねーか!」
「「私達いつも通り戦いに向いてないからパス」」
「わ、私も・・・」
「いや、イチゴよお前は強い部類の菌だろうが」

（どの菌がしゃべってるかはご想像にお任せします）

「いいから!!今日も始めるわよ~　みんな!殺さないていどにね!開始っ!!」

そうして、インフル君が皆に襲い掛かった。

これがフミに拾われたウィルスたちの日々。何だかんだ言っても本人（？）達はとても楽しそうにしているようだ。

そして、ここはセイルの部屋。

既に部屋の明かりは消されておりとても静かで、彼は既にベッドに横たわっていた。

テーブルの上には、彼が書いている日記とインク壺に羽ペン。そして本の山があり、火が消えたばかりであろう、油の入ったランプが置いてあった。
どうやら、先ほどまで起きて日記をつけていたようだ。

日記は無防備に開かれていて、誰でも見れるようになっている

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・

×月◆日

この世界に来てから３３日が経った。
未だにこの世界が漫画の世界だなんて思えない
しかし、実際海軍はいたし海賊もいた。悪魔の実もあった。
何故こんな事になったかは全くわからないが、なんとしてでも元の世界に帰りたい。

そういえば、昨日変な女の子と出会った。
船から来たのだろうと思ったが、何も覚えていなかったらしい。
もしかしたら、あまりの拷問で記憶をなくしたのかもしれない
帰る所を本人が見つけるまでは、嫌がってなさそうなので俺が世話することにした。

追記：服を着せるときにこっそり胸を触ったのは誰にも言うつもりはない。この世界にきてよかったと思えるたった１つの事だった

×月〇日

今日は能力で船を造った。
質量を無視して物を変化することができる能力だったので余裕で造れた。
浮かぶかどうかは半信半疑だったが、どうやら少し前に受けていた物理の”浮力”についての授業のおかげで無事に浮かすことに成功した。
あと、電気が欲しかったの大きな釜を造った。
火力発電の要領で風車を回すようにした。燃料は用意しておいた木炭と普通の薪なのだが俺がいれば永久機関になるだろう。
電球も作りたかったんだけれど原理が全くわからないので駄目だった。モーターは作れたんだが・・・磁石は島に砂鉄が多い場所があったのでそこから造った。

女の子は23という数字からとってフミと呼ぶことにした。
本人はニザンと読んで欲しかったらしいが、既に海軍大将青雉のクザンさんがいると思うので無視して”フミ”の名前を使うことにする。
悪魔の実がもう1つあったので部屋に持ってきたが、どうしようか。

それにしても、早く元の世界に帰りたい。

父さんや母さん、俺の友達や部活の教師に会いたい
家に帰りたい。学校に行きたい
（よだれと涙と思われる水痕がついている。ここで寝てしまったようだ）

△月●日

今日は”ローグタウン”に着いた。
間違いないとは思っていたが、原作に出てきた町が目の前に出てこられるとやはり絶望してしまう。
島で他の能力者と戦闘になった。
俺の能力とはとても相性が悪く、たまたま来てくれた海軍のスモーカーに助けられた

あと、フミが悪魔の実を食べた。
フミの能力で菌が見えるようになったらしいが、書いてもらうと前に見たも●しもんという漫画の菌のデザインとかなり似ていた。
ウィルウィル（ウィルス）の実かヤマヤマ（病）の実かビョウビョウ（病気）の実という所だろうか?俺は『ウィルウィルの実』と呼ぶことにする。
そして、その実はどうやら自然系らしい。
しかし、フミの体に菌の親衛隊ができているとは驚いた。あれはフミの人徳の成せる技だろう

俺は本当に元の世界に帰れるのだろうか?

△月□日

今日はリヴァース・マウンテンを抜けて、グランドラインに入った。
双子岬のクロッカスさんに会いたかったが、いなかったようでとても残念だった。
ラブーン（鯨）は見れたが、間近でみると段違いに、山みたいに大きかった

グランドラインにいけば、色々な未知の場所があるのできっと助かるだろう。
俺を元の世界に返してくれるならどんな事でもするつもりだ
でも、俺がいなくなったらフミはどうするんだろうか？

△月▼日（最新）

しばらく、俺の世界では伝説になっている生き物の住んでいる島について書くのが遅れた。
俺らの世界の常識から言えば、とても大きい人間大の白い鳥を助けた。
助けたはいいが、原作キャラクターの海軍大将黄猿に出会ったときは背中に氷がおかれたようだった。
しかし、結局は逃がしてくれたのでいい人だったんだろう。原作とはまた違う一面を見た気がする

宿屋が1つ、1部屋しか空いていなかったのには焦った。
そういえばなんでフミがただの友達だって言ったときにちょっと泣きそうになったんだろうか？
自分でもよくわからないが、一緒に部屋で過ごして（無論ベッドにフミ、ソファーに俺）夜に色々話をした時はとても楽しかった。

元の世界に帰りたいが、こっちでフミと生活しているときはなぜかとても幸せな気持ちになれる。

俺は確かにもとの世界に帰りたい。どんな事をしてでも帰りたい。
でも、フミと比べたらなぜかどっちも手放したくなくなる

フミは元いた場所に帰るべきなのだ。

奴隷海賊船につれられる前の記憶を取り戻したらお別れになってしまう

そうなると俺はまた1人になってしまうが、俺は（ここで文章が切れている）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・

ベッドに横たわっている彼は様々な重圧に押し潰され、涙を流していた。

## 第27話　それぞれの夜（後書き）

・ノロウィルス（ノロ君）
特徴　語尾が『～』と伸びる。

・ウエストナイルウイルス（ナイル君）
特徴　２〇ｈやニ●ニコ動画で主に使われる用語を連発する

・麻疹ウィルス（はしか君）
特徴　口調は普通だが、膨れているものをやたらと潰したがる

・新型インフルエンザ（型不明）（インフル君）
特徴　某弾幕シューティングゲームの氷結娘に極端に似た口調をしている。

・腸管出血性大腸菌Ｏ１５７：Ｈ７（イチゴさん）
特徴　実は女の子。臆病

・狂犬病ウィルス（ワンちゃん）
特徴　元気な少年

・破傷風菌（ハショー）
特徴　ちょっとテンション高気味な男

・青カビ
特徴　何が何でも家を作りたい。語尾に『ナリ』をつける

・アクネ菌
特徴　中学生の気の弱い男子。ピロリ菌とカップル

・ピロリ菌
特徴　高校生の気の強い女子。アクネ菌とカップル

他、元々体内にいたウィルスｅｔｃ…

センター試験が近くなってまいりました
やばいです。あと1年しかないです

1月11日修正
少し前に受けていたのおかげで
←
少し前に受けていた物理の”浮力”についての授業のおかげで

## 第２８話　悪魔の実のレポート（前書き）

主人公、フミの悪魔の実の能力説明回です

後から見てもすっごく見づらいです。
軽くスルーしながら見ていくことをお勧めします。
というか、後でよく分からない能力が出てきたときにこのページを確認しよう！くらいのノリでいいと思います。

ちなみに、次回からこの無人島での能力の練習風景を描いていこうと思っています
ドラム島編を楽しみにしていた人はごめんなさい。もうちょっと時間がかかりそうです

## 第２８話　悪魔の実のレポート

「よし、戦闘訓練をやろう」

「頭は大丈夫ですか？」

いつもの『本人は本気に言ってるのに、それに対する毒舌否定突っ込み』が入った。

「ぐふっ、相変わらずの毒舌・・・だが自分の能力の把握のためには結構良いんだぞ？まだお互い能力を全然把握仕切れてないからな」

そう。俺はそこそこに能力を使いこなしているつもりでいたが、できる事は

『敵を喰って自分の近くで傀儡として出現させる』

『触れた物を質量を無視して変化させる』

『自分の体の自動修復』

この３つである。

これでも一見十分なのだが、意外と穴が多い。

まず『敵を喰って自分の近くで傀儡として出現させる』能力だが

「骨壷の」デラーと戦ったとき、一味の海賊団は喰えたがなぜ船長だけ喰えなかったか？

『自分の近く』というのは分かっているが、具体的な効果範囲がどこまでなのか？

傀儡をいつまで使役できるか、どこまでの範囲で行動させることができるか、能力者同様の弱点を持つのか、喰った後いつでも出すことができるがどういう原理なのか？

そして、喰った人間は自分の意思を失くしているようだがただ封印されているだけなのか？それとも殺して肉体だけを使役しているのか？

『触れた物を質量を無視して変化させる』能力も

触れたものの形を操ることができるが、どこまで細かくできるのか？

造りだしたものは普通の物と同じく形をそのまま維持できるのか？

増やせる質量に限界はあるのだろうか？

ちなみに、生物のコピーに使えないのは自分自身とフミ（協力してくれと言ったら普通抵抗があると思うのだが案外あっさり頷いてくれた）で確認した。（骨などの単純構造の物質には使用可能のようだ。）

そして『自分の体の自動修復』

修復量に限界はあるのか？

以前炎で腕を焼いたことがあったのだが、しばらくすると普通に燃えて痛覚を感じた。つまり限界があるのではないか？
銃弾などの物質が体の中に留まったとき、それはどう処理されるのか？

ちなみに以前、腹の開いた穴を治そうと思ったらその部分が内臓が無い上、ただの肉の塊になっていてそこだけ重く、すごい違和感を覚えたため、素直に穴をあけたままにしている。
多分、能力者になる以前の大きな傷は治りづらいのだろう。だが、一緒に内臓も貫かれた筈だが・・・一体中はどうなっているのだろうか？

わーお、数えてみたらこんなにあるよ。

ちゃんとこれらについて把握していかないと自分の弱点やできない事が分からないので戦闘のときとても危険だ。

そしてそれはフミにも言える。
というか、フミはウィルスを見て、会話して、仲間（？）にする事と自然系の回避以外今まで何もしていない。

ウィルスだぞ？もっといい使い方あるだろ？？！
うまく使えばバイオハザード起して大勢の人間を殺したりできるし・・・まぁそんなことは俺もフミも望んでないけど。

「とまぁ、そんな感じだ。ちゃんと能力は把握しておかないと」

「見事に口での説明を省きましたね！！いいですけど、それだったら戦闘訓練じゃなく普通に１つ１つ試していく方が早くないですか？」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「あれ？あれ島じゃない？」
ふと海に目を逸らすと、記録≪ログ≫と違う方向を指しているが、なんと島を見つけた。

「あ、本当です！！うまく誤魔化したのは今回はスルーしてあげます！！」
フミも俺の指差す方向を見て島に気づいて歓声を上げた。最後の言葉は余計だと思うのだが突っ込むと面倒になりそうなのでスルーする事にした

「無人島なら能力を研究するいい機会じゃね？」

「というか、人がいないところじゃないと能力の練習や研究ができないなんて…フミたちもひどい能力を持ってますよね！！」

・・・・うん。全くだよ

原作にも『能力も使いようだ』みたいなことを言ってた人がいた気がするけど、俺らの能力は本気で使ったら大量殺人テロなんて簡単だからね。うん

気をつけてやらないと・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・

---

～2日後　セイルの悪魔の実能力レポート～

---

前書き

結局途中で停泊した島は無人島だった。
なので、俺たちは記録≪ログ≫が書き換わらないうちにそこで能力の練習と研究をする事にした。

島の滞在期間は2日間。（1泊2日）

また、途中で賞金２１００万『「頭領の」ガイム』を筆頭とした６００人くらいいる艦隊海賊団が襲い掛かってきた。
なので、俺の食欲＞グリード＜やフミの能力を使っての対人戦もすることができた

今までわかったことや、ここで実験して気づいたことや分かったことを書いていこうと思う
え?技名が厨二臭い?それは知りません。

---

●●●セイルの『ナノナノの実』について●●●

悪魔の実専門の図鑑には記載されていなかった。
操るのは【原子】。（原子の大きさがナノ単位だから?）

特徴

・斬撃、銃撃無効（正確には、食らって即回復しているため黄猿み

たいに貫通しているように見えている）
・永続的なダメージを３０秒以上喰らい続けると痛覚と治癒速度が常人と同じなる。そのダメージから逃れた後は回復能力がしばらく失われる
・痛みがない上あらゆる攻撃はすぐに回復する
・物質に触れると、その物の質量を無視して同じ物質の”物”を造りだすことができる。
・水以外なら、今わかっている限り炎にも弱い。

能力弱点表
Ｓ【海水】（常人に戻る。悪魔の能力全封印）
Ａ【不明】
Ｂ【炎】（３０秒以上消さないと普通に燃える。）
Ｃ【打撃】（痛覚は無いが普通に吹っ飛ぶ）
Ｄ【物理攻撃全般】

操るのが【原子】なので、何でもできそうだができる事は大きく分けて３つしかない。
（核分裂や核融合、その他思いついたことは試してみたができなかった。）

身体能力に関しては、全く変化はしない。
また、防御か攻撃のどちらかにしか力は使えない
能力を防御以外に使っている時に攻撃されると一瞬痛みを感じるが、攻撃を中断して防御に力が回る。

１つの攻撃に対して３０秒まで耐えられる。
そのために、斬撃・銃撃は耐えられるが打撃は普通に吹っ飛び
永続的にダメージを受ける火には弱い。

打撃は有効。但し、痛みがない上すぐに回復するため意味がない。

悪魔の実を食べる以前の傷は修復されない。
ただし、致命的なものに関しては実を口にした時点で回復するがその傷跡を残したまま回復してしまう。

錬金のような能力も使えるが
こちらの効果対象は自分の体か、それ（服や靴含む）に触れている物に限られる
出現させられる場所も、自分の体のどこかか対象の物に触れられる範囲に限られる。無意識のときは手に出現する
造りだしたものは順番に意識していくことで細部まで細かく造る事が可能。
本物と同じで海水に漬けても問題はなかった。質量に関しては場所がなかったので実験不能
生物のコピーを作ることは細部を認識していないので不可能。脂肪の多い部分や骨、爪は弄ることができた。
また、これは攻撃に含まれないので使用中も防御を続けることが可能。

●～悪魔の実の能力～●
イメージ：死後の世界、地獄寄り

・食欲＞グリード＜

相手の体が自分に触れた瞬間、肉体を自分の体に取り込む能力。
ただ殺すだけなら、そのまま土に還すこともできる
相手が覇気を使える・悪魔の実の能力者・精神力が強い場合は通用しない。
喰って保管できる人間は１０人まで。
それ以上保存した場合、取り込んだ人間の姿が自分の姿に加わり見た目（顔、体つき等）が大きく変わる。
人間以外にも使用できるが、取り込んだ場合その時点で大きく見た目が変わり、さらに能力者はその動物の持つ特性や弱点を引き継がなくてはならなくなる。
肉体を失った魂は死んだ生物と同じ末路をたどる。

・聖者の呪術＞リフレイン＜

対象の生きている人間に触れることで、全ての病、毒、怪我を確実に回復させる。
但し治療中は苦痛が生じ、重さ・進行度合（つまり死ぬ確率）が高いほどより大きな苦痛となる。
（具体的には、風邪のような症状から全身外側・内側から針をさされたような苦痛まである。最悪でも死ぬことはない。）
また、症状の進行速度によって修復にかかる時間も多くなる。

・死兵＞アンデットソウル＜

食欲＞グリード＜で取り込んだ、又は死んで3時間経っていない人間に触れることで発動できる
その人間の死んだ脳を再構築して命令を忠実に聞く僕＞しもべ＜に

できる。
自分の半径１０m以内かつ、能力者が立っている場所の地面と同じ素材でできている地面にしか召還できない。
また、能力者もしくは死兵そのものに塩水もしくは海楼石がつけられた場合能力者の制御を失う（能力者と能力で創造した人間には本能的に攻撃しない）
そして制御を失った場合、暴走して無差別に攻撃を始める。対象がいなくなった場合士に還る

▲死神系能力について
他の能力より残虐性、殺傷性が高い能力を分類する。
『食欲＞グリード＜』はメイン技なので、ここには分類しない
今のところの対象数は１つしかない。

・死神　死の地面＞デッドヴァース＜

自分の体の肉を地面の続く限り張り巡らせる。
その肉に触れた人間（装備も吸収するが終わったら吐き出される）は、全てそのまま吸収された。
自然系か特殊な超人系でないかぎり回避不能。一度肉に触れたら触れた部分を切り離さない限り逃れる手段はない

その場で取り込んだ人間はそのまま土に還った。
死兵＞アンデットソウル＜と組み合わせれば、かなり残虐な事にな

ると思ったのでそれは実行していない。なので詳細は不明

・特殊能力―創造＞パートナー＜

媒体となる死後間もない人間（性別は媒体の人間により決定される）と何らかの魂を取り込むことで一生で1度のみ発動。
1人の人間を生み出すことができる。但しその人間は記憶などがないため元々の媒体の人間の知識を使って生活をする。
その人間はナノナノの実の効果の例外的対象となる。

悪魔の実は”魂に依存する”ものなので、融合素材の魂が能力者でないなら新しく悪魔の実が食べても大丈夫。

●●●フミの『ウィルウィルの実』について●●●

悪魔の実専門の図鑑には記載されていなかった。
操るのは名前の通り【ウィルス・菌】。

特徴
・温度の高いもので攻撃されたら燃えないものの大きなダメージとなる
・能力者に触れた相手にウィルスを無条件で感染させることができる
・ウィルスがかわいい姿で見えるようになり、いかなるウィルスも体の一部とする事ができる
・海楼石に触れたり、海水に漬かっていてもウィルスの姿は見える

能力弱点表
S　【海水】（能力全封印）
A　【熱いもの】【冷たいもの】（身体を構成しているウィルスの弱点により変化。基本は過度の温度変化や酸性の物質）
B　（覇気を纏った攻撃全般）
C

D　【物理攻撃全般】

ロギアのため、全ての物理攻撃が無効
しかし、ウィルス故に過度の温度の変化に弱い
覇気を使われれば普通に攻撃は当たる。

自分から攻撃した場合、監獄所長マゼランより性質が悪く（ウィルスは見えないため感染したかどうかもわからない）その性質故相手が逃げ延びたとしても無事では済まない。
しかも自然系なので物理攻撃が効かない。覇気で攻撃しても後で大変なことになると言う最悪の能力者である。

●～悪魔の実の能力～●
イメージ：医学関連のもの

・予防接種＞ウィルスブロック＜

自分の体内にあるウィルスを分離させ、弱体化して他者の体に触れることで伝染させる。
ウィルスは害を与えないので、３分ほどでその人間にウィルスに対するある程度の耐性ができる。
なお、主人公にはナノナノの元々の修復能力が加わるため、完全な耐性ができる。

・自然蔓延＞ロギアスプレッド＜

その土地に元々存在する、又は自分の中のウィルスを辺りに増殖させ、蔓延させる。
攻撃以外にはあまり使い道がないが、麹菌なども増やせるため味噌とかヨーグルトが作れる。
後に納豆菌を畑にばら撒いた事で感謝されたり・・・

・菌弾＞きんだん＜

体内に保管してある菌かウィルスを増殖させて、弾として打ち出す。
肉眼では、黒に近い紫の弾を確認することができる
あたった場合、その人間に物理的ダメージはないがそれに感染する。
風で簡単に拡散する。（強風ならそのまま流されてしまう）

・保管＞ペット＜

能力者自身の体内にその辺のウィルスを1つ取り込み、自分の中で生活させることができる。
自然蔓延＞ロギアスプレッド＜の時の原料となる。

▲保管中の菌達

・ノロウィルス（ノロ君）
特徴　語尾が『～』と伸びる。

・ウエストナイルウイルス（ナイル君）
特徴　２〇ｈやニ●ニコ動画で主に使われる用語を連発する

・麻疹ウィルス（はしか君）
特徴　口調は普通だが、膨れているものをやたらと潰したがる

・新型インフルエンザ（型不明）（インフル君）
特徴　某弾幕シューティングゲームの氷結娘に極端に似た口調をしている。

・腸管出血性大腸菌Ｏ１５７：Ｈ７（イチゴさん）
特徴　実は女の子。臆病

・狂犬病ウィルス（ワンちゃん）
特徴　元気な少年

・破傷風菌　（ハショー）
特徴　ちょっとテンション高気味な男

・青カビ
特徴　何が何でも家を作りたい。語尾に『ナリ』をつける

・アクネ菌
特徴　中学生の気の弱い男子。ピロリ菌とカップル

・ピロリ菌

特徴　高校生の気の強い女子。アクネ菌とカップル

他、元々体内にいたウィルスｅｔｃ…

## 第２８話　悪魔の実のレポート（後書き）

ごめんなさい。悪魔の実の能力紹介ですごくグダグダです・・・
しかしこれでナノナノの実の今までの疑問点は大分解消されたのではないでしょうか？

しかし、【原子】を操っているはずなのに人間を召還したりと、今更ですがなかなかカオスですね。
回復能力は、原子の繋がりが離れた直後に元通りくっ付くイメージです。
物質変化も、その物質の持つ原子を複製してどんどん増やしているという感じ。

悪魔の実の能力の使い道って本人のイメージや発想次第だと思うんです。
今まで原作で出た既存の能力の攻撃方法も他にも色々なことができると思うのです。
なのでこういうなんでも応用が利く能力は、自分の元々持っているイメージに縛られてしまうけれど代わりに思ったことは何でもできる・・・みたいな。
核融合ができない理由は、セイルが単純に原理を知らないからです。

それにしても死神系能力って・・・どこの厨二？
でも、これが後のモリア戦でとても役に立つ予定です
命名理由は、どれもこれも考えてたら大量殺人テロ能力になっちゃって、まさに鎌を持った死神なイメージだったのでそうなりました。

特殊能力―創造＞パートナー＜って、セイル記憶ないんだから書く

余地なくね？
と思われた方も多いと思いますが、ここで説明を書いてしまわないと後で機会がなくなってしまうので書いてしまいました

他に新しい能力以外でわからないことがあれば、感想欄に書き込んでいただければ幸いです。すぐに修正します

前書きにも書きましたが、次回からしばらくはこの無人島での2日間のサバイバル状況を書いていきたいと思います。
本来は2話分航海した後すぐにドラム島に着く予定だったんですが、考えてたらこうなっちゃいました
楽しみにしていた人はごめんなさい。

明日から、センター同日が近くなってきたため更新が遅くなるかもしれません。
なので、毎日更新ができなくなってしまうかもしれませんがよろしくお願いします。

# 第２９話　無人島到着（前書き）

中盤、長々しいフミの愚痴が入ります。

# 第２９話　無人島到着

無人島到着１日目

俺らは、早速島に着いてから島の川を登って適当なところに錨を下ろした。
島を一回りしたが、人のいる気配が全くない。
すぐに能力で島と船を繋ぐ橋を作って上陸した。

「おー、これは・・・俺が最初にいた島の夏バージョンだな」

「ふおっ、あの島が夏だったらこんな感じなんじゃないですか？」

島は俺らが最初にいた場所とほとんど同じような形でジャングルや浜辺があった。
あの島にあった絶壁はあるかどうかわからないが、外見はほとんど一緒だったので２人ともとても驚いた

島の中を歩いていると、とても広い浜辺を見つけた。

「お、ここなら能力フルで使えそうじゃない？」

「そうですね。たまにはフミの菌たちも運動させてあげないと引きこもりになっちゃいます！！」

「いや・・・それはここだけじゃ収まらない事態になるからやめとけ。この島にいる動物が全滅するから」

フミの不穏な発言以外、特に障害となるものはなさそうなので早速始めることにした。

よし。先ずは俺からだ！！フミにカッコイイトコロミセテヤルゾー！！

ＳＩＤＥ　フミ

こんにちは。フミです！

えーと・・・今はセイルが能力でどこまでできるかを試しているところです。

全く。そんなことに時間使うくらいならオリハルコンを作る努力をした方がマシです！！

『実在しない鉱物を作るのは無理』とか思った人は安直すぎですよ！！物の例えです。

あ、セイルがいつもの傀儡軍団を出しました！

毎回思うんですけど、あれって女の子を食べたらセイルの言うことを何でも聞く人になっちゃうってことですよね？

つまりやりたい放題のハーレムです。フミは絶対許しません！！！

出した瞬間にセイルをインベルダウンまで蹴っ飛ばします！！！

というか、毎回思うんですけどセイルって結局何がしたいんですかね？

ニートになりたいんなら別にグランドラインに入る必要もないですし、元いた世界に返るなんて・・・いくらグランドラインでも有り得ません！気候とかは確かにカオス極まりないですけど元の世界に帰れるなんてどんな発想してるんでしょうか？

途中で何かの宗教団体に出会って『入信して騙されたと思って１億ベリー出して本気で●●神を信じたら帰れますよ・・・』なんて言われたら払っちゃいそうですし！！

その位のノリで今のセイルはぶっ壊れてます！

それにしても、セイルって毎回思うんですけどだらしないんですよ！
戦いになっても傀儡にばっかりやらせて自分は相手に触れる事しかしてないですし。
大体、船の中でもほとんどの仕事を傀儡にやらせて自分は部屋で寝てますしフミも一生懸命鳥や菌の世話したり記録指針≪ログポース≫見たり掃除手伝ったり今もっている資産のチェックしたり結構色々やって疲れてるんですよ？
なのにセイルは物増やすだけでほかの仕事何もしないんですよ！？
確かにそれは重要な仕事ですけど、ほかの時間手が空いてるなら協力してくださいよ！！
あ、他にやっている事ありました！この前フミが水温めてお湯にして、それでシャワー浴びてたらそこに普通に入ってきたんです！！
信じられますか！？！？
タオルをしていたからまだぶん殴るだけで済ましましたけど、タイミングが悪かったら船から突き落としておぼれた所を拾って火に突っ込んで燃やしてやった所です！！そして直ったところにインフル君とナイル君を投げ込んで……
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・

（３０分後）

って・・・ふぉっ！？

『ちょっと』目を放した隙にセイルの周りに気味の悪い肉壁が！！

あ、森からでっかい熊さんが出てきました・・・

ガアアアアアアアアアアッ！！！！

あ、セイルはやめといた方がいいと思いますよ？それ以上近寄ったら・・・

ギャアアアアアアアアアアアアアア！？！？

ああ、予想通り肉壁に触れたと思ったらそこに沈んで・・・

とうとう全部吸い込まれちゃいました！

具体的にいうと、足から肉が湧き出してきてセイルの周りの地面に広がっていってその肉に触れた瞬間底なし沼に足を踏み入れたかのように沈んでいった感じです。

というか、あんな事できたんですね・・・
悪魔の実が人離れした能力をもたらしてくれるのはわかってましたけど、あの熊セイルの2倍の身長がありましたよ？それにあそこまで気持ち悪い能力も他にないですよね・・・

ん、こっちに向かってきてるからとりあえず終わったみたいです。
じゃあ次はフミの番ですね。行ってきます！！

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ふぅ、終わった終わった。

それにしても、まさか熊が飛び出してくるとは思わなかった。
しかも今考えてる中で最悪の能力を試しているときだぞ？タイミング良すぎだろ！！
でも、予想してたより遥かに鬼畜だな！！なんだよあれ。泥沼ってレベルじゃないぞ。

あれ使ってて気づいたんだけど、食欲って喰える量に限界あるんだね。確認したら１０人しか出せなかったし
それ以上喰おうとしても、体から出て行って土の栄養分とかになっちゃうみたい。

今の泥沼みたいな技使ったら感覚でその辺の事がわかったんだけど・・・何でだろう。

それはまぁいいや。
そんな事より、重大な問題が発生したんだがいいかな？

少し沖のほうに、海賊船が一隻。

普通の海賊船ならまぁ能力だけでなんとかなるんだよ。

でも・・・

なんで白ひげ海賊団のマークついてるんだよ!!!

しかもこっち寄ってくる!こっちくんな!!!

ＳＯＳなんて出してないから!頼むから来ないで!!!能力的に放っておかれる気がしないから、今会っちゃうと勧誘断るの面倒なんだよ!!!

## 第２９話　無人島到着（後書き）

ごめんなさい。模試で時間がとれず短めになっちゃいました

セイルは能力の強さ故に勧誘されるんじゃないかと戦々恐々です。
残念ながら、あの海賊団に入る条件は強さだけじゃないのでそこの所を勘違いしているようですが・・・

白ひげ海賊団のフラグ登場です。２１００万の奴はもうちょい後になります

# 第３０話　白ひげ海賊団１番隊隊長（前書き）

３０話ですよ！３０話！
ここまでこれたのも皆様方のおかげです！！！本当にありがとうございます！！

・・・でもなんで更新しないとか言って更新してるんだろうか

# 第３０話　白ひげ海賊団１番隊隊長

「で、お前らは何者だよい？」

「だから、ただの旅人です」

「じゃあなんでお前らの船がないんだよい？漂流者かと思ってきたんだが・・・？」

「うるさいです！このヒゲ！！そんな間抜けな事態は起こさないです！！！」

「ちょ、フミ！？」

「ヒゲ？そんな名前で呼んだのはお前が初めてだよい。」

さっき見たとおり、白ひげ海賊団の船が上陸して来ました。
中に何人も人がいたみたいだが、代表して１人が降りてきてこっちに来て話しかけてきた。

ちなみに、俺はこの人が誰か知ってるのでフミの毒舌に相当焦っている。
これが普通の隊員とかならまだマシなんだが・・・

「えーと、まず貴方は白ひげ海賊団の「不死鳥」マルコさんで間違

いないですか？」
「確かにそうだが、よく知ってたな。それとお前らの名前をまだ聞いてないよい」

こちらにやって来たのは口調でお察しの通り白ひげ海賊団１番隊隊長「不死鳥」マルコ
動物系”トリトリの実”そしてモデル不死鳥という非常に貴重な幻獣種の悪魔の実の能力者。

何でこんなところにいるんだよ！！近くに領島でもあるのか！？

「俺の名前はセイル。セイルファントム。横にいるやつはフミです」
「こういう時はニザンだって言ってるじゃないですか！！」

「セイル、フミ・・・ニザン・・・聞かない名前だけど、賞金首かよい？」

「フミが何をしたって言うんですか！！」
「落ち着け！別に何もしてないので違います」
そう答えると

「そうか。グランドライン初心者の漂流者かと思ってきたんだけれどそこんところはどうなんだよい？ここは『ウィスキーピーク』に行こうとした奴がログを少しでも見なかったら辿り着く場所だから、もしかしたらと思ったんだが？」
「え？２人ともグランドラインに来てから２つ目の島なんで、初心者といえば初心者ですけど・・・船は川の所に隠してあります」

はっきり言って、ＯＮＥＰＩＥＣＥの漫画を読んでいるので色々と知っているが一応そう答えておく。

それにしても、ここってそんな原作に近い場所だったんだ。
麦わら海賊団の最初のグランドライン航海が失敗したらここに辿り着くんだな。なんか感慨深い・・・

「そうなのかよい。それより、１つ聞きたいことがあるんだが・・・さっき船の上から見えたんだが、お前は悪魔の実の能力者か？」

げ、やっぱり見られてた？
思わず言葉に詰まる。その様子を見たマルコは察したようで

「その反応だとそうなのか。でもグランドラインじゃ他の海よりベターだから問題ないと思うよい。例えば俺もこんな事ができるよい」

そう言って、自分の腕から「不死鳥」の能力で炎を出す。
「能力者は確かに少ないけれど、それでも前にいた海よりは化け物扱いされないと思うよい。少なくとも俺は、お前の何を見てもそれは言わないよい」

どうやら俺たちを他の海から来た能力者という事で、今まで化け物扱いされてきて仕方なくグランドラインに入ってきた人間だと思ったらしい。

それにしても、それをすぐに考えて安心させるために話しかけてくれるなんて・・・この人、いい人すぎる。心配りが半端ない
俺のいた世界にこんな人がいたら『おじ様！』とか言われて女性にかなりモテるだろうな。

「あ、ありがとうございます。・・・そういえば、どこまで見てました？」

「ああ、そのことなんだが。俺の見たのは最後の熊の所だけだが、あんな事ができる能力なんて見たことがないよい。何の実の能力者なんだよい？」

悪魔の実の事を聞いてきたマルコの顔は先ほどとは打って変わり、とても真剣だった。

「俺は『ナノナノの実』、そっちにいる奴は『ウィルウィルの実』の能力者です」

「な・・・2人とも能力者だったのかよい！？」

あ、そういえばフミが能力者だって言ってなかったな。

「はい。一応こいつも自然系だと思うけど、そんな感じの能力者です」

「図鑑は見たことがあるけれどどっちの実の名前も見たことがない

よい。自然系と言ったが、ウィルウィルというのは何ができるんだよい？」

「ウィルスをを体内に取り込んで体の一部にしたり、撒き散らしたり、そんな感じの能力です。な？」

「なんでそこでフミに振るんですか？」

「いや、お前の能力だろうが。」

軽く『なんでこっち見んの？』みたいな顔をされたので突っ込んでおく。

「つまり、能力で病気を引き起こせるのか？」

「そういうことになりますね。」

「・・・2人とも他と比べてとても珍しい能力を持っているんだな。・・・ちょっと見せてくれないかよい？」

そう言われたので、少し迷ったが別に今後敵対する予定もないしその気もない。

むしろ加勢したい側なのでここで見せても考えうる限り問題がない

ので、少しだけ能力を明かすことにした。

「（おい、俺はいいけどフミはどうするんだ？）」

「（セイルが言うならフミも別にいいですけど・・・でも）」

「（でも？）」

ん？何か嫌な事があるのかな？

やっぱり自分の能力に抵抗があるのか？

「（この人、斜めから見たらちょっとヒヨコに見えません？）」

ブッ！！！

フミの爆弾発言に思わず噴出してしまった。

マルコは不審そうな顔でこちらを見ている

「（もしくは、パイナップル？）」

「（おいこら！！おま、なんて事を・・・）」

にしても、こいつ・・・またとんでもない事を！！
見えないから！絶対に見えないから・・・完璧に見えない訳でもないけど・・・いやいや、何を言っているんだ俺は。
世界の中で今トップに立ってる海賊団の隊長だぞ！？そんな事聞こえたら普通に殺されるから！！
いや、能力じゃ死なないけど海に放り投げられるから！！そういう事言うのやめようか！？！

「ど、どうしたんだよい？」

俺が突然頭を抱え始めたのでいくら何でもおかしいと思ったのか、声をかけてきてくれた。
ごめんなさい、さっさと始めます。だから今のフミの発言は許してやって下さい！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

とりあえず、今俺らがやれる事はやった。

途中で白ひげの海賊船の中の人が様子を見にきたが、「あまり人前で使いたい能力ではない」と言ったらマルコさんが「この人たちは大丈夫だよい」と言って追い払って（？）くれた。

そして、死兵以外（これは見せたらまずい事になりそうだったので見せなかった）できる限りのことをやったら

「体術は何かできるのかよい？」

「へ？」

そういえばそうだ。

俺は運動なんか普通の高校生並にしかできない。

「いえ・・・何も」

「もしこの後もグランドラインを旅するつもりならその位は身につけないとすぐに死ぬことになるよい？」

それもそうだ。
漫画でも基本的にどの海賊も体術か剣術、専用武器を使っての攻撃ができた
一方俺は近接戦闘に持ち込まれたら防御能力は無敵なものの、弱点を突かれたらそれで終わりだ

・・・・やっぱりそれも含めて練習する必要があるのだろう。

「そうですね。何ができるかはわかりませんが最低限に鍛えておこうと思います」

「そうか。・・・そういえば、このままこのまま旅をして何をするつもりなんだよい？」

1番重要な事を聞かれた。
『実は、3年後に起こるあなたの海賊団と海軍との戦争を見るためです』なんて言ったら頭のおかしい奴だと思われる
理由を説明するにも『あなたの船の2番隊隊長がマーシャルDティーチに倒されて捕まったシーンを漫画で見ました。』なんて言ったら不敬罪的なもので殺されかねない。
とりあえず、当たり障りのない答えを出しておこう。

「特に目的はないですけど・・・楽しく生きていければいいです」

「ニートになるってちゃんと言ったらどうですか？」

「ニート？それは何かの職業かよい？」

「つまり、家に引きこもって働かないダメ人間の事です！！」

「おいこらフミいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！」

それを聞いて、若干引いていたがすぐに笑顔になって

「そうか。それなら、よければ俺達の船に乗ってみないか？親父・・・ああ、世間で言う白ひげの事だが。親父もお前らのような奴なら歓迎してくれると思うよい。」

それを聞いて俺はとても驚いた。

白ひげの船に勧誘された・・・？

予想はしていたけど、本当に勧誘されるとは思わなかった。

戦争に介入するならこれがチャンスだけど・・・やっぱり仕事はし

たくないし・・・

「ああ、無論海賊になるってことだから無理はしないでくれよい。でも仕事さえしてくれれば衣・食・住は保障するし、仕事も、今の所白ひげ海賊団の縄張りを回って荒れていないか確認して、そこの住人を助けてやる仕事だけだよい。」

あ、そういえばこの世界って前と違ってただ戦えばいいのか。いや、戦うのって結構辛いけど今の俺なら大抵のことでは死なないし、世界の頂点に立つ海賊団の戦闘についての教えを請えるという意味でもとてもいい話だ。

どうしよう！！

## 第３０話　白ひげ海賊団１番隊隊長（後書き）

まず最初に　途中のフミの失礼な発言について
マルコが好きな人もそうでない人も、本当にごめんなさい。毒舌考えてたら、かなりひどいものになってしまいました

隊長の口調、どうでしょう？おかしくないでしょうか？
あんまり「よい」を入れすぎてもおかしかったので出来るだけ抜いてみました。

白ひげ海賊団に勧誘されました。
マルコが勧誘した理由は
・このまま放置しておくと明らかに危険となる力を持っているから
・このまま育てれば、どこでも通用する実力を持てそうだと判断したから
・どう見ても弱いものいじめをする奴に見えないから
・断られても、繋がりができるから脅威になりにくくなる

フレンドリーに話してくれるのも、セイルとフミの人徳を見抜いているからです。

セイルにとっては体術も覚えられ、白ひげに会えて、戦争にも介入できるからローリスクハイリターンでしょう。
何がリスクか？そりゃセイルが仕事しなきゃいけなくなることですよ。

追伸：明日から2日間模試のため予告どおり消えます。ごめんなさい

## 第３１話　格闘・剣術修行（前書き）

センター同日模試終わったあああああ！！
やっと更新できる！！

でも・・・センターまであと３６３日なんだよなぁ・・・

# 第３１話　格闘・剣術修行

結局、白ひげ海賊団には入らないことにした。

ここで入ってしまうと、自由に動けなくなってしまうのと働きたくない一心である事が原因である。

何より、確かに色々な情報は手に入るが俺の元いた世界に帰るための方法を探してくれ！なんて言っても通じないだろう。

それなら俺達だけで旅して探したほうがよっぽど気楽でいい。

でも・・・

俺は本当に元の世界に帰りたいんだろうか？

最近船に乗っていても、暇だが学校に通うよりもずっと楽しい。

ただ受験勉強をする毎日より、ここで冒険していたほうが面白い。

能力のおかげで生活に困る事はない。

毒舌だがかわいい奴もいる。

つまり、ここにいた方が以前よりずっと充実した、楽しい生活を送

れるのである。

でも、元の世界には彼女こそいないものの親もいるし友人もいる。
思い出もたくさんあるし、心残りも山のようにある。

そんな迷いからか、俺はこう返事をした。

「ごめんなさい。まだ俺は気ままに色々な場所を見て回りたいのでその話はお断りさせていただきます」

「そうか・・・」
それを聞いたマルコは残念そうな顔をした。

「でも・・・」

「？」

「傘下に入るというわけではないんですけど、もし貴方方の領土での戦闘とかを見かけたら協力させてもらってもいいでしょうか？」

これには、白ひげ海賊団とは敵対しないという意思を伝えたという事と、こう言っておけば後で白ひげに会えるかもしれないと思った

からだ。

「友好関係を結びたいという事か？それならうちも大歓迎だよい。」

マルコも前者はわかってくれたようだ。

「よかった。ではよろしくお願いしますね」

「ああ、親父には俺から言っておくから大丈夫だよい。」

すると、何かに気づいたようにマルコが顔を上げた。

「ああ。それと、領島の防衛に協力してくれると言ったがそれならやはりそれ相応の力がないと無理だよい。」

まぁ・・・能力はあるにしても体術とかはからっきしだし、戦闘経験なんて無いに等しい

今までやった戦闘って1回目は一方的なフルボッコで2回目もスモーカーに助けられて決着がついたというどっちも俺ほとんど働かないで勝利だったしなぁ・・・

「だからもし体術を教えてほしいなら、基本を少しだけなら教えてやれるよい」

これは・・・願っても無いチャンス！！

まさか、戦闘の基礎だけでも教えてもらえるなんて思わなかった！！

「それにはフミも入ってますか？」
「ん、もちろん。時間はとれてもあと24時間位しかないけれど教えられるところまでは教えてやるよい」

…………………

…………………

………

…

「腰が入ってないよい！何だそのパンチは！！！全力で来いよい！！！」

マルコは厳しかった。

教えてくれるとはいったものの、ここまで運動能力がないとは予想外だったようで基礎の基礎から教えてもらっている。

俺のパンチは当たってもまったく痛くないようで、コツを掴むまで何度も『突き』の練習をさせられている。

フミはというと、少し離れた場所で他の白ひげ海賊団の人と剣術・体術の練習をしているらしい。
剣は、俺の船の素材となっていたものをさらに改めて剣の形にして渡してやった
ちなみにそれは良業物の『黒夢≪こくむ≫』という剣だったらしく、ちょっと羨ましがられた。

「違う！拳が上下に動いているよい！！ちゃんと真っ直ぐ打ち出さないと意味が無いよい！！」

むう、なかなかコツがつかめない。
俺はちゃんと全力でやっているつもりなんだが、まだ拳がふらついているらしい。

「まだまだ、もう1回だ！！！！！」

「もっと本気で来い！！！」

一方その頃、フミはというと

「ガッ！！！」ドカッ

「ぎゃあっ！！！！！」バキッ

「ぶほっ！！！」ドカッ

「こ、これでいいんですか？」

「ちょま・・・やめわあああああああああああ」ドカッ

「もうやめて！俺らのライフは０ｙ」メリッ

辺りは痣のできて倒れている海賊たちの山。
そして真ん中には棒を振り回しているフミ

最初は「女だし手加減してやるよ」というノリで全員が納得していた。
ルールは剣ではなく木の棒での剣術の修行。（全員が手加減する代わりに）一発でも食らったらアウトというルールで１ｖｓ５０。
当然、そこにいる人間は白ひげ海賊団の１番隊の人間故かなり強い。

だが・・・

今現在、１ｖｓ２２。既に２８人がフミによって叩き潰されている。

「「「マルコ隊長！！なんでこんな強いやつに俺らが修行つけなきゃならないんですか！！！」」」

部下の人間も、１人の初心者の女の子を鍛えてやるだけだとマルコから聞いていたので完璧に油断していた。のだが・・・

「うわあああああああああやめｔ」ドカッ

「隊長の嘘つきいいいいいいいいいこんな強いなんてきいてｎ」ドガッ

「ほ、本当にこれでいいんですか・・・？」

「「「「「なんでお前に修行をつけなきゃいけないんだよ！！！！！」」」」」

「ふぁい！？」

フミは感で棒を振っているだけなのだが、それらが全ての攻撃を防いで的確に当てている。

「まさか、こいつ見聞色≪けんぶんしょく≫の覇気を使ってるんじゃ！？」

「え、まさか・・・」

そう言っているうちに残り８人まで追い込まれてしまっている。
途中で全力を出している奴も何人かいたのだが全てかわされてしまう

ボカッ

バキッ

メキッ

そして、少しした後全ての船員がフミの周りに倒れ伏した。

そして、その日の夜。
俺の船とマルコの船から食材を持ち寄って、火を囲んでの夜食をとっている
今は、昼の訓練の話で持ちきりだった

「隊長!!何が素人ですか!!!あの譲ちゃん見聞色の覇気使ってくるじゃないですか!!!!

「そうですよ!!俺ら結局1回も攻撃当たらなかったんですよ!!!」

「・・・お前は”覇気”を使えるのかよい?」

「”覇気”?何ですかそれ?」
フミが惚けた声を出した

「覇気を知らないのかよい?」

「おい、フミ。覇気については俺が前説明したじゃないか」

覇気というのは、人間がもともと持っているかつ限られた者にしか使えない特殊能力。
種類は判っている限り３つ
「武装色≪ぶそうしょく≫」
「見聞色≪けんぶんしょく≫」
「覇王色≪はおうしょく≫」

武装色は、持っている武器や自分の体を硬化させる・単純に攻撃力を上げるという効果
また、攻撃の効かない悪魔の実の能力者に攻撃を当てることがきる。

見聞色は、相手の攻撃を先読みする・周りの人間の心の声を聞く事が出来るというもの。
また、空島では『心網≪マントラ≫』と呼ばれており、神≪ゴッド≫・エネルは応用で自分の雷を司る能力と組み合わせて空島全体を監視することができた。

覇王色は、他とは違い１００万人に１人しか使えないと言われている特殊な覇気。
気迫のようなもので、それを相手に当てる事によって無条件に屈服させたり気絶させる事ができる。
ただし、自分より強い実力者には通用しない。

「・・・って前言わなかったか？」

「外海から来たのに・・・なんでそこまで詳しく知ってるんだよい？」

あ・・・やべ。

覇気の事ってグランドライン外にはあまり知られていないんだった

「えー・・・幻島で見た本に書いてあったんです」

「「「「幻島！？」」」」

マルコの部下達が一斉に声を上げた。

それもそのはず。『幻島イリュラム』は世間的には空島同様御伽噺そのものの島。

幻獣狩りの際に島に黄猿が派遣されたときも、その前に海軍は存在を確かめるためにいくつか船を派遣しているのである。つまり海軍もその島の確たる存在を知らなかったと言う事だ。

その島から来た・・・なんて人間が今ここにいるのだから、驚いて当然である。

「最近海軍側におかしな動物達のせいで被害が出ていると聞いたが・・・関係あるのかよい？」

「海軍大将の黄猿さんが来てて、討伐に向かってました！！」

フミがそう言ったとき、またセイル以外の全員に驚きが走った。

「でも・・・最初の７つの島にそんな島はなかった筈だぜ！？お前らどっから来たんだ！？！？」

部下がそう口を開いた。

「普通にリヴァース・マウンテンからだけど。あー、間抜けながらフミとゲームしてたらいつの間にか流されてその島に着いちゃったんだよね」

「流されて・・・って、よく何も起こらなかったな。その島の周りって大渦で囲まれてるって聞いた事があるけど」

「いや～流されたり沈まなかったのは俺らの船が鉄製だったからだろうね。あ、でもその島って有名な商人なら結構知ってる人も多いらしいよ？不死鳥の羽とかとってきて飾りにして売ってる人とかいるらしいし。」

「「「「「（何者だこいつら！？）」」」」」

またもやマルコの部下たちの（心の）声が一致した。

「あ、ごめんなさい。キキにご飯を持っていってあげないと」

「キキ？」

「ああ、その幻島で拾ってきた鳥の名前。」

白ひげ海賊団は、今まで様々な場所を旅して死線を潜り抜けてきた海賊達だ。
なので、たいていの事では驚かないのだが・・・

「「「「「（本当にこいつら何なんだ！？！？）」」」」」

またまた全員の心が一致した瞬間だった。

幻獣というのは人に懐く事はない。むしろ畏怖の対象であり神と言われる事さえある。
その生き物の一匹を船に乗せてると言うのだから皆が驚くのも当然である

「そんな事より、せっかく肉とか焼けてるんだから食べようぜ？焦げちゃうよ？」

「あ、ああ。頂くよい」
「お前ら、いったい何なんだよ!!??」
「おい、もっとその島の話を聞かせてくれよ!!」
「その鳥、いるんだろ?後で見せてくれないか!?」
「それより、譲ちゃん”見聞色の覇気”が使えるんだろ?!どんな感じなんだい??」

・・・・・・・・・・

そんな話で盛り上がり、夜の帳が降りていった

## 第３１話　格闘・剣術修行（後書き）

フミが強いです。
フミ自体はそこまで強くないのですが、見聞色の覇気のおかげで攻撃をかわして思いっきり相手を引っ叩いてるので負けません。
覇気が使える事は自覚していないようです
なお見聞色が使えるものに聞こえる”声”ですが、フミはまだ完璧に使いこなしている訳じゃないので聞けるようになるまでもうしばらくかかる予定です

一方セイルは何もできないため普通の状態でスタート。
これからは6時間の修行という厳しいスケジュールが課せられました。

だが、セイル。安心しろ　俺の勉強時間は１１時間だ！・・・センター模試なんて二度と見たくないです

マルコが友好関係を無断で結んだのは、やっぱり2人の能力がとてつもなく危険だから、しかし悪い奴でないと判断したからです。
白ひげは世界を破滅させる力を持っている男と呼ばれていますが、この2人は対象の人間を問答無用で確実にぶっ殺す能力を持っているのである意味白ひげより危険ですね。

## 第３２話　無人島への砲撃者（前書き）

５００００ＰＶに４５０００ユニークアクセス超えました・・・
さらにお気に入り登録も５００件超えました。

見てくださっている方、本当にありがとうございます！！！
とっても嬉しいです！！！この小説が続けられるのも皆様のおかげです！！

# 第３２話　無人島への砲撃者

「突きも大分マシになったよい。これからはそれらを毎日３時間、さっき言った持久ランニングも２時間。刀の素振りも毎日１時間やるんだよい。」

俺はもうすぐ別の島に行ってしまうマルコ隊長から最後の訓練を受けていた。
内容は様々だったが、俺はどうやら格闘の方が向いていたらしくそれを中心に教えてもらっていた

「６時間とは・・・多すぎじゃないですか？」

「本気で友好関係を結ぶと言うならそれくらいは当然だよい。何より能力で怪我をしても問題は無いんだしグランドラインで生きるならそれ位の事は当然だよい」

ここまで船の上で怠けきっていた俺には痛い言葉だった。
１日４分の１を運動に費やした事などない。しかし、この世界に来てからは以前と比べて中々体力・持久力・筋力が上がっているためそれは無茶なトレーニングではない。
（最初の島で鍛えられたのが大きいが本人は気づいていない）

「そっちの穣ちゃんはその半分でいいが、しっかりと続けるんだよい」
フミは剣術に関しては教える事が何も無かったようで、俺の半分の時間の同じメニューが科された。

マルコの部下の人が言うには「これでも少なすぎる」「俺らなんか1日中走らされて、途中で弱音を吐いたら食事が抜かれたもんな」
「それは今でもだろ?俺なんかそれに慣れるのに半年かかったぜ」
・・・白ひげ海賊団に入らなくてよかった、と本気で思った。

「さて・・・俺らはそろそろ行かなきゃならんよい。残念だがここでひとまずお別れだよい」

「そうですか。色々とありがとうございました!」

「セイルの面倒を見てくれてありがとうございました!!!」

「いや、それは違うだろ。少なくともマルコさんの部下をボコボコにしたお前が言う言葉じゃない」

「「「「「全くだ」」」」」

そう言うと、フミが涙目になりながら
「ひ、ひどいです!!皆がフミをいじめます!!!」

「「「「「「全部お前のせいだよ」」」」」」

「ひ!」

そして、白ひげ海賊団の船が島から錨を上げ、出航した。

「あー行っちゃったなぁ。」

「折角大人数で楽しかったのに、勿体無いです」

「フミは少数より大人数の方がよかったのか？」

「え・・・？あ、う、そういう事じゃないです！！！このまま！！
このままでいいです！！！」
フミが顔を青くして必死に訴えかけてくる。

あれ？俺何か悪いこと言った・・・？
なんか顔が真っ青になっちゃってるぞ？

「え、あ。うん、今のところ仲間が欲しいとは思ってないけど・・・」

「そうです!!ずっとそのままでいいです!!!」

今度は顔を赤くしながら焦った口調でそう言ってくる

ヒュルルルルルルルルルルルル

「？」

「何の音ですｋ

ドカン!!!!!!!

・・・・・はい？大砲？？」

何が起こったか気づいたフミはその場で口を空けながら体の一部分を散らして（自然系なので1秒もしないうちに元に戻った）呆然としていた。

海からここに向かって砲弾が飛んできた。

一瞬「白ひげの船か？」と思ったがどうやら違うようで、海のほうを見ると『金槌に髑髏』というデザインの海賊旗を掲げた船がこちらに大砲を向けていた。

しかし、その船が半端なく大きい。具体的に言うと原作に出てきたクリーク海賊団の船くらい。

しかも、よく見たら遠くのほうにも何隻かいる。この世界に来て初めて艦隊・大型の海賊船に出くわしたなー。

「セイル・・・あれ、大丈夫なんですか？」

「んー・・・わからんけど、俺らならまぁなんとかなるでしょ」

俺らは能力的に砲弾が当たることはないし（俺は当たっても再生するので当たってない同然）白兵戦できても、覇気が使えない限り切られることはない。

しかも、その辺の雑魚レベルなら少し試してみたいこともある。

ちなみに、あいつらはフミを傷付けたから友好的だったとしても（いきなり砲撃してくるような奴に友好も何もないとは思うが）ただじゃ済まさないぞ！！！

「よし・・・じゃあ新技の実践、いきますか！！」

「だからそれで本当に大丈夫なんですか！？！？」

ＳＩＤＥ　砲撃をしている海賊船長

「ガイム船長！！前方に小さな島が！！目的地のウィスキーピークではないようです！！」

「ああん?おめェらちゃんと記録指針≪ログポース≫見てたか?途中で小島がある筈ねェぞ?」

そう俺が言い放つと、うちの船の航海士が

「あ・・・申し訳ありません!!少し目を放した隙に船が目的地斜め左方向に進んでいました!!!」

「何だとォ!?この愚図が!!!!・・・いい。もうお前はいらねェ、死ね」

記録指針≪ログポース≫から少し目を離したうちに、この船は目的地であるウィスキーピークから大分離れた場所に来てしまったようだった。
この船は、グランドラインの外から来た船なので、『指針から少し目を離しても大丈夫』だと思ったのだろう
残念ながら、そんな思いがこの船をこの島に引き寄せてしまった。
最初の航海なら、まだ許す余地があるのだろうが・・・

バアン!!!

・・・くだらねェミスをしやがって。てめェみたいなのがいるからだらしねェ奴が増えていくんだ。

そう思いながら、自らの部下を腰に差していた銃で撃ち殺したこの男は、部下のミスを許さず死ぬことによってこの件を償わせたのだった。

「てめェらもこうなりたくなけりゃさっさと元通りの航海に戻しやがれ!!ついでにこいつを片付けろ!!」

「「「「は、はい!!!」」」」

そういうと、部下は顔を青くしながら急いで動き回り撃ち殺した男の持っていた記録指針≪ログポース≫を取って、男の死体をそのまま海に投げ捨てた。

その男には誰も手を合わせない。このまま忘れ去られていき、孤独に海の底で消えていくのだろう。だが、そんな事はいざ知らず誰もが船長の機嫌取りにあせって動いていた。

「船長!!先ほどの無人島から、海賊船が出ました!!」

「何?どんな海賊旗だった?」

「それが・・・すぐに島影に隠れてしまったので見ることが出来ませんでした」

俺は、その男も役立たずだと思い制裁を加えようと思った。しかし、それに続けるように

「それと、その島に2つ人影が見えています。」

それを聞いて、俺の気が変わった。

無人島に残っていると言う事は、その島に何かあるか島流しにされたかのどちらかだ。
後者の方が可能性が高いが、部下の言っていた海賊船はただ島影に隠れただけで、もしかしたら停泊位置を探していただけなのかもしれない。その間に部下を何人か置いて調査させているだけかもしれない
となれば、その海賊船から何かしらの金品や食料が奪えると踏んだ。

「全員、あの島に向かえェ！！他の艦隊にも電電虫で伝えろ！！！」

「「「「は、はいっ！！！」」」」

この気の変わりがこの男、そしてこの海賊団の人生をここで終わらせることとなるのだった。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

## 第３２話　無人島への砲撃者（後書き）

この海賊達が旗を見なかったのは相当致命的です。
何せ、出て行った海賊船は世界最強の男、四皇白ひげの率いる海賊団なのだがら・・・

島に行っても、セイルとフミの餌食ですが。
どっちにしろ、この島に足を踏み入れる選択をした時点でこの海賊達は積みです。たかが２１００万（２８話参照）の海賊が勝てるわけがないです。

次回、スーパーフルボッコタイム突入。お楽しみに！

# 第３３話　最悪の厄日１

「全員、あの島に入れェ！！まずは逃げ出した奴らを捕らえろ！！！！」

懸賞金２１００万「頭領の」ガイムは、自分の艦隊に乗っている部下たちにそう命令した。

「「「「「「「「「おうっ！！！」」」」」」」」」

船長の命令に応えるため、いくつもの艦隊に乗っていた３００を超える船員が一斉に走り出した。
５０人は浜辺を、残りは森の中を探索するよう言い渡された

これで、船長のガイムはこの島にいる奴らを炙り出すつもりらしいこの命令の結果を待つために、船長はその場の数名の部下とともに座り込んだ。

「・・・・・じゃあしばらく船の上で座ってて。”アレ”試したいから」

「ちょ、フミの菌達もたまには運動させてあげたいんですけど・・・」

「んー、とりあえず俺先でいい？お前がやると相手が全力で向かってこれなくなるだろ」

「うー・・・仕方ないです。今回はセイルに譲ってもいいです！」

一方、俺らはその森の川。できるだけ上流にしたのだが、そこに泊めてある自分らの船に移動してそして座りながら相談をしていた。内容は、練習していた新技の開発。フミも新技の実験と、普段部屋に引き篭らせてる病気系の菌を遊ばせてやるとの事。

フミの菌が絡むと、万全な状態の相手との戦闘ではなくなってしまうので俺が先に能力の人間を使っての実践をすることにした

なお、この海賊達はフミに大砲をぶち当てようとした上俺らを捕らえようとしているのでこちらも問答無用でやるつもりだ。

能力なかったら立場逆だったな・・・うん

そして、俺は船から下りて地面に足を付けた。

「さて、じゃあいくぞ！！死神・・・死の地面≪デッドヴァース≫！！！！」

そう言った瞬間、フミが「おうっ、いつ見ても気持ち悪いですね！！」と言った。

そして俺の脚から肉が湧き出し、ゼリーの様な動きで周りに広まっていく・・・

一方、セイル達の船から最も近い海賊達・・・

「おいっ!!いたか!?」

「いや、まだ見つからない。くそっ、どこ行きやがった!?」

すると、2人組のうちの1人が、遠くの方に何か見つけたようだ。

「ん?遠くに見えるあれって・・・船じゃないか?」

もう1人がそいつが指差す方向を見た。

確かにそこには遠目からなのでよくわからないが、船のように見えるものと僅かだがそっちの方向から水の音が聞こえる。

「本当だ、こんな所に隠してやがったのか。ま、懸賞金2100万の船長の海賊旗を見たら逃げ出すしかないよな」

「違いねぇ。ワハハハ!!」

船を見つけてその2人は上機嫌になった。

森に入って一直線にここにきたので当然自分らがここに来たのは一番速い。つまり報告しに戻れば今後この海賊船でうまい役目を貰える。

そんな考えを持ちながら、間違いだと困るので確認にそこに近づくと・・・

「ん？なんだありゃ？」

地面から、肌色の物質が近寄ってきた。
近寄ってきたと言うより流れてくるようにこちらに迫ってくる。水と言うよりは肌色のスライムが重力に従って流れてくる感じだ。

「おい、ありゃ何だ？」

「ああ？俺が知るわけ無いだろう・・・・・おい、あれがどんどん迫ってくるぞ」

「あ？・・・おい、ちょっと不味くないか？」

肌色の”何か”は、海賊達にどんどん近寄ってくる。既に距離は１０ｍほど
あと数秒もすればあれに触れる事になるだろう。

「あんなの岩に登っとけば大丈夫だろ？どうせ逃げてる奴らが威嚇でペンキでも流してるんだよ」

「だとしたら相当頭悪いな。やるなら赤いペンキを流した方が効き目あるっての」

そう言って、２人は大き目の岩の上に飛び乗ってあれをやり過ごす事にした。

それにしても浅はかな脅しだ。やるならペンキの色をもっとマシなものにするなり、手段が無いならさっさと船で逃げてしまえばよか

ったものを。
まぁ、俺らが怖くて逃げられなかったんだろうけどな。運の悪い奴らだよ。
そう思っていた。

岩のところまで肌色の物質がやってきた。
それは、海賊達の思惑と反して、岩を”登り始めた”のだ。
それを見て2人は焦って岩から降りたが、もう遅かった
降りた場所にもその物質は満たされていて、それに足を入れてしまった。
その後その物質の下はただの土の地面だった筈なのに、2人は底なし沼に嵌ったようにどんどん沈んでいき、
沈みきった後その場所にその2人が着ていた服と装備していた剣が肌色の物質の中から吐き出された。

ここは、また別な場所・・・

「チッ、面倒だな。こんな何もない森を探さなきゃいけないなんで・・・」

「全くだ。俺はさっさと帰って飲みなおしたいぞ」

「うるせぇ。さっさと探せ、お前ら張っ倒すぞ?」

3人組で動いている海賊が、船長の命令に従いこの島にいる人間を探している。
この中の2人は、働いても上司に手柄を取られてしまうので全く乗り気ではない。しかし、後ろにいる上司に従わないと斬られてしまうので仕方なく従っている。

そんな険悪な雰囲気の中、しばらく森を進んでいると

ズズズズズ・・・・・

「何だ?何の音だ?」

歩いているうちに、奇妙な音が聞こえて3人ともその場に立ち止まった。
人間や動物が歩いている音ではない。何か大きいものが這っているような音だ
なので、全員に張り詰めた空気が流れた。

「な、何の音だ・・・?」

すると、部下の1人がそれが何か気づいたようで
「み、見ろ!!!何か流れてくるぞ!!!」

「あ、あれは・・・?ありゃ何だ?生き物じゃないみたいだが・・・」

向こうから肌色の何かが迫ってきている。
しかし、スライムのような動きなので何かと思い全員がその場に立ち止まった。

そして、部下2人のすぐ足元までその物体が迫ってきた

「何だ？こりゃ・・・？何でこんなわあああああああああああ！？！？！？」

「何だこれは！！！の、のみこまれ・・・ぎゃあああああああああああああ！！！！！！」

その物体に体が触れた瞬間、２人はそのままその物体に沈んでいった。
それを見た上司はというと

「な、何だこれは・・・！？わあああああああああああああ！？！？？！」

迫ってくる肌色の物体から逃げるためにその場から船に戻る道目指して走り出した。

島にいた人間総数

森の中
・セイルファントム
・フミ
・海賊の人たち約２５０人

浜辺
・海賊の人たち５０人

本隊
・「頭領の」ガイム
・海賊の人たち約３００人

現在の海賊団側の犠牲者（午前中時点）

森の中…４９人
浜辺　…０人
本隊　…０人

## 第３３話　最悪の厄日１（後書き）

今回は、セイルの技を発動させて終わりです。

この技は、物質の変質能力（自分の肉に対して発動）＋食欲＞グリード＜を組み合わせたもの。

神経や血管なんかは無理ですが、肉だけを増やすことでこの技を可能にしました。

喰った奴等は全員土に還っています。

デメリットとしては、対象の人間を喰うのに時間がかかり、肉の中に沈む感じになるところです。

無論、ほかの弱点は食欲＞グリード＜と同じです。

次回、本隊付近まで肉が到達します

## 第３４話　最悪の厄日２（前書き）

駄目だ、微妙にスランプ来た。書く気力がなくなってきてる・・・
持病の”早くドラム島に行かないと死んでしまう病”の発作が！！

オリジナル展開ばっかりだと難しいですね。
やっぱり原作展開が欲しくなってきます

# 第３４話　最悪の厄日２

「・・・遅ェ」

「う・・・もうすぐ戻ってきますよ。多分捕まえて手間取ってるんじゃないでしょうか」

船長のガイムはイライラしていた。
全員が戻ってこなくて怒っているわけではない。
何か見つけたらすぐ俺に報告することになっているのに誰も報告に来ない上、電電虫にも何の連絡も入らない。

しかし、いくら手間取っているといってもここまで連絡が入らないというのは流石におかしい。遅すぎる。

そんな思いを持ちながら、イライラしつつ報告を待っていた。

「プルプルプル・・・プルプルプル・・・」

すると、１つの電電虫が鳴り出した。
遅すぎる報告に腹を立てながらガイムは受話器をとった

ガチャ

「遅ェ!!おメェら一体何を
「た、助けてください船長!!!皆沈んじゃいました!!!」
・・・あァ?何を言ってるんだ?ボケたか?」
「ち、違うんです!!後ろから肌色の・・・追いつかれる!!!うわあああああああああああああああ!!!!!」
そう受話器から聞こえてきた瞬間電話が切れ、同時に森から今聞いた絶叫が響いてきた。
「な、何だ?どうなってる!?」
電電虫から聞こえてきた絶叫と森から聞こえてきた声に皆に同様が走る。
船長もこれには驚きを隠せず、少なからず動揺するが
「静まれ!!たかが雑魚が1人やられただけだ。こっちにはまだ兵力がいるしそのうち相手も疲れてくる。だから何の問題もない!!」
やはり、艦隊を引き連れるだけのカリスマはあったようですぐに立ってそう叫び、部下たちの動揺を収めた。
「(しかし、肌色の・・・何だというんだ?人間だったらそう言うはずだし、生き物でもそんなもの聞いたことがない。新種の生物か?)」

疑問を抱きながら、本陣の椅子に座りなおした。

「セイルー、まだですかー？」

「ちょっと待って、まだ浜辺にすら到達してないから！」

俺は今使っている死の地面≪デッドヴァース≫のせいで動けないので大声でその場から返事をする。

フミは実体のない自然系なので肉体を取り込むこの技に巻き込まれても問題ないのだが万一を考えて船の上にいてもらっている。

今の俺の目標は、この島中に自分の肉を張り巡らせて浜辺まで延ば

そうとしている。
昨日やったときは半径１５ｍくらいまで試したので、今はそれの限界を調べているが今のところ果ては見えない
全員を喰ってしまうとフミの技が試せなくなるのでとりあえず本陣まで技が届かないようにするつもりだ。

「そろそろ終わってくれないと、皆待ってるんですけど！」

「まぁ待てって・・・ん？」

フミに急かされたとき、１つ思いついた事があった。
もしこれが実現できれば様々な病気の予防ができるようになるが・・・

「フミー？そういえば菌の攻撃を抑えるように言って体の中に入れれば抗体ができるんじゃない？」

そう言うと
「抗体って何ですかー？」

ああ、そこからか
とりあえず全部終わったら抗体について説明するか。
もしそれができるなら病気耐性つくから医者が完璧にいらなくなるな。
傷は俺は即回復、フミは自然系だから無問題
病気も抗体

さてと・・・肉がそろそろ森を抜けるころかな？

出番をフミに回さないとまた俺の体でウィルス合戦をやられてしまう・・・

「（さっさと終わらせよう。うんそうしよう）」

そう思い、セイルは技の速度を早めた。

「船長！！森から肌色の物体が迫ってきます！！！」

場所は戻り、ここはガイムの本陣。

ついにセイルの死の地面≪デッドヴァース≫が本隊直前まで迫ってきていた。

その時、後ろにいる全員が焦りきってパニックになっていた。

何せ、さっきから報告の電電虫をかけてきた全員が「肌色の物体が近づいてきて」といって直後叫び声を上げて通信が切れているそしてその”肌色の物体”が見えるところまで迫ってきているのだから焦って当然である。

「騒ぐなァ！！！お前らァ、すぐに船に乗り込め！！！」

ガイムの判断は正しかった。
このまま何もせずにいれば部下はパニックに陥り、そのままセイルの技によって全滅していただろう
だがそこは仮にも２１００万の賞金首と「頭領」の名を持つ艦隊海賊団船長だけのことはあって今の状況を冷静に理解し、最善の命令を下していた。

とはいっても、この状況は海賊団結成以降かつてない位にまずい。
何せ敵がいるのは間違いないのだが本体が”見えない”のだ
肌色の物体も能力者の人間か未知の動物かは知らないが、あーいう生物には必ず核となるものがある。
それが見る限り１つもない。いや森の奥にあるのだろうがそこまで踏み込む手段がないため見えないも同然だ。
そして敵が見えないといくら集団で行動してるとはいえ部下がどんどん消えていっている。
それが部下の恐怖を煽ることになる。事実、皆俺の命令を待っていたかのように我先にと逃げ出すように船に駆け出した。

「（くそ・・・この島に来たのはまずかったな。まさかこんな事になるとは・・・）」

しかし、いまさら後悔してもこの状況になってしまった以上どうしようもない。
部下がまだ島に半数もいるので、何人かはもう駄目だろうがこんな事で全員が怪我をしている訳がないと思い島の周りを回って少しづつ回収することにした。

しかし、、船を出そうとしたとき迫ってきていた肌色の物体はさっきまで俺らがいた場所を避けるような形で、その場から森に引き返した。

俺はそれを見て唖然とした。

「（なぜあれは俺らのいた場所を避けたんだ？）」

後にガイムは、そんな疑問を持つ余裕があった今この瞬間が最も幸せだった・・・・と思った。

なぜなら、島にいた海賊総数約３００人は、既に消されてしまっていたのだから

島にいた人間総数

森の中
・セイルファントム
・フミ
・海賊の人たち約２５０人

浜辺
・海賊の人たち５０人

本隊
・「頭領の」ガイム
・海賊の人たち約３００人

現在の海賊団側の犠牲者（正午時点）

森の中…約２５０人（海賊側全員）
浜辺　…約５０人　（海賊側全員）
本隊　…０人

## 第３４話　最悪の厄日２（後書き）

書く時間が非常に少なく、短く雑な文になってしまいましたｏｒｚ
感想の方も返信が遅くなってしまいます。ごめんなさい

死の地面＞デッドヴァース＜がどこで引き返したかというと、海水に触れる直前です。
上から見たら海賊をよけるように三日月形に技が発動しています。
なお、海水に触れたらセイルがその肉を自分から切り離さない限り積みです。その場から自分の肉と足が繋がっているせいで動けません。

次回はフミの本気です。お楽しみに！

# 第３５話　最悪の厄日３

「どうなってるんだこれは・・・？」

海賊団船長のガイムは島を一回りした。
そして、部下を回収しようとしたのだが

どこに行っても部下の姿が見えない。
森の中にいる部下はともかく、浜辺にも５０人ほど部下を回していたはずだ。

なのに、まるで人の気がない。
海賊団の人間はそれに恐怖を感じていた。

「（このままだと不味いな・・・部下が消えたことで船に乗ってる全員の不安感が高まっている。その上島に回した奴らが見つからない。最悪だな）」

ガイムは冷静に今の状況を考えてみたが、どれをとってもやはり最悪だった。
しかし、今島に踏み入らないと残っている部下がどうなるかわかったものじゃない。人質になっていたら最悪だ

まぁその時は見限るが、とにかく今は様子を見に行かなければならない。

「ふぅ・・・」

決して賢者ではない。死の地面≪デッドヴァース≫で出した肉を回収し終わった所だ

「やっとフミの出番ですか！？」

ずっと待っていたフミが顔を輝かせながらそう聞いてくる

「あー、ちょっと先行ってて・・・ちょっと今取り込んだ人間を使って試したいことがあるから」

「え？うー、わかりました。折角ですから終わる前に見てくださいね！！」

そう返事するや否や、部屋にいた菌を纏って（セイルには見えていないが）海賊たちがいたであろう浜辺に歩いていった。

俺の能力は、死体を操ったりする辺り、原作に出てきた七部海の”カゲカゲの実”の能力者である「ゲッコー・モリア」に似ている所がある。

まぁ、ゾンビを作って操るという点だとカゲカゲなら制御できるが、俺は１０人以上の制御ができないという事と操るゾンビも生きている人間を殺して使っているのにに対し、モリアは既に死んでいる肉体を強化して使っているなどの相違点はあるのだが。

まぁそれはそれとして、俺が試したい事というのはそのカゲカゲの能力で使ってみたい技があるのだ。
モリアが体の中に他人の影を入れて肉体を強化する「影の集合地≪シャドーズ・アスガルド≫」
それを真似て死者の肉体を自分の体に取り込んで強化するという影の集合地のナノナノ版。
それができればいざと言うときの近接戦闘がとても楽になる。
・・・余談だが、俺がワンピースの中で1番好きなキャラがモリアだからという理由もあったりする。

「まぁともかく・・・いくぞ！！」

そして、その場でナノナノ版影の集合地≪シャドーズ・アスガルド≫が発動された。

「一体どうなっているんだ!?あいつらは!?」

「やっぱり、この島のどこかにいる海賊たちに消されたんじゃ・・・」

「馬鹿言え!!じゃああの肌色のスライムはなんだったんだ!!」

「きっと能力者だ!!ああ、俺たちはここで終わりなんだ・・・」

ガイムの部下は島を一周して、再び本陣を張った場所に来ていた。
今回はこの場所を集合場所に定めただけなので、島の地面に足はつけていない。万が一さっきのやつがまた襲ってきたらまずいからだなので今は全員が甲板に出て、戦闘体制をとりつつ
今は静かで物音1つ聞こえない不気味な島を見ていた

「落ち着け!!!あと10分だけここであいつらを待つ。来なければこのまま出航する!!」
そう言った瞬間、部下から批判の声が上がった

「船長!?あいつらをおいていくんですか!?」

「半分くらい探索に行ってたじゃないですか!?」

「俺の友人もいたんですよ!?!?」

「黙れてめェら!!!死にたいのか!!!!!既に300人全員が

消えているんだ！！！わかってんのか！？」

ガイムの怒声とともに冷え切った空気と静寂が訪れた。

「せ、船長・・・ですｇ」

「あれ？まだこんな所にいたんですか？」

「「「「「！？！？」」」」」

誰かが声を出そうとしたとき、突然森の中から声が聞こえて全員が驚いた。

「だ、誰だ!?!?」

ガイムがそう叫ぶ。

聞こえてきたのは女の声だった。

俺らの海賊団の中に女はいない、つまりさっきの肌色のスライムを差し向けた奴かもしれない。

「ちょっと遊ばせにきたんですが、相手になってくれませんか?」

そうフミが言い放つと海賊達が一瞬呆然としたが

「ああ!?お前・・・なめてるのか!?」

「俺らの仲間をどこにやったんだ!?!?」

「あの肌色のやつは何だったんだ!!!」

海賊達が大声で叫び始める

「おい、そこのガキィ！！てめェ俺の部下をどうした！？」
船長であるガイムがそう叫んだ。

「ふぁい？早く行かないとあの人たち逃げちゃいますよ」
しかし船長の声は無視され、フミはそのまま独り言（菌と話しているのだが他の人間には見えない）を続けている

「おい！！おめェ！！！俺を無視するんじゃねェ！！！」
そう叫んだが、フミは変わらず何か独り言を続けて完全にガイムの言葉を無視している

「なめやがって・・・全員、あいつを撃ち殺せ！！！！！」

ついにガイムは切れて、残っている部下に発砲命令を出した。
部下も先ほどまで感じていた恐怖をぶつける様に何の躊躇もなく目の前の少女に向かって発砲した

パァン！！！

ヒュン

「な、なんだ!?あいつの体にあたった筈なのに通り抜けたぞ!!!」

「ど、どうなっているんだ!!!!??」

「撃て!!!!撃て!!!!!!」

パァン!!!!
パァン!!!!
パァン!!!!

ヒュン　スカッ
ヒュン　スカッ
ヒュン　スカッ

海賊たちはさらにフミに発砲するが、体を通り抜けるだけで全くダメージがない。
しかも、この海賊達は外の海から来た人間。つまり悪魔の実についての知識はほぼないに等しいため、物理攻撃の効かない”自然系”

だということすらわからない。

「うわあああああああああ！！！！！化け物だ！！！！！！！！」

「なんで弾が当たらないんだよ！！！！」

「撃て！！！撃て！！！！！！」

さらに発砲を続けるも、銃弾はむなしく砂浜の砂を散らすだけだった。

「んー、それじゃあいってらっしゃい！！」

海賊達の銃撃を完璧に無視しているフミは一言何か言ってから、まるで上から何か大きいものが降ってきて、それから身を守るかのようなポーズでそこに座り込んだ。

「何のつもりだ・・・！？」

ガイムはフミが何をしているのか全くわからなかった。

あの銃弾をすり抜けられる体ならこっちに向かってきて今すぐ俺らを殺してもいいはずだ。

なのに突然頭を抱えて身を守るかのような体制をとったのである

これならばすぐに逃げられるしあいつを殺すこともできそうだ。

しかしその時、船長であるガイムは何か嫌なものを感じていた。

理論ではなく、直感で。

「・・・全員!!撃つのを止めて船を出せ!!!」

「し、しかし!!!」

「うるさい!!!さっさと船を出せ・・・うっ・・・」

部下が反論し、それを無視して強行しようとしたときガイムの体に異変が起こった

「何だ・・・?突然腹が痛く・・・」

「ううっ・・・トイレトイレ・・・」

突然風邪にかかったように腹痛が襲ってきた。

気づけば、他の連中も腹を押さえたり頭を抑えたりしている。

「うわあああああああああっ!?!?な、なんだよこれ!!!」

少しすると海賊達の何人かが騒ぎ出した。

それもそのはず、そいつらの体には真っ赤な発疹が出ていたり皮が剥がれ落ちたり目が有り得ないほど真っ赤に充血していたり・・・

中には一部の体の肉が腐っている奴もいた。

「な、何が起こっているんだ・・・ううっ！」
あたりの状況を確認しようと思った船長にもさっきよりひどい腹痛が襲ってきた。
しかも、今度は腹痛だけでは済まず息をするのが苦しくなってきた

「ぐえええぇえっ」

海賊達の中の1人が奇声を上げながら甲板に置いてあった淡水の入った樽をひっくり返した

「ヒッ！！！」

水がかかりそうになったので焦ってよけたが、何が起こったか本人は理解できていない

「な、なんで水がこんなにも怖いんだ・・・？！いやだ、触れたくない・・・嫌だ・・・」

自分にかかりそうになった水に尋常ではない嫌悪感を感じていた。

そしてここからは船長の気が狂って、それに合わせて船員たちも狂ったり白目をむきながら倒れたりしてついに船の上から生きた人間が消えた。

## 第３５話　最悪の厄日３（後書き）

≫まるで上から何か大きいものが降ってきてそれから身を守るかのようなポーズで

『徳山動物園（山口県周南市）のマレーグマのツヨシ君』
これで検索すれば大体のポーズがわかると思います。頭を抱えてしゃがみこんでる感じです

あと、今回ガイムの海賊団が倒れていきましたが
悪魔の実レポートに書いた「自然蔓延＞ロギアスプレッド＜」となります。
ちなみに
腹痛＝Ｏ－１５７他
頭痛＝インフルエンザ・ナイルウィルス他
水を怖がる～＝狂犬病の怖水症状

フミは今は遊ばせる目的で技を使っているので命名は後になります。

やっと島終わった・・・次回出航です。
ドラム島に行きたい・・・早く・・・
そしてもっと文章がうまくなりたい・・・

# 第３６話　フミの罪悪感（前書き）

なんでこうなったんだろう。
後悔は後でする。黒歴史になるんだろうか

# 第３６話　フミの罪悪感

場所は変わり、ここは海の上。
フミが能力を使って大虐殺を行った後、森の中に戻ってきたフミを拾って船を出してそのまま出航、島を後にした。

出航し、海に出たとき島はとても静かだった。
まるで外敵である俺らを冷ややかな目で見るかのように感じた・・・
やはり俺も大量に人を殺したのであの時に殺すことについて振り切っていたはずだが、やはり罪悪感を感じているのだろうか。

そして、殺したやつは結局俺らが船を進める直前に船ごと燃やした、つまり火葬した。

今は１つ大きな問題があった。

「・・・・・・」

フミが甲板の上で座り込み、普段ありえないくらいふさぎ込んでいた。

フミは自分の手でウィルス達を放ったことは理解していたようだがあそこまでひどい・・・全員が死ぬという結果になるとは思っていなかったようだ。
しかも船の上には血を吐いている者、肉が腐り落ちている者、失禁

しながら死んでいる者、どれもひどく惨い。
それら全てを、今まで人を殺したことのない人間がやったのである。
これでは精神の1つ2つ壊れてもおかしくない。

「（しばらく1人にしておくか・・・）」

俺はとにかくそう思い、ゆっくりとフミを自身の部屋に連れて行った。

「とりあえず寝とけ。疲れただろ」

「・・・・はい。おやすみなさい・・・」

俺が声をかけるとずいぶんとやつれた声を出した。
いつもの毒舌からは考えられないほど落ち込んでいる・・・しかし俺には何もできない。
放っておくしか選択肢がないから、部屋を出て甲板に戻った

今フミを慰めてはいけない。

この世界にいる限り海賊だろうが海軍だろうが、殺しは平然と起こりうるのだ。

現に漫画ではあまり描写されていなかったが、この世界に来てからは『海賊たちが島民を虐殺』『〇〇王国の王と側近６名がが暗殺される』『●●国と××国、ついに開戦』というニュースが新聞で絶えず流れてくる。

この世界にいる以上、どこにいても元いた世界より殺される可能性がはるかに高い。

無論、それを止めるために動いた人間もいるがそれで止まった試しはない。むしろその動きによって死者増えるばかりだ

だから、自分も身を守る術を持たねばならない。そして身を守るためには人を殺さなければいけない

つまり、今自分が人を殺したという事実を受け入れられなければどんなに強い能力を持っていてもここでは生きていけない。

ちゃんと自分の手で他人の人生を終わらせたという自覚をする。

それがこの世界で生き抜くために必要なのだ

だから俺はフミ自身に乗り越えさせるために一切手を出すことはできない。

もし乗り越えられなかったら船から降りさせて、その後は・・・いや、それは考えないことにしよう。
その先を考える事は俺にはできない・・・いや、これは事実から逃げているだけだがやはりできない。

俺はフミが立ち直ってくれることを信じている。いや、信じる事しかできない

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・

人を殺してしまいました

友達をちょっと遊ばせるだけのつもりだったのに、殺してしまいました

勿論少しくらいその人にもダメージはあると思っていましたが、殺すなんて思ってませんでした

「（フミはどうすればいいんですか？どうやって償えばいいんですか？）」

フミは普段の元気の全てをなくした様に落ち込みながらベッドに横たわっている。
いつも毒舌を飛ばしセイルを落ち込ませる、そんな日常を作っていたのに今はまるで別人のようだ
罪悪感というのはここまで人を変えるのだろうか、というほど以前と何もかもが違って見える

「償う必要なんてないよ。相手が殺そうとしてきたんだし」

「そうだね～正当防衛ってやつだね～」

突然声がしたので驚いて振り返ると、そこにははしかとノロがいた。

「そうだね！ころしてしまったとしても向こうもやってきたんだし！！」

他にもインフルやナイル、イチゴもフミのそばにいた。

少し驚いていたがすぐに元の顔に戻ってしまった

「だとしても・・・どうあれフミも人を殺してしまったんです。どうやって償えば・・・」

それを聞くと、ナイルが呆れたように

「あのさ？人を殺して罪悪感を覚えるのはいいけどね？でもこれから先こんな世界にいる以上こういう事は起こるんだから覚悟しろよ？」

「おい！！もう少し”おぶらあと”に包め！！」

「おぶらあと？何それ！！」

インフル君が横槍を入れたのでナイルが少し怒ったようだ

「馬鹿！！俺がせっかく良いことを言ってたのに」

「なんだと！？やんのか！！」

「・・・・・・・！！！」

「・・・！！」

「・・・！」

「・・・・・・・・・」

菌達の間でそんな話が続いているが、フミの耳にはほとんど届いていなかった。

人を大量に殺した。

今はそれが心に重くのしかかっている。このままではそれに潰される日もそう遠くないだろう。

そして今は菌達はくだらない争いを続け、セイルは何もできず、フミは罪悪感に押しつぶされそうになっている

## 第３６話　フミの罪悪感（後書き）

ギアス見ながら書いてたらいつの間にかこうなってました。
どうしてこうなったかはわかりません

そういえばこの前『悪魔の実で幻獣種って他に何があるかな』って友人と話をしていて

俺「ドラゴンは絶対いるでしょ。”ドラドラの実”みたいな」

友人「確かにまだドラゴンっていないけど、モンキーDドラゴンって風じゃなくてドラゴンじゃね？」

俺「あ、案外そうかもね。」

友人「あ、考えたんだけどドラドラの実ってモデルによっては最強種じゃね？」

俺「んー、強いとは思うけど最強ってほどじゃないんじゃね？」

友人「”ドラドラの実”モデル青狸。攻撃方法は地球破壊爆弾」

それ聞いた瞬間腹筋が崩壊しました。
確かにそんなのあったら最強ですねｗｗｗ

# 第３７話　セイル、訓練する

この擬音を聞いて卑猥な事を想像した君たち。残念ながらセイルが船でトレーニングをしているだけだ

「ハァ・・・ハァ・・・」

島を出た２人はしばらく指針通りに進んで、暗くなるとそこで船を止めて一夜を明かした。

そして今は早朝。多分５時くらい
俺は朝食をとった後（フミの部屋に持って行ってやった。時間が早いだけあって寝ていた）早速マルコに言い渡されたトレーニングで船の周りを走っているのだが・・・
も

「ゼェ・・・ゼェ・・・」

かれこれ３０分で息が上がっている。
能力で傷は直せるが疲れは消えないのでもう嫌になってきた。だが、目標時間である２時間の４分の１しか経ってないうちに諦めるのではあまりにもかっこ悪く罪悪感もあるので頑張り続ける事にした

というか、ただのインドア高校生が３０分走り続けているあたりかなりすごいと思う。
以前は１５００ｍ走なんかをやった時は完走する前に息が切れて、最後には歩いているのと変わらないスピードで走るくらい体力がな

かった。
それが今では息は切れているもののまだ走る事ができている
うーむ、この世界では鍛えるとすぐに体力が上がる上上限がないのかな？
じゃないと、原作キャラ達のあり得ない身体能力に説明がつかん。
というか今の体力のまま元の世界に戻ったらスポーツ選手になれるんじゃなかろうか

できるならそのうち六式とか覚えたいなぁ
鉄塊なんかは原理わからんから無理だけど、剃なら原作に書いてあったのでわかる（一瞬で地面を１０回ほど全力で蹴ればいいってＣＰ９戦で言ってた）。
できれば移動のための月歩と遠距離攻撃の嵐脚くらい機会があれば覚えたい。
そういえば、アニメのほうに”カマカマの実”のカマイタチ人間ってのがいたけどあれって嵐脚あればいらないよね？むしろ溺れるリスク考えたらカマカマの実って悪魔の実の中では大はずれだと思う。
そもそもカマイタチって範囲が狭すぎるんじゃないか？

・・・何にしろ今は走るのに集中しないと。ほかの事考えてたら時間がたつのが遅く感じる！

1時間半後

もうやだハァ・・・ハァ・・・

六式とか本当に考えが甘かったです。2時間走るだけでも体がやばいですガタガタです

それでも、途中で歩いたりしたが結局2時間走れたのはやっぱり体力が上がってるからだろうか？

でもこれでやっとランニングから開放される・・・

開放される・・・

開放され・・・？

「これからはそれら（拳突き練習）を毎日3時間、さっき言った持久ランニングも2時間。刀の素振りも毎日1時間やるんだよい。」

・・・あれ？

残り3時間＋1時間で4時間残ってる？

アハハハ・・・夢？夢？

いや、あれ冗談だよね？

3時間後

無理・・・ハァ・・・ハァ・・・

なんでこんなにやる羽目に、ゼェ・・・ゼェ・・・

いや、本当無理だから・・・腕動かすだけだろ?とか思った奴は出て来い。
あれは腕が主体だけど、体全体を動かす運動だから!!しかもずっと立ち続けてるから足にも限界が来てるし。

え?なんで休まないのかって?

休んでるよ。学校風に1時間おきに10分の休憩取ってる
でも、その10分の間に息が整うなんてある訳ないんだよ！！！

でも、残るは1時間の素振りだけ・・・やり遂げるぜええええええええええええええええええええ！！！！！

1時間後

終わったああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

終わりましたよ今日の訓練！！！
朝からやってただけあって昼前！！こんなに早く終わるとは思わなかった！！いや、起きる時間が早かっただけだけどね

マルコにはやるごとに休憩を取ってもいいぞって言われてたんだけど意外にいけるもんだな！！

それじゃぁ今日は遊び放題だぞ！！！
本を読もうか？絵でも書こうか？漫画やパソコンは・・・うーん、そんなのはここには無いけどやっぱり欲しいなぁ。今度漫画でも書いてみようかな？いや、画力的な問題で無理か。

ん？『今日は』・・・？

あ、そういえば明日も同じ事やらなきゃいけないんだった・・・

・・・今日は終わったんだから忘れよう！！！

でも、フミは部屋に引きこもっちゃってるから何もできないな。
仕方ない。とりあえず昼飯食ってフミにも持っていって、んで部屋で絵でも書くか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・

「おーい、フミ。飯持ってきたぞー」

フミの部屋の扉をノックして声をかけるが返事が無い。

「おーい、入るぞ？」

料理も冷めてしまうので仕方なくドアを開けた

ガチャ

「暗!?何でカーテン締め切ってんの!?」

部屋に入ると、普段窓からの光でちゃんと明るくなる筈の部屋が真っ暗だった。
すぐに窓を開くと、ベッドが照らされて布団の中に山のような不自然な塊が1つできていた。

「おいフミ、飯だぞ・・・ってうわっ!?」

布団を引っぺがすと、そこには顔を真っ赤にして目を晴らし体育座りをしているフミがいた。

「・・・・もうどうしていいかわかんないです。あんなに何人もの人を殺しちゃってどうしたらいいか・・・」
声もとても暗く、やっとの思いで声を出しているようだ。

それを聞いた俺は、とりあえず一息ついて声をかけた

「あのさ、大丈夫だから。」
「へ?」
フミが間抜けな声を出した

「今までたくさん人殺しをしてきた人たちがいました。その人たちは今度は2人の冒険者を殺そうと刀を持って襲ってきました」
「え?それって」

フミが言いかけたが、それを遮って話を続ける

「そこで2人の冒険者は殺されないためにその人たちと戦いました。その結果2人が勝ちましたがその人たちは全員死んでしまいました」

「・・・・・」

「もし俺らが能力者じゃなかったら殺されてたんだぞ?それに向こうも殺しにきてたんだ。」

「でも・・・」

「相手が殺しにきてるならこっちも相手を殺す気でやらなきゃならない。でないと相手に失礼だしその考えを持ったままだとこの世界では死ぬぞ」

そう俺が言うと、フミはさっきとは違う表情で何かを考え出した。

「ま、とりあえず昼食はここにおいておくから。時間はあるしゆっくり考えればいいさ」

そう言って俺は部屋を出て行った。

そしてすぐに自分の部屋に入った。

すると１０分経ったくらいで部屋の扉が大きな音を立てて開いた

「今日もヨンマの塩焼きですか！！！芸が無さすぎです！別なものを作って下さい！！！！」

そこには、すっかり元の調子に戻ったフミが立っていた。

それに少し安心しつつ、俺も息を吸って大声で言い返した

「知るか！！！！！」

## 第３７話　セイル、訓練する（後書き）

フミ完全回復です。そして殺しについては吹っ切れたようです
サンマってそのまま書くのがなんか悔しかったのでヨンマにしました。

それにしても、今日は時間が無かったせいで書き上げたのが深夜の１時半になってしまった。
続くまで１日１話投稿で続けようと思っていましたが、流石に限界が見えてきましたｏｒｚ
感想の返信も遅くなってしまいますが申し訳ありません。

次回も船の上での話になります。
ドラム島編も、かなり近づいてきました。このまま行くぞ！！

## 第３８話　サイクロンとドラム島（前書き）

結構頑張って書いたんだけど見返すと思ったより短かった件について抗議する！

## 第３８話　サイクロンとドラム島

「フミィ！！！　キキから離れるなよ！！！」

「わかってます！！！　それより早く何とかしてください！！！」

「キー！！！！」

今、俺らは非常に焦っていた。

先ほどまで晴天だったのに、少し前に雨が降り始めたと思って外の様子を見に行くと

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

・・・目の前に巨大なサイクロンがあった

そして、今どうするか考えている。

少し遠いとはいえ、このままだと直撃コース。多分あと1分くらいで巻き込まれる

もう船を逸らせようとしても遅い。

ガクッ

「「うわあああああああああああああ!?!?」」

嵐のせいで波が高く、おかげで船が大きく傾いた。

腰を強く船の縁に叩き付けられたが痛くないので問題無い。だが

「ちょ、痛いですよ!!もうちょっと何とかならないんですか!!!」

「ちょっと待ってろ!!」

と言っても、ここまで迫っているともうどうしようもない。

なら・・・そうだ!!あの手があった!!

「とうっ!!」

ある事を思いついた俺は、船の鉄を延ばした。

どうするかというと、そのまま船を包み込むように球状の形を作って

起き上がりこぼしのように船が常に下になるように重心を置いて、

空気を取り入れるための穴をあけておいた。

空気がないと、空気が無い場所でも活動できるであろうフミ（真空でも生きれるウィルスは多くいるので多分可能）はいいのだが俺とキキはまずい。
無論、２酸化炭素（シーオーツー）から炭素（シー）を取り除いてやれば酸素はいくらでも増やせるのだが、そんな事をしていたら船の修復や重心の調整ができなくなるので今回はパス。

そういえば、ヘリウムとか水素とかって風船に入れたら浮くけどあれを大量に増やして密度上げて上にやっとけば浮かぶんじゃないだろうか？
いや、それで爆発したりしたら危ないしやめておこう。

「ちょ、暗いです！！真っ暗です！！！」

あ、そうか。空気のことは考えたけど明かりの事は考えてなかった。
こんな揺れる所でランプつけたりしたらひっくり返るし・・・

「悪い、諦めて寝てくれ！」

「キー！！！」

「フミの部屋はどこですか！？！！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

「痛いです・・・」

「キ・・・」

「うー・・・」

外がやっと静かになったので元の船の形に戻した

すると、空から雪が降っていて波も穏やかないい天気が広がっていた。

昨日のサイクロンが嘘のようだ。

ちなみに、ずっと真っ暗なのですぐに布団に入ったがサイクロンに船が巻き上げられたので宙返りはしなかたものの（起き上がりこぼしのような構造にしていたため）ずっと尋常でない揺れが続いてとても落ち着いて寝れたものではなかった。

「やっと明るくなりましたね・・・それにしてもここは何処ですか？」

「サイクロンにぶっ飛ばされたから場所なんてわからんよ。一応指針の向く方向には船を進めてるけど・・・」

雪が降っているので、これがしばらく続けば冬島が近い事になる。

指針の向く方向に進んでいて冬島が近くという事は、他の島に巡り合うことは滅多に無いので高確率でドラム島にたどり着くという事だ。

「キキッ！！」

「早く島に到着してください！！」

「いやいや、そんなことを俺に言われても困るんだが・・・この海に言ってくれ」

フミとキキが騒いでいるが、天気なんて俺の知った事ではないのでスルー。

「お前ら、そんな事より朝食の用意だ！」

「あ、ふぁい！！」

「キギュー・・・」

とりあえず腹が減ったので俺らは朝食の用意を始めた。

「今日はムグムグ・・・おいしいですムグムグ・・・」

2人で飯を作り終わったのでとりあえず甲板に机を出して食事中。

雪が降っているが風が強くないため木の屋根を作っているためかからない。

さらに机の下で火をつけて上に油を入れたフライパンを置いて揚げ物をしているため結構暖かい

野外で焼肉とかバーベキューとかではなく揚げ物。これって新しくね？

「そりゃ、豚カツだからなモグモグ・・・そういえば豚カツって知ってる？」

「何ですかそれ？」

あー、やっぱりそうか。

この世界に卵・小麦粉・パン粉を使って肉を揚げるというのは広まっていない。

つまりこれ作って店開いたらり売れるんだろうか？

「あ！！セイル！！！見てください！！！」

そういえば、ハンバーガーとか天ぷらとかってこの世界にあるのかな？
ケチャップとかデミグラスソースとか手に入ったら作ってみるのもいいかもしれない。

「セイルー！！死んでますかー！！寝てますかー！！」

酒のつまみの焼き鳥とかピーナッツとか・・・あ、あとポテトチップスも売れる気がしてきた。
以前買ったポテトチップは油で揚げてない、塩もふらずにただ焼いただけのものだったからなぁ。バター味だったし

「セイルー？」

「・・・あ、ああ。ごめんごめん。ちょっと考え事してただけ。大丈夫」

おっと、深く考えてたせいで黙り込んでしまったようだ。
まぁこのレパートリーは練習しておいて何かあったときのためと普段のためにとっておこう。

「で、あそこに見えてるの島ですよね？」

「へ？」

間抜けな声を出しながら振り返ると、７本の高い山のある雪の積もった島が近くに見えた。

船はついにドラム島に到着した。

## 第３８話　サイクロンとドラム島（後書き）

この世界ってハンバーガーや揚げ物、あとポテチとかあるんでしょうかね？
もしないならポテチは間違いなく大ヒットするのでその展開の話も書きたいですね。

それにしても本当に時間が無い！
やっぱり平日に朝から行って帰ってくるのが午後９時だからなぁｏｒｚ１日１回更新もそろそろ難しくなってきました・・・

それはさておき、ドラム島到着です。
３年前なのでヒルルクさんはいません。ワポルもドルトンを拘束した状態で王をやってます
さて、セイル達は何をやらかすのでしょうか。

１月２８日修正

酒のつまみの焼き鳥とかピーナッツとか・・・あ、あとポテトチップスも売れる気がしてきた。
←
追記
以前買ったポテトチップは油で揚げてない、塩もふらずにただ焼いただけのものだったからなぁ。

ポテトチップ、１８話でセイルが買ってきていますが別物です。
じゃがいもを薄く切って、バターをつけて焼いたもので油で揚

げるポテトチップスとはまた違います
申し訳ありませんでした。

# 第３９話　ドラム王国の悪政

「止まれ！！貴様らには入国手続きをしてもらう！！！」

ドラム島に着いたと思ったら、突然兵士のような人がやってきて何か言ってきた。
本当にたった今ついた所だ。
船で港を探しているところだ。

それにしても、なんだこいつ。いかにもな悪人顔だなおい！

「入国手続きなんているんですか？」

「そうだ！！国王ワポル様の命により、入国者は１人につき１０万ベリーの入国料を払うことになっている！！」

１０万ベリー！？つまり日本円で１０万円！？！？
島に入るだけで１人１０万とか、元の世界ならいい感じで海外旅行ができるぞ！？

それにしても流石ワポル。やる事が半端ないぜ・・・法律的な意味で・・・

「払うなら、船は我々王国軍が港まで誘導する。追加料金３万ベリ

ーを払えば港まで私たちが船を回そう」

あれ?料金が高いこと以外サービスは行き届いてるんだな。
・・・って、そんな訳ないか。多分旅人だからってなめられてるからどうせ船室にある金目のものを盗むつもりなんだろうな
国王があれだし、こういう兵士という立場を利用した犯罪とかも結構あるんだろうな。
側近で民主的な人もドルトンさんだけだったし、チェスもクロマーリモ（親もよくよくこんな名前つけたよな、と思った）はワポルの国王独裁政治に賛成してたし。

「払わないのなら島から出て行くか、何なら入ってみろ。不法入国者には後に財産全没収後死刑となっている!!」

ワポルさん・・・?そこまでやりますか・・・?
そんな事したら貿易相手もいなくなるし島の外からの金が入ってこないじゃないの。考えてないのかな?

「えーと・・・ふと思いついたんですが、出国料なんてのはないですよね?」

そう俺が聞くと、兵士は『当然だ!』みたいな顔をしたのでホッとしたら

「当然有るに決まっているだろう！！１人３０万ベリーだ！！」

ワポルって鎖国でもしたいのかな？
いや、本当にそう思うレベルだよこれ？国外追放でもされない限りこの島から出るのに１０万もかかるんだぜ？
いくらワポルがあの性格だからってここまでやるか・・・？
というか、ワポルだし国外追放の場合でも金とられそうだな。あ、金じゃなくて資産の１００％だな。

あ、そういえば原作で医者狩りをしたって書いてあったな。
そのせいで病気になった国民は、ワポルの配下であるイッシー２０≪トゥエンティ≫に頼らざるを得なくなってワポルの政治に反対できなくしたんだっけ？

だとすると、この暴利政策もそれの一部なのかな？
出国料を取ることで逃げ出した後の資金を減らす。しかも金は税金云々でほとんどワポルに流れるからたまっていかない。
だから逃げ出したくても、記録指針≪ログポース≫や永久指針≪エターナルポース≫があっても島から出ることはできないし、出れたとしてもその後生きていく手段はない。

国民の暴動も軍とワポル、そしてチェスとクロマーリモによって完全に鎮圧できるし・・・
政府に訴えようにも、ワポルのやっている事はあくまで”政治”な

ので目立つ殺戮とかしない限り捕まらないだろう。

あ、ひょっとしたら政府に税金で国民から取り上げた金で裏金やってるかもしれないな。

世界政府も所詮は巨大な組織だから、東の海海軍基地で魚人が支配する”アーロンパーク”に金関連で絡んでいたネズミ大佐みたいな金にいじ汚い奴いるだろうし。

ひょっとしてワポルって頭いい？

あ、いや。例えこの考えが合ってたとしてもチェスとクロマーリモのおかげだろうな。ドルトンはそんな事考えててもいわないだろうし

「あー、それにしてもどうしよう。フミ？金はら・・・ちょっと、何だその体の回りに滾る赤いオーラは」

ふとフミに話しかけると、真っ赤なオーラが見えるほどもんのすごい闘気を張り巡らせながら怒りマークを2つほど顔につけ、とびっきりの（黒い）笑顔で兵士のほうを見ていた。

「ちょ、フミ?」

「えーと、そこの兵士さん?ちょっとフミの所に来てくれませんか?握手してください」

一見、訳の分からない台詞だが俺にはわかる。
今フミの手に殺傷力の高い菌を集めていることは間違いない。

というか、手の周りが紫がかってる。間違いなく能力使ってる!

フミがこんなに怒ってるのはじめて見た・・・あああああ、どうしよう!!!

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・

とりあえず、鳥がいると面倒なことになりそうなのでキキを「後で呼んでやるからそれまでこの島で遊んでて」って言って兵士の目に付かないところで空に放してやり、別な場所で２人分の金を払った。フミが「ぼったくりです！！！」って言ってナイル熱ばら撒こうとしてたけど面倒事は避けたいと言って抑えておいた。このままばらまかせたらこの国確実に終わる。雪の国だから暖かい場所の病気の抗生剤なんて持ってないだろうし・・・

そして別な場所に行ったはいいが、そこでの請求額は１人１２万べリーだった。・・・あれ？ちょろまかそうとしてない？

どうせ金は無限にあるので結局２人分の２４万を払って入国した。「２人です」と言ったとき、兵士に「２人だと！？ありえないだろう」って言われて船をくまなくチェックされたが見られてまずい部屋の扉は消しておいたので何も見つけられなかった（というか、元々２人と１匹だったので）。そのせいで疑惑のまなざしを向けられたが。

さて、入国したはいいがどこに行くかまったくあてがない。
とりあえず、ビッグホーンという地名だけは覚えていたのでそこに行くための看板を見つけて（看板が近くにあって助かった）向かう事にした。
理由は単にそこしか覚えていなかったからというのもあるが、ドルトンさんを見つけられればとりあえず色々と話を聞けるからだ。

「ドルトンって誰のことですか？」

「んーと、確かこのドラム王国の政治をやってたワポルが兵士と一緒に黒ひげ海賊団から逃げ出した後国を守ってた人」

「え？でもさっき兵士いましたよね？」

あれ？そういえばさっきドラム王国の兵士みたいな人いたよね？
悪人面だったしコートも一致してたから間違いない。

「ってことは・・・ひょっとしてドルトンさんワポルに捕まってない？」

「そうなんですか？」

兵士がいるって事は、黒ひげ海賊団はまだ来ていないってことが読

み取れる。
この国の優秀な医者であるＤｒヒルルクがどうなっているか・・・
回想シーンがあったのは覚えているが正確な時期は覚えていないので、それがわかればこの国の大体の状況がわかるだろう。

ちなみに原作のドラム島編回想を初めて見た時は思わず泣いた。
個人的にはどっかの青い猫型ロボットと心優しいメガネの少年が永遠に別れる・・・というストーリーの映画と同じくらい好きだ。

「おっ、あそこでそりと動物の貸し出しをやってるみたいだぞ」

「貸し出しって・・・物じゃないんですから」

少し船から出て歩いたところに、そりとスノーカクルというそりを引くであろう動物を貸し出している場所があった。
折角なので借りてみることにした。

「へい！スノーカクル２匹とそりで合わせて４万ベリーになります！」

・・・・・なんだこの国の金銭感覚。

## 第３９話　ドラム王国の悪政（後書き）

スノーカクルという動物は、原作でウソップとビビとドルトンさんを乗せて走ってたあの動物です。名前はハリポタのしわしわ角スノーカックからちょっとひねりました。

ドラム王国の法律を作るのがワポルで、その穴を埋めるのがチェスとクロマーリモの役目だと思います。
ドルトンが今までワポルの法律作りを抑えてたけど、ヒルルクの件で投獄されたためやりたい放題になってしまった・・・そんな感じで書いてみましたがいかがでしょうか？

悪政してるワポルもただ自分の欲のままに好き勝手やってるだけで、国民を苦しめる目的とかではやってないと思います。
（前に記述したように、チェスとクロマーリモが法律の穴を埋める段階で自動的に国民を苦しめるシステムが加わるのでは？と思う）

そしてフミが珍しく切れてますｗｗ
まぁこんな状況、まともな人が見たら怒って当然ですが・・・
セイルはまだ記録≪ログ≫のたまる時間も不明なので関わって逃亡生活が始まったりしたら面倒なのでスルーの方向のようです。能力でなんとかなるとは思いますが。

そういえばワポルって今は先代国王の息子って立場で王になったけど、表紙連載の方では自分の能力で成り上がってましたよね。
番外編ワポルはなんかかわいくて好きですｗｗ作者の尾田さんが１

番好きな悪役と言ったのもすごくよくわかる。

さて、ビッグホーンにいって何をするかまだ考えてない・・・何とかしないと・・・

## 第４０話　雪の降る村＆ｑｕｏｔ；ビッグホーン＆ｑｕｏｔ；（前書き）

４０話ですよ！！！！ついに！！！
やったぜ！！！！

まさか、こんな小説が１ヶ月でこれだけの評価を頂けるとは思いませんでした。
ここまで来れたのも皆様のおかげです！！ありがとうございます！！

## 第４０話　雪の降る村＆ｑｕｏｔ；ビッグホーン＆ｑｕｏｔ；

「（うわぁ・・・）」

ビッグホーンについてから、まず思い浮かんだのはその単語だった。

俺たちは、結局４万払って（フミが怒っていたので強制的に引きずってそりに乗せて、さっさとその場から離れた）ビッグホーンに向かった。

途中で巨大な熊が歩いている所や（杖を持ってたからあれがハイキングベアだろう）雪鳥≪スノウバード≫がたくさんとまっている木があったりと、とても自然豊かなのがうかがえた。

雪国もいいものだなぁ。俺は以前は暑い場所に住んでたからこういう一面が白の景色はとても珍しい。

さてさて、そんなきれいな景色を見つつフミを引きずりつつ、ついにビッグホーン入り口の看板が見えてきたので、ソリから降りる準備を開始した

「ちょ、これは・・・なんとも・・・」

「ちょっと・・・何ですかこれ?家が・・・」

村に入ったと思ったら、入ってすぐに家が見えたのだが・・・普通ではありえないが、その家には”食いちぎられたような跡”があった。

・・・十中八九、この国の王のワポルが悪魔の実の能力で食っていったんだろうな。生ハウスって所か?

「あんたは誰だ?」

村の入り口で立ち止まっていると、突然声をかけられた。
俺らに気づいた村の人だろうか? 手に銃を持ち毛糸のコートを羽織っている体つきのいい男の人だが、その人が俺らに話しかけてき

た。

辺りを見回すと、物陰から銃の先端がこちらに向かって伸びているのが見えた。
俺らは海賊とかじゃないし、もし海賊だったら国王軍に何らかの動きがあるから気づくと思うけど・・・？

しかも後ろのほうで『早く家の中に入りなさい！』な感じで子供を家に入れて皆扉を閉めちゃったし・・・どうなってるんだ？

「あ、いえ。ただの旅人です」

「そうか。だがここに来るまでに国王軍から入国料を要求された筈だが？」

男がそう言いながら神妙な顔になった。

あー、なるほど。
入国料払わなかった人間はこの国では海賊だろうが旅人だろうが犯罪者だもんね。
犯罪者をかくまったらそいつは問答無用で殺されるか国外追放なんだろうなぁ。ワポル政治だし

村に入っただけでも、そういうレッテルを張って村人にひどい仕打ちをしそうだし・・・
そりゃ国民もピリピリするよな。島から出れないし金はない、少し

の手違いでひどい目にあう上に政府は助けてくれない・・・
反乱を起こそうとしても無論国王軍に鎮圧されるのがオチだ。悪魔の実の能力にもとてもではないが敵わないだろう

「あ、ちゃんと払ってきました」

「本当か!?　入国料に1人5万ベリーとられた筈だぞ!!??」

男がとても驚いた口調でそう言ってきた。

え?何?5万ベリーだったの??
俺最初に要求されたの2倍の10万だったんですけど。

おっと、いかん。元々5万だと知ったフミの周りに赤いオーラが・・・早く話を進めないと暴走して本当にナイル熱をばらまいてしまう!

「い、いや。俺は12万要求されましたけど・・・あ、まぁこの通りお金はそれなりにあるので」

俺がそう答えたときその人は俺の動揺を怪しんでいたが、懐に入っていたベリーの札束を見せた瞬間は少し驚きながらもほっとしたため息をついて「そうか・・・」と言うと、腕を後ろに回して銃をしまった。
するとそれが合図になったのか、影から俺らを狙っていた銃口が降りて隠れていた人が出てきた。

「すまん、手荒な歓迎を許してくれ。以前入国料を払っていない人間を歓迎した村が国王軍の手によって焼かれたことがあるんだ。幸い昼で住人に死人は出なかっ」

そこまで言ったときに、フミが

「何ですかそれは!?!?　旅人を歓迎しただけで村が焼かれた!?!?　そんな事があっていいんですか!!!??」

やはり、この国の政治がだいっ嫌いなのだろう。
俺もこのやり口は大嫌いだが、フミの嫌いようは尋常ではない。
いや、そもそも政治と呼べるものではないが・・・それでもフミにとってはひどく引っかかったようだ。

「・・・怒ってくれてありがとう。こんな国だが、君たちさえよければ歓迎するよ。」

男はフミが激怒したことで俺らを見る目が一瞬で変わったようだ。
やはりこの村の住人もワポルに対して反感を抱いているが、武力により押さえつけられているのだろう

そして、俺らに銃を向けていた人間や後ろで敵意を向けていた人達に謝られながら、そのまま村を歩いてすぐの所に案内された。

誤る必要はないと言ったのだが、『こんな国でごめん』と言われた時は流石にどうしようかと思った・・・

「ここは、旅人を泊めるために用意してある宿だ。無料という訳にはいかないけど泊まれるだけの設備は用意してある」

「え？でもここって・・・」

案内された場所は、普通の雪が積もらないように作られているとんがり屋根の家。

ただし、玄関のところに注射のマークの書かれた札が立っている事からここは元医者の家だったのだろう。

所々でこの国で起こった生々しい出来事の跡が見えてしまい、とて

も心が痛む。

「2年前にワポル・・・ああ、この国の国王の事だが。ワポルが『医者狩り』をしてね。この国の医者がいなくなってしまったんだ。今残っているのはワポル直属医師の”イッシー20”と医者狩りを逃れた”Drくれは”しか残っていないんだ」

さらに、後ろにいた人がまた語る。

「先代の国王が治められていた頃にはこの国は医療大国と呼ばれるほどだったんだ。だが医者狩りのせいで国民たちは国王ワポルに頭を下げてイッシー20を頼るか、時々しか来ない上、法外な請求をするDrくれはに頼むしかなくなったんだ。」

あー、確か原作にもそう書いてあったなぁ。原作ではワポルは間抜けに見えたけど、実際この国に来てみると本当に荒れていたのがよくわかる。

「2年ほど前は”Drヒルルク”というヤブ医者もいてね。その人もワポルに捕まって殺されたんだ。」

「ああ、ちょうどその時だったか?ドルトンさんがワポルに歯向かって捕まってしまったのは」

やっぱりドルトンさんも捕まってるのか。

ヒルルクがまだ死んでなければ助けたかったが・・・そう都合よくはいかないか。

まずはこの村の人にお礼を言って宿を頂いた。
料金は５０００ベリーと、とても破格の値段に思える安さで驚いた

フミがずっと怒りのオーラを発していたので俺は無視していたが村人はそれを見て感銘を受けているようだった。

とにかく、今日はもう疲れたので情報収集は明日にする事にした。
記録≪ログ≫も、流石に１日で貯まるなんてことはないだろう。原作から考えて少なくとも３日はかかるだろうし

それにしてもこの国はいったいどうなっているのだろうか?それが今とても気になる。
明日は他の町に行ってもう少し調べてみるか・・・

そう思い、俺は布団に身を任せた

## 第４０話　雪の降る村＆ｑｕｏｔ；ビッグホーン＆ｑｕｏｔ；（後書き）

ごめんなさい。今回最後のほう手抜き感ＭＡＸです
本当はこの続きも書く予定だったのですが、時間がなかったのでやむなくこういう形になってしまいました。

詳しく書けば書くほど、ワポルの王政がひどいものになっていく・・・

原作のままだと穴だらけですが、側近の２人が穴を埋めてる事を考えるとどうしてもこうなってしまう。

それにしても、村人に警戒心を解かせるあたり流石フミ。
フミがここまで怒るのはやっぱり理由がありますが、それはどこかで明かそうとおもいます。

ああ、眠いよ・・・
投稿時間は８時だけど書いてるのはその日の１時半です・・・ううう・・・

そういえば、いつも８時に投稿していますがこのままでいいでしょうか？
もし皆様の希望があればできる限りお答えしたいと思います。感想欄に書いていただけると有難いです

## 第４１話　ドラム王国の姿（前書き）

とらドラの小説検索したら意外と少ないんですね。
暇があったら書いてみようかな・・・？
でも他にもオリジナルや東方も書いてみたいし・・・構想はあるんだが・・・

とりあえず本末転倒になりたくないし、今はこれを書いてて楽しいのでこれ一本に集中します。

# 第４１話　ドラム王国の姿

「急患だ！！！！！」

外から大声が聞こえてきて目を覚ました。

何か焦っているみたいだけど・・・何だ？ワポルか？
いや、俺も寝ぼけてるな。急患っていったら病気か怪我だろ。

窓から外の様子を見ると、なにやら向かいの家に人が集まっているようだ

とにかく、部屋から出てそこに行ってみることにした

騒がしい場所は向かいだったので歩くまでもなくすぐに着いた。

「何かあったんですか？」
とりあえず聞いてみる。

「あ、ああ。今朝外で遊んでいた子供達が国王軍に足を銃で撃たれたんだ」

・・・・またか
もうこの国の政治に突っ込む気力すらなくなった。
フミが聞いたら多分問答無用で城向かってワポル殺しに行くぞ・・・
？

「何ですと!!!ワポルってどこにいるんですか!!?」
・・・あ、もう手遅れかもしれない。

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには真っ赤な怒りのオーラに包まれた般若がいた。

フミを落ち着かせること２０分。

とりあえず、今は子供の治療が先だと言い聞かせてやっとの思いで正気に戻し家の中に入った。

村人に「傷は無理ですが、ウィルス関連の予防治療ならできるかもしれません」と言ったら少し驚いたようだったが中に入れてくれた。

そして子供の寝ている部屋に来たのだが・・・

「痛いおおおおおおおおお！！うわあああああん！！！」

「あなた・・・どうすればいいんでしょう・・・もうワポルに頭を下げてでもイッシー２０を頼るしか・・・」

「それしかないのか、Ｄｒくれはは当てにできないし・・・仕方ない」

「でも、それでいいのか？！何をされるかわからんよ！！？」

「仕方ないだろう！！この国の医者はイッシー２０しかいないんだ！！Ｄｒくれはは法外な請求をすることを除いてもどこに住んでいるかもわからないから当てにはできん！！一刻も早く息子を助けてやらないと！！！！」

子供が痛さゆえに泣き叫んでいる中、親は子供を運ぶ用意を始めな

がら周囲の人間と議論をしていた。

怪我をさせたのは国側の人間だが、今からその国の人間に頭を下げに行かなければ行けないのだ。
息子が怪我をすれば医者に連れて行くしかない。
ワポルに頭を下げるしか、自分の子供が助かる方法はないのだ

それを考えた時、俺も激しい怒りを覚えたが今はそれどころではない。
俺らは村人から宿を借りている身なのだ。こういうことがあったときには力になってやりたかった

「あの、すみません」

俺が声をかけた途端、そこにいた人たち全員から警戒の目線が送られたが、昨日来た旅人だとわかるとすぐにほっとした様子になった。

「ああ、君は昨日来た・・・今は急いでいるんだ。息子を助けに行かないと！！」

父親は焦った様子で息子を抱っこて走り出そうとした。

「ちょ、待ってください！！簡単な治療ができるかもしれないと思

って来たんですから！！」

俺がそう告げると、全員が「へ？」と言ったが無視。

「ちょっとその子の足を見せてください」

と、フミが言った。

「本当に大丈夫なのか・・・？」

「いや、でも外から来た人だ。案外こういう時どうするかの知識があるかもしれない」

「ああ、それならあり得るな。海賊の多い時代なんだし今まで襲われることもあっただろう」

「有難い・・・だが、ちゃんとした治療ができないのは残念だな・・・」

この時、そこにいた全員はこの２人が怪我の応急処置をしてくれるのだと思った。

しかし・・・

「ちょっと、そこの子達！！その子の足にくっつくのはやめなさい！！！」

フミが包帯を解いた後突然怪我をしている子供の『足』に向かって怒鳴り始めたので、全員の心に「は？」の一文字が浮かんだ一瞬、怪我をした子供に怒鳴っているのかと思ったが、フミの目は子供を見ていない。
現に子供も何が起こっているのかわからない様子でポカンとしていた

しかし、そんな事を完全に無視しながら足に向かって言葉を発し続ける。

「む、そこにいるよりフミの家に来ませんか？というか、とりあえずフミのところに来てください！」

そう言うと、子供の足に手を触れた。

「ギャアアアア！？！？」

子供がものすごく痛そうな声をあげたが、それも無視して傷にふれ続ける。

「おい！！！俺の息子に何を」
「ちょっと待ってろ。多分破傷風とかの菌の予防をしてるんだから」

「「「「は？」」」」

訳が分からないぞ！という感じの声が上がった
しかし、それを完全に無視しながらフミは続ける。

「予防接種≪ウィルスブロック≫！」
最後にそう言って、フミは俺のほうを向いた。

「セイルー？　これだけだとまずいですし新しい包帯はないですか？」

「ああ、了解。」

ここまでで、最後以外で俺らが何をしているか分かった人がいたらそれは神くらいのものだろう。

現実では

フミが能力で菌を取り除き、
予防接種≪ウィルスブロック≫という、人間の体にフミが弱体化させたウィルスを流し込んでそれに対する抗体を作らせる技を使って最後に傷口に菌が入らないように応急処置で新しい包帯を巻こう

という事だったのだが。

説明している時間がないので、とりあえず包帯を出してもらって足に巻いた

「じゃあ早速イッシー２０の所に」
「ちょっと待ってくれ」

「ん？」

焦って、ワポルの城に行こうとした父親を引き止めた。

「もしＤｒくれはに治療してもらえるとしたら・・・貴方はどっちを選ぶ？」

俺のその言葉に、その場にいた村人全員が首をかしげた。
突然来た旅人がＤｒくれはの居場所を知っているのか？という当然すぎる疑問だが。

「あんた・・・Ｄｒくれはがどこにいるか知っているのかい？」

「あ、ああ。くる途中でばあちゃんがソリに乗って窓のある木の中に入っていくのを見たんだ。」

無論大嘘だ。海岸からそりでここまで一直線で来たのだから、森に住んでいる人間が見えるわけがない。
つまりは原作知識を使っての言葉だ。

「じゃあ・・・まさか！」

「確証はないけど、”ギャスタ”って所の近くの大木だったと思うが、そこにいた。」

俺がそう言ったときに誰かが

「そういえば、Ｄｒくれはって普通の家に住んでないって話だよな。」

「ギャスタの傍の大木・・・もしかしてあの外れにある大きな太い木の事か？なら俺は場所がわかるぞ！」

「そういえば俺も、ギャスタにいった時に目立つ大木があったの覚えてるぞ！！」

と言い、連鎖的に話が進んでいったので今度は俺が驚かされる番だった。

おっと、いつまでも驚いているわけにはいかない。

そして俺は最後に父親に止めを刺した。

「ワポルに頭を下げるか、Ｄｒくれはに頼みに行くか・・・どっちにします？」

「決まっているだろう！！息子と一緒にギャスタにそりを出す！！」

## 第４１話　ドラム王国の姿（後書き）

１話でギャスタまで行く予定だったのに結構延びちゃいました。

もう眠いので、とりあえず感想とかの返信は後になります・・・ごめんなさい。もう午前2時なんです許して！

次回、Ｄｒくれは登場予定です。

# 第４２話　ギャスタの外れの大木

只今、父親とその息子、村人数人と俺とフミ。
その人たちでギャスタへの道のりをソリで爆走中だ
目的地はＤｒくれはがいるかもしれない場所
皆で急いでそこに向かっている。

「それにしても・・・君達は何故Ｄｒくれはを知っているんだい？」

「え？」

「まだこの島にはきたばかりなのだろう？なのになんでＤｒくれはの容姿を知っていたのかが気になるんだが・・・」

あ、まずい

Ｄｒくれはってあんまり町とかに来ない人な上、俺がこの町来たの昨日って言ってあるから・・・

「あ、いえ。たまたまソリに乗った聴診器を持ったおばあちゃんを見かけて・・・・」

医者として聴診器を外気に触れさせたままで歩くとは思えないが、とりあえず嘘は通じたようで納得したようだ。

「そうか・・・確かにこの国のワポルの手を逃れている医者は1人しかいないからな。」

「くそ・・・ワポルさえいなければこんな事にはならなかったのに・・・」

「そういえば、最近ジンダムの方で反乱を起こしたらしいが・・・ちょうどワポルの兄が帰ってきてたらしい。」

「ワポルの兄というと、あの事件の?」

「ああ、先代国王がいないのをいいことに呼び出したらしい。」

ん?今なんて言った?

「火の国キラウエアに国外追放だったか?全く、ワポルはどこまで俺達を・・・」

ワポルに兄？そんな人間いたか？

原作を思い返してみるが、ワポルの兄なんて思い当たらない。キラウエアという地名にも聞き覚えがない。ただ、ギラウェア火山という言葉は聴いたことがある気がする。

というかそもそも、そんなキャラ紹介する場面あったっけ？

本編に出てきた回想もヒルルクの時のだけだし、兄がいるなんて書かれてた覚えがないし・・・

「あのー？ワポルって兄弟がいるんですか？」

「ああ、ワポルには兄貴がいてな。１７年前までは国王の息子としてこの国にいたんだが、退屈しのぎに自分の能力を試したために国民をたくさん殺して国外追放になったんだ」

ん？そんな話は聞いたことがないな・・・

作者が考えてたオリジナル設定か何かかな？だとしたら辻褄が合うな

「能力というと、悪魔の実の能力者なんですか？」と、フミが聞いた。

「ああ、あんた方も悪魔の実の能力者なんだろ？なら”ノコノコの

実”って知ってるか？」

んー、やっぱり知らない名前が出てくるな。

「ノコノコっていうと、ノコギリか何かですか？」

「いや、キノコの”ノコ”だ。ワポルの兄”ムッシュール”はキノコ人間だ」

あー、余計分からなくなった。

ムッシュールなんてわかりやすい名前、忘れるわけがないんだけどなぁ・・・

ひょっとして、後のフラグか？

ワポルは表紙連載でおもちゃ工場みたいなのやってたから、後にルフィと再会したときに参戦！みたいな。

「キノコ人間・・・って事は、胞子をばらまいたりしたんですか？」

「ああ。ノコノコ実の能力の中に、体内に溜め込んだ猛毒を１０年

に一度体外へ砲弾として出す「フェイタルボム」というのがあってな。それを国王のいないときに城の大砲から打ち出して大惨事になったんだ。」

「そんなひどい事件が・・・」

「ああ、幸いにもその日は風が強くて大きな被害が出るのは免れたんだがな。だが、それで多くの人が死んだんだ」

ムッシュールという奴は相当いかれているのだろう。
退屈しのぎに猛毒を国中にばらまくなんて、どう考えても正気ではない

例え王家の人間だろうと国外追放になるのはちょっと考えれば分かるだろうに・・・
先代国王もなんでこんなアホな子供2人を持ってしまったのか・・・
ドルトンは先代国王はいい王と言ってたと思うが。

「おい、そんな嫌な話をしているうちにギャスタに着いたぞ」

本当だ。いつの間にかそりはギャスタ付近に到着していた（入り口の看板があるので間違いないだろう）

「おい、皆！Ｄｒくれはをどこで見かけたかもう１度教えてくれ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

「ここか・・・？」

探すこと数１０分。

探していた大木は意外と早く見つかった

他の木が針葉樹な中１つだけ菩提樹のような木で、窓もついてるしこれで間違いないだろう。

「で、誰が先に行く？」

誰かがそう言うと、辺りは「お前が行けよ！」「何を言ってるんだ！責任者はお前だろう」「ハア！？俺がいつ責任者になったんだよ」と、なすり合いが始まった。
やはり、法外な請求をするくれはを警戒しているのだろう。

「（セイル、セイル）ヒソヒソ」
フミがこっそり話しかけてきた。

「ん？どうした？」

「（いや、窓を見てください）ヒソヒソ」

フミが窓のほうを指を指したので言われるままにその方向を見ると

「「（・・・・・・・）」」

家の中から、赤い帽子を被ってそこから角を生やした奇妙な動物がこちらを警戒しながら見ていた。

チョッパー！

あれトニートニーチョッパーじゃないか！！
ちょ！初麦わら海賊団キャラクターだ！！

しかもワンピースの人間以外のキャラの中で最もかわいいと言われているキャラじゃん！！！

なんか、すごい感動した・・・やっぱりドラム島にいたんだ・・・

その動物（チョッパー）には、他には誰も気づいていないようだった。

「セイル？突然口を空けて突っ立って何をしてるんですか？」
「あ、ああ。大丈夫。ちょっとあの動物かわいいなーと思ってさ」
「うわっ・・・」
俺がそう言うと、フミが確実に後ずさりして行った。
「ちょ、俺何か気に入らないこと言った!?!?」
「いや、セイルがあまりにも気持ち悪かったので・・・」

ズガッ（↑セイルの心に何かが突き刺さった音）

「フミよ、そんな冷たい事を言わなくてもいいじゃ」
「あんた達、私の家の前で何をしてるんだい？」

突然後ろから声がして全員が振り返ると、めがねを二重にかけた見

覚えのあるばあちゃんがいた。

## 第４２話　ギャスタの外れの大木（後書き）

忙しすぎて＼（＾ｏ＾）／
感想の返信もやってないし、メールの返信もしてないよ・・・

チョッパーと、Ｄｒくれはことドクトリーヌ登場です。
この時期は、ドクトリーヌに医術を習っている頃ですね。なのでこの家の中にいます。

チョッパーが人間以外のキャラの中で最もかわいいと言われていると書きましたが、あくまでセイルの知識の範囲なので実際１位かはわかりません。
でも、ＩＰｏｄのカバーのようなキャラグッズに使われたり人間以外でのキャラを見ると公式の人気投票でも１位なのであながち間違いではないと思います。

ワポルの弟？ムッシュールって誰？と思われる方もいると思いますが、『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　エピソードオブチョッパー＋冬に咲く、奇跡の桜』という映画に登場するボス的キャラクターです。
原作には出てこなかったのでここで登場させてみました。

ちなみに作者は一昨年の年末にこれ見て１人で泣いてました。完璧に変人です

ドクトリーヌってよく見ると眼鏡を２重にかけてるんですよね。
サングラスと老眼鏡なんだろうｎ・・・おっと、こんな朝早くに誰

か来た様だ

うわ！ナイフをもったババアｇうわなにをするやめくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@

## 第４３話　Ｄｒくれは・チョッパーと出会う（前書き）

あかん。だんだん文が短くなってきてる。
その上感想返信がだんだん溜まってきた・・・とりあえず誤字修正しました。ご報告ありがとうございます。

# 第４３話　Ｄｒくれは・チョッパーと出会う

「なんだい？人の家の前でぐずぐずと何をやってるんだい」

「Ｄｒくれは！やっぱりここに住んでいたんだ！！」

「頼む！！うちの息子が怪我をしたんだ！助けてくれ！！！」

俺らの後ろに突然現れたＤｒくれはは、俺達を不審そうに見ている。
だが、ここは普段人が入ったりしない場所なのでその警戒も当然だろう。

「ほう、怪我人かい？」

「そうだ！！息子が銃で撃たれたんだ！！助けてくれ！！」

そう言うと、

「金さえ払えば治療してやるよ。怪我した子をこっちに渡しな」

どうやら、子供のほうはちゃんと診てくれるようだ。
ただし、原作どおりの性格なら法外な治療費を請求してくると思うが・・・

父親は子供をくれはに引き渡して、くれははそのまま子供を抱えながら家の中に入ったので、俺とフミもついて行った。

家のドアを閉めるときに玄関前に俺らがいる事に気がついたくれはは訝しげな顔になった

「何だい?部外者は出て行っておくれ」

「いや・・・その子供の汚したところの肉を取らないと」

そう言うと、俺は子供の足を指差した。

子供をベッドの上に下ろしたくれはは、子供の足の

「ん・・・？え、こりゃ何だい？！もう完全に直ってるじゃないか！！なんでこんな「いえ、違うんです。それ俺のせいなので」・・・何だって？」

「いや、まぁとりあえず取りますね」

強引に話を進めて、足に触れて能力で造った肉を元の形に戻しておいた。

「なっ・・・！・・・あんた、見かけない顔だと思ったら外から来た能力者だったのかい」

「あー、はい。ナノナノの実を食べた原子人間です」

ちなみにこの紹介の仕方、実は船の中で暇なときに必死に考えていた台詞だ。

原子人間というのは、俺の能力は”原子”を増やしたり減らしたり、

組み替えたり自在に動かしたりできる能力だからだ。
人を殺して操る事に関する原理はまだよくわかっていないが・・・
食欲≪グリード≫で喰った人間は、能力者の体内に原子レベルまで分解されて合致。そして分離して召還・・・という感じだと思う。
俺の勝手な予想だがな！

修行中にそれに気づき、「やべぇ、なんだこの能力」ってテンション上がって舞い踊っていた（！？）所をフミに見られて無言で逃げ出された。

うっ・・・思い出したら腹痛が・・・

「おや、あんたも病気かい？」

「い、いえ・・・ちょっと黒歴史を思い出してお腹を痛くしているだけです」

「ふーん、でも随分と便利な能力を持っているようだね。賞金首か何かかい？」

「あ、いえ。グランドラインを適当に旅しています」

「へぇ。まぁ、とりあえず今はこの子の治療が先だから、邪魔だし出て行っておくれ」

そう言うと、プイッと反対側を振り向いて検診を始めた。

「ふぁい！”はしょうふう”はフミが直しておきましたから安心してください！！」

おい馬鹿やめろ！
説明が面倒だろうが！！

「あんたら、治療が終わったらゆっくり話そうか」

あ、・・・もう！！！

悪魔の実の能力の説明って激しく面倒なんだよ・・・
しかもフミは自分で説明できないから、いや、できるんだけど菌それぞれの説明や自慢になったりで話がそれるから俺が説明しなきゃ駄目なんだよ

こうなったら手遅れだな。逃げたらナイフ投げられそうだし・・・

ううん、今のうちに説明の文章考えておくか

そんな悩みを持ちながら家を出ようと扉に手をかけたその時

「お、お前ら！！客か！？」

後ろから呼びかける声が聞こえた。

振り返ると・・・

「客なら2階に案内するから来い！！」

後ろんは隠す方向を明らかに間違っているチョッパー。

あ、ついでに声はアニメそのままだったよ

「あ！！さっきの駄目帽子です！！」

「「え？」」

フミの一言に訳がわからず2人とも固まるが、

「な、何でこの帽子を悪く言うんだ!!これは俺の尊敬する」

「いえ、帽子にバッテンマークがついてるので駄目なのかなーと」

ズサー

「おい・・・フミ。×を駄目と結びつける気持ちはわからなくもないけどな?」

「・・・ハッ!!じゃあ零点ならいいでしょう!!!」

「誰が零点だ!!!誰が!!!」

フミの辛辣なボケに耐えられなかったのか、その場でチョッパーはフミと口喧嘩を始めた。

「うるさいよ！！！あんたらとっとと出ていきな！！」

Ｄｒくれはがどこからともなく槍を投げてきたので（チョッパーとフミのちょうど間の壁に刺さった）チョッパーに従い、走りながら２階へ上がったのであった。

## 第４３話　Ｄｒくれは・チョッパーと出会う（後書き）

チョッパーは激怒しました。

駄目帽子って・・・フミも初対面の人なのにかなり失礼な事をさらっと言いますよね。

いや、まぁそれがフミの性格なんですが。

思った事をすぐに口に出す辺り、まさにフミです（？）。

セイルが何人間か？と聞かれたときには、原子を操るということで”原子人間”という事にしました。

セイルがこれに気づいたときに、かなり強い能力ということで舞い上がって、コサックダンスやらタップダンスやらその場でにやけながら転がったりしてる所をフミに発見されました。

普段なら毒舌を吐かれたり、気持ち悪いという一言があるのにこの時は本気で引かれて逃げられたのでものすごーく深く胸がえぐられたようです。

おお、怖い怖い

そろそろ毎日更新に限界が見えてきましたｏｒｚ

これ以上は話の質を落としてしまうかもしれないので、これからは日を空けることがあるかもしれませんが、作者は生きているのでご安心ください。

# 第４４話　チョッパーと話してみる（前書き）

土曜日？休みじゃないよ。
受験生って大変です

# 第４４話　チョッパーと話してみる

「お、お前ら外の海から来たのか！？」

「ああ。東の海≪イーストブルー≫からリヴァースマウンテンを越えてきた」

「へぇ～。この島にはあんまり人が来ないからお前らのような奴は珍しいんだ」

「ハッ！！そういえばこのシカ喋ってます！！！大発見です！！！」

「いや、遅いよ」

「シカじゃねぇ！トナカイだって言ってるだろうが！！」

現在、Ｄｒくれは家２階。リビングのような場所でソファーに座りながらチョッパーと話をしている、

最初はすごく警戒された。だが

「角!?これ生角だったんですか!!?帽子についてるアクセサリー説沈没です?!」

というフミの一言によりチョッパーと俺はその場で転倒。

「いや、俺トナカイだし・・・っていうか何だその説」

「って事は、この島にはサンタさんが住んでるんですね!?どこですか!!」

「スルーか!?」

「いやいや、フミ。トナカイは寒いところなら意外に沢山住んでるから」

「それにしても、このトナカイ反則です!!何ですかこのモフモフは!!!!!!」

「おい、俺もスルーか!?」

俺とチョッパーの言葉を完璧に回避したフミは、チョッパーをヒョイと持ち上げてふにふにし始めた

「お前、俺が気持ち悪くないのか・・・?俺はバケモノだぞ?喋るし青っ鼻だし・・・!!」

「よくわかりませんけど、とりあえずクンカクンカしてもいいですか?

「おいこら、お前はどこでその言葉覚えた?」

チョッパーが何か言っていたが俺ら2人は完璧にスルーした

フミは素だろうが、俺はそう言われたらどう返していいか考えつかなかったからこそのスルーだが。

「おい、お前ら聞いてるのか？」

「ごちゃごちゃ言ってないで、早く体を楽にして下さい！！気持ちよくしてあげますから」

「フミ・・・？」

ちょっとエロく聞こえたので軽く残念な顔をしてみる。

「ちょ！！これは違うんです！！ただのスキンシップです！！！」

そしてなぜか焦りながら墓穴を掘るフミ。

いや、意味が違うってのはわかってるんだけどね。なんでここまで焦ってるんだろう？

相手はトナカイだぞ？ヒトヒトの実を食べているとは言え・・・

「おい！！俺はバケｍ「うるさいです！！」・・・」

うわぁ・・・抱きかかえられて、何か喋ろうとしたら即フミに突っ

込まれて話の流れを切られるチョッパーがかわいそうになってきた。

数十分後

「お、お前ら外の海から来たのか！？」

「ああ。東の海≪イーストブルー≫からリヴァースマウンテンを越えてきた」

「へぇ～。この島にはあんまり人が来ないからお前らのような奴は珍しいんだ」

「ハッ!!そういえばこのシカ喋ってます!!!大発見です!!!」

「いや、遅いよ」

「シカじゃねぇ!トナカイだって言ってるだろうが!!」

話は冒頭に戻り、しばらく話しているうちにチョッパーとそこそこに仲良くなった。

しかしやはり警戒している部分もあるようで、以前の事もあってか人間は信用し辛いらしい。

だが、最初の警戒に比べたらはるかにマシで、ほかの人間に対してよりは気軽に話してくれていると思う。

「そういえば、なんでチョッパーはここにいるんですか?」

フミがそう聞いた

「俺か？俺はどんな病気でも治せる医者になりたいんだ！」

「なんでそんな夢を持ったんですか？」

「俺を助けてくれたドクターみたいになりたいんだ！！」

なんか、フミの質問風景が就職の面接みたいに見えるな。

ドクターって言うと、Ｄｒ，ヒルルクだろう

命を助けて、バケモノ呼ばわりされていたチョッパーの心を開かせた唯一の人間だ。

原作で、ものすごい感動したのを覚えている。

「チョッパーって海賊にあこがれてるんですか？あそこにかかっているのって海賊旗ですよね？」

「ああ！あのドクロは”信念の象徴”なんだ！！ドクターが俺に不可能はないって教えてくれたんだ！！」

「そのドクターって、あの女の人のことですか？」

ああ、ちなみにフミはヒルルクの事は知らない。

以前に原作のことをいろいろ話した事はあったが、細かいところは

教えていなかった

「ドクターは・・・」

少し言いよどんでしまったので、フミが慌てて

「あ、ご、ごめんなさい！！」

「あ、いや。別にいいんだ。」

そんなこんなでチョッパーと俺ら2人とでしばらく談笑を楽しんだ。

そして、２０分後・・・

「治療が終わって父親に引き渡してきたよ。さて、話を聞かせてもらおうか」

そして死刑執行のお時間がやって参りました。

## 第４４話　チョッパーと話してみる（後書き）

今書いている時間がないので、今日の昼くらいに書きます。

しかし、段々文章が短くなっている・・・

ちょっと休みとらないと、気力的にも時間的にもそろそろ限界が来ていますｏｒｚ

## 第４５話　中学時代のセイル（前書き）

今回は少し内容が重いかもしれません。観覧注意です

でも、こういういじめって実際にあるんですよね・・・嫌な時代です。

# 第４５話　中学時代のセイル

「へぇ。そんな便利な悪魔の実をどこで手に入れたんだい？」

「んーと・・・流れ着いた無人島に打ち揚げられてました」

セイルです。

２人分の能力と身の上の話をするのはこれっきりでお願いしたい。

能力については、俺の食欲≪グリード≫関連の使い方以外は全て教えてしまった。

フミの能力について話したとき

「ウィルスって事は、病気をどうにかできるのかい！？」

「すげー！！病気に関しては万能薬じゃねーか！！」

２人とも医者だけあって、ウィルスが見えるという所や色々なウィルスを体の中に入れているという事をいった時には、とても目を輝かせていた。

しかし、俺が

「たぶんどんな病気でも治せるんだぜ」

って言ったときにチョッパーが少し暗い顔になった

「そうか・・・お前らがもうちょっと早く来ていればドクターは・・・」

「チョッパー！！」

ドクトリーヌがチョッパーの言葉を大声で制した。

「あ、えーと・・・能力はそんな感じです。」

周りの空気が重たくなったので、とりあえず俺が口を開いて何とかする。

「そうかい。・・・あんたたち、私に協力する気はないかい？」

「へ？」

「私が診た中でいくつかよくわからない症状の患者がいてね。私に付いてきてもらってもいいかい？」

「え？」

「ああ、それなら私からあなたたちになにかしなきゃいけないねぇ。」

俺らが患者を診ることに付き合う側なので、何かお返しをしなきゃいけないということだろう。

「ふぁい！　フミ達はお世話になっている身なので、この島の住人にお返しをしなきゃいけないんです！！　だからかまいません！！」

そしてフミ、優しすぎ。まぁ別に俺はいいんだけどね。

「お前、やっぱり変わったやつだな！」

「チョッパーより変わってる人なんているんですか？」

「お前ほどじゃない！そんな妙な体持ちやがって！！」

「チョッパーだって変形できるじゃないですか！！　何を言ってるんですか！！！」

どうやら、チョッパーとフミは仲がよくなったらしい。

以前は学校で口喧嘩って結構あったけれど、どれもその後険悪な雰囲気になってたよな
でも、これはそれとはまったく違う・・・自分でもうまく説明はできないけど、陰湿なものではない。

というか見ていて気持ちいいくらいだ。
全く・・・こういう喧嘩がなんで現実にはなかったんだろう。

ちなみに前の世界の中学では普通に虐めが横行してた
というか、俺がいじめられる側だった。

よく廊下で足をひっかけられたりトイレ掃除を1人でさせられたり、陰口を目の前で言われたりしたものだ。
それについて指摘したら「え?誰もお前だなんて言ってないじゃん(笑)」って言われた。

誰を頼ろうにも頼れる人間は1人もおらず、ただ毎日いじめられる日々。

教師に相談しても、ちょっと注意するだけで終わらせるから何も解決しない

それどころか「お前チクっただろ?」という言葉と共に「うわ最悪～」「キモッ！」「こいつ死ねばいいのに（笑）」という罵声を集団で浴びせられた。

これが、いじめられる側が引きこもったりする原因だろう。
テレビとかで「いじめられる側にも原因がある」とか「それくらいで引きこもるなんて精神が弱い」とか言ってる人間がいるけど、俺はそういう意見を持ってる人間は何も知らない、現実を見ていない温室で育った坊ちゃんだと思っている。
だから、そんな意見を聞いただけで胸がむかつく。

あと、1番ひどい時には・・・
体育の時間グラウンドでサッカーをしていたのだが
教師がいなくなった瞬間に俺といじめる側と傍観側にわかれて、ボールをいじめる側が俺に向かって蹴ってくる。
当然避けるが、俺の周りは囲まれているので、またボールをこっちに向かって蹴ってくる。

そして、見張りの奴が「戻ってきたぞ」というまでそのループが続いたものだ。

そして高校に入ってからは中学の人間は1人もおらず、やっと安心して生活していけるようになったのだ。

友人もできて、

まぁ、この世界に来たせいで、そんな良い思い出や悪い思い出が大量にあった生活は全部無くなっちゃったけどね。

ちなみにそれで引きこもったことはない。

いや、あまりにも酷かったときは最長2週間くらい学校に来なかったことはあったが・・・

「セイル？また深層心理空間に迷い込んだんですか？何ならフミが蹴っ飛ばして引き戻してあげても」

「ハッ！！　・・・・・・ちょ、何怖いこと言ってんの！！　大丈夫だから！！！」

おっと、少し考え込みすぎていたようだ。というかフミが怖い。こいつ、言った事は本当に実行に移す人間だからな・・・

少し暗い気分になってしまったが、ここでそんな事を思い出しても仕方ない。今度思い出しそうになったら、ここで生きることと元の世界に帰る方法を考えよう

「ヒッヒッヒ、坊やも傷の治療が出来たらよかったのにねぇ」

「あー・・・んー、さっき話したとおり俺は人間の体の単純な部分

ならどうにでもなるけど、神経とか血管とかはイメージが出来ないから無理で・・・」

「そうです！セイルは役立たずです！！」

いつもどおり、フミがバッサリと切り捨てる。

おい、その言い方だと俺が無能みたいじゃないか。いや、将来ニートになる夢は抱いているけど。

「ん？でもそれだったら医学の勉強をすれば良いんじゃないか？」

チョッパーがそう言った。

んー、でも医学の勉強ってかなり大変でしょ？

大学入試でも医学部ってそうとう難しいらしいし・・・

「でも、やっぱり難し「そういやそうだねェ。」・・・え？」

くれはさん？

「そうです！！これでセイルが傷を治せるようになれば完璧です！！！」

え、ちょま
フミさん?まさか乗り気ですか?そしてさっきと打って変わって”
完璧”ですか!?

「よし、その分のお返しは坊やに記録≪ログ≫が溜まるまでの１０日間に勉強の仕方と最低限の医術と若さの秘訣をみっちり叩き込んでやるよ」

え?・・・え??・・・・・・え???!

「よし、そうと決まれば俺がまずこの家の案内をしてやる!!資料ならいっぱいあるぞ!!」

あれ?チョッパーさんまでそんな・・・

これってひょっとして医学勉強≪しぼう≫フラグ立った?

## 第４５話　中学時代のセイル（後書き）

この作品はフィクションなので、作者とセイルの過去とは関係ないです。

折角こういう作品をかいているのだから、いじめ問題について多少取り入れてみました。
ちなみに、作者の意見は一番下に書いています。

それにしても時間が（ｒｙ
感想の返信を（ｒｙ
・・・感想を書いてくださっている皆様、本当に申し訳ありません。作者も受験勉強でかなり忙しくなってきました。なので時間がなかなか取れない状況なのです・・・

チョッパーはフミとそこそこに仲良くなりました。
ボケとツッコミの関係が成り立ってます。ただし、ボケは超毒舌で突っ込みは超まともですが。

ドラム島の記録≪ログ≫は結局１０日間にしました。
特に意味はありません（キリッ
しかし、医学の勉強をする事になったので９日のうちにどれだけ勉強方法を教われるでしょうか。
かつては医療大国と呼ばれていたほど医術のレベルが高かったようなので、資料に関しては困ることはなさそうですね。
あ、９日間で医学を覚えるわけではないですよ。

「どの分野を勉強するか」とか「どういう勉強方法をするか」とかそういう類のものです。
毎日のトレーニングもあるのに、これを加えると自由時間がどんどん減っていきます。まぁ船の上なら暇だし問題ないでしょうが。

Ｄｒくれはの「若さの秘訣かい！？」を入れるシーンがこの２人だとどうも見つからなかったので話の途中に入れました。
無理やり感がある？何のことでしょう。

←※この先作者のいじめに対する多少暴言的な意見が書いてあるので観覧注意！！

私と作品とは一切関係ないですが、私のいじめに対する認識はセイルと一緒です。
親も頼れない、教師も頼れない、学校は義務教育、学校に行かなければ高校入試で落とされる

よく、親が「頑張って学校に行きなさい」って言うけどこれでどうやって「頑張ればいい」んでしょうね？

本当に「いじめられる側にも問題があるんでしょ？ならいじめる側だけが悪いわけじゃない」って言ってる人間の思考が理解できません。

例えいじめられる人間に原因や問題があったとしても、それを理由に日頃のストレスをずっと晴らし続けたりしてるから問題なんでしょうが。

一度や二度なら誰も”問題”として取り扱ったりしないでしょうが。

「いるだけで目障り」「しゃべり方がウザい」なんて話もよく聞きますが、そりゃあんたらの傲慢でしょうが。許せないです

ごめんなさい。暴言、長文失礼しました。

ではまた次回お会いしましょう。おやすみなさい！！（現在午前1時半）

## 第４６話　ドラム島感染症患者は（前書き）

今日とらドラの小説1，2巻買いました。原作より主役ヒロインが毒舌でした
フミとはまた違うタイプの毒舌でした。

え?そんなのしらねーよ?・・・ごめんなさい。

とらドラの小説を書きたいと思っているのですが、ハードルがかなり上がりそうです。キャラ1人1人の心理を読み取るのが非常に難しい。
だが、俺はこの小説に区切りがついたら書く！（キリッ

# 第４６話　ドラム島感染症患者は

「お願いです！！夫を助けてください！！！！」

「そう焦るんじゃないよ。私らは治療しに来たんだから、逃げやしないよ。で、坊や。症状は変わったかい？」

「ううっ・・・相変わらず息が苦しい・・・です・・・」

「ヒッヒッヒ・・・何かわかったかい？小娘」

「この人の口からインフル君です！！」

「・・・なるほど、そうかい。チョッパー、こいつの病気を全て当ててみな」

「わかった。えーと・・・・・発熱、胸痛、呼吸困難、高熱や筋肉痛というインフルエンザの独特の症状・・・」

現在

俺、フミ、Ｄｒくれは、チョッパーの４人でソリに乗って感染性の重症患者の家を回っている。

こういう患者は普通はくれはが診る前に即急に”イッシー２０”の
所に行くのだが
患者が危険な感染症であるとイッシー２０の人間が報告するや否や

「おれ様の城に何故そんなカバなものを持ち込んだ！！泊めるなん
てとんでもない！放り出せ！！！」

その一言以降、感染症の患者は広く蔓延するまで治療されることな
く自宅療養。
それには流石のイッシー２０も反抗したようで

「そんな！！ワポル様！！このままでは多くの国民が病気になって
しまいます！！」

「カバめ！！そんな愚図な愚民のせいで王様であるおれ様が病気にかかったらどうするんだ！！」

の一言で一蹴。

蔓延すれば流石にイッシー２０を治療に動かすようだが、それまでは完璧放置という恐ろしい放任。

幸いにもまだ拡大していないものや、自宅で治療ができるものならばいいが
拡大しづらいものや合併症に関しては治療がされないため、死ななくてもいい人間が死んでいくという事態もあった。

Ｄｒくれはが、今までこういう患者を治療できなかった理由もそんな所にある。
感染性のウィルスを防ぐ術（アルコール消毒等）がなければ、いくら知識があるとはいえ広めてしまう危険がある。
しかも、治療できる場所が当人の家しかないので二次感染（治療中に他のウィルスに感染したりする事）の恐れが大きい。

手術用の設備や輸送手段があれば何の問題もないのだが
患者にとって安全な輸送手段は国王軍に見張られて使えない、追放された医者の家にあった医療器具も全て財産として没収されてしまっている。消毒用アルコールも、この島では貴重品だ。

今だから、フミという『ウィルス人間』とＤｒくれはという医者がそろっているのでこういう医療活動ができるのだが。

そんな訳で、今はそんな患者の家を回っているわけだが・・・

「わかった。インフルエンザもそうだけど、急性心膜炎も起こしているんだ」

「あたしもそうだと思うよ。『感染性心膜炎』だろうね。胸痛に呼吸困難、しかもここまでやせ細っているという事は食欲不振もあるんだろうねェ。ま、ここまで弱ってりゃ食欲も何もあったもんじゃないだろうがね」

それを聞いて、俺もくれはの家から借りてきた医学の辞書を捲ってみる。

「えーと・・・急性・・・あった。急逝心膜炎・・・・・・・・・あ。

これか！」

・急性心膜炎

感染による合併症、悪性腫瘍や心筋梗塞、心筋炎、外傷や放射線照射が原因。
原因不明の場合も多い。

発症すると、胸痛・呼吸困難・反回神経圧迫による嗄声・発熱・発汗・倦怠感・食欲不振・体重減少などの症状が現れる。

場合によっては心タンポナーデ（心臓の中に血液が溜まる）状態になることがあり、そうなった場合は生命に危険が及ぶ場合もある

ちなみに、何故辞書を持っているかというとくれはに「医学の勉強をするんなら、まず調べることに慣れておきな」と言われたので貸してもらって持ってきたのだ。

それにしても、この分厚い辞書の発行場所がドラム王国になってるぞ？

辞書の厚さは、言うなら人間の太もも、学校においてあるような国語辞典の2倍、顔の3分の2ほどの大きさがある。半端なく大きいのだ

やっぱりかつてはすごい医療大国だったんだなぁ・・・とつくづく思った。

こんなにも素晴らしい国の魅力であり、大きな国の収入源にもなる医者達をどうしてワポルは追放できたんだろうか？という疑問も大きいが。

「ウィルスの治療は小娘に任せても大丈夫のようだから、急性心膜炎の検査に入るよ。チョッパー、医療器具を持ってきな」

「うん。」

そう言って、チョッパーが家の隅に置いてあった自分らが持ってきた医療器具を咥えて戻ってきた。

「じゃあ、検査といこうかね。小娘、終わったなら手伝いな」

「ふぁい！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

「ヒッヒッヒ・・・治療、終わったよ」

「どう？！楽になった？！！？」

「ああ・・・さっきよりマシになったよ・・・」

妻が必死に語りかける中、夫は弱弱しいものの、先ほどより生気のある声でそう言った。

「ありがとうございます！！お礼ならなんでもします！！！」

「残念だけど、この病気は本来は入院しなきゃいけないない位の病気な

んだよ。だけどうちはそんな施設がないからまだ苦しむようなら、この青電伝虫≪あおでんでんむし≫を使いな。全部終わったら報酬として、この家の財産の５０％を頂くよ」

「お支払いします！！だから夫をよろしくお願いします！！！」

一見、夫を人質に金を要求しているように見えるがそうではない。

くれははくれはで、全員が承知で誰が相手でも変えることのない料金を請求している。

しかも、夫も妻もその値段で命が助かるのだから安いと考えているのだ。感謝さえしている

こういう腕も立ち、誰にでも平等に接する人間だからこそ、Ｄｒくれははこの島で医者として何年も活動を続けられたのだろう。

もしこれで人によって料金を変えていたり、ヒルルクのように医者としての腕がアレだったら受け入れられなかっただろうが。

ヒルルクは、死んでも患者を助けるという心で続けていたから後に受け入れられたのだろう。

「よし、チョッパー。次の所に行くよ」

「うん。次はロベールだね」

日が暮れるまで、患者を回るために次の町に行く用意をしていた。

「そういえば、Ｄｒくれは「その呼び方は面倒だから、ドクトリーヌとお呼び」・・・ドクトリーヌ。これは何？」

「さっき、狭範囲専用の”青電伝虫”を渡してたじゃないか。」

「”青電伝虫”って？」

「そんな事も知らないのかい？範囲は狭いけど、”黒電伝虫”でも傍受されない念波を出せる種類の電伝虫だよ」

ああ、俺の知らない電伝虫か。

『小』『黒（盗聴用）』『白（盗聴妨害用）』『金（バスターコール用）』『銀（バスターコール受信用）』と、映像やＦＡＸを出す電伝虫があったのは覚えているけど。

「そいつは、患者専用に使うためのやつさ。くれぐれもかけちゃ駄目だよ。受信用だからね」

ピシャリとそう言われて、少しびっくりした。

「セイルー、このでんでん虫？って言うんですよね。アオは生きてるんですか？」

「え？あー・・・生きてるんじゃない？」

てのひらにある電伝虫は、薄目を開けて「何よ、うるさいわね」とばかりに恨みがましい目でこちらを見ていた。
電波ならぬ念波を受信していない間は常に寝ているので、起こされて不愉快だったんだろう

「あー・・・なんかゴメン。寝てて」

俺がそう言うと、アオ（いつのまにか命名：フミ）は「なんで起こしたのよ！！次に起こしたら許さないんだから！！」みたいに顔を横に向けながらこちらを見ているというツンデレ風の目と、少し朱色に染まった頬（いや、そう見えるだけだが）を見せた後、再び眠りについた。

こういっちゃ何だが、何で電伝虫がツンデレだったのだろうか。よくわからない。

しかしフミは何かに気づいたらしく、この電伝虫のツンデレ性に突っ込んだら俺に向かって

「え？鈍感だったんですか？」

って振ってきた。

おい、それってまさか・・・電伝虫に惚れられた？

え？え？

・・・・・・・・

うわああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああ

## 第４６話　ドラム島感染症患者は（後書き）

前回のいじめに対する私の意見で、たくさんの返信がありとても驚きました。
忙しくて感想の返信ができなくなっている状態ですが、ちゃんと見てます！いつもありがとうございます！！

やっぱり、いじめって最悪ですよね。
学校行ったらやられるし、行かなかったら社会不適合者の烙印を押されるし・・・
ちなみに、あの中で少しだけ黒の実話が含まれております。
やっぱりいじめてる側は、いじめられてる側がどんな状態で学校に来ているかとかわかってないんですよね。やっぱり自分がいじめられる側にならないとわからないものなのでしょうか・・・

急性心筋炎については、ググって調べました。
情報をあわせてわかり易くしたものなので、間違いや説明不足などがあると思いますがお許しください。
なので、正確な症状を知りたい方はこの文を一切当てにせず、専門家（医者）に聞いてください。
検索しても、色々と情報は出てくるとおもいますが、くれぐれもグーグル病にだけはならないように・・・

またワポルの悪政が増えちゃいました。
それにしても、ワポル兄の出番がありませんがいつになるんでしょうか・・・
そのうち、『戦闘を書かないと死んでしまう病』になりそうですｗ

電伝虫ですが、他にも色々種類がありそうだったので青色で出してみました。
イメージとしては、電話と違い、オモチャのトランシーバーみたいなものなので傍受される危険性がない・・・という感じです。
某死のノートからアイデアを頂きました。

セイルは、現地の治療を見て勉強中
フミは、能力でウィルス避けと説得回収。
くれはとチョッパーは治療です。
こうして見ると、フミはウィルス性の病気に関しては万能薬です。
しかし、怪我や寄生虫や生活習慣病などはどうにもならないでしょうが・・・
セイルなら寄生虫や腫瘍（取り除き方を気にしなければ）に関しては何とかできそうですね。

電伝虫がツンデレ風味です。あくまで目線と頬の染まり方だけでの判断ですが。
とらドラ呼んでたらそうなりました。ごめんなさい。声は・・・ご想像にお任せします。

セイルも、フミのおかげで弟子入りみたいな感じになってます。
なので、ドクトリーヌって呼んだほうがいいかな?と思ったのでこれからセイルはくれはに対しては『ドクトリーヌ』と呼ばせることにします。
そういえばチョッパーって、くれはに対してドクターって呼ぶシー

ンあったっけ？

果たしてセイル×ツンデレ（？）青電伝虫ルートはあるのでしょうか！？

それではまた次回！！

# 第47話　平和な4人組

「ヒッヒッヒ・・・今日はここまでだね。明日はココアウィードとビッグホーンを回るよ。ゆっくり休んでおきな」

「ふぁい！おちゅかれ様です！！」

フミが可愛い噛み方をしたので、俺は思わず吹きだしてしまった。

「小僧、あんたはずっと勉強だから休みは無いよ。」

「え〜」

俺の奇声を聞いたフミに逆に吹きだされてしまった。

現在時刻、午後9時。

今日はいくつかの町を回って5人ほど患者を診た。

1つの町に1，2人なので、ここまで多く診察できたのはドクトリーヌの腕とそりを引いてくれたチョッパーの足のおかげだろう。

病人の中には、インフルエンザから環境の悪い場所で起こりやすいチフスの患者までいた。

税率の増加の影響で診察料がなくなり、家や自分の体の衛生環境が悪くなっていった結果だろう。負の連鎖もいいとこだ

なおチフス患者は2人いたが、そのうちの1人患者を診ていたら妻の周りにもチフス菌が飛んでいるのに気づいたらしく「せっかく胆嚢に家を作ってたんだから邪魔するな」って妻の周りに飛んでいる菌たちに言われて相当困ったらしい。

結局、妻と夫の菌はフミが全部『全員、他の菌と仲良くしてくれるなら不自由しない環境を別に提供する』という条件を出した末に引き受けてくれた（らしい）。

こんな治療法を聞いたら、世界中の医者が卒倒か激昂するだろうな・・・

というか、医学への冒涜じゃないかなこれ？
まぁ、結果患者が助かってるからいいとは思うけど。

「じゃあフミは寝ます！！」

「あ、ああ・・・お休み・・・」

ちなみに、訓練は島に上陸している間は休みにしている。
船とは環境が違う上、今回は医学の勉強と言う事もあり時間が無いのが理由だ

「さて・・・坊やはこれから教習の時間だよ。覚悟しな・・・」

「ヒイッ!!!」

セイルは違う世界に行っても勉強をする羽目になったためか、その時は涙目だったという。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

「ヒッヒッヒッ、ああ、もう3時半か。小僧、4時間寝ていいよ」

夜９時から朝３時半までぶっ通しで勉強しました。
勉強開始前に患者の家を回っていたせいでものすごく疲れている所にぶっ通しで６時間半の勉強。

これで疲れていない人間がいたら、そいつは機械か幻獣かＣＰ９くらいのものである。

ＣＰ９って一週間くらい徹夜しても問題なさそうに見える。一応政府の隠密暗殺部隊で人外の超人軍団だし

「あ、もう駄目・・・」

俺が最後に見たのは、机のすぐ後ろにあった（配置に悪意を感じ続けていた）完全無菌・・・フミのおかげだが、患者用ベッドが目の前に迫ってくる場面だった。

「おやおや、この程度でへばっちゃって。今時の子供は体力がない

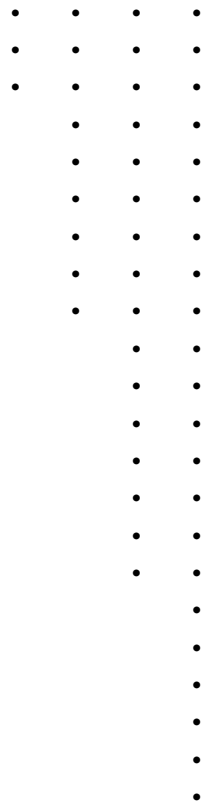
ねェ」

残されたくれはも、流石にそろそろ寝なくては”若さの秘訣”を保てなくなるので寝ることにした。
家の真ん中に置かれている青電伝虫（ツンデレ）が、患者から何かあったとき知らせてくれるので大丈夫だろう

しかし、くれは自身もこれだけ早く重病患者が片付くとは思っていなかったので、明日にはすべての患者を診終えることができるという計算に驚いていた。

ただ、今は順調に行っているが唯一気がかりなのは、何といってもこの国の国王ワポルだ
側近や兵士が、自分らが重症患者を治療して回っていることを知ればこの事態を放ってはおかないだろう。

だからさっさと全て片付けてしまいたいものである。
厄介事になる前に・・・



次の日　午前7時半

「全員起きな!!仕事に行くよ!!!」

「うー・・・・」

「うー・・・ご飯ですか?」

「Ｚｚｚ・・・」

チョッパーは、目をこすりながらくれはの方に向かっている。
フミは完全に寝ぼけていて持参のパジャマを、若い男が見れば誰もが『畜生!!見えない!!!』と叫ぶような位置まで開いた胸部と、画像投稿サイトに投稿してギリギリセーフで削除されない位の下半身をはだけさせながら、食事のことを考えていた。
セイルは、そんなフミの姿を見れないまま昨日の疲れで眠りについていた。

「チョッパー、医療用具とソリの準備。小娘は・・・そのみっともない服装じゃまずいね。着替えてからしばらく待機。そして・・・」

4時間くらいしか寝ていないのに眠くないのか?と突っ込みたくなるほど明確に淡々と指示を出すくれは。（そして、急いで服を直すフミ。）

「小僧！！！さっさと起きて支度しな！！！！！！」

セイルは今まで経験したことはないが、覇王色の覇気と勘違いするほどの殺気を感じて脂汗を流しながら飛び起きた。

・・・飛び起きなかったら、くれはの凶器投げが炸裂していたので起きて正解だろう。

主に、ナイフとか槍とか弓とかが飛んでくる。メスは医者として飛ばさないようだがそれでも包丁が危ないことに変わりはない。

無論くれはは覇気は使えないのでセイルに刺してダメージを与えることは不可能だが、この殺気を当てられると何となく死の恐怖に身を震わせてしまう。

それほど、くれはの殺気は凄まじかった。

「まだ・・・眠いで」

「さっさと支度を済ませないと、飯抜きの上外の木に縛り付けるよ」

有無を言わせないくれは。そして凄まじい威圧感を出しながらの脅迫・・・これで屈服しない人間がいるとすれば、それは白ひげくらいのものだろう。と、ふと思った

そして、準備を始めたのだが・・・

「ふぁい！！？　セイル！！　着替え中なんですから入ってこないでください！！！！！」

「うおっ！？」

ドンガラドンガラガッシャーン（フミに吹っ飛ばされて階段を転げ回るセイルの音）

「うわっ！？　何か落ちてきた・・・ってお前かぁ！！！」

「イテテ・・・何も殴り飛ばさなくても・・・」

「女の敵！！　痴男子！！　だけどそんな人間がセイルなんですよね！！」

ドガッ（セイルの心に何かが刺さった音）

「ええ!?　お前・・・まさか覗」
「誤解だ!!　完璧に誤解だ!!!!　そしてフミ!!　お前は何なんだ!?!?」

プチッ（何かが切れる音）

「フミの着替えが見たいなら堂々と来ればいいじゃないですか!!
その時は窓から１０ｍほど吹っ飛ばしてあげます!!」

「ふっ飛ばしたいの!?　そして顔を赤くするくらいなら言うな!!」

「お、お前ら・・・?そろそろ静かにしないとドクトリーヌが・・・」

ガッチャーン（ビンが割れる音）

「あんたら！！！　うるさいよ！！　用意しないと、全員昼飯も抜くよ！！！」

今日の朝も、ギャスタの外れの大木は平和だった。

# 第４７話　平和な４人組（後書き）

平和（笑）

結局毎日更新できている罠。
あれ？おかしいな。更新速度が落ちる予定だったのに・・・
昨日は三千字くらい書いてしまったし・・・あれ？

チフス患者については、ｗｉｋｉｐｅｄｉａに載っていたメアリー・マローン氏を参考とさせて頂きました。
ちなみに、メアリーさんが「邪悪な感染源」か「不運な社会的被害者」かについては私は後者だと思います。
記事を見る限りでは、彼女には国に勝手に仕事を奪われたと思って行動した　という風に見えたので。
ただ、彼女の最大の不運は本当にチフス菌保菌者であったことでしょう。
社会を相手に、よく戦ったと思います。不幸なすれ違いと、傲慢な国の対応が招いた結果としか言いようがありません。

訓練ですが、素振りくらいならできるかな？と思ったのですが、医学の勉強（勉強方法や基礎を教わるだけだが）をするとなると相当な時間がかかってしまうと思い、全面的に休みにしました。
なので、これからしばらくは寒空の下で仕事をしたり勉強をするだけになります。

9時くらいに寝て7時半におきているため、目覚めはとってもいい筈なのに、微妙な姿で寝ぼけている辺りやっぱりフミですね。
というか、これが意図的だったらフミは悪魔ですね。
ああ、それにしてもフミかわいいよフミ・・・おっと。

ちなみに、作者は『フミのために絵や小説を書いている』と言っても過言ではないので、病気がかった発言はお許しください。
どう見ても基地外です本当に（ｒｙ
自覚症状はあっても、直す気がないです！

くれはは、怒らせるとものすごい殺気を放ちそうですよね。という訳でこんな結果に
実際に覇王色の覇気を使っているわけではありませんが、この威圧感がいつでも出せれば偉大なる航路で海賊をやっても通用するでしょう。
その位凄まじいです。

さて、では私もそろそろ勉強頑張ってきます！！！
皆様も、今日も頑張ってください！！

## 第48話　"ブリキの"ワポル（前書き）

ついに、1日更新できなかった・・・
でも、受験だから仕方ないよね！！

今週と来週は日曜日も通わないといけないし・・・大変です。
英語が大幅に遅れてしまっているので・・

# 第４８話　"ブリキの"ワポル

ＳＩＤＥ　ワポル

「恐れながらご報告します。ワポル様」

目立つアフロ頭を持ち、手にはボクサー用グローブをはめた悪人面の男・・・おれ様の部下だが、おれ様に話しかけてきた。

「何だ?クロマーリモ」

「Ｄｒくれはが、この町の住人の治療をしているそうです」

「そんな事でおれ様に話しかけたのか?」

「いえ、それが先日入国してきた人間を連れて患者のところを回っているそうです。」

「あぁ?あの忌々しいババァといる人間なんかいらん。消してしまえ」

面倒ごとを持ってきやがって。おれ様は、あんちゃんの事で忙しいというのに。

「いえ・・・それが」

「あァ？」

おれ様のもう1人の部下・・・道化師のような格好をしたチェスも話しかけてきた。

「その2人、入国料を払っていまして口実が」

「そんなもの、あのクソババァと一緒にいる時点で消せばいいだろう」

いつもならそれで良かったが、今回はチェスもクロマーリモも、珍しく少し深刻な顔をしていた。

「それが、その2人が来た途端にうちで治療させなかった病人を次々と治しているのです」

「その入国者2人は、相当な医者かと・・・何せ、イッシー20でも”治せない”と言った患者も治したらしいので」

「それがおれ様と何の関係があるというんだ？」

「ですから、その2人を上手く騙せばＤｒくれはを捕らえられる上その2人を医者として我がイッシーの一員にすることができるかもしれないということです」

「おお！成る程！！頭がいいなお前ら！」

おれ様はそんな事考え付かなかったぞ！

流石は我が優秀な部下！！

あの生意気なドルトン君がいなくても、この2人さえいれば十分じゃないか！！

「では、その件については手配しても？」

クロマーリモがそう聞いてくる

「おー！好きにするがいい！おれ様は今とても気分がいいぞ！！」

「ハッ、では失礼します」

チェスはここに残り、クロマーリモは作戦を立てるために無駄に煌びやかに飾られた王室を出て行った。

この飾りは、先代国王が死んでワポルが王になってからすぐにつけられたものだ。

ちなみに、税金で買ったダイヤや高価な絵などが飾られている

「おーい！」

「あ、あんちゃん」

一息ついたと思ったら、俺のあんちゃんが声をかけてきた

「おれの事は”お兄たま”と呼べと言っているだろう！！」

「わかったよ、あんちゃん。それで、どうした？」

あんちゃんと呼ばれているこの人物こそ、ワポルの兄であり”ノコノコの実”の能力者であるムッシュールである。
頭はキノコのかさの様になっていて、顔には妙なアイマスクにごついヒゲ、棘のついた肩当てと厚手のコートを右側だけに羽織るという特徴が濃い、すごぶる妙な格好をしている。

「いやぁ、あんまり城にいたから暇なんだよ。あいつに付いていってもいいか？」

「ああ。」

ワポルも兄に対しては傲慢ではないようで、ごく一般的に話している。

そして、その”あんちゃん”はワポルの言葉を聞くや否や飛び出していった。

「あんちゃん・・・元気だな」

そう思った。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

城での会話から数時間後。

「よし、次の家に行くよ」

「ちょ・・・ちょっと待ってくれ・・・流石にもう疲れ」

バタッ

現在時刻、午後3時
また患者の家を回って、ソリに乗り込んだところだ

体調はくれは、チョッパーは普通。
フミはなぜかすごく元気。何かいいことでもあったんだろうか？
一方、俺はやばい。眠い。おなかすいた。
しかももんのすごい疲れた。死にそう
具体的に言うと、

「何を言ってるんですか？　こんなにいい天気なのに寝てたら勿体無いですよ！！」

フミが強引に俺の顔をソリの床から引っ張り出し、無理やり座らせた。

「いや・・・俺昨日かなり起きてたんだが・・・勘弁して・・・」

「何を寝ぼけてるんですか？　もう起きないと遅刻しますよ！！」

「い、いや、どこに遅刻するんだ・・・俺学校今通ってないし・・・」

以前ならともかく、今は島を転々としているので学校とは無縁。

そういえば、通ってた高校は既に2ヶ月以上放置していることになるので退学か停学になってるんだろうか・・・？

というか、それ以前に俺は行方不明扱いだろ？

ニュースで「高校生が神隠し！」みたいな事をやってるかもな。

何せ、貯金は全額手をつけずに銀行と（探せばすぐに見つかる）部屋の中に入れてある。
書置きや遺書もない。親戚や友人の家のどこにもいない。
高校に入ってからは断然”楽しい”と親にも言って色々な土産話をしているし、いじめという事実がないことは俺の友人や教師が証明しているはず。

だから、多分ニュースで騒がれてる。

または、警察が誘拐事件か何かで捜索してると思う。

「フミを見てください！！　朝起きたらなんか肌がツヤツヤになってたんです！！」

そう言われてフミを見ると、いつもより肌が・・・なぜかつやつやだった。
原作でサンジが言ってたように、雪国だからだろうか？それとも・・・

「何をニヤついてるんだい？　そんな暇があったら・・・辞書でも読んでな！！」

そう言って、俺の腹にパンチをかます。

「へ？」

くれはが少し驚いたような声を出した。
それも当然。俺の腹は、穴が開いていて一部がないのだ
拳は多少服に邪魔されながらも、そのまま腹を突き抜けて貫通してしまう

「あー・・・以前でっかい氷柱にぶっ刺されまして・・・その痕なんです」

チョッパーは何が起こったかは前を向いていて見てなかった様だ。

「あんたは、本当に訳がわからないね。医者を何だと思ってるんだい」

「うー・・・でも、その時に悪魔の実を食べてなかったら俺は死んでたんですよ？」

「そうです！　セイルがいなかったら私はどうなってたんですか！！」

「というか、そもそもあの時お前は一体どこから来たんだよ！！！」

「だから、気がついたらあそこにいたって以前も言ったじゃないですか！！！　細かいことを気にしたら嫌ですよ！！」

「・・・（ショボーン）」

フミが段々と、女性特有涙目状態になってきたので少し落ち込んでしまう。

「うそです！」

「は？」

「嘘です！！！」

「ゴルアアアアアアアアアアアア！！！」

セイルの怒声とともに、２人の間で口論が展開される。

「またいつものやり取りか・・・あいつら飽きないのかな？」

「放っておきなチョッパー。そのうち仲直りするから」

くれはは伊達に長く人付き合いをしてきた訳ではないらしく、既にフミとセイルの関係を見抜いているようだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

ソリを走らせてから数十分後

「いや、俺が悪かったたってば。ごめんって」

「いえいえ！　フミこそ嘘泣きしてごめんなさい・・・」

「いやいや、そんなのはいいんだけど、俺もひどい事ばかり言っちゃって・・・」

「フミこそ、いつも悪いことばかり言っちゃって・・・」

今度は先ほどから一転して、２人とも謝罪し合っていた。

「何だあいつら？　今度は謝罪合戦が始まったぞ？」

「放っておきな。そんな事より前を見な。ぶつかるよ」

なんだかんだ言って、この2人は仲がいいのだ。

チョッパーは気にしているが、くれははどうやらこの2人を完全にスルーする方針を固めたようだ。

「それより、これから、・・・・？」

そこまで言ったところで、くれはの口が突然止まった。

「え？どうしたの、ドクトリーヌ？」

「・・・チョッパー、気をつけな。馬鹿どもが来たみたいだよ」

「！？」

突然、ソリの動きが止まった。

チョッパーはその場に立ち止まり、くれはは落ち着いて目の前を見据えている。

しかし、セイルとフミはなぜか再び口論を始めていて、止まったことにすら気づいていない。

「フン、ようやく見つけたぞ。”医者狩り”最後の生き残りのＤｒくれは！！」

## 第４８話　＆ｑｕｏｔ；ブリキの＆ｑｕｏｔ；ワポル（後書き）

じ、時間がああああああああ

今回のセイル状態です。本気でつかれきってます・・・

なので、後書きは許してください。ｏｒｚ

# 第４９話　ドラム兵士、襲撃中（前書き）

最近発売された６１巻のＵＧ海賊団のコーナーに、マルコをパイナップルとして描いてる絵があって腹筋が崩壊しましたｗｗｗ

それにしても、９２万ＰＶに８万３千ユニークアクセスですよ！！！

よくここまでこれたなぁ・・・ここまでお付き合いいただいている皆様、本当にありがとうございます！！！

これからも、ぼそぼそ更新していくのでよろしくお願いします！！

・・・・受験なんて消えてなくなってしまえばいいのに

# 第４９話　ドラム兵士、襲撃中

「フン、ようやく見つけたぞ。〝医者狩り〟最後の生き残りのＤｒくれは！！」

全員が一斉に声のした方向を向いた。

「アフロ？」

「アフロだ」

「・・・・」

「ああ、アフロだねぇ」

目の前にあった木から、突然アフロのボクサーが降りてきた。

それを合図に、あたりの木の陰から王国の兵士が走って俺らのソリを取り囲んだ。

当然のごとく、全員からは銃を向けられている

「フン、お前らが最近入国してきた医者か。そこのババァにも因縁があるが・・・今回用があるのはお前ら2人だ」

「「え？」」

俺なのか？

私ですか？

「お前ら、そこにいるババァが誰か知ってるのか？」

そりゃ知ってますとも。

医者狩りの対象者で、法外な治療費を請求する医者で、Ｄｒヒルルクの意思を継いでる人間で、やたらと若くて、医者としての腕は確かで、チョッパーっていう能力者の鹿を連れていて、もうすぐお前ら海に出るけどその後で城に住む人間だろ？

少なくとも、お前らよりは知ってるよ。

だけど、そんなことを言ったら面倒なことになってしまうので今回はスルー。

「教えてやろう！！そいつは、この国の重大な法律違反をした婆だ！！！」

近くにいた兵士が俺らにそう言ってきた。

しゅ、こん

「お前さん、口の利き方に気をつけな」

「貴様！！！！！！」

「われらに手を出したな！！！」

婆といった瞬間、くれはがどこからともなく取り出した弩とその矢が兵士に向かって発射されていた。

「お前ら!!今はこっちが先だ。放っておけ!!」

だが、クロマーリモはくれはには動じなかった。

「チッ・・・面倒な。・・・だが見ただろう。そこの奴はいつ人を殺してもおかしくない奴だ。今我らとくれば、そいつらとは別な最高の待遇を約束しよう。」

不測の事態も、自分の都合のよいように変えるずる賢さ・・・流石は悪代官と呼ばれているだけの事はある。

だが・・・

「残念だけど、俺たちも患者の治療をしなきゃいけないんだよ。今すぐ行ってやらないと」

「そうですね。フミもまだお仕事が終わってないし、セイルも医者のお勉強しないと」

「いや・・・それは勘弁してくれ」

俺らはその誘いを断った。
ここでこの話を受けたら患者もほっぽり出すことになるし、何より俺の性分ではない。

「それは、この王国の国王であらせられるワポル様のご意思を無視するということかな？」

「そういうことになるかな？ごめんなさい」

とりあえず、丁重に謝ってみた。

「国王の頼みを断るとは不届きな奴め。ババァ共々始末してやる」

あ、やっぱり駄目ですか？

そういわれた途端、兵士がいっせいにこちらに銃を向けた。

「フッ、今考えを改めるなら荒事にはならんが・・・？」

「いや、ちゃんと入国料も払ってここまで来てるし法律違反も常識で考えうる限り1つもしてないと思うんですが・・・なんでこんなことに？」

「ワポル様の命令に背く奴は誰であろうと死刑だ。それがこの国の法だ」

もうやだこの国！！！

ワポル嫌い！！本人は何てことのない気持ちでやってるんだろうけど、迷惑が普通の比じゃないんだよ！！！

そして、チェスもクロマーリモもなんでノリノリなの！？本当に誰かこいつら止めろよ！！

「最後の警告だ。我らの所に来るか、それともここで一生を終えるか」

クロマーリモが、下種な笑みを浮かべて腕を組みながらこちらを見てきた。
最後通告が出たことで、周りの兵士達も同じ笑みを浮かべる

それを見たくれはは、思いっきり舌打ち。
チョッパーは、何か悔しそうに歯を食いしばりながら

「あなたたちは馬鹿ですか、そうですか。」

空気が凍った。

横を見ると、気持ちいいくらいに威風堂々とした（どや）顔で立っているフミ。
そして周りには「は？」という間抜け面をした兵士たちとクロマーリモと俺とチョッパー。

ちなみにくれはは、黙ってその様子を見守っていた。

「フミたちがそんな事するわけないじゃないですか！！　それと、これ以上口を開いたら死ぬより苦しい目に遭いますよ？」

後半の方は、明らかに敵意のこもった顔で言っていた。以前見た真っ赤なオーラが出てたし・・・

フミの『死ぬより苦しい目に遭います』は洒落にならん！
人を殺せるレベルの疫病や伝染病の大量保菌者だぞ！？　しかも、自分の意思でばらまけるし！！

「おいフミ、それは本気でやめろ。制御きかなくなったらどうするんだ」

「え？」

「考えてみろ。お前と知り合ってる奴はいいが、そいつらが子供を生んだらどうする。勝手に動き回って国が滅びるだろうが」

「ああ・・・確かにそうですね！！　頭いいですね！！」

「いや、それは常識だ」

「おい！！馬鹿にしているのか？！・・・仕方ない、全員用意！！」

あ、完全にクロマーリモのこと忘れてた。
フミと話してるとつい忘れちゃうんだよね・・・言い訳になってない？　知りません。

そんなのんきな事を考えてるうちに、俺たちのソリに銃が向けられた

「小僧、どうするんだい？」
「おい、お前ら・・・この後どうするんだ？」

チョッパーとくれはは生身の人間なので、当然銃を撃たれればダメージ・・・いや、この人数なら蜂の巣にされて終わりだろう。
これでチョッパーとくれはがいなくなったら、後から来る麦わら海賊団はどうなるんだ？ナミはケスチアで死ぬだろ？

え？イッシー２０がいる？
あいつらケスチアの抗生剤は持ってないんじゃない？　古代の絶滅した病気らしいし。

まぁ、この場での答えはどう考えても一択だね。

能力を使ってでもいいからとにかく
「よし・・・逃げるぞおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

俺が大声を出した途端、チョッパーが全力で走り出した。

## 第４９話　ドラム兵士、襲撃中（後書き）

ワポルが嫌いと書いてますが、作者は普通にワポル好きです
まぁ、ゲッコー・モリアには敵いませんが。モリアさん格好いいよモリアさん

そういえば、今日コンビニを見たらスリラーパーク編の特別編集の漫画が出てましたね。
早く、影の集合地のシーンが見たいです。アニメでのそのシーンの笑い声が頭から離れません（笑）

セイルは、口に出しているとき以外は基本「くれは」と呼ぶことにします。
”ドクトリーヌ”って書いてしまうと、後で”くれは”と混じっちゃいそうなので・・・ごめんなさい。作者の都合ですｏｒｚ

今回は短めになっちゃいました。
でも、最初に書き上げたときは１７００文字だったのでこれでも増量してるんですよ！！
ああ、ゆっくり考える時間と書く時間が欲しいです。

それと、２月２０日は模試があるのでその近辺は休むことになりそうです。
よろしくお願いいたします。

# 第５０話　キノコとソリとフミ（前書き）

５０話です！！！ここまで見てくださった方、本当にありがとうございます！！！

しかし、そろそろ模試や入試が迫ってきたりしてる関係で土日も休みが取れなくなってしまいました・・・更新が・・・

しかし、これかいてて受験落ちたら元も子もないので書けない分、勉強をしっかり頑張ってきます。
空いてる時間に精一杯頑張ります！！なるべく早く更新するのでこれからもよろしくお願いします！！！

# 第５０話　キノコとソリとフミ

「逃がすか！！！追え！！！！！！」

「うおおおおおおおおおお！！！？」
「早く走ってください！！！」
「さっきから全力で走ってるよ！！！」

ソリを引きながらチョッパーが全力疾走。そして後ろからは同じくソリに乗った兵士とクロマーリモ。

パァン！！！
パァン！！！
パァン！！！

ヒュン
ヒュン
ヒュン

「待て！！！全員逃すな、生きたまま捕らえろ！！！！」

銃弾は俺らを殺す気がないためか直接は当たらないが、ソリに当たって激しい音を立てているものもある。

「あー、面倒です！！！　もうやっちゃっていいですか！？」

「だから、やめろって。村にも被害出るんだから」

「だったら、あの鬱陶しい”バァン”を止めてください！！」

「それができたら逃げる必要ないだろうが！！！」

フミもイライラしながら後ろを見ている。

まぁ・・・さっきから怒ってて、それを発散できてないから仕方ないといえば仕方ないね。

というか、「フミにしてはよく抑えているな！」って言いたいくらいすごくよく怒りを抑えてると思う。

まぁ、言ったらボコボコにされそうだし言わないけどね。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・

ＳＩＤＥ　ムッシュール

「ここはどこだ？」

「う、うるさい！！さっさとここから出て行け！！」

「そうだ！！出て行け！！！」

アフロを追いかけてたら途中で見失っちまって、この辺を歩いてたら（彷徨ってたら）俺の周りに突然、この村の村人？に囲まれた。

「何だお前らは？」

「う、うるさい！！！何でもいい！！出て行ってくれ！！」

「そうだ！！」

村人側は、完全に俺のことを警戒している。

ひょっとして、俺が何年か前に打ち上げた花火のことか？

なんだ、あんなモンの事をまだ覚えてたのか・・・チッ、あのときのことを思い出したら腹が立ってきたぜ。

「おい、頼むから目の前から消えてくれ。邪魔だ」

「ふ、ふざけるな！！また能力を使うつもりか！？」

「やってしまえ！！」

おいおい、少しは俺の話も聞けよ・・・
そう思ってため息をついた。

実際のところ、その花火（毒性の強い胞子の詰まった爆弾）が打ち上げられ（爆発して胞子がばら撒かれ）たせいで多くの犠牲者が出たので仕方ないと言えば仕方ないのだが・・・
ムッシュールはそんな考えなど微塵も無いので、むしろ一方的に襲われていると勘違いした。

「傘乱舞≪シェードダンス≫！！」

ノコノコの実の能力で、頭のキノコから菌糸でできた弾丸を発射した。

当然、

ハァ・・・やっぱりなんか面倒だな。

そんな想い（？）を抱きながら、動かなくなった連中を放っておいて先に進もうとすると・・・

「あああああああああああ！？どいてくれえええええええええ！！！！」

「い！？」

突然横から怒声・絶叫と、全速力でこちらに向かってくるソリが見えたと思ったら・・・

目の前１０ｃｍくらいまで迫っていた

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ドンッ

「ちょ、人轢きましたよ！？！？」
「おい、あれ大丈夫なのか！？」

セイルとフミは、突然目の前に飛び出してきた

チョッパーも、全速力で走っている最中に突然飛び出されたものだから止まりようがなく、そのまま轢いてしまったのだが・・・

「ああっ、ちょっと戻らないと」

3人とも、人間を轢いたことで血の気が引いていたが

「あれは・・・！」

「？　ドクトリーヌさん、あの人は知り合い？」
突然くれはが妙な顔をしたので、ちょっと聞いてみた。

しかし、くれははそれを無視して

「・・・チョッパー、ソリをだしな。このままここにいると面倒な事になるよ」

「え？」
「フェイタルボムの小僧だよ」

「あ・・・わかった」
チョッパーはその単語だけで納得したようで、急いでそのまま走り出した。

「ちょ、放っておくんですか！？」

「フミ、落ち着け。フェイタルボムって単語に聞き覚えは無いか？」

俺は、その単語に聞き覚えがあった。
そう。この島に来て村人の子供をくれはの家に連れてくる最中に村人に教えてもらった事がある

『ああ、ワポルには兄貴がいてな。１７年前までは国王の息子としてこの国にいたんだが、退屈しのぎに自分の能力を試したために国民をたくさん殺して国外追放になったんだ』

『ノコノコ実の能力の中に、体内に溜め込んだ猛毒を１０年に一度体外へ砲弾として出す「フェイタルボム」というのがあってな。そ

れを国王のいないときに城の大砲から打ち出して大惨事になったんだ。』

『ああ、幸いにもその日は風が強くて大きな被害が出るのは免れたんだがな。だが、それで多くの人が死んだんだ』

「あーーーーーーーーーーーーーー!!!!!」

突然横でフミが声を上げたので、3人とも驚いた。

「うるさいぞ!!」
「うるさいよ!!」
「驚かさないでくれよ!!」

3人の声が一斉にフミに向かって、涙目になった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・

「じゃあやっぱり？」
「ああ、さっきの奴は間違いなく茸の小僧だよ。あの顔は間違いない」
「どうでもいいですけど、あの人の頭って全ておかしいですよね」
「え？」
「だって、すんでいる場所で爆弾打ち上げたり、胞子ばらまいたり、あの髪型なんか・・・」
一通り毒舌を吐くと思ったら、最後のほうで頬を赤らめて突然口が止まった

「？　どうしたんだ？」

「え、えーとですね。フミにも羞恥心というものがあり・・・」

「お前、今何を考えた？」

突然フミが顔を真っ赤にしたと思ったら、今度は真っ青になって

「何を言ってるんですか！！あんなものフミの知識にはありません！！！！！」

「お前はいったい何を言っているんだ」

「汚いです！！！」

「フミ、ひょっとしてお前・・・」

「うるさいよ小僧共！！！」

くれはが怒ったので、俺らは押し黙った。

「（で、何ですか？）ヒソヒソ」

「（いや・・・何でもない）ヒソヒソ」

「（気になる言い方ですね!!いいからしゃべってください!）ヒソヒソ」

「（いや、本当に下らない事だから）ヒソヒソ」

「言ってくださいよ!!女の子が頼んでるんですよ!!」

「女の子関係ない!!俺は言いたいときに言う!!それだけだ!!」

「だから、フミに隠し事をするんですか!!はけば楽にしてあげますから!!」

「楽にする!?何を楽にされるの!!ねぇ!?!?」

「小僧ども、よっぽど血を見たいようだねぇ？」

後ろには、出刃包丁を両手に持った鬼がいた

## 第５０話　キノコとソリとフミ（後書き）

（´・ω・`）ショボーン、ウッ
→
フミの涙目

途中で何でフミが頬を赤らめたかって？
それは各自でご想像ください。
あ、ただしその後フミが顔を青くしているシーンと合わせて考えてね！

いや、真面目に時間がない。
土日予備校とか無理。小説のアイデアを考える時間すらない・・・
ああ、早く受験を終わらせて続きを書く時間とアイデアを考える時間がほしい・・・
まぁ、その時間が取れるのは１年後だけどな！！！

## 第５１話　最終日の昼（前書き）

この前、映画を見直してきました。

ムッシュールの口調が大分違いますね。しかもワポルの事カバ野郎って言ってたし・・・

ノコノコの実って、体を胞子にできるなら自然系かな？
でも、バズーカとか当たってたしベースは茸そのものなのでしょう。
胞子なら自然系でもいい気がしますが・・・

それにしてもチェスとクロマーリモが可愛そうすぎるでしょあれ！！
不遇すぎですよ！　あの終わり方は！！

# 第５１話　最終日の昼

「次はどうすればいいんですか？」

「この前の患者から取ってきたウィルスがあるだろう。あれで薬を作るから少しこのシャーレによこしな」

「え？でもこの子達は全部私の友達で・・・」

「いいから早くしな！！」

「ふ、ひゃい！！」

「安心しな。殺すようなことはしないよ。・・・ところで小僧、寝たら飯を抜くよ」

ガンッ

「痛ててっ！？・・・何も拳骨をしなくても」

「本当は腹の方がよかったんだけどねェ。穴が開いてるから仕方ないだろう」

「いや、腹の方がダメージでかいですから」

「ドクトリーヌさん！入れましたけど・・・どうするんですか？」

「適温にして増殖させて、増殖したほうを使うのさ」

「ふぁい！？子供殺しです！！訴えます！！！」

「黙りな！薬を作るのにはそういう工程が必ず必要なんだ。」

あの逃亡から数日が経った今、俺たちはくれはの家に引き篭もっている

現在は、９日目午後３時。

滞在終了予定日が明日なので、あと２４時間くらいはいられることになる

そういうことで、この木の家の中では最後の地獄の追い込みが始まっていた。

難易度や疲労度はご覧のとおりである

ちなみに王国の兵士たちはこの場所は知らないようで、この場所までは追いかけてこなかった。
無論、ソリで滑った跡は他のソリの跡と混ぜてわからなくしたので証拠も残っていない

というか、そんなもの残したらこの国に撃ち殺されるから・・・
くれはやチョッパーを巻き込むわけにもいけないし。

あー、想像しただけでお腹痛くなってきた。

「でも、この子も私の子供です！！」

「お黙り！！　子供だろうがなんだろうが、この場で渡さないなら・・・」

と言って、ナイフを突きつけるくれは。

そしてフミは、菌に思い入れを持ってるせいでくれはに怒鳴られていた。
くれははくれはで無論、自然系だとわかっての行動だろうが怖いことをしている

というか、この言葉だけ聞いたらくれはがフミの子供連れ去ろうとしている誘拐犯にしか聞こえない。危ないよ！放送コードに引っかかるよ！！

医学って、病気に対して常に犠牲・・・時には死んだ人を使ってでも対抗して発展した学問だからそういう思いがあるんだろう。
無論、俺にはその辺はわからないが。

ヒュン

チッ

グサッ

「小僧！こっち見てないで手を動かしな！！」

「はい！！！」

上から
ナイフが投げられた音、髪をかすった音、壁に刺さった音。

そしてくれはの怒鳴り声と俺のおびえ声。

ちなみに、俺は勉強中である
というか昨日からぶっ通し２４時間テレビならぬ２４時間スタディ。
現在１８時間目

正直もう殺してくれ・・・

寝れば済むって？
眠ろうとしたら、後ろからナイフを投げてくる鬼がいるんだぜ？

抗議したら、くれは曰く「最終日なんだからシャキッとしな。」って言われた。ここまでノータイムで勉強してきたのにそりゃないぜ・

・・・

「大丈夫か？　これ、眠気覚ましの効果があるお茶なんだけど、飲むか？」

チョッパーが暖かい緑茶（？）を持ってきてくれた。

「あ、ありがとう・・・」

嬉しい！ありがとうチョッパー！！！
やさしすぎる！！

だが・・・ここで暖かいものを渡すとは、チョッパー狙ってる？
気持ちよくて眠っちゃうよ？

「あ、そのお茶を暖かくして飲むと体を冷やす作用もあるんだ。それで眠くならないだろう？」

チョッパー・・・その善意は嬉しいんだけど、眠くて疲れている人を前にそれは言うべきじゃないぞ。
いや、ありがたいよ？　すっごくうれしいよ？
でも、眠気が勝ってる時に”起きろ”はもはや怒りを覚えるよ！！！

というか、本当に眠らせてくれえええええええええええええええ！！！

うん、マジ死ぬ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・

ＳＩＤＥ　ムッシュール

「痛ててて・・・」

くそ。この前ぶつけられた所がまだ痛いぜ。

あー！思い出したら腹立ってきた！！！
あの野郎共今度会ったらキノコの山にしてやるぜ。
それにしても・・・

「畜生、ここはどこなんだ！久しぶりだから道を忘れちまったぜ！！」

あの後、城に戻ったがいいがまた暇をもてあまし　そしてまた城を飛び出した結果がこれでだ。

ちなみに今ムッシュールが歩いている場所は、道・・・というか山の中なので、道どころか何も目印がないので、道を知っているも何も知っているわけがない。

間抜けである。

もしこの状況をフミが見ていたとしたら「この人の頭はぬるぬる動く菌糸でできてるから迷ったんですね！」とかいう毒舌を吐いてくれるだろう。

「ああ、面倒くせェな・・・近くに村人か誰かいれば毒胞子で吐かせるんだけどなぁ」

そしてさらっと怖いことを言うムッシュール。

しかし、それを言うだけの能力と身体能力を持っているためその言葉はひどく現実味を持っていた。

そして歩いていると、二股の道になっているような場所に出た。

「オイ、こりゃどっちに行けばいいんだ?」

歩けど歩けど、村も看板も見当たらない。

「しゃーねーな。適当に歩き回るしかねェか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・

その後しばらく歩いた時　とても大きな木を見つけた。

「おっ？あれは何だ？」

目の前には、窓のついた大きな木。
中から声が聞こえるので、今でも使われている家（？）なのだろう。

「おお？　あんなところに妙な木があるぞ！　家か？　ちょっと道を聞いてこよう！」

そう言って、ムッシュールはその木に向かって歩き始めた。

## 第５１話　最終日の昼（後書き）

シャーレ＝ウィルスを培養したりする容器

はい。死亡フラグを立てて終了です

映画を見直したら、ナミが「早くしないと記録が書きかえられちゃうから」って言ってました。

もしかして、ドラム王国の記録って2日くらいなんでしょうか？

・・・まぁ、この小説では１０日って事にしておいてください。

＜＜でも、眠気が勝ってる時に”起きろ”はもはや怒りを覚えるよ！！！

これ、最近の私です。

眠いのに「起きろ！！」って言われて無理やり起こされたせいで現在頭痛が半端ないです。

ううう・・・これ書いたらすぐに寝るんだ・・・

あと、チョッパーは別に”起きろ”なんて言ってないですがセイルにはそう聞こえています（笑）

チョッパーのした事は完璧に善意の行動ですが、人間疲れると正常な判断ができないのです。

あー、もうやだ。誰か時間をとめて！　俺に執筆と休息の時間を！

!
!

# 第５２話　ムッシュールの訪問（前書き）

チョコレート？　何それ食べ物？
バレンタイン反対！！

学校で勉強している間に、唐突に自然系の能力を２つ思いついた。
でも１つは、食べた人間が空気化してしまう”エアエアの実”なんだよなぁ・・・たぶん自然系悪魔の実を考えている人なら誰もが思いついたであろう実だと思う。

# 第52話　ムッシュールの訪問

「ふぁい！もう夜です！？」

「ああ、もうこんな時間かい。小僧、もう寝ていいよ」

現在時刻、午後9時。
地獄の勉強会終了時刻も午後9時。

・・・という事は

「やっと・・・寝れるのか・・・？」

よっしゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！
やっと、やっと布団の中に引き篭もっていられる！！！！！

正直、もう死ぬかと思った。
だって辞書をずっとめくりつづけて、のーとにいろいろとかきこんで、ねむいの・・・を・・・がま・・・

ドサッ

「おやおや、ここまで散々ベッドをチラチラ見ていたのに机で寝ちまうとは・・・困った子だねぇ。ヒッヒッヒ」

「仕方ないよ。ここまでぶっ通しでやってたんだから。俺も見習わないと・・・」

「いや、ドクトリーヌさんの手にある包丁が主な原因だと思いますけど」

「ああ、こりゃただたまたま持ってただけさ。（ニヤリ）」

「ドクトリーヌ・・・それは流石にかわいそうなんじゃ・・・」

「まぁ、あと6時間せいぜい寝ることだね。適度に眠らないと頭に入らないからねぇ」

既に窓からは、闇に満ちた景色が映し出されており　真夜中であることを語っていた。

この島の原生生物も眠りにつく時間帯で、辺りは静かすぎるほどの静寂に包まれている

「うー、フミもそろそろ眠くなってきたんですけど寝ていいですか？」

「ああ、明日は出航なんだから早めに寝ておきな。まだいくつかやってほしいことはあるからねぇ」

「ドクトリーヌ、俺もこれ終わったら寝ていい？」

「ああ、好きにしな　あたしももう少ししたら寝ることにするよ」

実はくれはは寝るつもりなどない。

なぜか？

それは当然、ドラム王国の兵士が自分らを探しているからに他ならない。

いつもならこんなに血眼になって探されることもないのだが、今回はセイルとフミの件のせいで総力を上げて探されてしまっている。

もっとも、あの時逃げていなければ　2人は捕まっていたのだが。

そんな訳で、もし全員が眠っている時にこの家を襲われでもしたら
一溜りもないので不寝番(ねずばん)をしようというつもりだろう
ちなみにくれはは、1日2，3時間の睡眠しかとっていない。

もしこれを察している人が3人の中でいたなら、絶対におきてくれ
はを寝かせていただろう。

「ふぅ、やっと全員寝たかい」
そして、ついにチョッパーも寝てくれは1人になった。

「全く、人の気も知らないで気持ちよさそうな顔で寝て・・・」

実際のところ、セイルよりくれはのほうがずっと寝ていない。
それでも起きていられるのは、くれはの言う”若さの秘訣”のおかげだろうか？

「さてと、わたしゃさっさと後始末をして明日の準備でもするかね」

バンッ！！

その時、ドアが思いっきり開いた。

「おい、俺に城行きのロープウェイに行くための1番近い道を教えやがれェ！！」

「！？」

突然だった。
入ってきた誰かはノックもせずに問答無用で蹴り破ってきた。

ドラム王国の兵士かと思ってあせって振り返るが・・・

「あ、お前はこの前俺を轢いた奴！！！」

・・・それより悪かった。

目の前にいるのは、ワポルの弟でありノコノコの実の能力者である

ムッシュールだった。
流石にこれは予想外らしく、流石のくれはも顔を青くしていた

「くっ・・・お前ら！　起きな！！！」

くれはは、全員を起こすべく大声を上げた。

「うう・・・なんですか。もう朝ごはんですか？・・・それとも暗いから夜ご飯ですか？」

「うーん・・・どうしたのドクトリーヌ・・・」

「Ｚｚｚｚ・・・・」

フミとチョッパーは寝ぼけ気味で起きたが、セイルは未だに寝ている。

「・・・ふぁい！！　セイル！　おきなさい！！　殺しますよ！！」

「え！？　フミに殺されるなら本望だ！！　Ｚｚｚｚ・・・・」

「うわっ！？こいつ、寝言がひどい！！　いや、そんな場合じゃない！！　起きろよ！！」

チョッパーが椅子に座っているセイルの体を激しく揺らす。

「起こす必要はないぞ。俺が、この手で、殺してやる！！！！！」

「「「！！」」」

そう言うと、笑みを浮かべながら両手を前に出した

「傘乱舞≪シェードダンス≫！！」

そう言うや否や、手から無数の紫色の弾丸が発射された。
その弾丸は派手な音を立てて、手近な家具やベッドや壁に手当たりしだい穴を開けていった

「うーん・・・」

「あ、やっと起きたんですか！！！」

セイルが今の攻撃の衝撃音で目を覚ましたようだ。

「何だよ、せっかく寝てたのに・・・もしかしてもう時間なのか？」

「何をいってるんだい！！　敵だよ！！」

くれはがそう言った瞬間、セイルは辺りを見回して今の状況を把握したようだ。

「あ、お前・・・この前の奴じゃねえか！！！」

「ああ？」

不思議そうな顔をするムッシュール。

「そうです！！　この前の頭が菌糸君です！！！」

「ちょっと待て、フミよ。呼び名が前よりひどくなってるぞ」

それを聞いたムッシュールはと言うと

「とんだ阿呆野郎共だな？　覚悟しとけ！！」

今のあだ名に切れたらしく（当然といえば当然な気もするが）、ム

ッシュールが怒りの声を上げた。
全員がその声に体を震わせたが、１人だけプルプル震えている奴がいた。

「・・・・・（ボソッ）」

「あぁ？　何を言っ・・・」
そう言ってセイルの方を振り向いた
セイルは顔を上げ、ムッシュールの方向を向いてこう言った。

「てめぇ、ただでここから帰れると思うなよ？」

今度はフミでなく、セイルが般若だった

## 第52話　ムッシュールの訪問（後書き）

・傘乱舞（シェードダンス）
頭のキノコから菌糸でできた弾丸を発射する。

劇場版だと手からは出ていませんが、手からも出すことができるということにしておいてください（キリッ

この時代の城への交通手段は、何本かドラムロッキー頂上へのロープが張ってあり、それを伝ってロープウェイが動いているだけです。ほかに城に行く手段といえば、ワポルのホワイトウォーキーという毛カバくらいでしょうか。

なんでセイルが般若かって？
それは次回のお楽しみ。「バレバレじゃねーかｗｗｗ」とか決して言わないでね！

## 第５３話　ノコノコの実の能力（前書き）

昨日の登校中に、突然戦争の１つ前の島でのイベントのアイデアが思い浮かんだので書き留めてみました。
・・・相当ひどい展開になりそうです。

フミの悪政嫌い（誰でもそうだが、フミの場合は何よりも毛嫌いしている）の原因もここで回収かな？

# 第53話　ノコノコの実の能力

「ああ？　お前、自分の立場がわかっているのかぁ？」

ムッシュールがいやらしい笑みを浮かべた。

「ああ、わかってるさ。お前は俺の睡眠時間を・・・とりあえず、死んでくれないかな？」

ゴガッ

「へぶおェっ!??」

セイルがムッシュールを殴った。

そのため、奇声を上げてそのままドアから綺麗に出て行く形で吹っ飛ばされた

「・・・よくあれだけのことをやってこの家が壊れなかったね。」

「とりあえず、俺の睡眠を邪魔したの奴なんでぶっ飛ばしちゃいました！」
キリッとするセイル。

「セイルはひどい鬼畜ですね！！」

「きちく・・・？　何それ？」
チョッパーの知らない単語だったので尋ねた。

「あ、気にしないでください。セイル語です」

「なんだよセイル語って・・・まぁ、ちょっくらあのキノコ野郎をのしてくるわ。」

「いってらっしゃーい！」

これから戦闘になるとは思えない雰囲気を作り出している1人と、それをポカーンと見ている1人と1匹をよそに、セイルは扉の外に向かって歩き出した。

「痛てて・・・チクショー！　何だお前は！　俺を馬鹿にしてるのかぁ！？」

外に出ると、いきなり殴られたので何がなんだか理解できていないムッシュールが悪態をついていた。

「てめぇ、今何をしたかわかってるのか？」

セイルは怒りに満ちた声でそう話しかけた。

「あァ？　俺がいったい何をしたって言うんだ」

1つは、誰がどう考えても部屋の中で砲弾を乱射して物を壊したことなのだが、ムッシュールの常識の中ではそれは”当たり前”の行為・・・『お前ら愚民の物なんて全部どうでもいい』の精神であるためちっとも思いつかないようだ。

「1つ目は、部屋の中で技を使って色々な物を壊した事。2つ目は、突然押しかけて大声を出したこと。3つ目は、今俺に手間をかけさせていること。そして、最後は・・・」

すっ　と息を吸って、ムッシュールをまっすぐ見つめた。

「俺を起こした事だ。引きこもりニートになる予定の俺が、勉強して徹夜をするという偉業を為し遂げてやっと眠れると思った矢先にこれだぞ!!!　ふざけんな!!　安眠妨害者には死を・・・」

「お、おい。ちょっと待て、それは俺のせいじゃねーぞ!!」

「うるさい!!!　死ね!!!!」

ムッシュールが慌てて否定するが、ぶち切れたセイルの耳にはもう何も聞こえてはいなかった。

・・・24時間起き続け、ノンストップで訳のわからない勉強し、やっと眠れると思った矢先の出来事だったのでその怒りは当然のものと言えば当然のものなのだが・・・

「食欲≪グリード≫！！！！」

セイルがムッシュールに飛び掛った。

「おっ！？」

そしてセイルの手がムッシュールの腰に触れた

「・・・・・・」

「・・・・お前、何がしたいんだ？　傘乱舞≪シェードダンス≫！！」

セイルの食欲≪グリード≫は、以前骨壷のデラーと戦ったとき同様通用しなかった。
その一瞬の隙を着かれて、紫の砲弾を体全体にモロに食らってしまって、そのまま５ｍほど後方に吹っ飛ばされた。

ドガンッ！！！

体がそのまま木にぶち当たり、大きな音を立てて辺りが見えなくなるほどの雪煙が上がった

「小僧！！」
「セイル！！」

チョッパーとくれはも、これは流石にまずいと思って煙のほうに声

をかけた。

「チッ！　やはり、これ（・・）には条件があるみたいだな・・・」

そのまま、何もなかったように雪煙の中から出てきたセイルが舌打ちをしたが、フミ以外の3人は唖然としていた。

「お、お前！　今確かに命中した筈なのになんで平気なんだ!?」

「あ、ああ。俺にそんな攻撃効かないから。」

「ふざけるな!!　妙なトリックを使いやがってぇ!!」

ムッシュールはセイルの発言に切れていた。

毒性のものではないが、今までで自分の技を受けて平然としていられた人間がいなかっただけに焦っていた

傘乱舞≪シェードダンス≫の威力はかなりのものなのだが、今回は運が悪かったとしか言いようがないだろう
何せセイルは痛みを感じない上即回復するという、ゾンビよりも性質の悪い能力を持っているのだから。

「くそ！！」

しばらく憤慨していたが、やがて思い出したようにセイルに向かって駆け出した。

「回転傘棘≪スピンドリル≫！！」

ものすごい勢いで駆け出したまま、手からものすごい勢いで回転する鋭いキノコを突き出した！

スカッ

「は？」

「ああ、悪い。そこ　外れね。」

ムッシュールは、確かにセイルの腹を捕らえていた。

しかし、これも運が悪かったとしか言いようがないが、捉えた場所が丁度穴の開いた部分だったためかわされてしまったのだ
そしてそれを受けてなお、口を半開きにしながら唖然としている

・・・そのつけが回ってきた

「オラァ！！！！」

セイルが拳を頭部目掛けて振り下ろした。

「ガハッ！？」

毎日船で鍛えていただけあって、その威力は遥かに増していた。
これなら、その辺の雑魚海賊なら一瞬で消し飛ばせただろう

「いてて・・・クソッ、なんなんだお前は！　俺の技を受けても平気だったり物理攻撃も効かなかったし・・・」

しかし、ムッシュールはそこらの雑魚とは違い　相当な耐久力を持っていた
王に追放されてからと言うものの、その恨みを晴らすための復讐のために鍛えていたのだが　それがこんな所で役に立っていた。

だが、ムッシュールはそんな事も忘れて混乱していた。

「（糞・・・どうなってやがる？　能力者なのは間違いないが、物理攻撃が効いたり効かなかったり・・・自然系ではなさそうだが、何なんだあの能力は！？）」

回転傘棘≪スピンドリル≫がちゃんと当たっていれば気づいていたかもしれないが、見事に腹の空洞に当たって本体とは掠りもしていなかったため”実体がない”と思い込んでしまっていた。
いや、問題はそこではないだろう。　今、ムッシュールにとって最大の問題は・・・

「（いや、そいつはどうでもいい。だが、何故さっき俺の攻撃が当たった筈なのに平然としていられるんだ!?　命中したならダメージか何か変化がある筈・・・　自然系なら、そのままあの技は通過していただろ・・・）」）

そう、当たったはずの攻撃がセイルに全くダメージを与えていないことである
痛みを隠している可能性も否定はできないが、人間を５ｍも吹っ飛ばす技をモロに食らって立っているというのは普通あり得ない。

「どうした？　さっさとかかって来いよ。」

「うるせェ!!　・・・くっそ!考えてても仕方ないぜ!!　行くぞォ!走菌糸≪ラン・ハイファー≫!!!」

地面にキノコがものすごい勢いで生えたと思ったら、それはセイルをあっという間に包み込んで身動きを取れなくした。
腕は体と直角になるように固められ、まるで十字架に磔にされたように見える。

「なんだこれは?!」

「フフフ・・・いくら能力者でも、こいつは効くだろ！！！」

ムッシュールの周りに紫色の胞子が生み出されていく。

「！？　まずいよあれ！！　毒胞子だよ！？」

「逃げな、小娘とチョッパー！！　あれは不味いよ！！」

チョッパーは、焦ってその場から駆け出した。

「何をしているんだい小娘！！　危険だよ！！」

くれはは、ボーっと戦いを見ているフミの腕を強引に取って走り出した。

「（あの程度なら全く大丈夫だと思うんですけどね・・・）」

「へへへ・・・どんな能力者であろうと、毒なら効くだろ。　十字傘≪クロスシェード≫！！！」

その言葉を合図に、後ろで増え続けていた紫色の毒胞子達が　海の大波のように、一斉にセイルを飲み込んだ。

「小僧！！」
「セイル！？！？」

チョッパーとくれはが、思わず声を上げた。

「ヘッ、お前らよく見ていろよ？　この阿呆なことをほざきやがったこの小僧を殺ってやるからなぁ・・・双大増殖≪ロット・ステイフインツイン≫！！！」

ムッシュールの体から紫色の物質が零れ出た。

「いけェ！」

その一言で、紫色の物質は、みるみるムッシュールと同じ形の体を８体作り出して一斉にセイルに襲い掛かった。
かわそうにも、セイルの周りには茸が纏わりついていて動くことができない！

ドガガガガガ！！

分身は、ものすごい勢いでセイルの体を殴り飛ばす。

「トドメだ！！　行けェ！！！」

ドガッ！！！

８人と本体の拳が、一斉にまとわりついていた茸を吹き飛ばしてふっ飛ばしていた。

ドシャッ！！

大きく雪の壁に突っ込んだため再び多くの雪煙が上がり、辺りの木に積もった雪が一斉に全て落ちきるほどの凄まじい衝撃がこの場を襲った。

「ハァ・・・ハァ・・・どうだ！　これなら流石にくたばっただろう！！」

息を切らしながら、にやけ顔で高らかに勝利宣言をした。

「なんだ？　そんな程度で喧嘩を売ってきたのか？」

再び上がった雪煙の中には、平然としたセイルの姿があった。

## 第５３話　ノコノコの実の能力（後書き）

・回転傘棘≪スピンドリル≫
原作ではカタカナ表記だが、この作品では漢字にしてみた
腕を傘状にし高速回転させて攻撃する。

・走菌糸≪ラン・ハイファー≫
地面に菌糸をはり、巨大なきのこを伸ばしてその中に相手を閉じ込める。

・十字傘≪クロスシェード≫
これまた原作ではカタカナだが、この作品では漢字表記。
背中から帯状の毒胞子を放つ。
走菌糸≪ラン・ハイファー≫とのコンボで確実に命中させる戦闘をする。

・双大増殖≪ロット・ステイフインツイン≫
胞子で出来た分身８人を作り攻撃する。
原作での技名は大増殖≪ロット・ステイフイン≫で、人数は４人。
つまり、単純にその倍の技

くそっ！！　感想が返信できない！！　返信したいのに！！！
しかも、２０日は模試じゃ！！　なので、その辺はこの作品の執筆をお休みします。ごめんなさい

それにしても、大増殖なのに双≪ツイン≫っておかしいですよねw
まぁ、これしか思いつかなかったので許してください。

質問の中に、『フミは超人系ではないのか？』というものがありました。
フミは、悪魔の実を口にした瞬間　体を構成する物質が全てウィルスになりました。
なので、少しでも風を生む物理攻撃は全て　その風の流れによってかわされてしまうので無効となります。

菌の寿命はとても短く、特殊なこと（後に説明します。番外に出てくる菌たちがずっと生きてる理由もこれに当たります）をしない限りすぐに生み、死にで入れ替わります。
なので、流動する体・・・と言えるかな？　そういう事にしておいてください。

・・・でも、自然系である最大の理由は

その方が後の話を作るのに都合がよかったからです（キリッ
ごめんなさい。こんな理由でごめんなさい。許してください。ちょ、
そのピストルをどうするつもりｄくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；
@：

ではまた次回！

# 第５４話　"卑怯"

「なんだ？　その程度か。それで喧嘩を売ってきたのか？　笑わせるな」

セイルが冷たい声でそう言い放った。

「な、なんで！？　俺の十字傘≪クロスシェード≫、ちゃんと当たっただろ！？」

ムッシュールは焦っていた。

十字傘≪クロスシェード≫は、大量に生み出した毒胞子を相手に向かって放つ技だ。
人間というのは生きるために絶対に呼吸をしなければならない。そのためどんな人間でもこの毒胞子は絶対にかわすことはできない。
それが例え自然系であっても、実体の人間が呼吸をしている以上確実に胞子は体に入って蝕んでゆく。

その原理を本人がわかっているかどうかは別として、今までその攻撃が命中したのに効かなかったことはなかったので混乱してもおかしくないだろう。

「なぁ、ちょっと聞きたいんだが？」

「あぁん？俺の質問を無視すんな！！」

ムッシュールが突然の質問に怪訝な声を上げたが、それを無視して

「こういう時に、毒を使うことって”卑怯”だと思うか？」

セイルが冷たい声でとある質問をした。

「何を言ってるんだおめェは。殺し合いに卑怯も糞もあるか。勝ったモンが正しいだろうが」

ムッシュールの答えはこうだった。

以前の世界では毒ガスや細菌兵器、核兵器などの大量破壊兵器は、その効力と残虐性から禁止条約により製造や保有・使用が禁止されていたが、海賊や海軍が自分の全てを懸けて殺し合いをしているこ

の時代ではそんな甘いことを言っていられない。

殺し合いの時に卑怯なんて言ってたら自分がその”卑怯”な手段で殺されて、全てを失って死ぬだろう

なので、『勝ったものが正しい』という答えは正解の1つであると言える。

無論それとは違った状況もあるが、生きるためにはどんな手段を使ってでも勝たなければならないというのは、殺し合いでは普通のこと

卑怯だからそんな手は使わない　なんて言って、負けて全てを・・・プライドすらも失っては目も当てられない　ただの屑だ。何も残らない。

「ああ、俺もそう思うよ。だから、俺も似たような手段でその技を完璧に防ぐ手段を使わせてもらったよ」

「なっ・・・!?」

「あ、ちなみにその方法は教えないよ?」

「何でェ!?」

「いや、それ明かしちゃったら面白くないでしょ？」

「いやいや、そう言わずに教えてくれよ？」

「いやいやいや、これから死ぬ相手にそれ教える必要ないでしょ？」

「てめ、なんだそのムカつく顔は！！　馬鹿にしてんのか！」

「馬鹿にする以前に、お前は馬鹿でしょ？　というか、ああ、また怒りが込み上げてきた！！！　さっさとひれ伏せ！　俺を起こした事を謝れ！！！」

「何ィ？！　馬鹿たァなんだ！馬鹿たァ！！！　それに、男がそう簡単に頭を下げられッか！！」

「馬鹿に馬鹿って言って・・・ああ、そうだな。お前は馬鹿じゃなくて間抜けの阿呆寝言野郎だな」

「間抜けのあ・・・って、てめェ、ふざけんな！！　俺様を誰だと心得る！　ムッシュール様だぞ！！」

「黙れネゴトペラペラキノコ！　少しは口を閉じたらどうなんだやかましい！」

「何ですか、この醜い争いは」
「いや・・・確かにそうだけど、それ以前にこいつら悠長すぎないか？　一応戦闘中だぞ？　それに、あいつフミよりひでぇ毒舌だぞ・・・」

チョッパーとフミは流石にこの状況に呆れていた
まぁ、殺し合いの最中に訳のわからない言い争いが始まったのを見ているからそれも最もな事だが。

「・・・・・」
2人が騒いでる中、くれははいつもと違って黙って戦闘の様子を見ていた。

「小僧・・・死ぬんじゃないよ」

その呟きは、戦いの騒音と言い争いの声にかき消された。
この戦いに何か思うところがあるようだが、今は黙ってムッシュー

ルとセイルの戦いを見守っている

「面倒だなクソっ！！　これで殺してやる！！！」

その瞬間、ムッシュールの腕から無数の茸が生えたと思ったらそれらはものすごい勢いで回りだした。

「行くぜェ・・・　回転傘弾≪スピンシェードバン≫！！！」

回転していた茸が一斉にムッシュールの腕を離れて、まるでミサイルのように発射された！

「うおっ！？」

ドガッ、ガガガガガガガガ！！！！

「ヘッ！　うまくかわしやがって！　小賢しいヤローだぜ！」

そのまま連射を続けるが、セイルが上手くかわすので１つも当たらない。

「「（くそ・・・このままじゃラチがあかないな）」」

ムッシュールの技はセイルに当たらない。というか、当たったとしてもダメージはない。

毒胞子を使うという手も、何かよくわからないが完璧に防がれてしまう。

しかし、セイルはセイルでムッシュールに攻撃できる技がないのだ。

いや、正確には死兵≪アンデッドソウル≫があるが、あれは戦闘能力の高い人間に通用する代物ではない。

囲めばなんとかなるかもしれないが、ノコノコの実の能力で全てかわされてしまうだろう

こんな事なら、もっと早くに近接戦闘を学んでおくべきだった・・・

と後悔したが、それも今更。後の祭りだ

「（チッ、面倒だな。　・・・ん?待てよ?）」

ムッシュールがふと横を見ると、フミとチョッパーとドクトリーヌがいた。

それを見て思わずニヤリとした

「（そうだ！　あいつらを使って・・・となると、まずは）グヘヘヘヘ・・・」

ムッシュールが突然何とも微妙な笑いを上げた。

「？　おい、何を企んでるんだ！」

セイルも不審そうに見ている。

「へへへ・・・気にすんな。・・・そんな事より行くぜ、傘分身≪シェード・ブランチ≫ッ！！」

ムッシュールの体が紫色になったと思ったら、細胞分裂するように、

２つに引きちぎれて元の形の元の大きさになった。

「「まだまだァ！！　傘分身≪シェード・ブランチ≫傘分身≪シェード・ブランチ≫！！！」」

１つが２つ、２つが４つ・・・という風に増えてゆき、ついに紫色のムッシュールが１６人になった。

「「「「「「「「ヘッヘ、どうだァ！」」」」」」」」

そして、紫色だったムッシュール全員の体が元の血色の悪い肌色に戻った。

「「「「「「「「降参するなら今のうちだぜぇ？」」」」」」」」

「お前・・・単細胞生物だったのか？　自分がそんなに増えて気味悪くないか？」

「「「「「「「「・・・この野郎、その減らず口もすぐに聞けなくしてやる！！」」」」」」」」

ムッシュール全員が一斉にセイルに飛び掛った。

「どりゃあ！」

「よっ」

「この野郎！」

「ほっ」

「畜生！」

「とっ」

「でりゃあ！」

「やっ」

ムッシュールの攻撃も凄まじいが、セイルもそれらを全てかわしている辺り鍛錬の成果が出ている証拠だろう。

ムッシュールもそれを悟ったのか、攻撃をやめてそのままセイルを囲んだ。

「なんだ？　もう終わったのか？」

「「「「「へへへ・・・残念だったなぁ！！」」」」」

「セイル・・・」

嫌な予感がした。

「なっ、フミ!?」

声のする方向を見ると

「ヘッヘッヘ・・・お前の負けだァ!!!」

分身の1人が、フミを拘束していた。

## 第５４話　&ｑｕｏｔ;卑怯&ｑｕｏｔ;（後書き）

・回転傘弾≪スピンシェードバン≫
回転傘棘≪スピンドリル≫のミサイル版。
腕を傘状にするのではなく、腕からキノコを生やしてそれを回転させて発射する。
弾丸は大きいが、銃と同じくらい殺傷能力が高い。

・傘分身≪シェード・ブランチ≫
双大増殖≪ロット・ステイフインツイン≫や大増殖≪ロット・ステイフイン≫のような胞子で構成された分身と違い、ちゃんとした体を持つ分身を作り出す技。
自分含め、最大１６体まで増やせる。長い間使い続けると喧嘩を起こす・・・らしい。
体に溜まっている毒素も分身の数だけ分割されるので、技の威力は落ちる。

セイルはフミと同棲した！
セイルは　どくぜつを　おぼえた！
セイルは　いんしつを　おぼえた！
セイルは　まけずぎらいを　おぼえた！
セイルは　わるくちを　おぼえた！

フミと暮らすと、こういうスキルを身につけられるようです（笑）
そりゃ、四六時中毒舌聞いてりゃ嫌でも覚えるよね。
セイルが黒くなっていくの、書いてて面白いですｗ

≫ただの屑だ。何も残らない。
『負けたら屑や！なんもない！』っていう坊カードゲームの恐竜君の台詞です。　屑ってのは言いすぎかな？と思いましたが、結構的を射ていたのでそのまま使ってみました。

タイトル？思いつかなかったので苦し紛れです。
厨二病？　知ってますよ！　でも他に思いつかなかったんだもん！！

模試終わっても忙しいとはこれいかに
朝から学校、勉強して帰ってくるのが９時頃で、単語を１時間ほどやらなきゃいけない。風呂入ってなんだかんだやってたら結局１１時になる。
もう！

## 第５５話　フミの怒り（前書き）

土曜日でやっと書けた・・・・
これからは、平日に書けなくなるかもしれません。
家で新しく英語をやることになって、休み時間が消え去ってしまいました。
これも全てにっくき受験とフミのせいです。多分。

## 第５５話　フミの怒り

「ヘッヘッヘ・・・お前の負けだぜ。おとなしくしなァ！！！」

振り返ると、勝ち誇った顔のムッシュールが腕でフミの首を押さえてこちらを見ていた

「セイルー・・・」

「！？」

油断していた。

まさか、ほかの１５人を囮にしてまでフミを人質にとられるとは思わなかった・・・

くそっ　面倒な！！

「ウヘヘヘ・・・さて、どうするよ？　この娘が大切なんだろ？さっきからチラチラ見てるしよ」

「・・・本当に外道なことしやがって。死にたくなかったらさっさと離せよ」

「嫌だね！　何で離さなきゃいけないんだ？」

「全くセイルの言うとおりです！　さっさと離してくださいボケナメコ！！！」

「おい、フミ　それはあっち的にはアウトだぞやめろ」

「な、ナメコォ！？　また馬鹿にしやがって、殺すぞボケッ！！」

ギリギリとフミの首をさらに強く絞めあげた。
今度はそれだけでなく、首を絞めている手だけで体を持ち上げている
あの体制では、縊死するのも時間の問題・・・そんな最悪の状況になった。

「ゲホッ！？　痛いです苦しいです！　ゴホッ、何をするんですか！！」

「なら大人しくしろ！」

ん？
何でムッシュールはフミに触れられるんだ？

フミは自然系だから、本人の意思で触れさせる、させないを切り替えることができると思うんだけど・・・

「もう！　いい加減その菌まみれの腕を離してください！！」

「やなこった！　離してほしいなら、さっさと『助けてください』ってあいつに言いな！」

くそっ、このままだとフミを人質に取られたまま城に連行されるか、最悪の場合海に放り込まれる！

・・・ん？　待てよ？　『菌まみれの腕を』？

・・・・・・しまった！　ムッシュールはノコノコの実のキノコ人間・・・菌の能力だから触れることができるのか！？
ムッシュールの能力の菌を纏っている腕に掴まれてるというなら、確かにそれも当然か・・・

「さぁ、言ってみろ！！　『私を助けるためにムッシュール様の言うことを何でも聞いてください』って言えよ？　早く言わないと死ぬぜェ？」

「う・・・・・」

まずい！　フミもそろそろ限界なのだろう。　顔が青くなり始めている
首を押さえられてるせいで血が流れなくなっている上に息もできなくなってるのか！？

食欲≪グリード≫、死兵≪アンデッドソウル≫・・・駄目だ、これじゃどうにも・・・何とかしてフミを助ける手段はないのか！？

「ヘッヘッヘ、そろそろ降さｎ　「あの・・・あんまりやり過ぎると体がどうなっても責任は負いませんよ？」」

俺がムッシュールに頭を下げようとしたまさにその時、苦しそうなガラガラな、かつとても冷たい声がその場を支配した。
周りの温度が一気に下がったのを感じた全員が、一斉に声の主を見た

声を出したのは、今にも殺されそうになっているフミ。

力が入らないのか、手はだらりと垂れ下がり、顔も下を向いて見えなくなっていた。
その姿を見たとき、昔何かの漫画で読んだ　雷が鳴る闇夜に、雨に濡れた髪を晒しながら木にくくりつけたロープで首をつった死体を連想した

だが、目の前の少女は死んではいない。
死んでいるようにしか見えないが、その声にはハッキリとした怒りの意図が乗っていた。

「あなた、恥を知りなさい。　何が国王？　税金？　入国料？　『助けてください』と言え？　寝言にしてはフミは間違いなく断定的に許せませんね。」

先ほどまでのおどけた口調とは一変して、まったく別人のようになっていた。
突然フミの空気が変わったことに驚いたムッシュールが思わずフミを取り落とした。

「国民を虐めて何が国ですか？　殺すのが楽しいですか？だとしたら相当残虐な悪魔極まりない冗談ですね。」

唖然とした。

いつも楽しげにしているフミが、これほど怒るところは初めて見たその姿は、とても今まで過ごしてきたフミからは考えられない・・・まるで別人のような、自分の大切なものを侮辱されて本気で切れていて

形容できないほど怖かった。

足は・・・すくんで動けない。
全身も、まるで凍ったように動けなかった
口すらも、この空気の前ではピクリとも動かない

それほどの怒気、威圧を、今まで一緒に過ごしてきた相手が放っている。

何だこれは。
夢か？
悪い冗談か？
こんなに怒っている人間、見たことないぞ
そもそも何でフミはこんなに怒ってるんだ？
わからない。
この場所にいることが怖い。

「・・・・・おい」

再び冷たい声を出したので、全員の体が小さく痙攣した

・・・まさか、記憶が戻ったのか？

突如、そんな考えが頭を過った。

もし、さっきのショックで記憶が戻ったならば納得できる。
あんな無人島に1人でいたのだから、きっと漂流者なんだろうとは思っていたが

漂流する以前にこの国のような所にいて、何らかの事情でそこを放り出されて流れ着いた・・・そして記憶を失った
それならば、納得がいく。

同じような目に会った人間なら、その苦しみは分かると思うから。

「キノコ」

暗い声で、力を失っているように見える指をムッシュールに向けた。

「う・・・！？」

思わず後退するムッシュール。

「あなたはここで、苦しんで苦しんで、苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで」

苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し
んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで
苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦し

んで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで苦しんで

――――――――――それで、償って下さいね？　フミが手伝いますから

## 第５５話　フミの怒り（後書き）

えーと、フミがムッシュールに捉えられてる件ですが
ムッシュールはキノコ人間。キノコ＝菌糸の塊＝菌
つまり、体がキノコの菌でいっぱいなのです。
しかも、そのキノコの菌は能力によるものなので決してムッシュールを裏切ったりしません。
光には光で、火には火で、煙には煙で対抗できるように、体が菌になっているフミに（知らないうちに）菌を纏っている腕で触れることができています。
分かりづらくて申し訳ありません。

次に、セイルが「フミの記憶が戻ったのか？」と言ってるシーンで
漂流者うんちゃらかんちゃら言ってますが
拷問で初めてフミを見たときの記憶をなくしているので、そういう考えに至っています。

フミのキャラ崩壊。そしてみなぎる作者の厨二臭
でも、後々必要になってくるから仕方ないね・・・仕方ないと思います。ごめんなさい
本来のフミならどんな事されてもこうはならないのですが、後々のフラグということでこのキャラ崩壊は今は許してください。

大学になってから悶え死のうと思います。
後に修正を加える可能性大です。本当にご勘弁下さい

次回、ムッシュール戦の決着です。

## 第５６話　決着、しかし毒舌（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。
別に今年が受験ではないのですが、宿題やら予備校の講座やら何やらで忙しくて・・・

私がここにいない間に、大きな地震がありましたね。
まだ見つかっていない方も大勢いらっしゃるみたいです。どうか、全員が無事に帰ってこれますように。
そして、原発が爆発を起こしませんように。
犠牲者の方のご冥福、被災者の方に心よりお祈り申しあげます。

# 第５６話　決着、しかし毒舌

「な、何を言ってるんだ！？　お前、今の状況がわかってんのか！？！？」

「ええ。分かってるからこそ言ってるんですよ？　頭のネジが歪んじゃいましたか？」

「馬鹿野郎ゥ！　おめェこそ頭がいかれてんじゃねえのか！」

「フミの頭がいかれてるなら、キノコの頭の中は臭いニオイのするネバネバしてる腐ったドロドロのジャム同然です」

「おい、フミの奴　相当怒ってないか？」

「あ、ああ・・・あんなに怒ってるフミを見るのは初めてだよ」

セイルはもちろん、チョッパーとくれはもフミの変わりように今ま

でにないほど驚いていた
いくらフミが怒っていたとしても、あんな姿は普段の姿からは想像できない・・・

元気で温厚で優しかった人間が、突然指名手配犯になってしまったような　そんな驚きがセイルを支配していた。

「ちょ、フミ?」

今まで一緒に過ごしてきただけに、突然の事に動揺を隠せない。

「なぁドクトリーヌ、なんでフミの奴はあんなに怒ってるんだ?」

「・・・さあねぇ。以前に何かあったんじゃないのかい?　　何にしろ、今はそれどころじゃないよ。見なチョッパー、始まるよ」

「この野郎ォ、ぶっ殺してやる！！　双大増殖≪ロット・ステイフインツイン≫！！！」

再びムッシュールの体が紫色の粒子になり分裂、８人の不完全な分身を作り出した。

「もう、そんなヘボキノコ軍団に当たりません！」

するとフミの腕も紫色になり、蛇のような、骨が入っているなら絶対にあり得ない動きをしたと思ったら球状の形をとって８つに分裂。

「菌弾≪きんだん≫・青カビ×８！！」

作られた球体のすべてが一斉にムッシュールに向かっていった。

「ヘッ！　こんな中途半端にでけェ玉なんざ　目を瞑ってても避けれ・・・おうっ！？」

ドカッ

「な、何だァ！？」

分身達が一斉に倒れた。
しかし、原因がわからない。

「おめェ、一体何をした！？！？」

「あれ？　これ普通は当たらないと思うんですけど・・・どんなマジックを使ったんですか！？」

フミとムッシュールが驚いている理由はまったく違う。

まずムッシュールは、何故かわした弾が当たったかと言うことだが

分身全てが菌弾≪きんだん≫をかわしたと思った・・・後ろに飛んでいった筈の弾が、そのままぐるっと回って狙いをつけていた分身全員を追尾するように動いて命中した

その種明かしをすると、菌弾≪きんだん≫というのはフミが今まで拾ってきた菌たちの集まり。

風が強く吹く日はすぐに霧散して消える。
逆にほとんど風がない場合は、それを維持した上で菌たちを指示することでその技の動きを操作できる

今日は運がよく風が吹いていない日・・・つまり、技は霧散することもなく操作できる状態だったのだ。

フミの方は、菌が命中したまではいいのだが・・・

本来、あの技は命中した相手に　菌を感染させて病気にする技だ。
対象の相手が”キノコ”という事で、腐るかと思って試しにカビを投げてみたのだが

実体がない（菌なので霧散する）筈なのに物理攻撃となって命中した。

「もう、面倒です！　当たるんだったらこうしてやります！！　菌

室≪ハザードルーム≫っ！」

フミの体から紫の煙が湧き出して、それがムッシュールを包みだした。

「な、何だコリャ！？」

「とっとと死んでください！　密集≪プレス≫！！」

ムッシュールを包んでいた煙はフミの号令により突然中心部に集まり、最終的に濃くなっていった

ギリギリギリ

「な、なんだこりゃ・・・痛えええええええええ！？痛えええええええ！？！？！？」

ベギャッ

グギッ

「やめ「うるさいです」」

グジャ

ドサッ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・

「うえっ・・・ゲホッ、ゲホッ」

「おいフミ、大丈夫か？」

戦いはフミの勝利で終わった。

あの後フミは、ムッシュールを菌に押しつぶさせるという凄惨な結果を残した。

「・・・覚悟はできてたと思ったんですけど、フミは駄目駄目ですね。」

フミは、倒した直後にそのまま座り込んで口を押さえ、顔を青くしながらその場で座り込んでしまった。

目の前のムッシュールの姿を見てかなり気分が悪くなっているのだろう。実際、フミはその場で何回か吐いていた。

辺りには血なまぐさい臭いが充満しているのがよくわかる。風がないため、空気が流れにくいのだろう

悪魔の実、”ノコノコの実”の茸人間であり、風のない日という条件を踏まえての攻撃方法だったので本人も予想ができていなかったのだろうか。

少女（見た目はあくまで１６歳。実年齢不明）が見るにはあまりに壮絶な光景。

以前は、顔を紫色にし、体から発疹、吐血までしている集団の姿。
今度は全身を潰されてペシャンコにされたせいで血みどろになった男。

セイルは、この状況を元いた世界の同学年の女子が見たら　気が狂ってもおかしくないだろう・・・と思った。

「まぁ、海軍とかがいるとはいえ殺しが平気で横行している世界なんだ。今はいいけど、そのうち慣れればいいさ」

「・・・そうですね・・・いや、慣れちゃ駄目ですよ！　それでも人間ですか！？」

うんうん・・・と、頷いていると　突然の突っ込みにセイルの頭が地面の雪と　バフッという音を立てて合体した。

「えええええええええ?!　おま、今のはどう考えても励ましの言葉だろうがよ!?」

「知りません!　フミに謝りなさい!!」

「無視!?　無視なのか!?」

突然いつものペースに戻ったフミ。

怖いくらいのメンタル回復の早さ。この女、恐るべし。

「そういやお前、さっきはなんでそんなに怒ってたんだ?」

「・・・・なんでですかね?」

「いや、聞くなよ」

静かな森の一角で2人は突っ込み合っていた。

傍から見れば1組の男女が言い争いをしているだけに見える。

「おい小僧共、こいつはどうするんだい？　こんなに派手にやっちまいやがって。」

「あー、確かにこれはまずったな。どう処理する？」

「とりあえず海に流しちゃいましょう。お魚さんも大喜びです！」

「いや、でもこんないかにも不味そうな毒キノコを誰が食べるんだよ？」

「あ！　そうでした！　このボケナメコは食用じゃなかったですね！！」

「あ、１つ思いついたんだけど　このまま穴掘って埋めればいんじゃないか？」

「だめですよ。そんな事したらまた生えてきちゃうじゃないですか！！」

「・・・ドクトリーヌ、俺人間不信になりそうだよ」

「全く・・・とんでもない奴等に医学を教えちまったみたいだねぇ。というか、さっきまでの空気はどこにいったんだろうね？」

一方、後ろで2人の様子を見ていたドクトリーヌとチョッパーはドン引きしている・・・そこに血みどろの男さえ倒れていなければ、いつもの和やかな毒舌合戦だったのだが。

「さて、こうしちゃいられないね。チョッパー、今すぐにムッシュールの手当てをするよ。」

「え？！　でも、こいつは・・・」

「いいから黙って運びな。」

「でもドクトリーヌ、こいつは遊びで大量殺人するような危険な奴なんだろ！？」

「いいかい？とりあえず聞きなチョッパー、怪我を治したら縛って港のコンテナに・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・」

「ん？どうしたんだいチョッパー？」

「ドクトリーヌ、俺もうどうしていいかわからないよ！皆鬼じゃないか！」

「ヒッヒッヒ、私は医者であり、魔女だからねぇ。容赦はしないよ？」

そして４人はムッシュールを運び出してその場から去った。

## 第５６話　決着、しかし毒舌（後書き）

ムッシュールの怪我の状況の没台詞←

チョッパー「そういや、こいつって生きてるのか？」
ドクトリーヌ「・・・おやおや、これだけ骨や肉が逝ってても内臓は奇跡的に大丈夫みたいだねぇ。悪運の尽きない男だよ」
チョッパー「うわっ、ここひでぇよ。骨の破片が飛び出してるよ！」
ドクトリーヌ「どれどれ・・・おやおや、こりゃひどい。なんで生きてるんだろうね？」

こんな感じ。生きてます。死にません。キノコしぶといです。

全く関係ないのですが、自分の目指している大学って、福島原発のある場所にかなり近い場所にある大学なんですが来年大丈夫なんだろうか？

## 第57話　ドラム島出航とムッシュールの命運（前書き）

お久しぶりです。黒です

番外編を書いたあと、展開にすごい困っているうちに続きが書けなくなってしまい3ヶ月ほどスランプでした。
今もスランプ気味ですが、細々と更新していこうと思っています。

「番外編　ワポルとキキ　前編」ですが、続きがどうしても書けなくなってしまったので削除します。
期待してくださってた方は本当に申し訳ないです・・・

今回と次回は短めになってしまうので、許してください。

# 第57話　ドラム島出航とムッシュールの命運

「それじゃ、俺らはそろそろ行くとするか。
短い間だったけど、世話になった。色々ありがとう、くれは。」

「ああ、気をつけるんだよ小僧共。」

「フミは小娘です！」

フミのその一言に全員がズサーとすっ転んだ。

「いや、そこに突っ込むのかよ？
いつもの事だけど・・・」

「・・・！？
ふおっ、フミは今奇跡を目の当たりにしました！
角の生えたモフモフが喋ってます！！」

「ええ！？　今更なのか！？」

「チョッパーも、これからまた医者になるための勉強を続けるんだろ？」

「あ、ああ。俺は俺の夢を叶えたいからな」

「そのうち海に出るといいぞ。海には色々なものがあるからな。世界を探せば、お前の知らない病気や薬なんかがいっぱいあると思うぞー」

「・・・海に出る、か。」

「ま、どんなに勉強してもフミが万能薬ですけどね！！」

そう言って俺らの横で自信満々に胸を張った。

「おいこら、てめー今俺結構良いこと言ってたのに水を差すな！それと、お前が治せるのはウィルス性の病気であって、それ以外の病気は治せないからな？」

（ガーン！！）

「そ、そんな・・・フミはそんなに無力だったというのですか・・・ちょっとそこのお山にお散歩に行ってきます・・・」

「ちょ、もう船取りに行って船出すんだぞ！？」

「ううう・・・でも今のフミはお船に乗る資格はありません・・・
しかし、お船に乗らないとフミは大嘘つきの狼坊っちゃんになって
しまうのです！
やっぱり船に乗ります！！」

「・・・・・・自己解決したならよかった。
じゃあ、ここまで見送りにきてくれてありがとうございました。

くれはさんは判らないですけど、チョッパーは・・・海で会うかも
しれないな。
見かけたら声をかけるよ。
その時はどんな船でも気づけるように、甲板から顔出して手を振る
から」

「うん。海に出るかどうかはわからないけど・・・もしも会えたら
よろしくな。」

「ああ。
よし、じゃあ行くか。」

「気をつけるんだよ小僧共、ヒッヒッヒ！」

「また会おうな2人ともー！」

俺らはそのまま歩いて船に戻った。

「痛てて・・・ああん？　なんだここは」

ムッシュールは目を覚ました。

「寒ぶっ！？　暗えよ！？　なんだこりゃ！？！？」

目を覚ました彼の視界に入ったのはまず暗闇。
そしてうすぼんやりと見える氷と氷柱。

「寒い寒い・・・あっ！　畜生、あの糞女！　俺様のことを馬鹿にしやがってェ！！
今度あったら覚えてやが・・・ハークション！！！
ううう、くそ。寒すぎて上手く能力が使えねえ・・・どっかに明かりと火はねえか・・・」

暗闇をしばらくさ迷ったが、結局何も見つけられず

「寒、火・・・火・・ヒ・・」

そこでムッシュールの意識は途絶えた。

ムッシュールはその後、商人が食料を運ぶための冷凍箱（コンテナ）に入れられて凍り付いているところを、とある流氷の上にある国の住人に発見されるのであるがこれはまた別の話である。

## 第57話　ドラム島出航とムッシュールの命運（後書き）

コンテナは当然くれはの仕業。
キノコは火以外ならどこでも結構強いですが、冷凍コンテナの中では流石に繁殖しないだろうなということでこうなりました

あー、それにしても2ヶ月更新されてませんの表示が出ちゃってたか・・・
お待たせして申し訳ありません。

## 第５８話　船の上の日常（前書き）

お久しぶりです、黒です

番外編なのですが、私の勝手な都合により削除しました。
期待してくださっていた方には本当に申し訳ありません！

１話前の回も更新しました。

今回はまったりなお話です。

# 第５８話　船の上の日常

「・・・ドラム島、大変だったなあ」

海に浮かぶ一隻の船の甲板に、遠い目で空を見つめるセイルがいた。

「え？　あんなに楽しかったじゃないですか！」

「・・・ちょっと１回死んでみる気ない？」

「殺せるもんなら殺せばいいじゃないですか！」

「キー！」

甲板から見える海からは、穏やかな波の音と海鳥独特の鳴き声、そしてこの船の動力の１つである水車が回る音が聞こえる。

空を見れば一転の雲もない晴れ渡る青空
遠くには少し雲が見える。

海を少し覗けば、浅い場所なためか
綺麗な珊瑚や色取り取りの綺麗な魚が泳いでいるのが見えて、とても美しい風景がそこにはあった。

リゾートを楽しむならば、静かで絶好の場所なのだが・・・

「フミ、お前も少しは働けよ！！」

「何を言ってるんですか、やることなんて料理を作るくらいしかないじゃないですか！」

「キー」

「剣の修行はどうした剣！！」

「もうとっくに終わりましたよ！　セイルが寝坊したせいです、ざまあないですね！」

「てめえ、ふざけた事言ってると菌ごと海に放り込むぞ」

「キッ！」

「男のヒステリーは恐ろしいです！」

「ドラム島に行ってから宿題が増えたんだ、放っとけ！　そして俺の怒りの原因のほとんどはお前のせいだ！！」

この2人と1匹の乗る船のせいで、静かで美しいこの空間はぶち壊しだった。

冬島のドラム島を離れてから2日後、再び記録指針を頼りに冒険を再開していた。

セイルはマルコの修行に加えて医学の勉強をしなければならなくなったので激しく気落ち中。
フミはこの綺麗な景色に乗じてリゾート気分。
レモンの入ったブルーハワイ色のドリンクを飲みながらビーチベッドに寝転び、どこから持ってきたのか船の上に日陰になるようにヤシの木まで置いてやがる。しかも、泳げないくせに水着（スク水）。
キキの方はどっか飛んでったり戻ってきたりしてる。
今は船のマストに止って休んでいるようだ。

「チキショー、お前ばっかりいい思いしやがってえええええ！！！」

「日頃の行いの賜物じゃないですか？」

「絶対にお前にだけは言われたくない」

「キー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・

夜。

「ち、チクショー。やっと終わったと思ったらもう夜じゃねーか・・・リゾートってレベルじゃねーぞ・・・」

自室で、セイルはハードスケジュールのせいで疲れすぎて寝込んでいた。

「しかし、やっと休める・・・昨日は全然寝れなかったからな。」

バタン

「セイルセイルセイル！！　大変です、竜巻が横切ってます！！」

こう、やっとゆっくりできると思ったときにフミがやってきやがる・・・

「てめえ、やっと寝れると思った隙に何なんだよ！！　竜巻くらいじゃこの船は沈まないって何度言ったらわかるんだ！！」

「そんな事はどうでもいいです。竜巻の火が船に燃え移ってます！！」

・・・・ちょま、勘弁してくれよ・・・

海の竜巻に火とか・・・・グランドライン怖え・・・

「さっさと消すの手伝ってください！　フミは火気厳禁なんです！」

「・・・もう助けて」

次の島に着くまで、このセイルの日々は続く。

## 第５８話　船の上の日常（後書き）

３ヶ月の間にちょっとづつ書き溜めようと思ったのに、これと前の話だけしか書いてなかった。

な、何を言ってるのかわからねーとおも（ｒｙ

現在、自分の小説を最初から見直しているのですが・・・

ひどい、ひどすぎる！！

と、いう訳で　大幅な修正作業をします。

といっても、内容自体を変える訳ではなく

・あまりにも見苦しい部分の修正、削除

・説明が足りない部分の付け足し、小エピソード追加

・台詞修正

・誤字修正

を、やります。

正直、自分の初期の文がここまでひどいとは思いませんでした・・・

修正しないと最悪なレベルだと思ったので、しばらくその作業に没頭しようかと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6516p/

ONEPIECE　死者の放浪

2011年11月16日16時38分発行